

し、少し静かにして貰ひ度い、自分は寝なければならぬ。さう喋りつづけてゐては。まるで寝られなくて甚だこまるではないか、といったので漸くだまった。これでやつとねる事ができた。一等と二等と共同の待合室はこれだからいやなのだ。印度人の中にもこんな奴もゐるのである。

此點になると一般に歐米人は、さすがに進歩してゐる。尤も何にでもある通り、これにも除外例はある。嘗てアテネ市のアクロポール・パレーヌ・ホテルといふのへ泊つた時、隣室が晩く迄やかましく、到底やり切れないので、室をかへると帳場へ抗議を申込んだら、番頭が理由をきいたから、隣室があれでは困るといったら、あの室にはアメリカン・ジェントルマン・アンド・ヒズ・ワイフがゐるのだが、そんなにうるさいかといふから、何にしる室をかへる、なくば他の家に移るといったら、丁度反対側の隣室が夕方あくから、かへておくといつたので、談判成立し外出して歸つたら、其通にしてあつた。ところが私のあとへ入つた英國人が、やはり閉口して私がたつと同時に私の室へ移る約束だと、女中も番頭も私にさういつて笑つた。何にしる夫婦者のところへ友達が来て夜十二時過迄騒ぐのだからやり切れたものではなかつた。かういふ特殊の例を除いては、めつたにない。

一寝入して目がさめたら又話をしてゐた。時計を見たら四時。ねられなくて困るから、もっと小さい聲で話せといつたら又黙つた。夫れで寝入込んでしまひ、今度は五時になつてマンガに起された。何ぼなんでも一夜中殆んど喋りつづけた黒ん坊二人、腹に据えかねたので、マンガに解るかどうか知らぬが、昨夜はやかましくて寝られなくて困つた、だからねむいといつて、横目で彼等の方をみたら、眼を

ねむつていやに静かだから、不思議に思つて尙よくみたら、一人になつてゐた。成程これでは静かな筈、いくら何ぼ何でも一人では話ができないから。

此待合室には寢臺が二脚備附であつた。けれども餘程事情でもない限り、衛生上の顧慮から私は自分のを組立ることにしてゐる。併しながらこんな時には、餘りうるさいので、一層の事一脚を先に占領しておけばよかつた。さうしたら一人は出て行くか、或は二人でて行くか、かう苦められることはあるまい。といふ様な少しばかり穩かならぬ考へも擡頭してきた。併しこれは無作法な人間に對する正當防衛でもある。豫め形勢を洞察して臨機の處置をとることを、後の旅行者に進言しておく。

紅茶はリプトンの半封度入の新しい罐をあけたが、牛乳は得られなかつた。それでも昨夜モカメー驛 (Jn.) の食堂でパンを買つておいたのが大に役に立ち、パンと紅茶とで朝食類似のものをすました。暫くして前夜二一・〇六にホウラー驛をたつた第十一號急行といふのが五・五四にいたので、驛は一時に賑つた。此汽車はここ迄が急行で、ここからノロ行となり、アラハバード迄行くのだが、大部分の旅客はここで下車し、恒河を渡り思ひ思ひのところへ行くので、それこそ文字通り絡繹として絶えないのである。どうしてこの様に澤山の人が、河向ふに用事があるだらうと思はれる位。あとからあとからいくらでも船へのもつて來た。

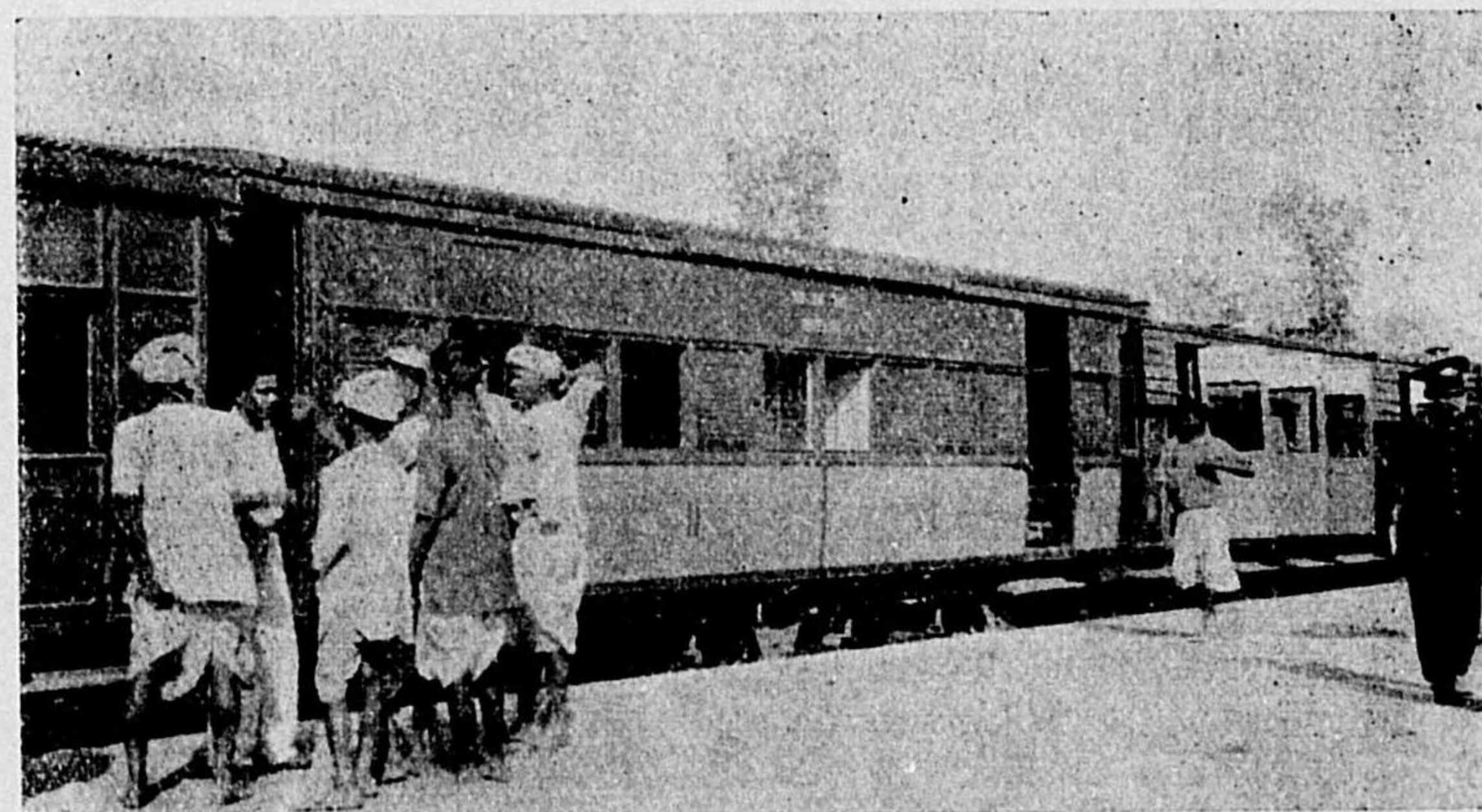
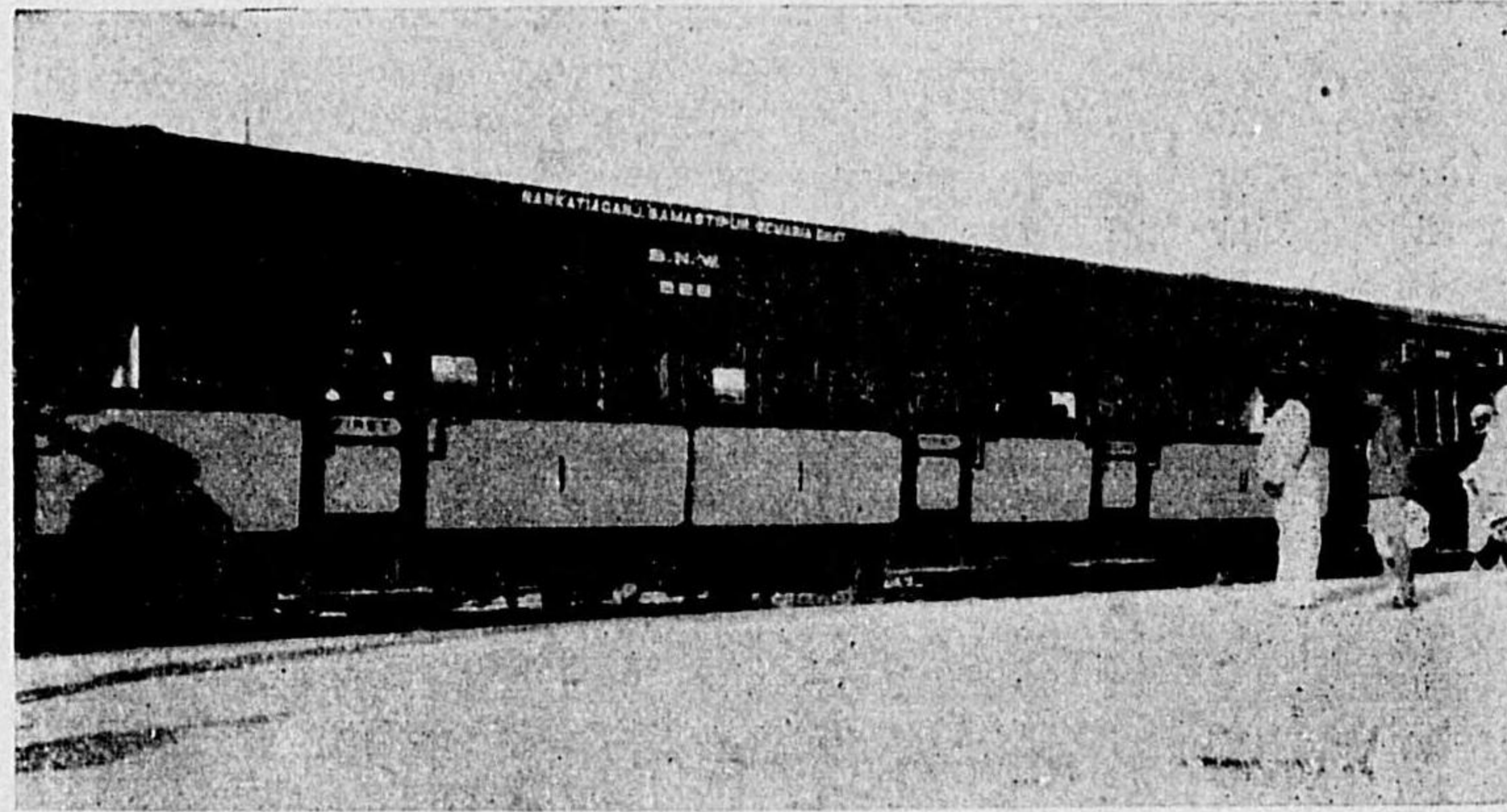
時刻表通りだと、六・三〇にでる筈の船が、時刻が来ても出ない。四〇分になっても四五分になっても動かない。遂に六・五〇になって漸くでた。連絡船といふと大きいが、實は小蒸氣である。船名は「ベナレス」。ベナレスなんか少し遠すぎて縁が薄いやうだ。ベナレスにする位なら、「サルナート」の方がよからう。「ベナレス」でも「ギャ」でも朝早く涼い風に吹かれながら、恒河を横切るの等は、場合が場合で場所が場所だけに、洵に心地のいいものである。

約二〇分ばかり船は對岸に着いた。そこが即ちセマリア・ガート (Semaria Ghat) である。船着場から汽車はよく見える。一二等旅客は特権があり、近道から客車のところへ行けるが、三等となると全く差別待遇で、大分に迂回せなければならぬ。乗降場へ出ると、殆んど三等車ばかりで、その中頃に二・一・一・二の順序につくられた一二等合造車が一臺ある。その軒のところに起點と通過する主要驛と終點の名——NARKATAGANI-SAMASTIPUR-SEMARIA GHAT——とが書いてある。乗降場を歩いてゐたら、先日甲谷他總領事館で約束をしたバンツールが挨拶に来た。彼は約の如く十一日夜甲谷他發、此朝着いた汽車へ乗って来たのであった。汽車は七・四〇にでた。辨當を持たずに乗ったら夫れっきりで、買ひ度くも賣ってはゐない。それでは驛食堂で買へばバン位はあるが、こんな田舎へ来ると、本線の Jn. Stn.を除いては食堂もない。此日は前夜買ったパンの残りも、途中的驛で買ったバナナとですましておいた。此邊へ来るとバナナ迄小さく、皮をむくと一口に入る位の大きさで、まあ「一口バナナ」とでもいってらいいと思はれるもの。それでゐて可なり高價である。終日汽車で暮したせいも、割合に汗もせず、

もって乗った魔法瓶に一ばいの紅茶で飲料は充分であった。

此線路は殆んど總ての驛に乞食がある。表題上の小圖は、サマステブル驛 (Jn.) で停車中、隣りの客車の窓へ来た乞食の子を寫したものがあつたが、子供の時から學校へ行かずに、乞食の修行をするのだから、生長すれば斯道の泰斗たり得るのである。印度の汽車では殊にこれがうるさい。尤も物質文明を誇りとし、優等人種は自分達ばかりだと、誇大妄想に罹つてゐる事に氣がつかず、さう信じきつてゐる歐羅巴人のゐる國でも、イタリヤだのスペインだのは、殊に乞食が汽車の窓口へ物乞ひにくるのである、この邊大にだらしない。だから印度等では来る方が寧ろ當然といへるのであらう。さうして彼等はこれが職業だから、この小圖の子供乞食等は、まだ見習なのに職務格別勉勵をしてゐるのである。これにくらべると、大驛の下級驛員が寢臺車の前に来り、何かいふが知らん顔をしてゐると、一度消え失せては再び現はれ、念入の奴は内へ入つてきて、何か都合なことはないかと尋ね、8アンナ銀貨にありつく迄は、何度でもやって来るのに比べると餘程罪がない。彼等は制服の手前よく厚顔にもあんな眞似ができるものだと、只管感心させられるのである。

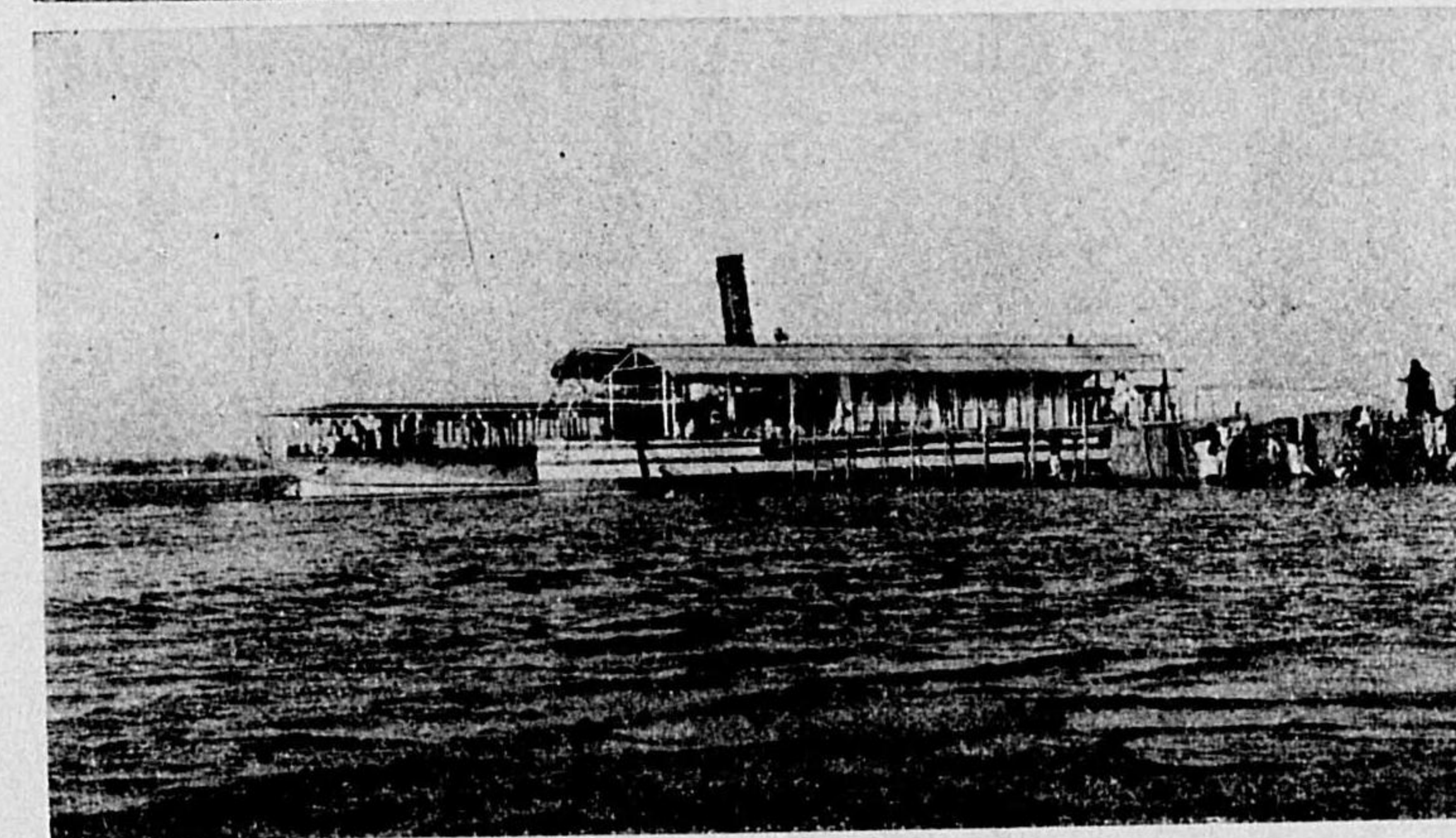
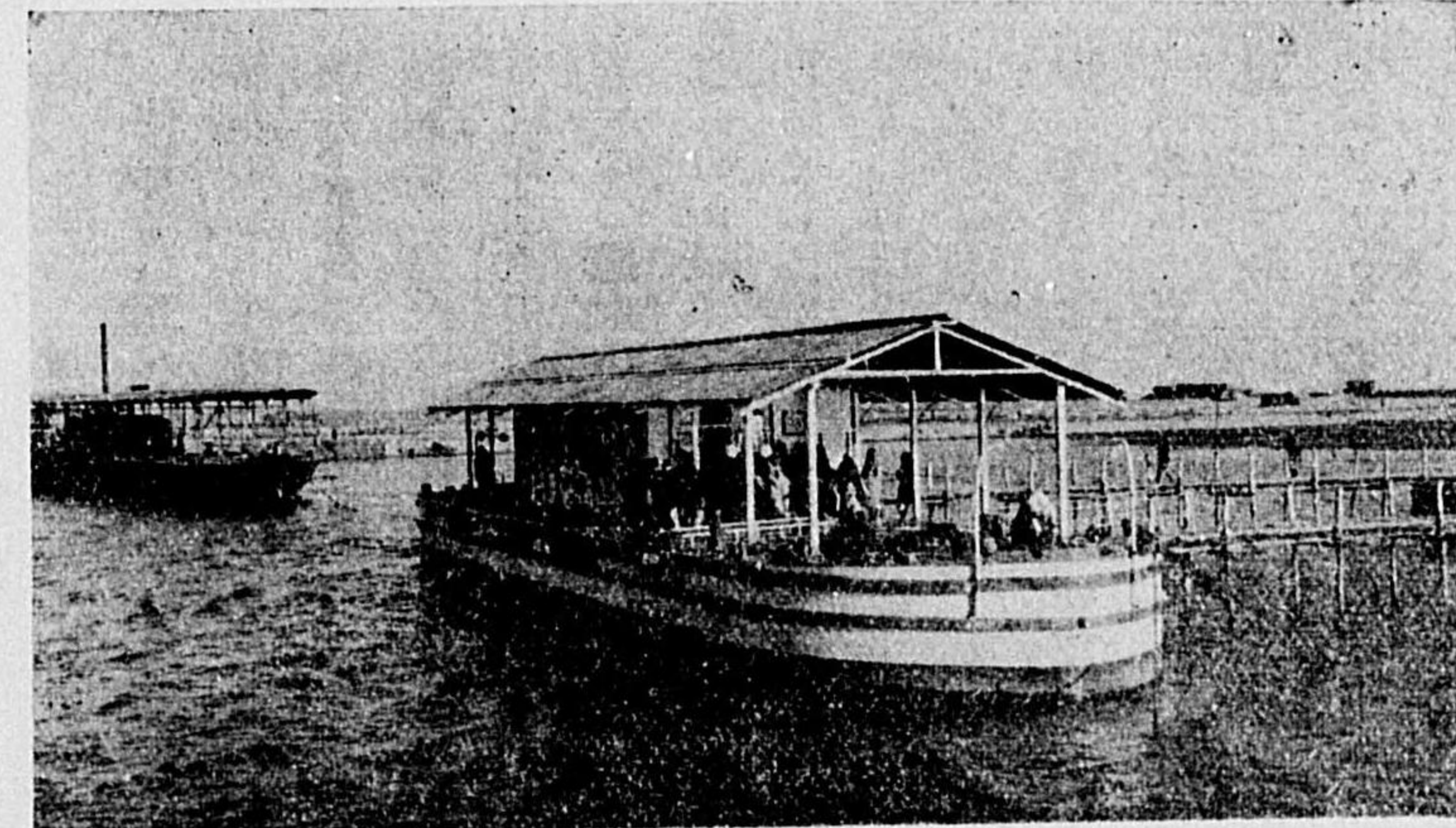
汽車は一五・二四サガウリ (Sagauli) 驛着、ラクサウルへ行くため乗換へたら(だまって乗つてゐれば終點まで行つた)異人が一人のつてきたのは全く驚かされた。私一人と信じ切つてゐたのに意外なことであつた。どうもラクサウルへ行くらしい。さうすると或はネバルへ行くのではなからうか、さうなれば偶然も偶然も、全く偶然妙なことになるなと思つた。サガウリ・ラクサウル間19哩、1時間と33分かかる。



上。 セマリア・ガート駅の光景
 下。 サガウリ駅の荷運び人夫
 (昭和十一年三月十二日)

連絡船でガンジス河を渡り、對岸へ上って少し歩くと汽車が待っている、ナルカチアガンジとセマリア・ガート間を折返し運轉してゐる B. & N. W. R. の汽車で、一二等合造車の軒に「NARKATIAGANJ-SAMASTIPUR-SEMARIA GHAT」とかいた額をあげてゐるのでよく判る、圖の右方にはマンガと新しく雇入れたバハツールが金もうけの相談をしてゐる。

下は同じく「SAGAULI↔RAXAUL」とかいてあり。この兩驛間19哩の間を走る汽車で、サガウリ驛でのりかへるのである。其時赤朝賃が少ないといつて、大勢でマンガをせめたので、彼は應戰大につとめてゐるところ。こんな時には私はいつも知らん顔をして客車内に納まってゐる。結局發車すると總てが解決されるのである。



上。 セマリア・ガート棧橋 (其一)
 下。 同 (其二)

昭和十一年三月十二日朝、モカメー・ガート (Mokameh Ghat) から連絡船「BE-NARES」へのり、約20分かかって恒河を渡り、對岸のセマリア・ガート (Semaria Ghat) につく。上圖は將に着せんとするとき寫した船つき場で、下圖は北端からその船つき場と、連絡船をとつたので、つまらない寫眞だが、こんな事は私の一生に二度とないから、まあ記念といふ様なつもりでとっておいたのである。

船の名の「ベナレス」はどうも感心ができない。まだ「サルナート」の方がよからう。妹姉船があつたら「ルンミンデイ」か「クシナガラ」がよからう。そこへ行くと我國の「玉藻丸」、「田村丸」、「比羅夫丸」なんかとてもよろしい。正に天下一品の名で、紅毛人には眞似ができない。

即ち一三・三〇にでた汽車は一五・〇三につくので、この兩驛の間に、サガウリから10哩を隔ててラムガルワ (Ramgarhwa) といふ驛が一つあるだけで、沿線の光景は洵に淋しく且つつまらない。

汽車がラクサウル驛に停つた時、誰か人が入ってきて西洋人と話を初めたが、其間に私は下車をした。驛前——といっても驛の建物とは反対側——に煉瓦造の大きな二階建がある。此はネバル國政府で建てた公立宿舍ださうで、同國へ行くものは一定の料金を支拂ひ、自由に泊ることができのださうである。バハヅールはこの家に行くべく勧めたか、豫告なしに行つても泊れるかと質問したら、彼ははっきりした返事をしなかった。若しあの家迄態行つて泊れないといけないから、D・B・があるならそこへ行かう、あるかないか訊いてみてくれといったら、其返事に少し遠いがあるとの事で、夫れにきめて行くことにしたが、歩くのがいやだから馬車でも雇つてくれといったら、乗物はまるでなく、歩かなければならなかった。

クーリーを三人雇ひ荷物を持たせ、従僕二人と都合五人を連れ、先頭にたつて歩いて行くのは、自分ながら相當にえらくなつた様な気がした。暫くの間は鐵道線路を傳つて歩いたが、驛員は何とも言はない。印度鐵道で一等客といったら、それは相當に無理がきくのなさうである。だから日本なら驛員の一喝にあひ、外につまみ出される様な鐵道規則違反を、印度では正堂堂と大手を振つて行ひ得るのである。とにかく五人を連れて行進してゐるところを、ふだん表面何気なき態でゐながら、内心は彼何せるものぞといつた風な人に見せたら、もう少しは馬鹿になくなるだらうと考へたが、情ないことに

日本へ歸つては、こんな眞似は到底できないから、いづれ馬鹿にされたままで、そのうちお目出度くなるのでらう。

七四、ラクサウルのバンガロー

初めの間はさういふ次第で可なり得意で歩いたが、どうも遠い。だんだんいやになつて來た。漸く着したらこの様な札が眼についた。またしてもアイ・ビーで、これは禁物である。失望しながらも反対側へ廻つてみたら、おそろしく色の黒い男が一體をしたので、これなら先づ泊れるだらうと安心をした。かう氣が落着いてみると、このバンガローの粗末なることは例ふるものなく、印度に於いても可なり工面のよくない水飲百姓の住宅程度だから、此がまた好奇心も手傳ひ、とても氣に入ってしまった。二室あり。煉瓦壁に白漆喰を塗つたのが所所はげてゐて、切妻造藁葺、軒のところは壁の上(桁にあたるところ)と椽との間に面戸板がないから、空氣の流通は非常によく、頗る衛生的にできてゐる。窓なく出入口は一所で、片開の扉はうまく締らない。但し床は石敷。天井なく化粧屋根裏であつた。

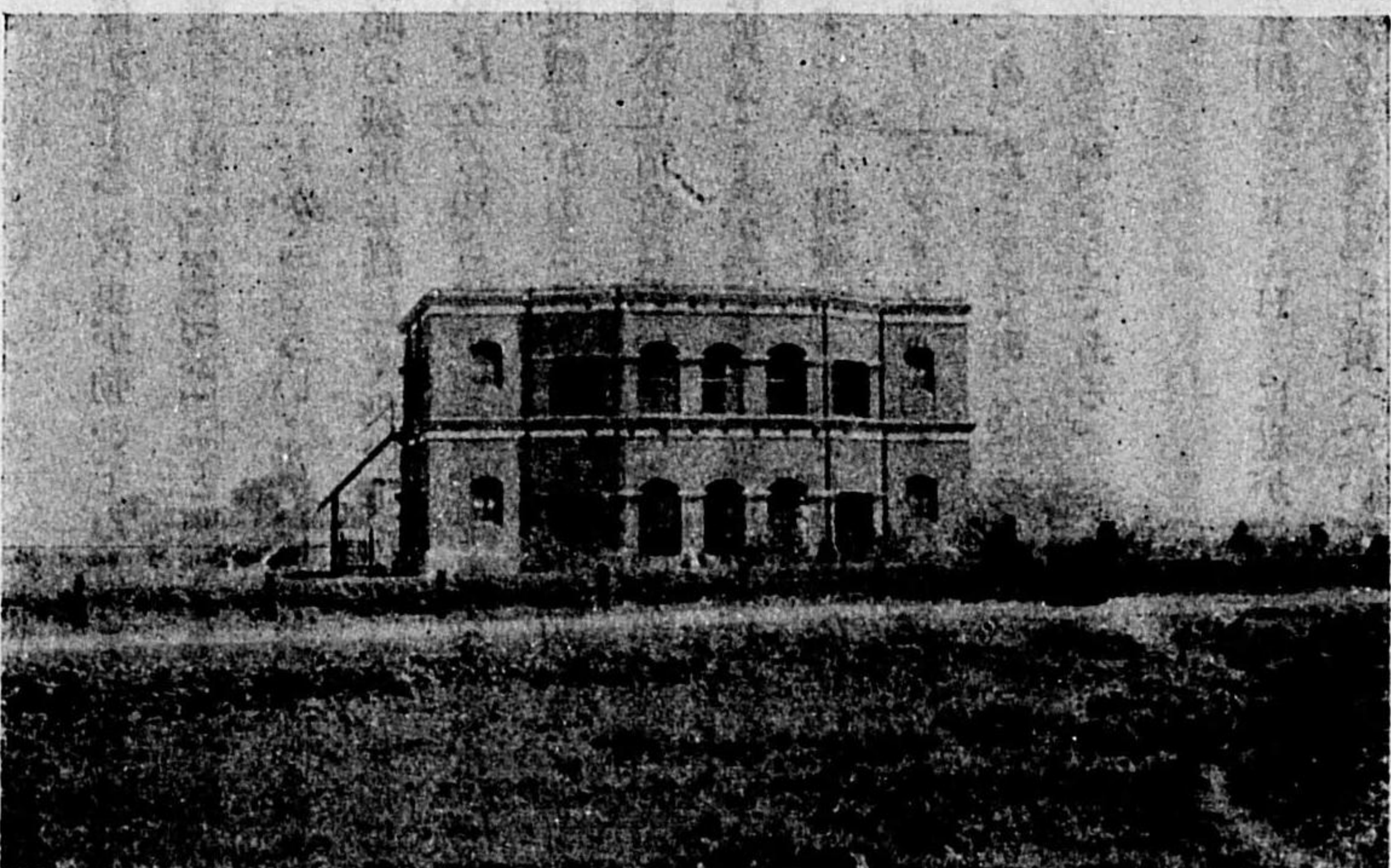
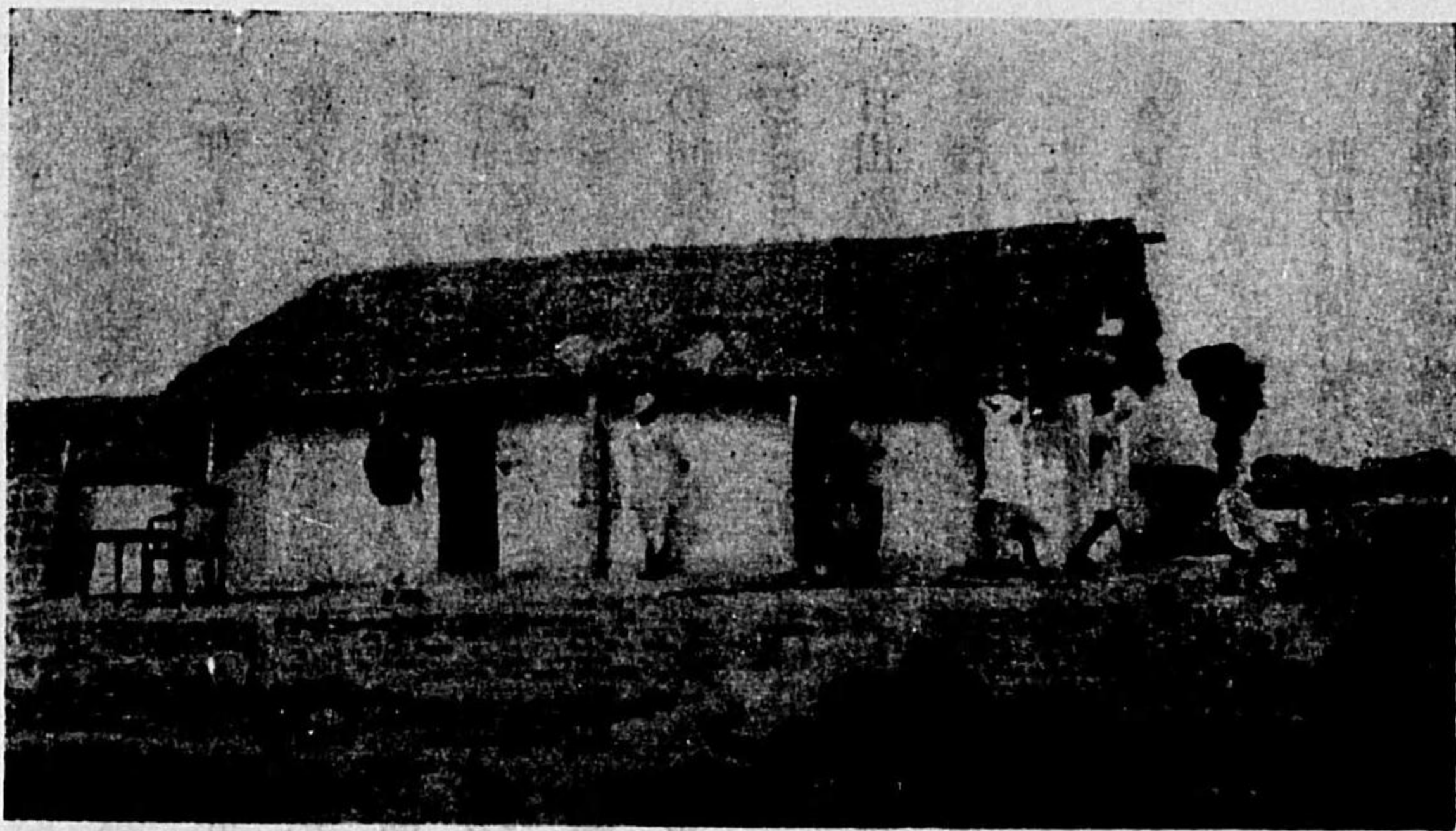
勿論カンサマ等は居ない。だからマンガには第一に湯を沸かして紅茶を入れる要意をし、次に夕食の飯を炊く様に、バハヅールは驛へ行き、明日ネバル國の旅巻を得るた

CHAMPARAN DISTRICT BOARD
RAXAUL INSPECTION BUNGALOW

め、ゴスワラコートへ行かねばならぬのだから、汽車はどこかの驛から何時にでもか確かな時間と、それから手紙が驛止めになってゐるかも知れぬから、何れも驛長にあつてきて来る様にと命じ、尙早く入浴したいから、直に湯をつくるべく番人にいひつけてくれとマンガにいったが、何れも承諾して早速仕事にとりかかった。

バハヅールは暫くして太った背の高い男を一人連れてきた。此男はネパルの用務を帯びて出て来たので、此夕私が驛前にあるR・H・へ泊る事ができる様に準備をしておいたのだが、自分の来る汽車が後れたので驛へ出迎へることができなかった。旅券は態態ゴスワラ・コートまで行かないでも途中でくれる。汽車はラクサウル驛から八・一五にでる。終點のアムレクガンジから車でビムフェヂ(Bhimphedi)へ行き、明夜はそこへ一泊し、其翌日即ち十四日にカトマンズに着するので、極めて安全で且つ容易に行けるといった。

* "I have received your letter of the 24th January (昭和十一年) on the subject of the proposed visit of Dr. S. Ananuma to Kathmandu early in March next. If the Doctor is so very eager he may undertake the journey after obtaining on his way up the requisite passport from the Goswara Court at Birgunje which is a Nepal frontier station near Raxaul. Will you please let me know the exact date of his expected arrival at Raxaul to enable me to inform the said Goswara Court?".....(下略) 昭和十一年二月二日附、ネパル國マハ・ラジヤ直屬秘書官マラーチ・マン・シ(Manichi Man Singh)氏から甲谷他駐在野々村副領事に宛てた手紙の一節。



上。ラクサウルのL.B. (昭和十一年二月十三日朝)

下。同 ネパル國公立宿舎 (昭和十一年三月二十三日)

上はまことに粗末な建物だが、此附近の農家と同じ様に、出入口だけで窓はなく、且つ屋根は藁葺である。但し机と椅子と一脚づつ備へ附けてあるので都合はよろしい。三月十二日夜一泊、翌十三日早朝、出発せんとするところで、クーリー三人で荷物をもって出かけやうとしてゐるところ。

下は此地にあるネパル國立のR.H.で堂堂たる二階建。この邊にこの様に大きな立派な建物はないから、大變に目立つ、但し食物はなく、すべてこちらで料理せねばならぬ。それから水が汚くて且つ油の様なものが一面に浮いてゐて、含嗽するにも一度沸かさなければ心地が悪いし、紅茶を入れると、味も色もまるで變つて了ふ程の不良水である。

實は此時迄、私はネバル國に例ひ僅かでも、汽車が動いてゐることを知らなかった。鐵道は同國には一哩もないものと心得てゐた。1931年發行された「NEPAL」と題する大きな書物を二冊もつてはゐるが、繪をみてるただけで讀んだ事はなかった。だからさういふ事は知らなかった。何度もひっくり返して見た時刻表の附圖には、印度國や錫蘭島の鐵道は詳しくかいてあるが、ネバル國のはまるでかいてない(手許にある最近といふのが昭和十一年三月。だから知らなかったのである。然るにラクサウルからアムレクガ分のだから、今ではかいてあるかも知れぬ)。だから知らなかったのである。その起點のラクサウル——B・N・W・R・ンジ (Amlekhganj) 迄25哩の間輕便鐵道があるさうで、その起點のラクサウル——の次がビルガンジ (Birganj) の同驛と少しはなれてゐて、ネバル國公立宿舍に近い所にある同名の驛——の次がビルガンジ (Birganj, Birganje) で、ここで停車中に旅券は貰ふことができる。故に一度貰ひに行つて歸つて一泊し、更に其翌日出かけるには及ばぬから、明朝はすつかり出發の支度をして出かければよろしい、といふのである。後に知つたことだが、以前はサガウリ・ラクサウル間も汽車はなく、ましてネバル國にはまるでなかったから、皆旅行には随分やつかいであつたさうである。ラクサウル迄汽車が通じた後も、ここからアムレクガンジまで25哩に、まる一日かかつたさうである。

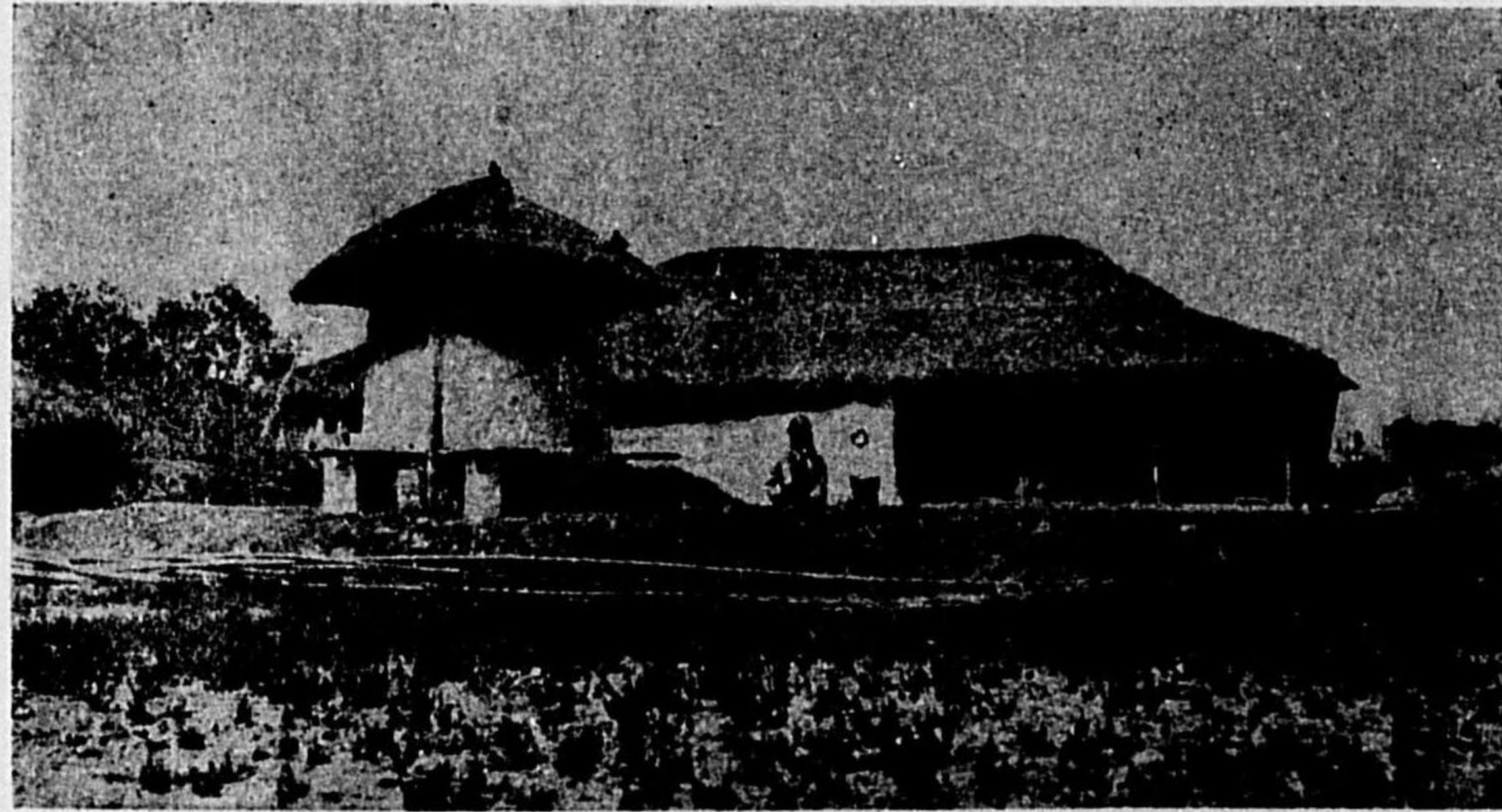
此男は尙ほ語をついで、自分の不行届からR・H・に私が泊らぬ様になつたのではすまない、如何にも準備が悪かつた様でいけない。今からでも行つて貰へないだらうかといつたに對し、最早あすこへ行

くのは面倒だから、今夜はここへ泊る。いづれ歸りには一泊するつもりだから、其時はよろしく頼むといつて、最早動かぬ工風をした。併しこんな事なら初めからズーズーしく出かければよかつた。さうすれば上等な室でゆつくりねる事ができたのである。けれども又一方では、さうしたらこの様な脱俗超凡のバンガローへ泊れぬのみならず、其存在さへも知らないですまして了つたらう。

湯ができたといふので入らうとして、隣りの風呂場へ行つてみた。これがまた方一間の粗末極まる小屋で、出入口の扉等はまるでしまらない。バニワラが水をうめ過ぎたので、少しぬるくなつたといふから、其覺悟をして加減をみたら、少しどころか先づ水はなれがした位、これでは何とも手がつけられないが、沸し直すのには大變だし、明夜からあとの入浴が頗る不安だし、思ひ切つてあびたが、餘り寒くて風を引きさうになつたので、驚いてやめにした。僅に身體を洗つた程度であつた。氣温は夜の九時に72であつた。同じ印度でも北の方では可なり寒い。

漸く夕食ができた。マンガの手料理はこの夕が最初である。といつた所で、味噌汁と炊きたての飯とをもつて來ただけ。此あたりランチ・バスケットは絶對必要で、若しこれがなかつたら食ふものがないのである。花薙の瓶をあげようとして手が迂り、折角の味噌汁を全部ひっくり返したので、新にまたつくらせたといふ様な餘興もあつた。考へてみれば前日からろくなものは食べてゐなかつたので、この夕食は實にうまかつた。少なくとも飯の炊き方はワッサンより上手である。

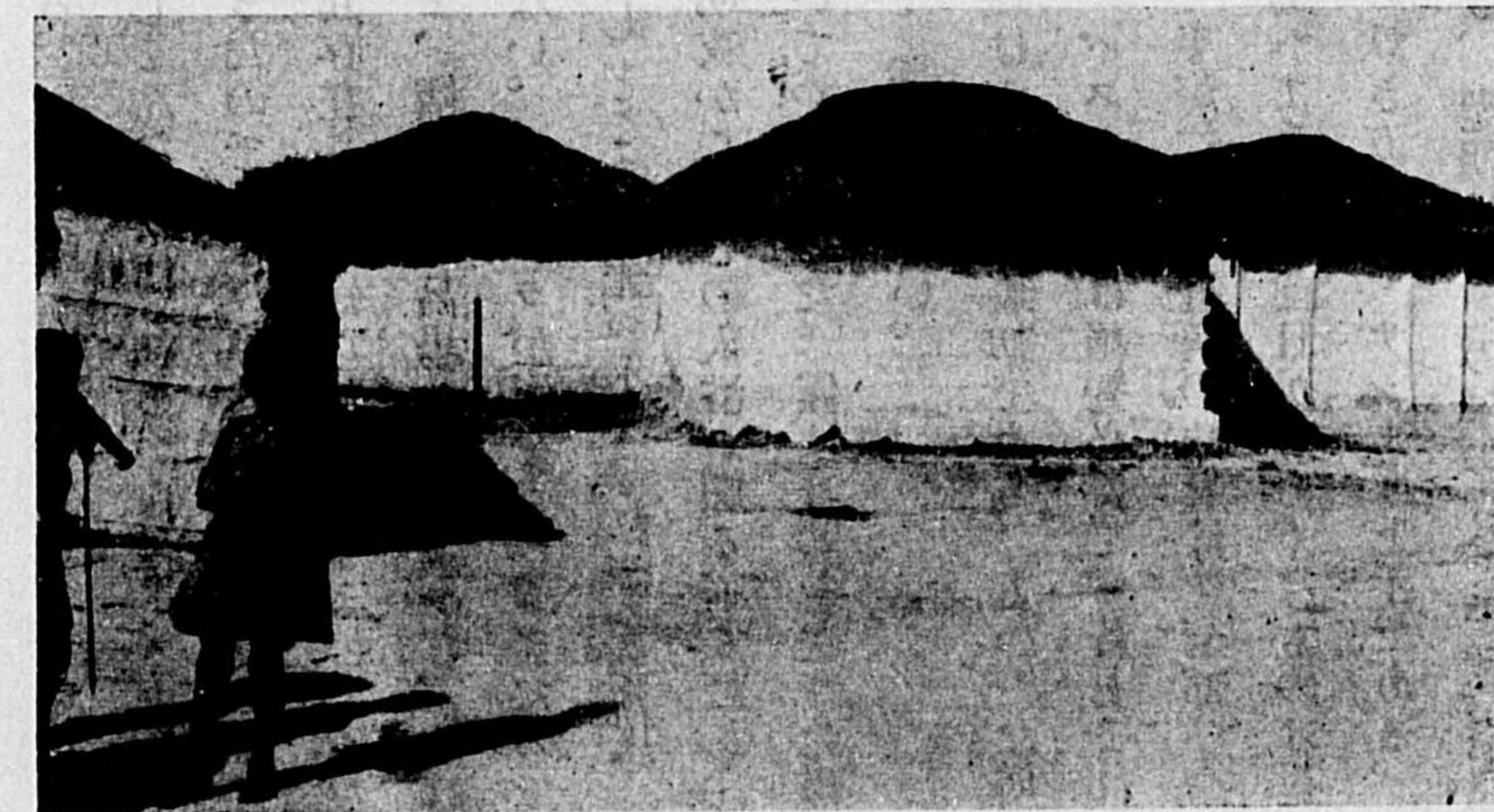
其餘つためしを茶漬にしてたべれば、翌朝は早いのだから、手数が大分省ける。茶さへつくればい



上。ラクサウルの米倉及農家 其一
下。同 其二

(大正十一年三月二十三日)

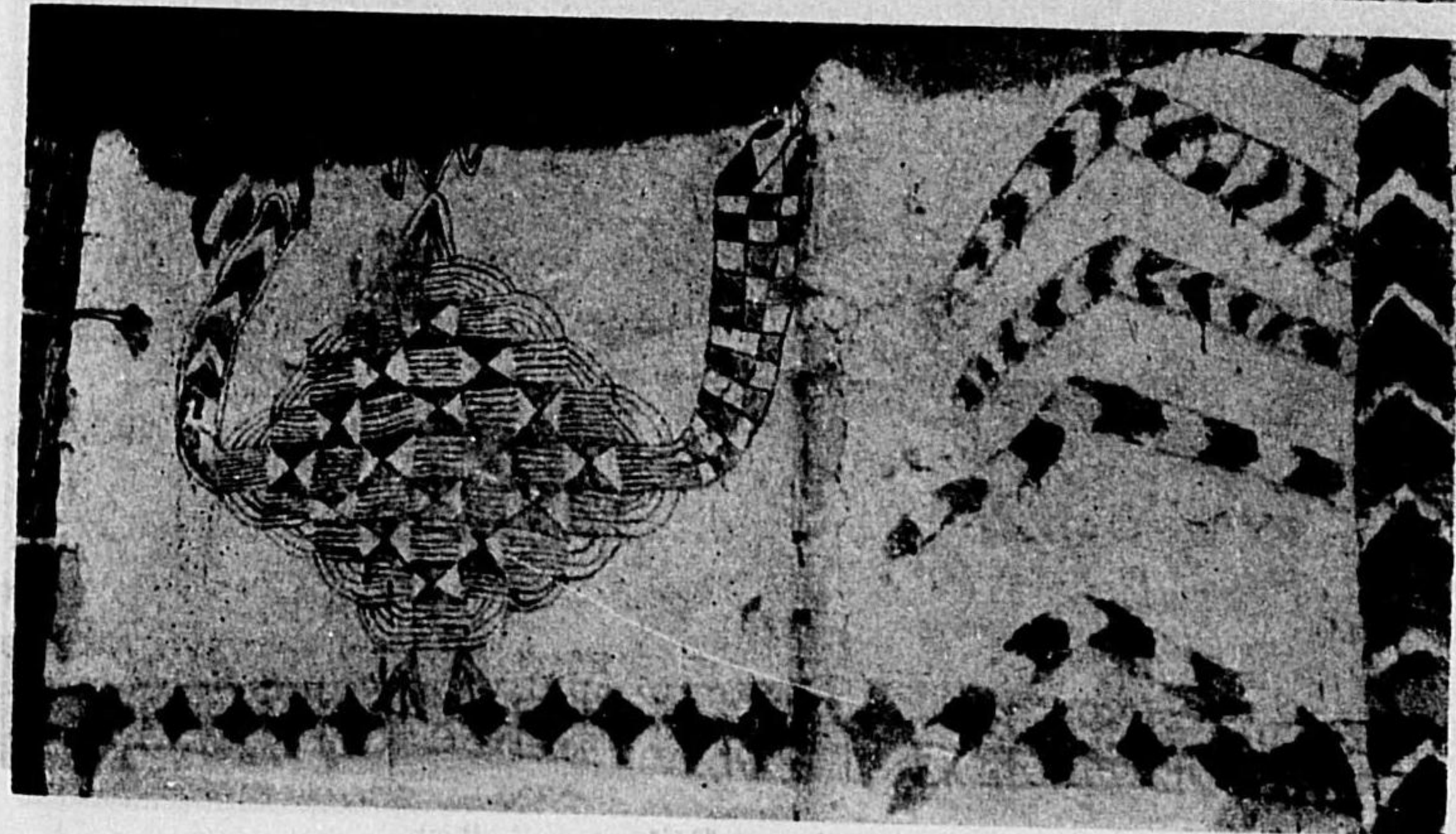
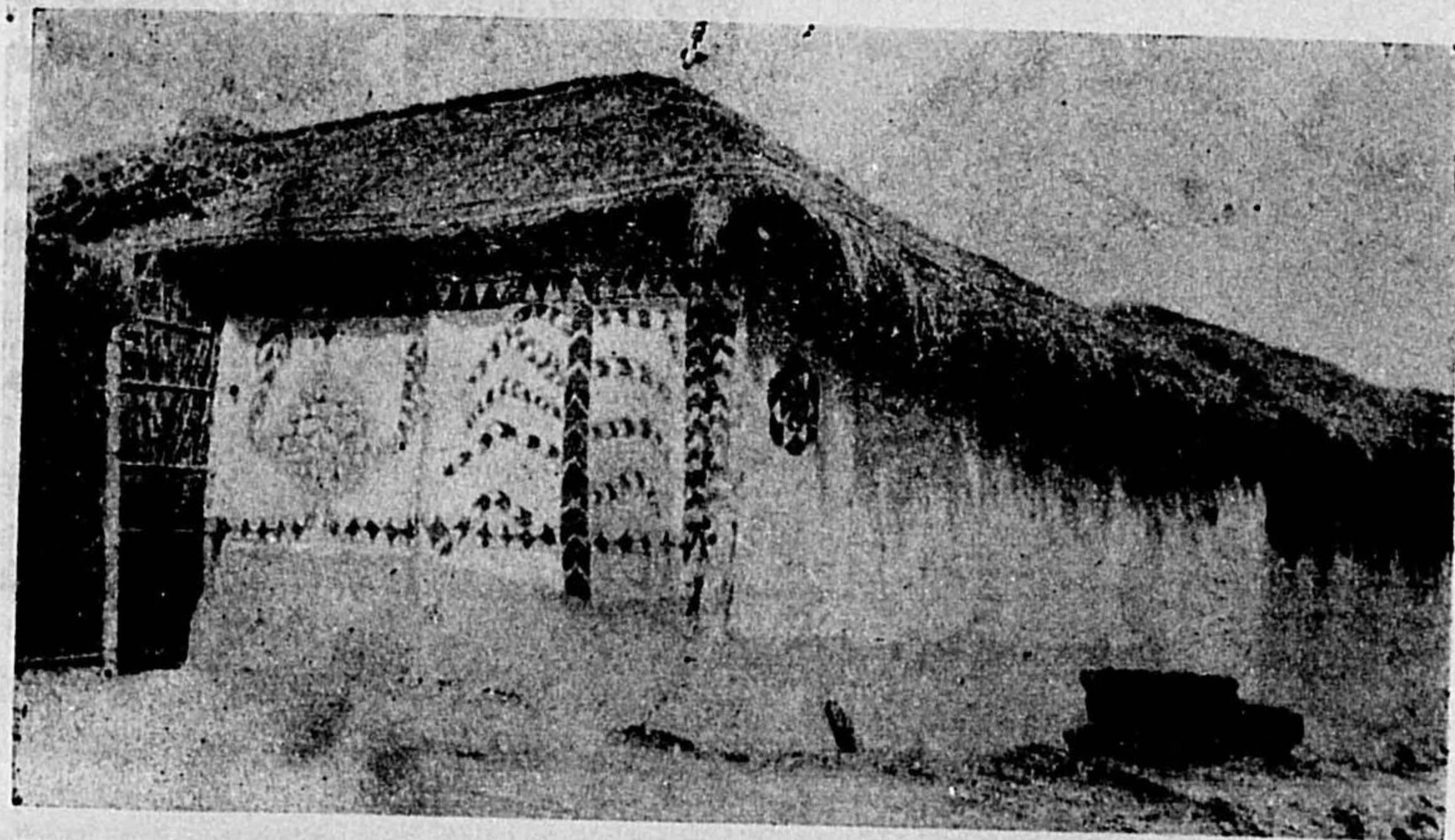
ラクサウル村——ばかりではあるまい。いづれ附近一帯さうであらうが私は其範圍を知らない——には、随所に床の高い圓形藁葺の建物が建つてゐた。周囲は黄色の土壁で、窓も出入口もないから、まるで見當がつかない。マンガにきいたが彼は知らなかったから、土人にきかしたら、米ぐらださうで、この内に密閉して貯蔵するのだとのことであつた。上圖に於いては、椽が取まいてゐるが、下圖のにはない。尙ほ人物や鳥に比べてみると、左程大きなものでないことが判る。「困」といふ字がある。「廩」もこめぐらだが、「困」は外圍圓形の米ぐらださうで、差づめこれは其一例となし得る。



上。ラクサウルの村落 其一
下。同 其二

(昭和十一年三月二十三日)

私が見た極めて狭い範圍では、北印の村落は大概こんな形式で、これで子供が裸體であつたら、アフリカの内地だといつても否定はできまい。若し私がアフリカの内地を少し旅行でもして、こんな寫眞をだして、コンゴの奥地であらゆる危険を冒してとつた土人の部落といつても、知らなければさうかといふより仕方があるまい。大概は四注造藁葺。出入口一個所だけで窓はなく、土色をした壁に好んで白・黒・代赭 (Indian red) で頗る原始的の繪をかいてあるが、稚拙捨て難いところがある。截頭方錐體を倒置せる如くに牛糞をつみ、乾燥さして燃料にしてゐる。上圖右方に其二三が見えてゐる。



上。ラクサウルの農家 其一

下。同 其二

(昭和十一年三月二十三日)

上圖は壁面を二區に分ち、一方に樹木、他方に鳥(?)をかいたのである。樹木のかき方は大概かういふ風で、中央に太い幹が直立し、其左右から枝(と葉と)が「へ」の字形に平行して出てるので、同じく輪郭は黒、内は白と代緒と一つ隔きに塗ってある。稀にもっと面白い、偶然だが参考になる様な描き方をしたのもある。左方のはどうも鳥らしいが、上にのってゐるのは人らしいから、比例からいふと莫大な鳥で、【暴夜物語】の船乗新八の話にてでくるロック位の價値があらねばならぬが、或はこれは主人所有の家禽の總數を現はしたのかも知れない。



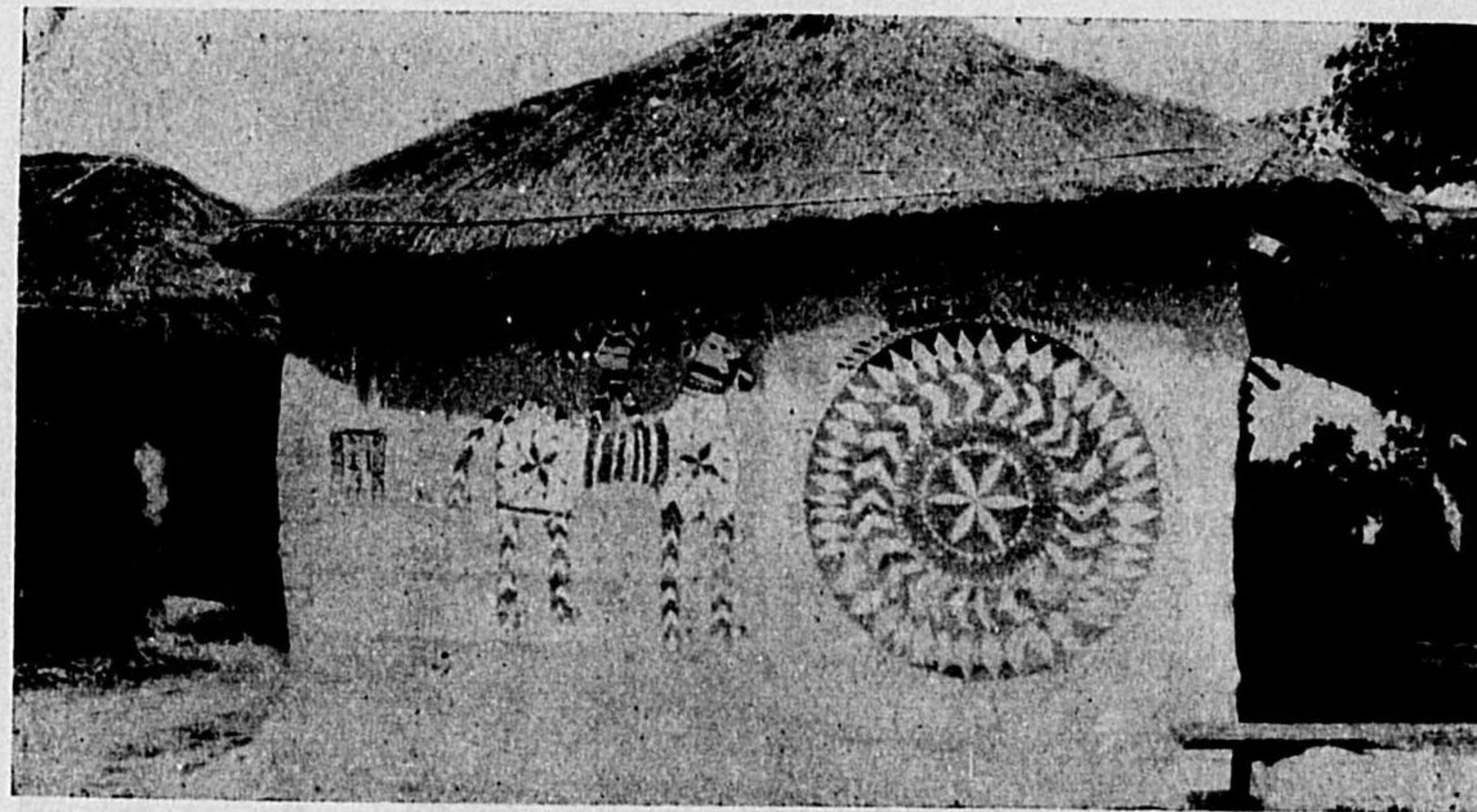
上。ラクサウル村の鳥の家
下。同 農家壁畫の一

(昭和十一年三月二十三日)

私は昔てアィメダバード (Aimedabard) に於いて、面白い鳥の家を市中隨所に於いてみたが、それは大分金のかかった立派なもののみであった。然るに北印の一寒村なるラクサウルに於いては、古い廢物の車輪を丸太の上に固定し、其上に四角な模倣家屋を建てて鳥の家としたので、洵に氣のきいたものであった。上圖に示したのが即ちそれ。

下圖は農家の壁畫の一つで、人物の表現法が甚だ原始的だが要を得てゐる。北方ネパール國に入りても、ラクサウルから十三哩のバルツニアール (Barwanpur) まで壁に畫をかいてゐる様である。





上。ラクサウルの農家

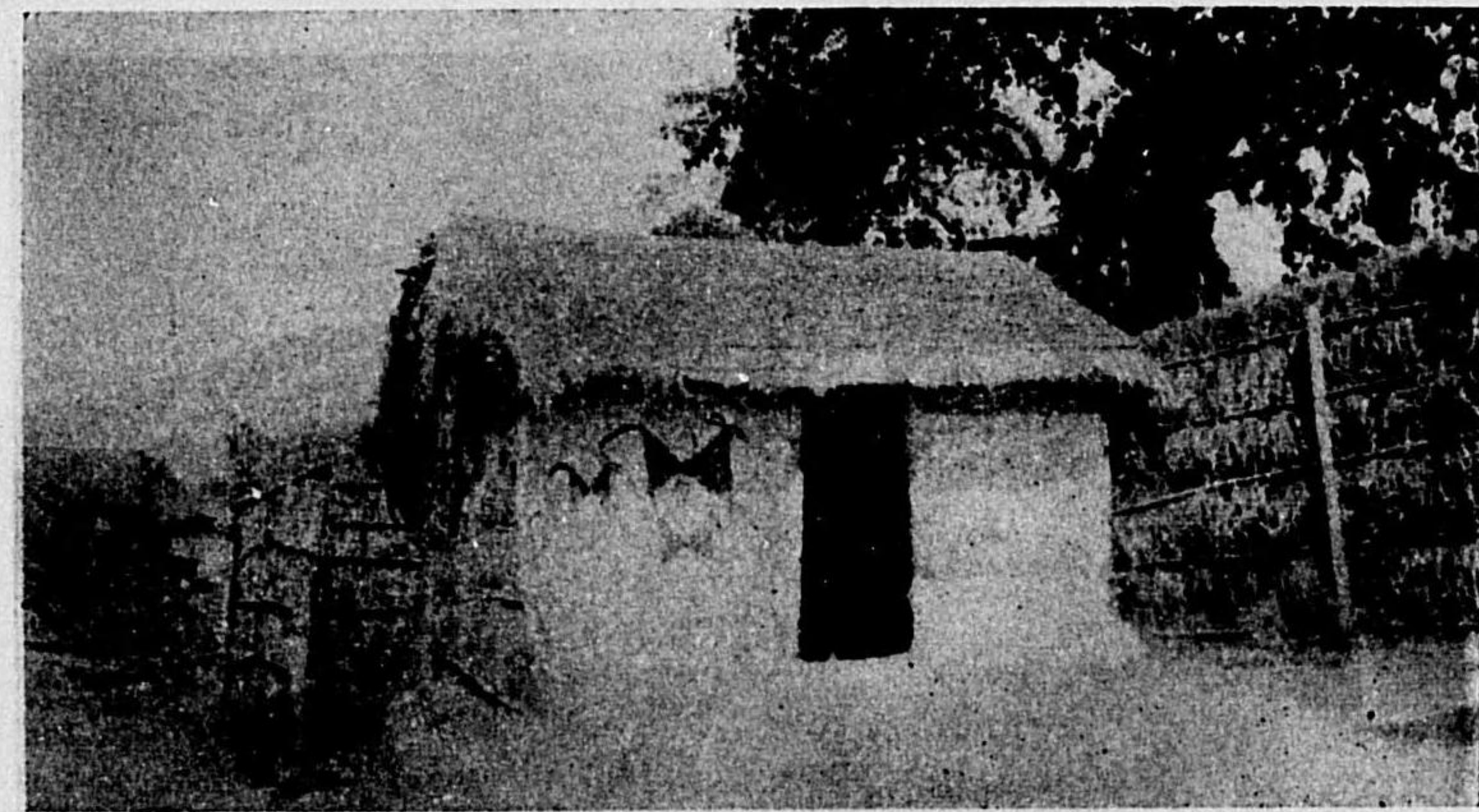
其五

下。同

其六

(昭和十一年三月二十三日)

(前頁より)はないがやはり前記三色を以て興味のある畫をわいてゐる。これはどうもアフリカ内地だといつて吹き飛ばす次第には參らぬといふのは、上圖右方圓文の上方の文字がいふことをきかない。上圖は前頁下圖と同じ側、即ち右側面を大きくしたので、下圖は同背面で蒸になつてゐてよく判らぬが、馬が氣に入つたので23日の午後、日があつた時出直して寫してきたのである。馬に人がのつてゐるところ、其乗り方等が實に愉快である。これ等は恐らく村一番の美術家、壁面裝飾の大家が腕を揮つた傑作の一であらう。



上。ラクサウルの農家

其三

下。同

其四

(昭和十一年三月二十三日)



家は大抵四注造で藁葺だが、稀に切妻造がなくもない。上圖は即ち切妻の例で、正面に出入口が一つあるだけで、窓はない。壁畫が頗る面白い。上圖はどうも「馬」の略畫らしい。直角等脚三角形を頂角が接する様に反對にかき、下方の兩すみから二本づつ出でゐるのは足で、左上すみから尾、右上すみのは恐らく鬣のつもりであらう。三角形の輪郭と附屬物は黒、胴體はインヂアン・レッドに

塗り潰してあるから、あか馬である。

下圖は私が此地方でみたらうちの最も裝飾の多い農家の一で、さう大きく(次頁へ)

い。其つもりでアルミニュームの鍋に入つたまま机の上に置き、日記をつけて今日の仕事を終り、明日の用意もできたので、従僕二人が食事のためバザーへ行つて歸らぬうちに消燈をしてねた。

七五、ラクサウルの農家

ネバル入國は幾多の波瀾曲折を経て漸く目的を達し得る迄になつたのである。外國人が入國する唯一の關門といふべきは、このラクサウルからで、其他潜行者は別として、餘程特別の事情でもなければ、他所からは望めぬらしい。又望んで假に許可されたとしても、私共の様に手薄な設備では、到底手も足も出せないらしい。とにかくここにラクサウルの農家數種を掲げ、餘り日本人の行かない北印の特種住宅を紹介しておかう。此邊の家は町家はさうでもないが、農家となると大概一階建て、藁葺で窓はなく、壁は土色でそれに原始色——白・黒・代赭——で原始的の繪をかく。其繪が捨て難い味をもつてゐる。東西はどれ位の範圍か知らぬが、北の方はラクサウルから13哩のバルワニプール(Parwanipur)位までらしい。尤も私は汽車の窓から沿線の民家を見たのだから、甚だ以てあやしいが、今のところこれ位の標準として考へるより仕方がないのである。

繪は黒で輪郭をとり、白と代赭とで一つおきに塗るのが普通だが、白と黒とばかりのときもある。また文字を一面にかいたのがあつた。私のみた例は代赭で澤山の文字をかいたものであつた。敢てこのみではない。私の知つてゐる範圍では南印地方もさうであつた。實に印度人は好んで代赭色を用ふるの

で、南印地方に於いては印度建築の下方、或は沐浴用貯水池の周圍の石塀等を、白と代赭と一つ隔きに塗つてゐるのは常に見受けるところで、時には樹木の下の方迄さうしたの等もある。あの褐色にインヂアン・レッドとは實にうまい名をつけたものと思はれる。この顔料は、もと東印度産の酸化鐵粘土から製したといふから、インヂアン・レッドといふ名はさういふところからでたのかも知れぬ。私はさういふことはよく知らないが、とにかく隨所に用ひられてゐるには驚く。ネバル國に入つても、農家は壁を黄又は白とこの色と塗り分けにしてゐる。ここに掲げた寫眞は、ほんの一例に過ぎないが、これにより其大體を推察し得ることと思ふ。

少しばかり面白いのは米ぐらで、外圍はすべて圓い床を高くし、床下の空氣の流通をよくし、周に椽のあるもあり、戸口も窓もなく、屋根は藁葺であるから、特殊の外觀をしてゐる。支那では圓形の米ぐらを囷といふさうである。私はみたことがないから、どの様な形のものか知らぬが、印度の倉は上から米を入れて、屋根で蓋をして貯藏するのだといふ。まことに風致のある原始的建築である(第39頁)。

昭和十一年四月七日の朝、孟買の宿舍で新聞紙(The Times of India)を見てゐたら、ラクサウルのバザーに於いて原因不明の火を失し、折柄疾風に煽られ意外の大火となり、隣接のバレワ村迄を焼き拂ひ、多大の損害を與へ、重傷者十四人をだしたといふ四月六日付ラクサウル通信がのつてゐた。してみると恐らくI・Bは元より、これ等の家屋倉庫は、今では復興してゐるだらうが、同じものはもう

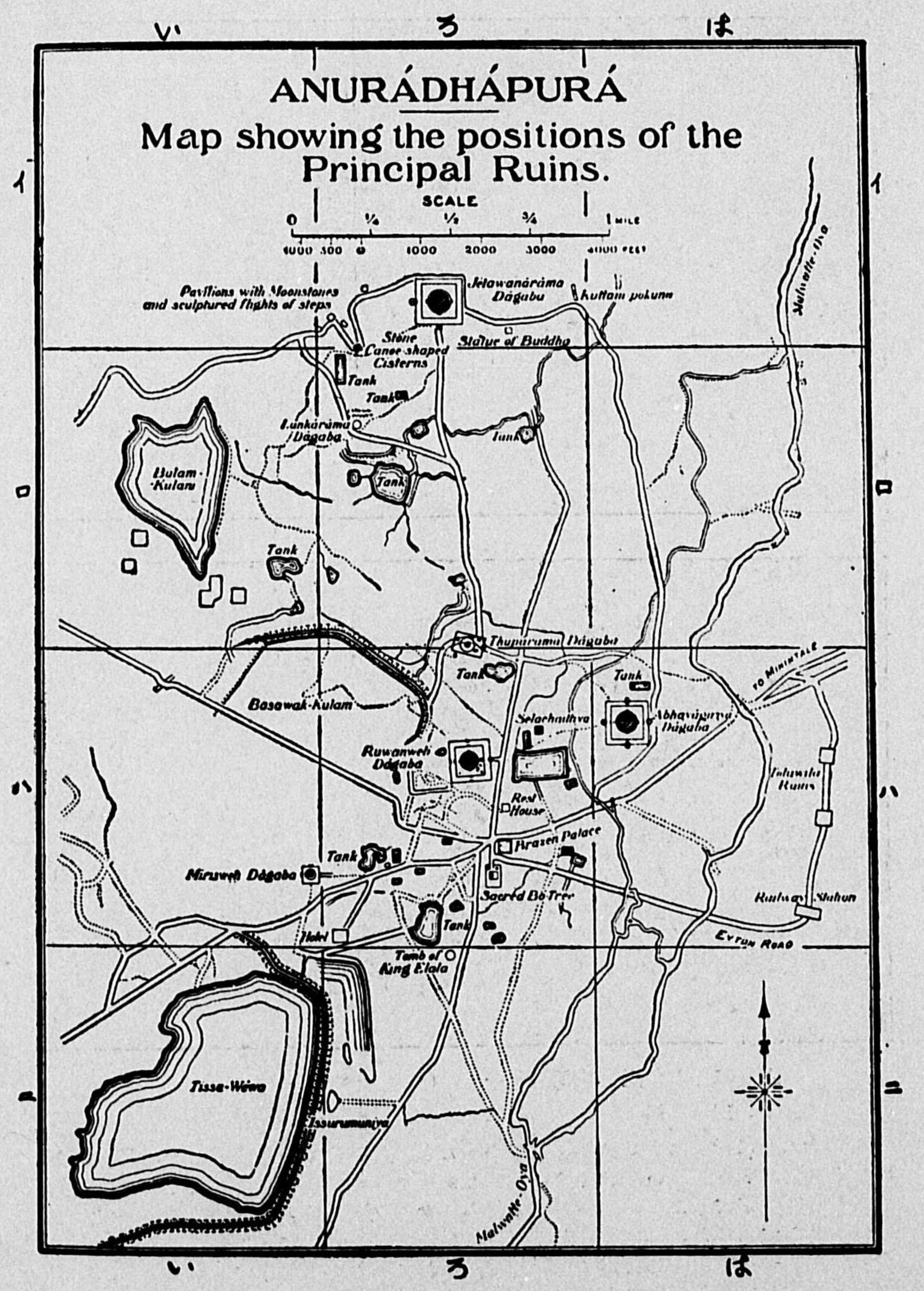
あるまいから、多分私の寫眞に残ってゐるだけであらう。果してさうなら、下らない寫眞だといつてさう馬鹿にしたものでもあるまい。

(昭和十二年六月八日京城に於いて稿了)

【印度佛塔巡禮記】 上冊 終

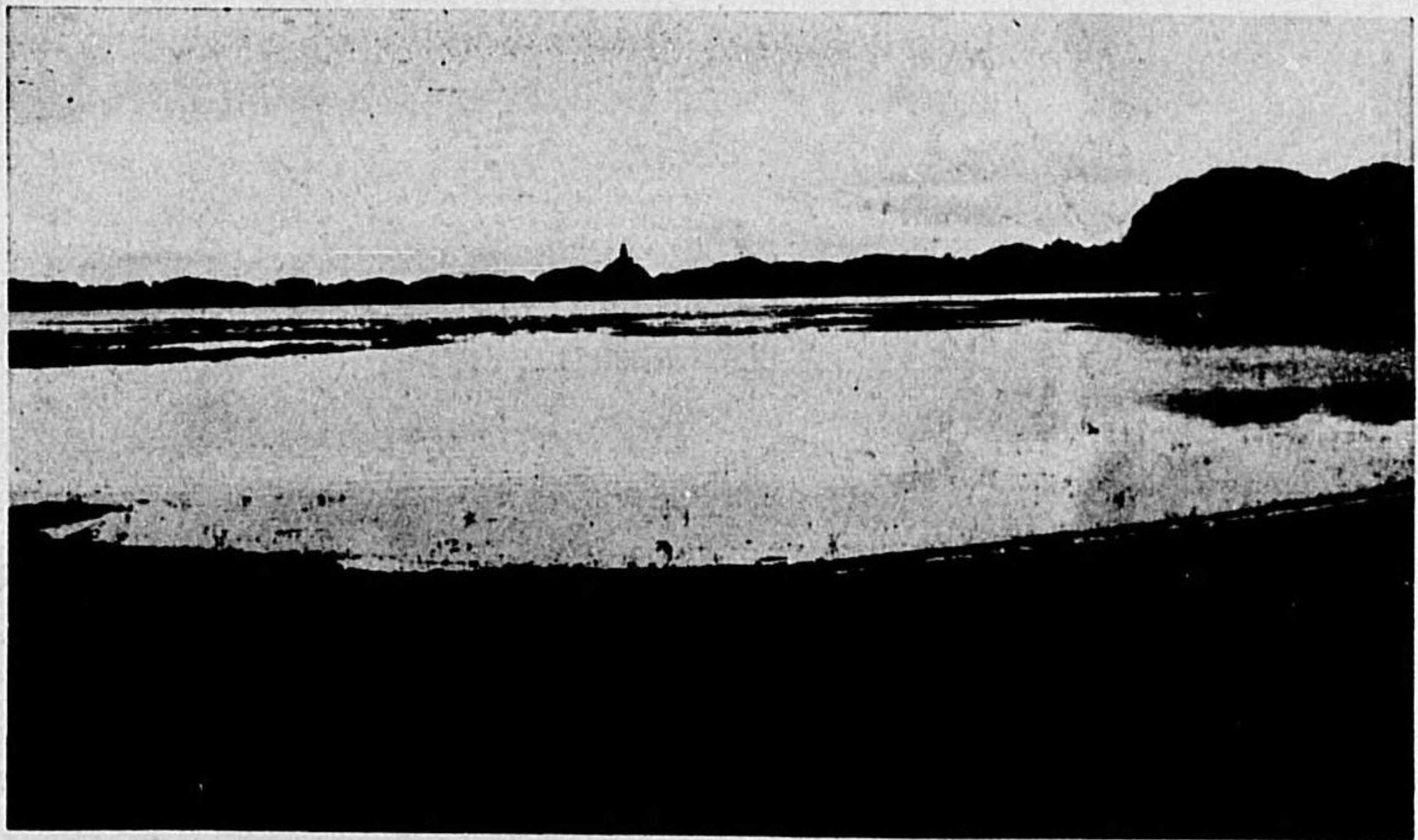
圖 版

— 159 —



— アナラジャブラ地図

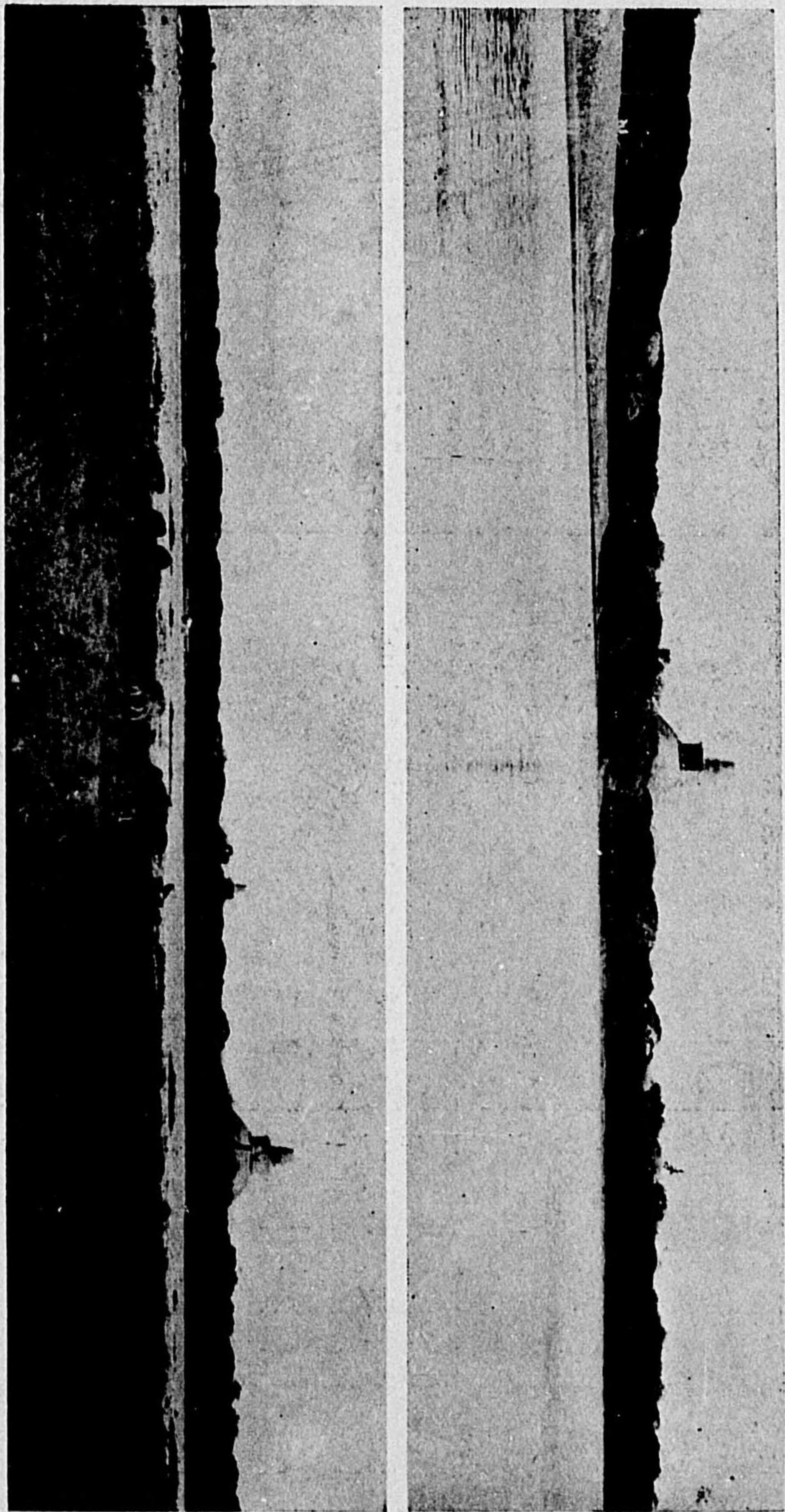
アナラジャ市遺跡圖は、非常に詳しいのがあるが、複寫困難なので “The Ceylon Govt. Ry” といふ書物の挿圖を複寫し、少しばかり手入れをして用ひておいた。



上。二 祇園塔遠望 其一 (大正十二年一月二十六日)

下。三 同 其二 (昭和十一年一月二日)

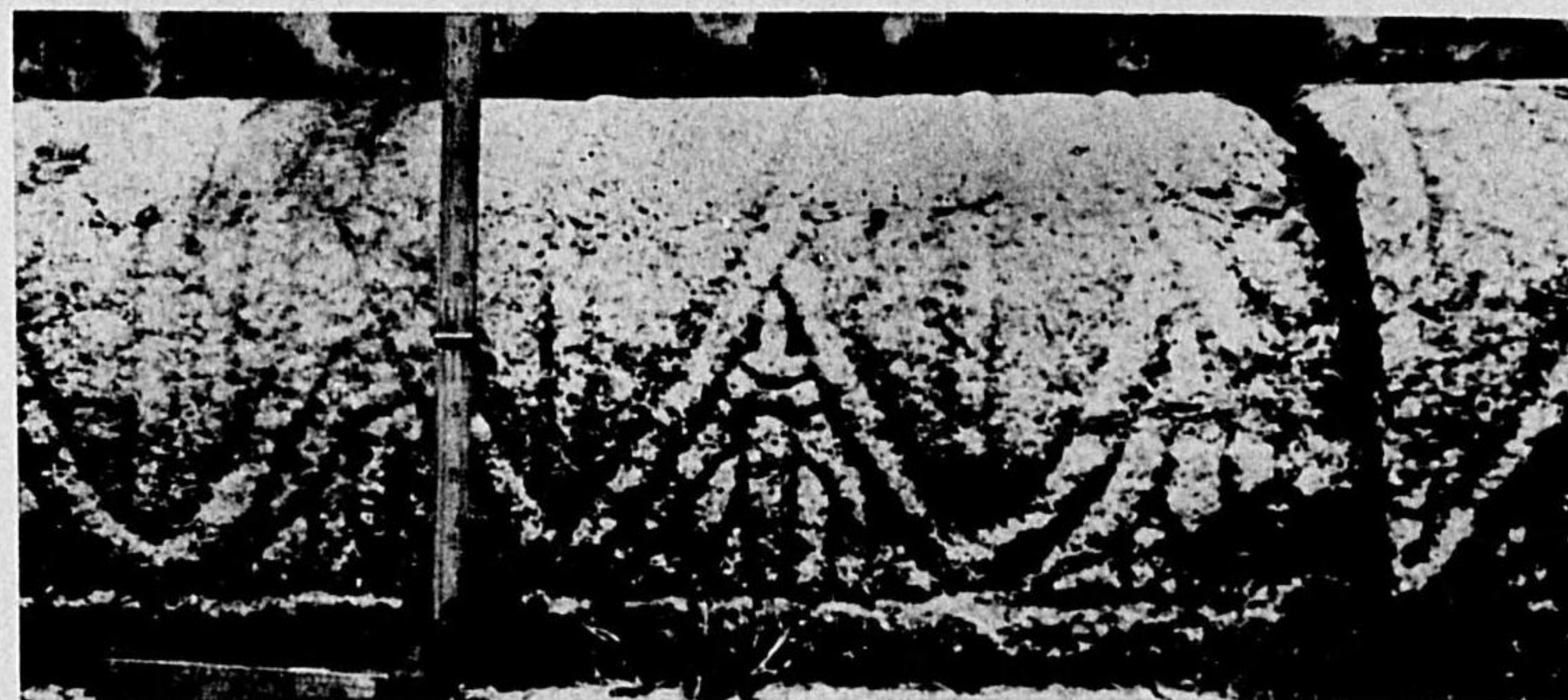
大正十二年に行ったときは、最初であったため、みるもの皆珍らしく、景色等をゆっくり眺めやう等といふひまはなかったが、ホテルから祇園塔へ行くとき、偶然湖畔から遠望ができた。湖といふのは即ちバサワク・クラム(一いろロハ)で、その南側からであった。早速寫眞をとたら、二の様なものできたから、それを【印度旅行記】へ掲げたりしたが(第514頁)、それはほんの一部であったため、此度は全部を出して、其雄大さを見せた。三は今回略ぼ同じ様な位置をさがして、樹木の間から寫して別種の感を出すべく試みた。かかる光景は到底他に求め得られない。



上。四 金粉塔及無畏山塔遠望 其一 (昭和十一年一月二日)

下。五 同 其二 (昭和十一年一月二日)

バサワク湖(一いろロハ)の一周を試みたときは、丁度一月二日の午後で、非常にいい天気であった。北側の堤防の上を西に向って歩いたが、不圖後をみたら、金粉塔がまともに日光を受けて光り輝き、湖面によく反射してゐたので、寫したのが上圖。其左下に無畏山塔の相輪の頭だけが見えてゐる。夫れから西側を通り、南側の方へ行かうとしたら、今度は無畏山塔が大分に見え、又別種の趣があつた。夫れが下圖。前頁の二圖と共に絶景。

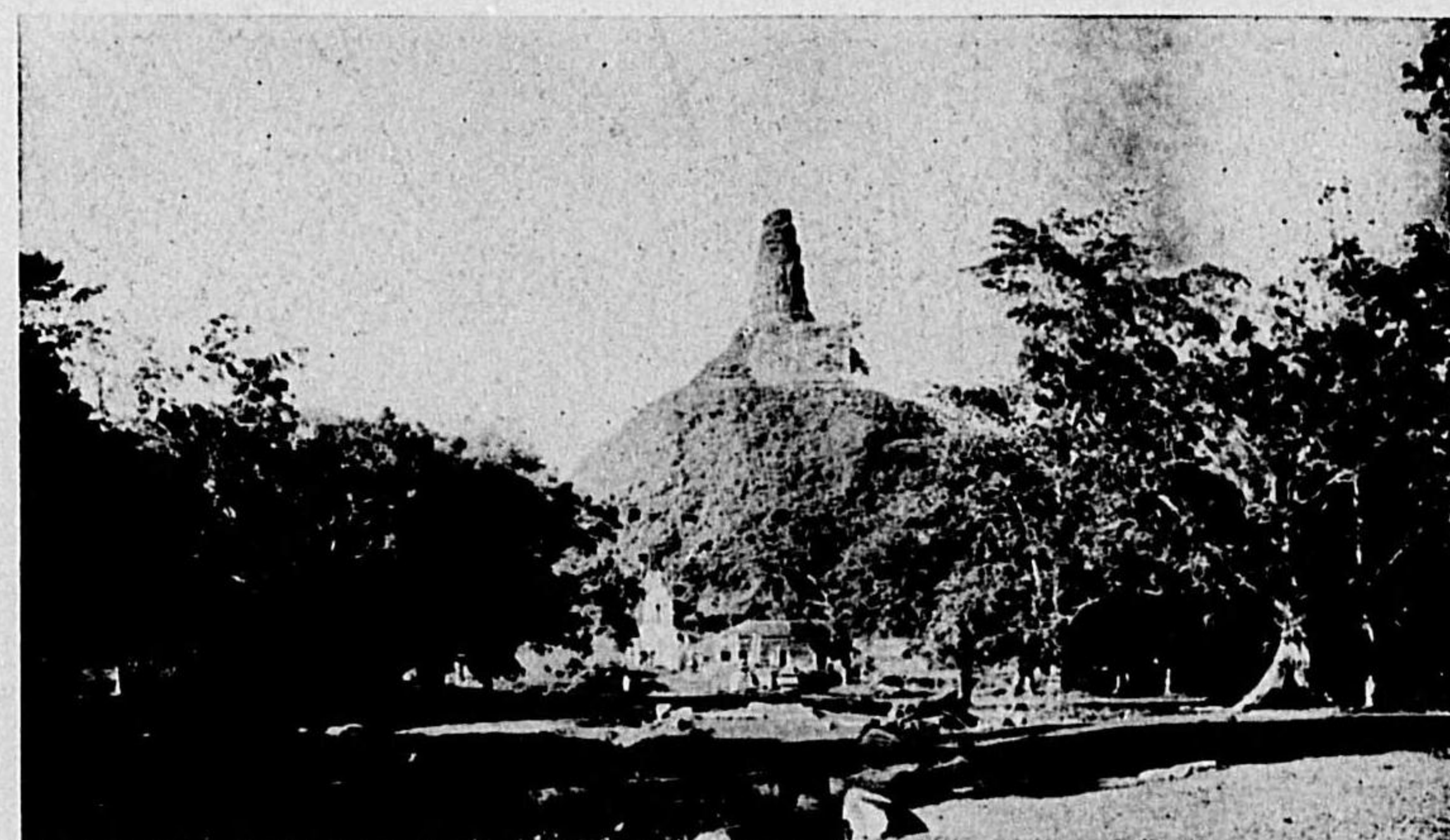
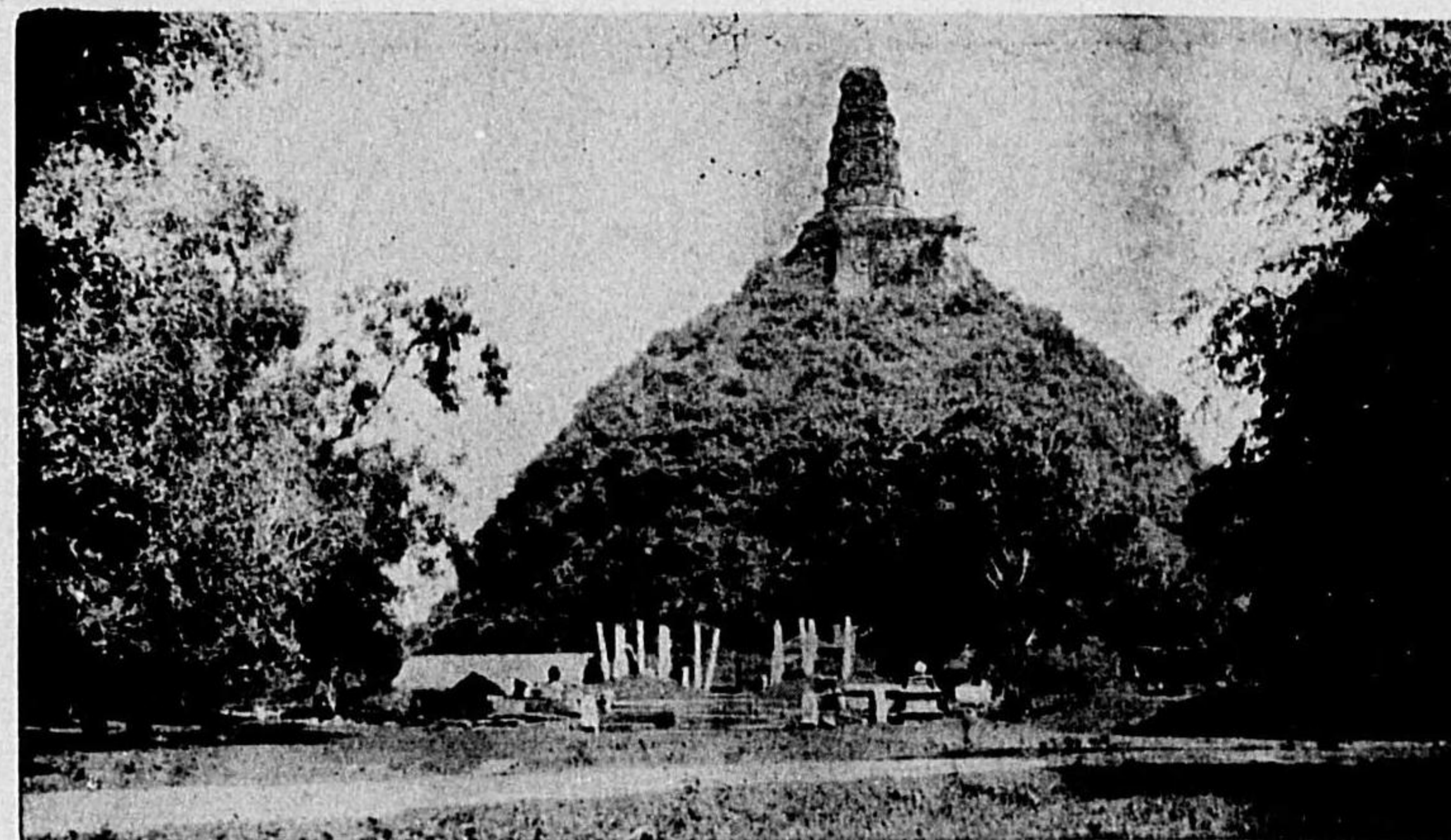


上。八 祇園塔基部反花 其一
下。九 同 其二

(上圖物指は曲尺の約五寸(六吋)・下圖一尺・昭和十一年一月一日)
祇園塔の基部には、花崗岩を以て彫刻した簡単な反花裝飾がある。全體が外側に膨らんでゐること圓弧の如く、蓮花瓣は一つ隔きに前後してゐて、相隣れる瓣と其遊離端を結べる水平線との間に形成されてゐる三角形の部分、殆んど總て蓮花の横向きを以て充たしてあり、ただ僅かが文様を異にしてゐるだけである(上圖)。

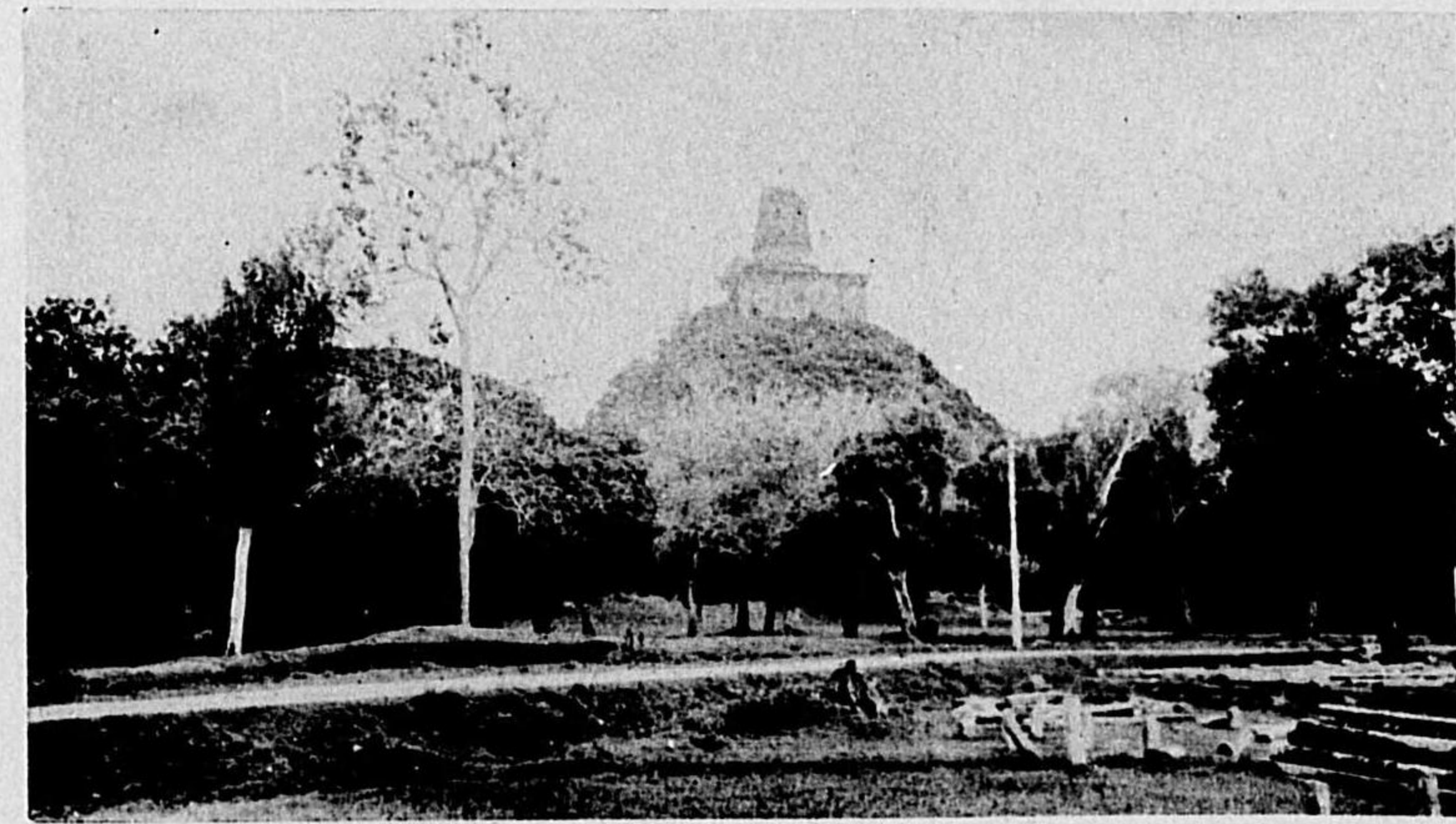
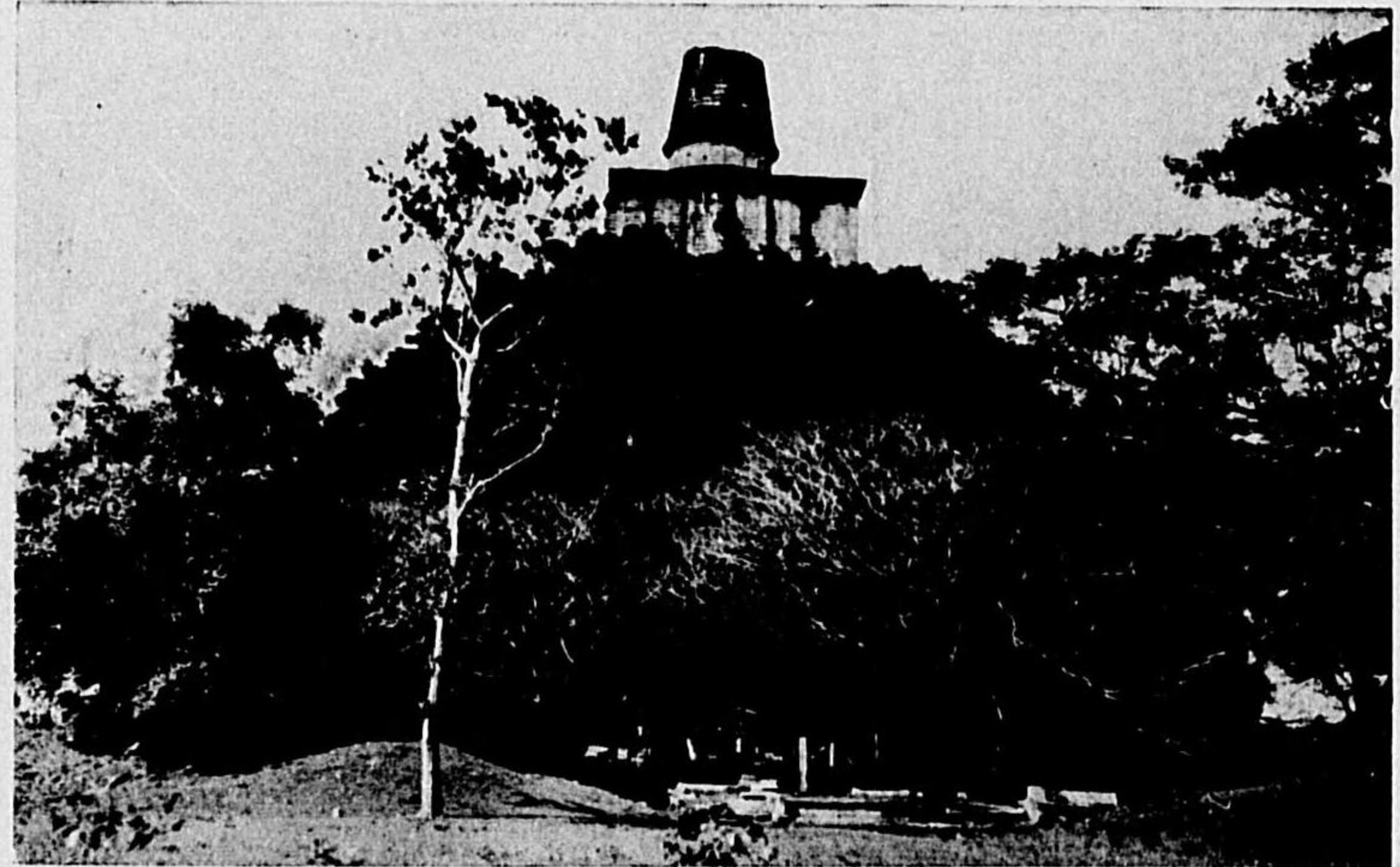
* * * * *

今私の興味を惹いたのは、この三角の空間を充たしてゐる下向きの蓮花である。なぜならこれが古代埃及の裝飾文様に現はれてゐると同じものであるからである。尤も斯様な蓮花は、印度にありてはサンチ(Sanchi)の塔門、パールハット(Bharhut)塔婆玉垣、或はナシク(Nasik)窟殿の柱の裝飾文様等にも現はれてゐて、ここばかりではないが、かかる形に蓮花を現すことは、印度や錫蘭に於いて創案されたものではなく、やはり埃及裝飾の影響と考へ度いのである。塔婆の基部を蓮花で飾ることは、我國にも廣く行はれた。



上。六 祇園塔 其一 (大正十二年一月二十六日)
下。七 同 其二 (昭和十一年一月二日)

上下圖共祇園塔(ジェタワナラマ(Jetawanarama))を南側からみたもの。何にしるB.C.88からとすると、随分永年のことだから、十三年位は問題でない。人爲的に模様替をせぬ以上、塔其物の概形に變化がないのは當然である。大きな漏斗の様にはあるが、さうしてこれが無畏山塔であつたとすると、尙更のことだが、當地に於ける塔のうちで、一番形がいいといふ感が一層増してくるのである。即ち最大最美といへるのである。十三年前、正面階段の傍に藁葺の小屋があつたのを、困つた事だと思つてゐたが、今度は一層困つたものができてしまつた。どこ迄俗化することか。

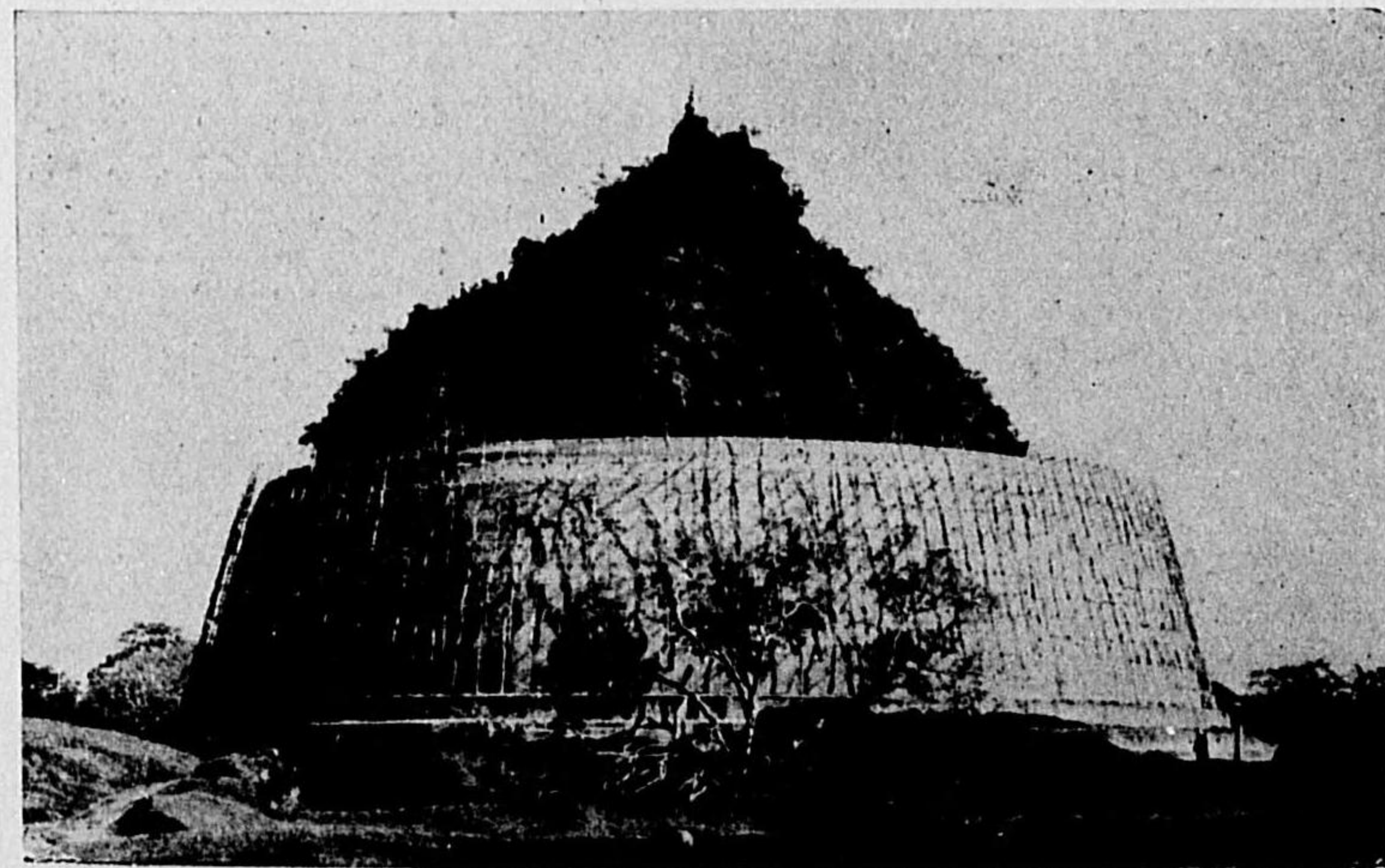
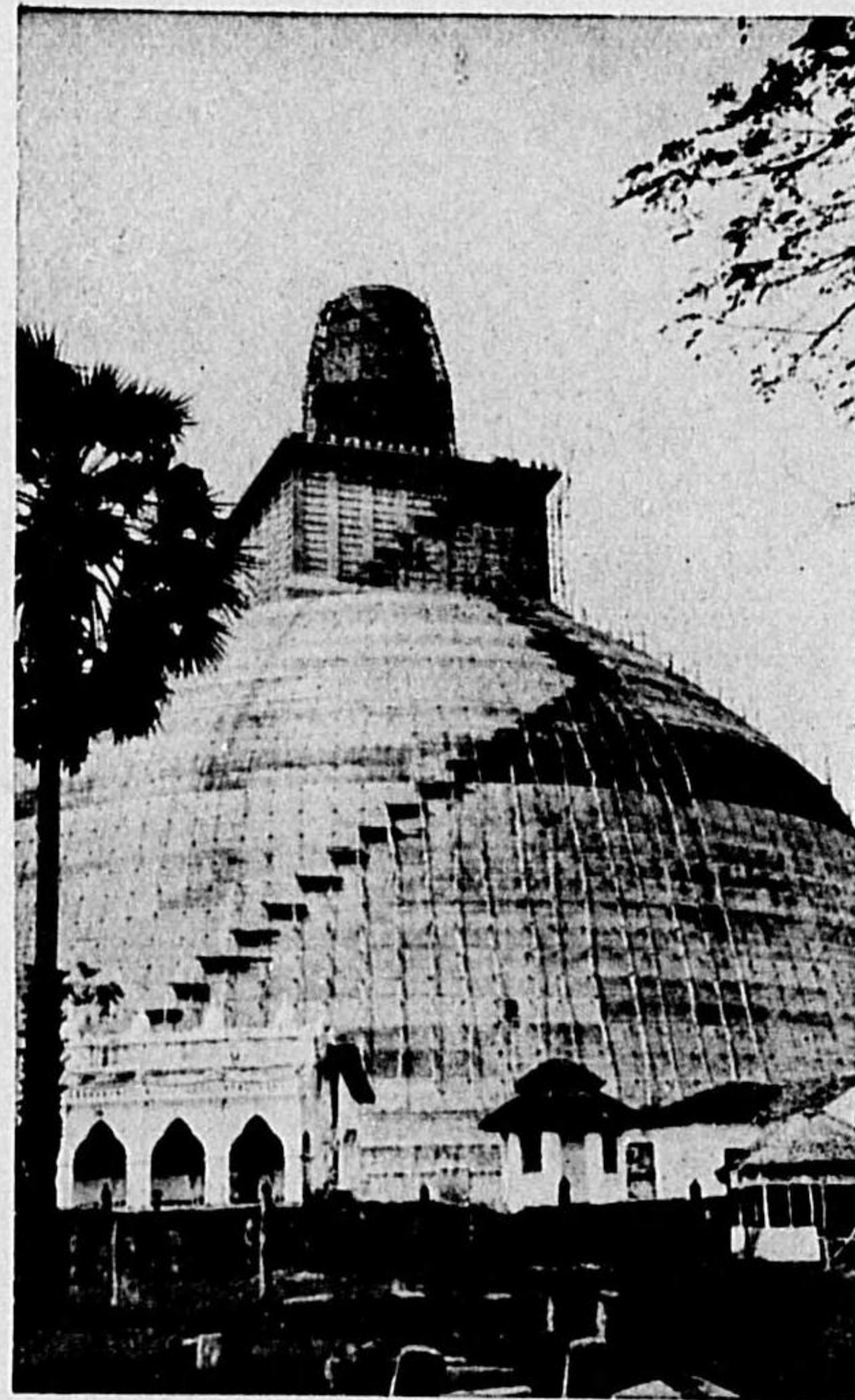


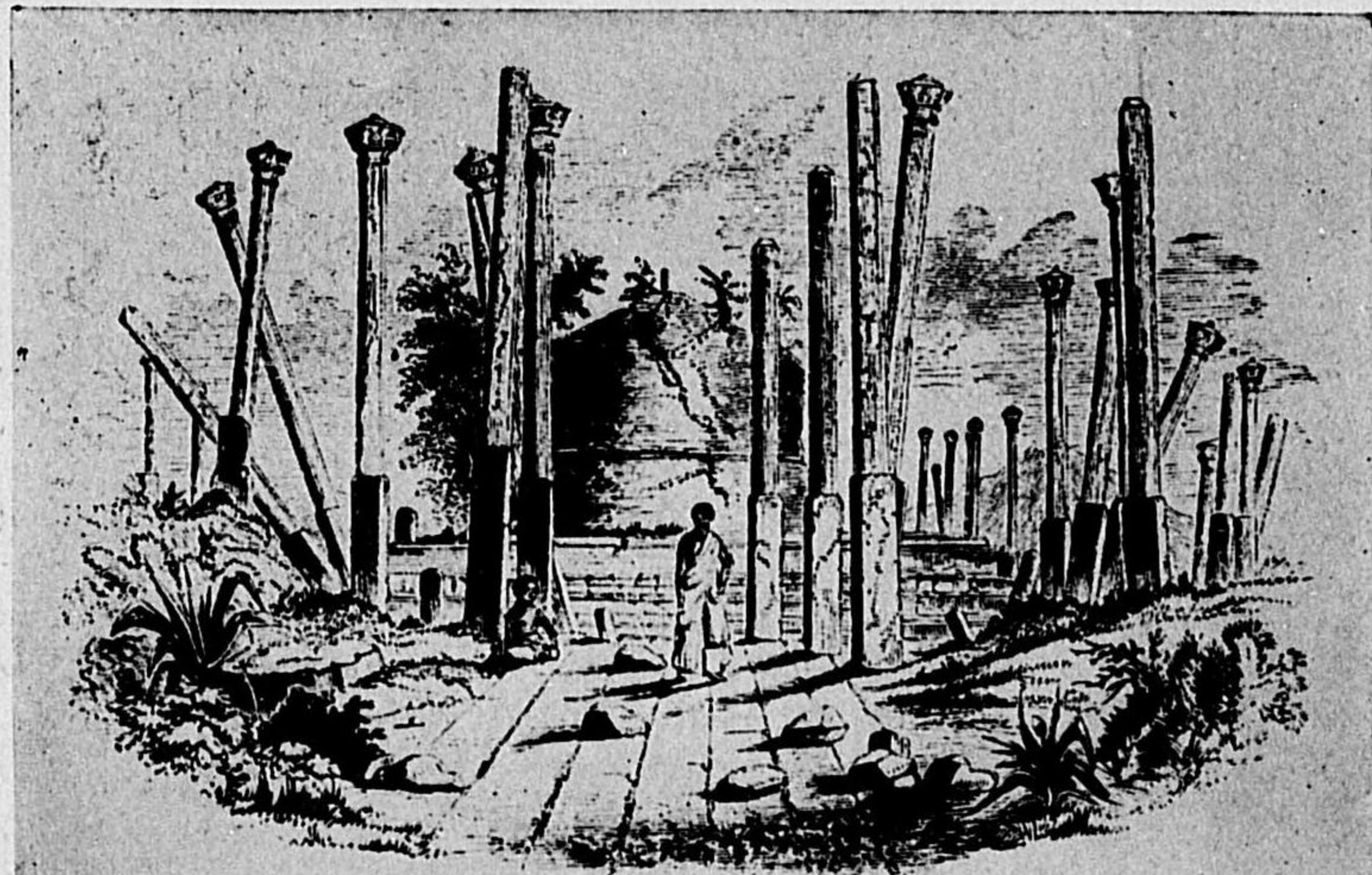
上。一〇 無畏山塔 其一 (大正十二年一月二十六日)
 下。一一 同 其二 (昭和十一年一月一日)

祇園塔と無畏山塔と名が入れ違ったさうだから、元へ返して考へると、これは祇園塔であるわけである。アナラジャ市に於ける主要な塔婆のうち、よく古式を存してゐるのは此等の兩塔だけで、これも亦祇園塔と同じく、此前と殆んど變つてゐず、これから先は知らぬが、今日迄はよく古式を存してゐた。塔上の四角形の所謂「平頭」はよく形を残してゐるが、相輪が折れたのは惜しい。

上。一二 金粉塔 (修理中) 其一
 下。一三 同 (修理中) 其二 (昭和十一年一月一日)

【錫蘭の亡都】の挿畫は、寫しやうも拙いやうだし、見た向方もいけないかも知れぬが、まるで塔だか何だか判らぬやうなものだが、大正十二年一月には修理進行中で、下圖の如く下から半分位煉瓦が巻いてあつた。この先どうするかと思つてゐるが、此度幸に再度見學したら、上圖の如くともかくも形だけは殆んどでき上りかけてゐた。此前にも少しはあつたが、何しろ新しい拙い建物を澤山に建てたのは困つた次第である。



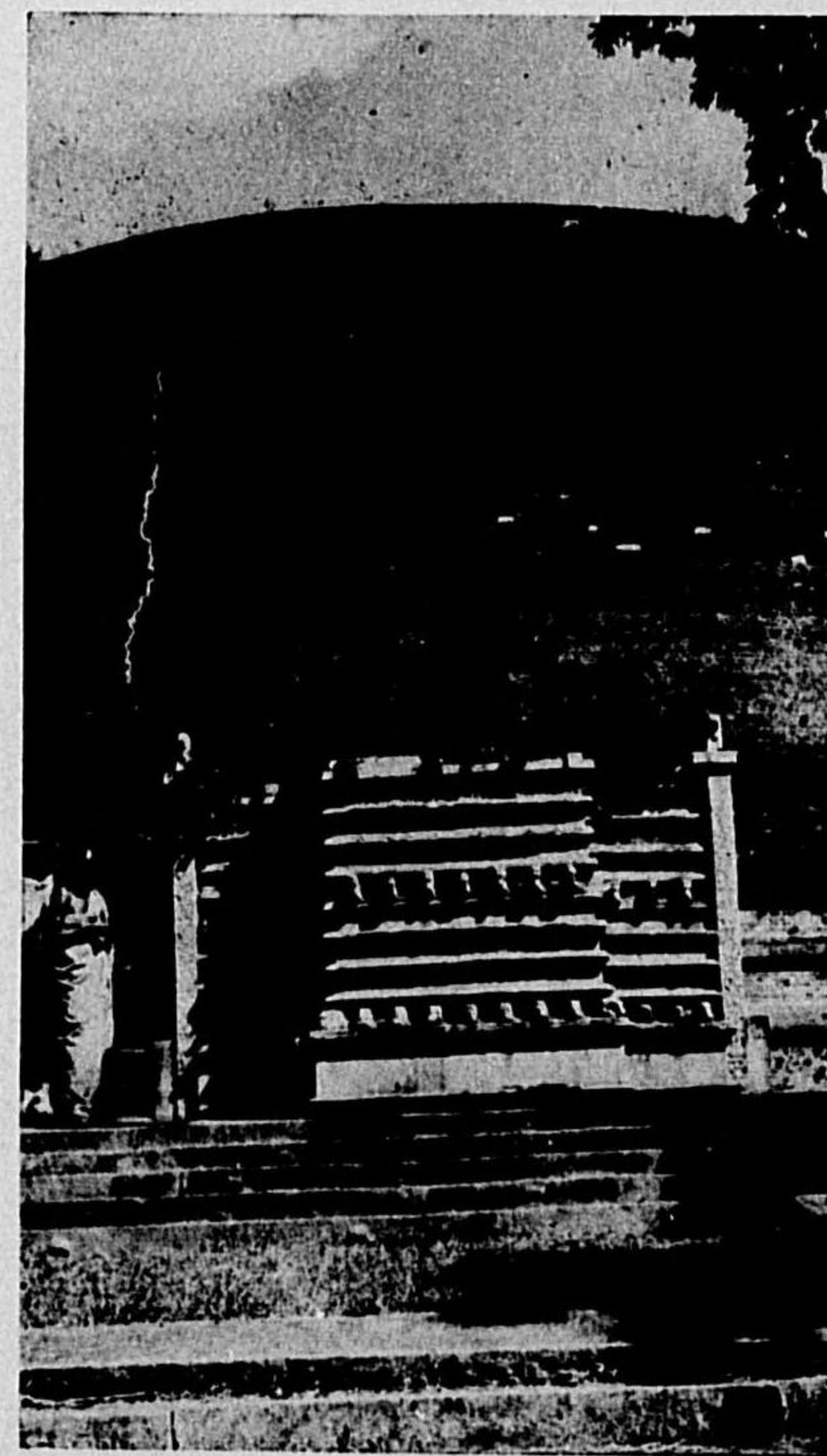
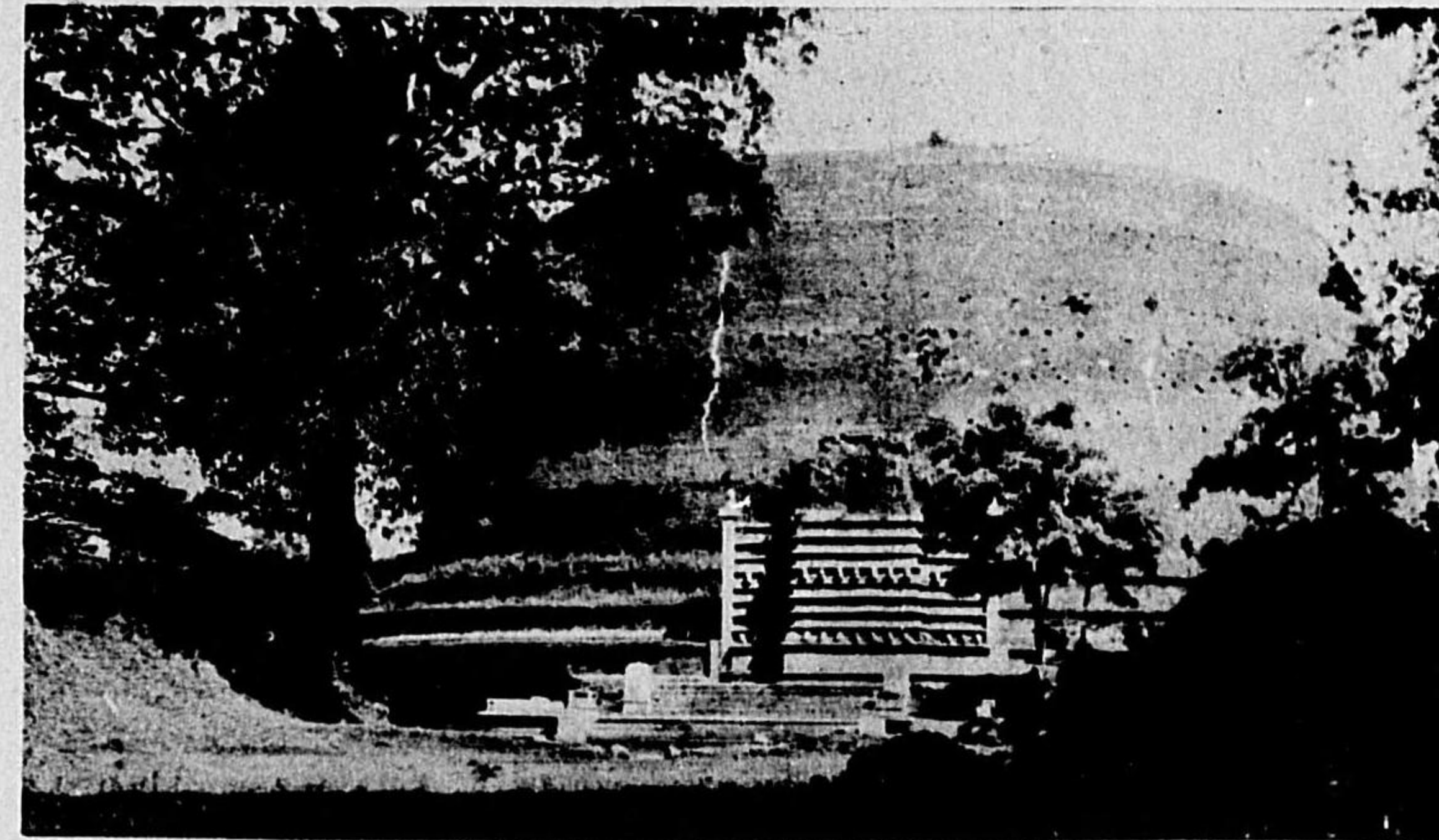


130. Thûpârâma Dâgaba. (From an unpublished Lithograph by the late James Prinsep.)

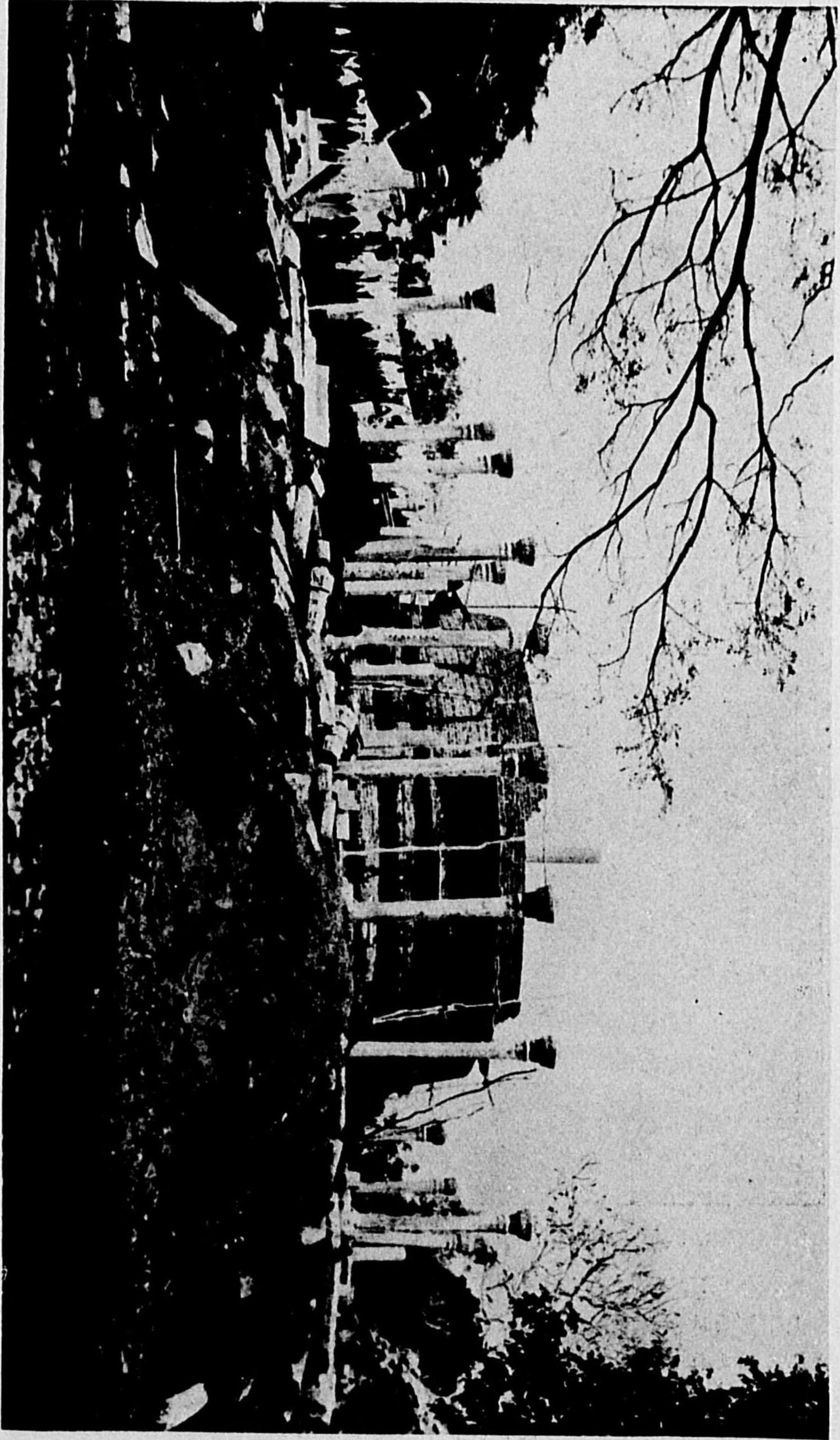


上。一六 ッバラマ塔 (修理前) (ファーガッソン氏著書より)
下。一七 同 (修理後) (大正十二年一月二十六日)

上下圖を比較してみれば、修理の前後で其形に如何に多大の相違があるかが判るであらう。それはうまく推定復原をしたのなら結構だが、どうも現在の状態では、どこまでを信じていいか、少しばかり心細い。確かなのは周圍に四重にたてる柱だけである。



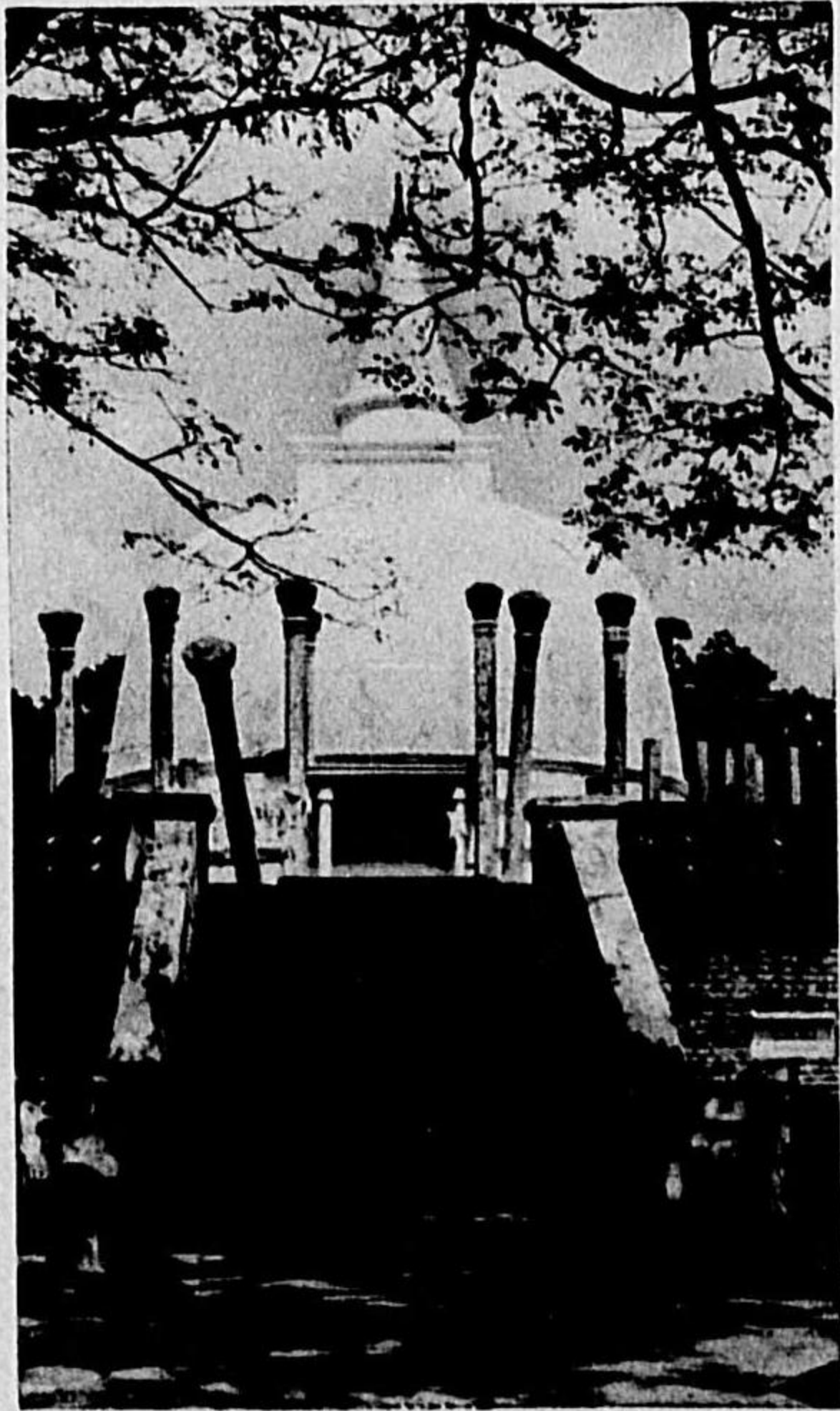
上。一四 蕃椒塔全景(西門)
下。一五 同 西側聖壇
(大正十二年一月二十七日)
(昭和十一年一月二日)
此塔も亦、以前も今も少しも變りなく、相不變海膽型であるが、ただ樹木が餘計に繁茂したため、西方からの眺めは、上圖程明らかでない。但し先年は坊さんも居ず、其ままだ捨ててあつた有様で、無住であつたが、此度は下圖の如く佳持もでき、すべてあたりも美しくなつてゐた。塔はいつ見ても不恰好だが、四方の聖壇は洵に立派なもので、當地ではこの位のはこれだけである。八呎を隔てたミヒンターレ發掘の新塔のは此に類してゐる。



一九 ランカラマ塔 (修理中) (大正十二年一月二十六日)
 一八は明治三年に於けるこの塔の狀態であったが、五十三年後の大正十二年には足場をかけて修理を始め、私はこれを見たとき、どういふ風に修理をするか、多分金物塔の様に大きな海膽をつくるのではないかと考へたが、それは誤りであった、左方柱間に吊つてゐるのは巡禮の小旗。

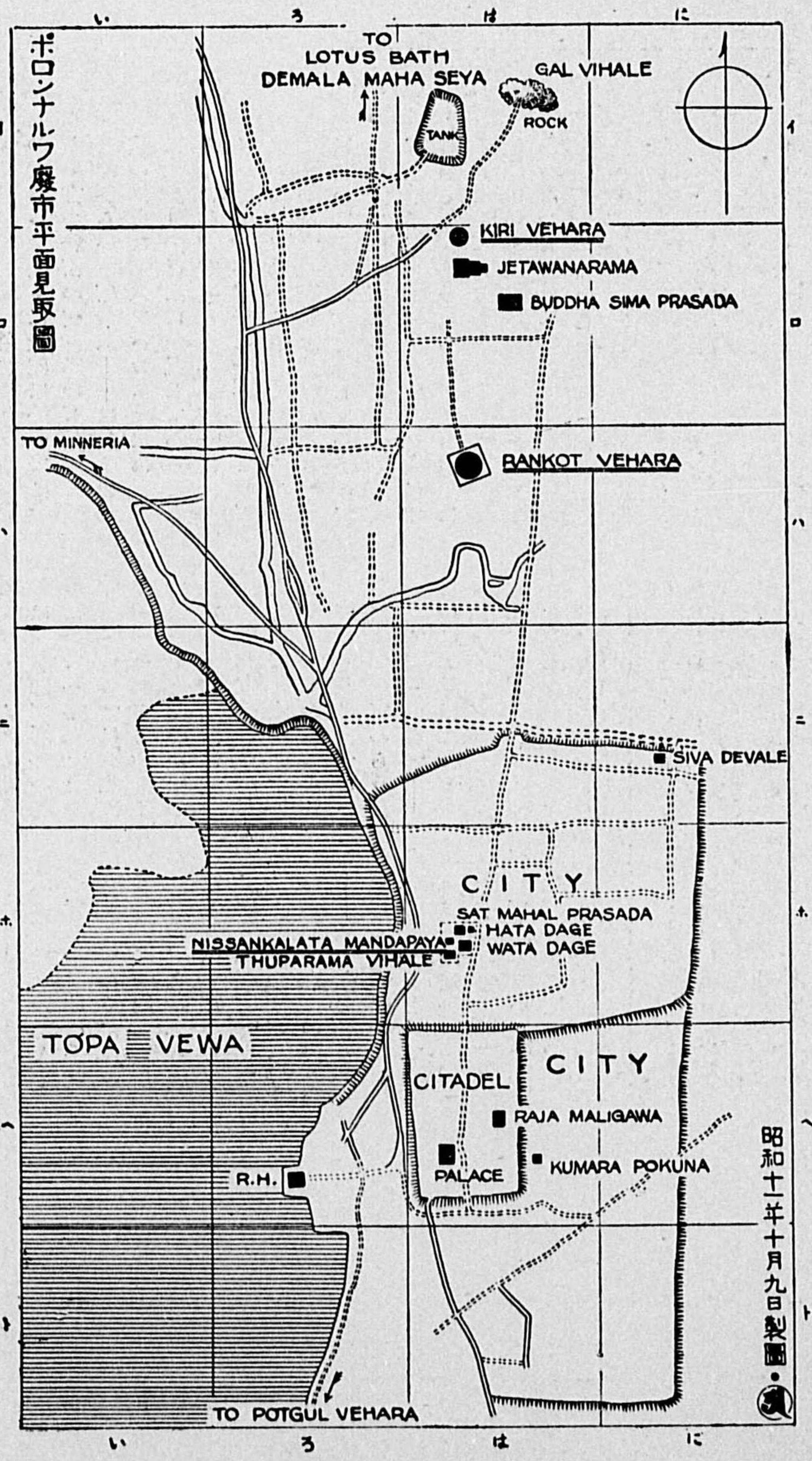


132. Lankārama Dāgaba (1870). (From a Photograph.)

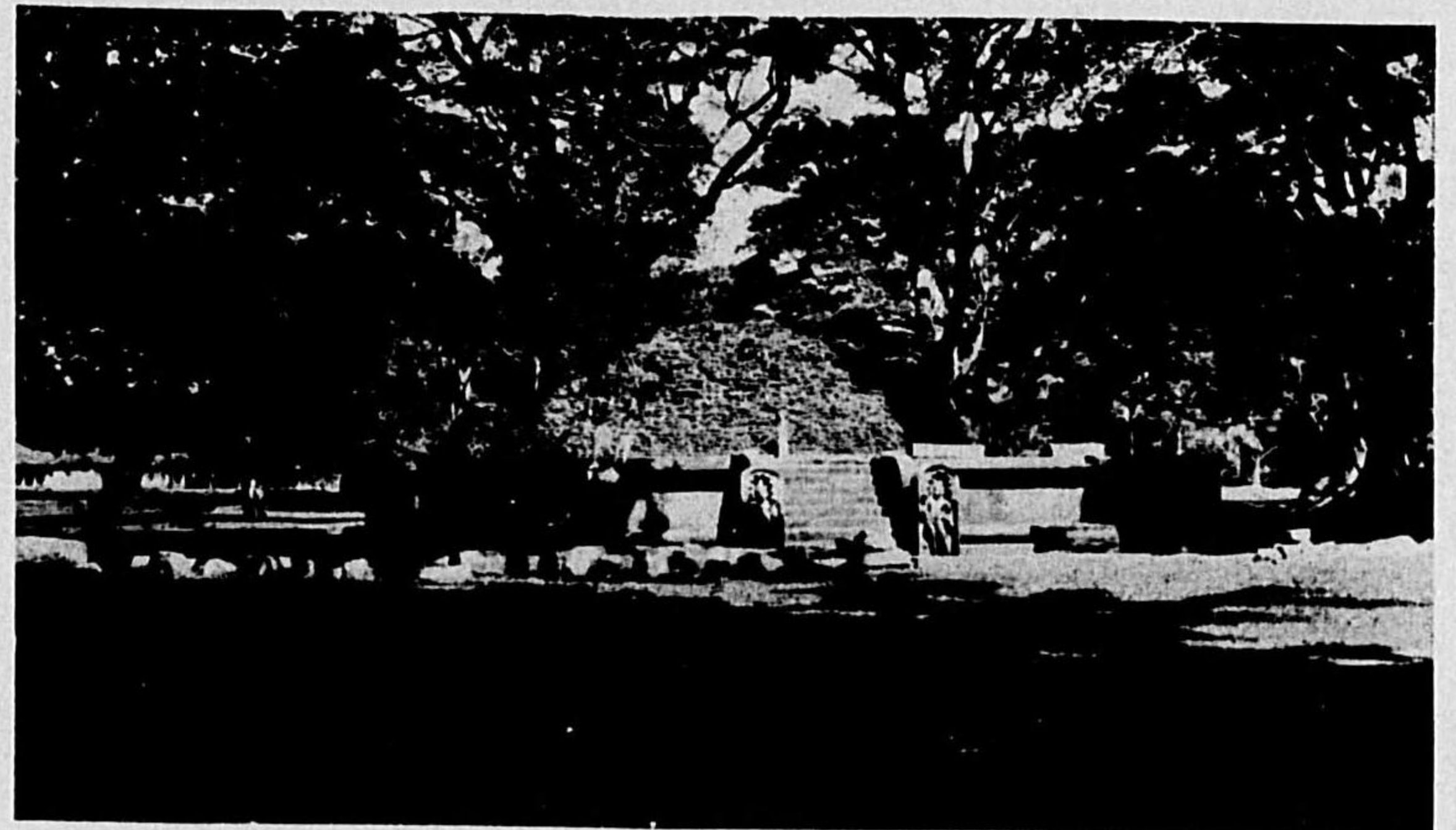
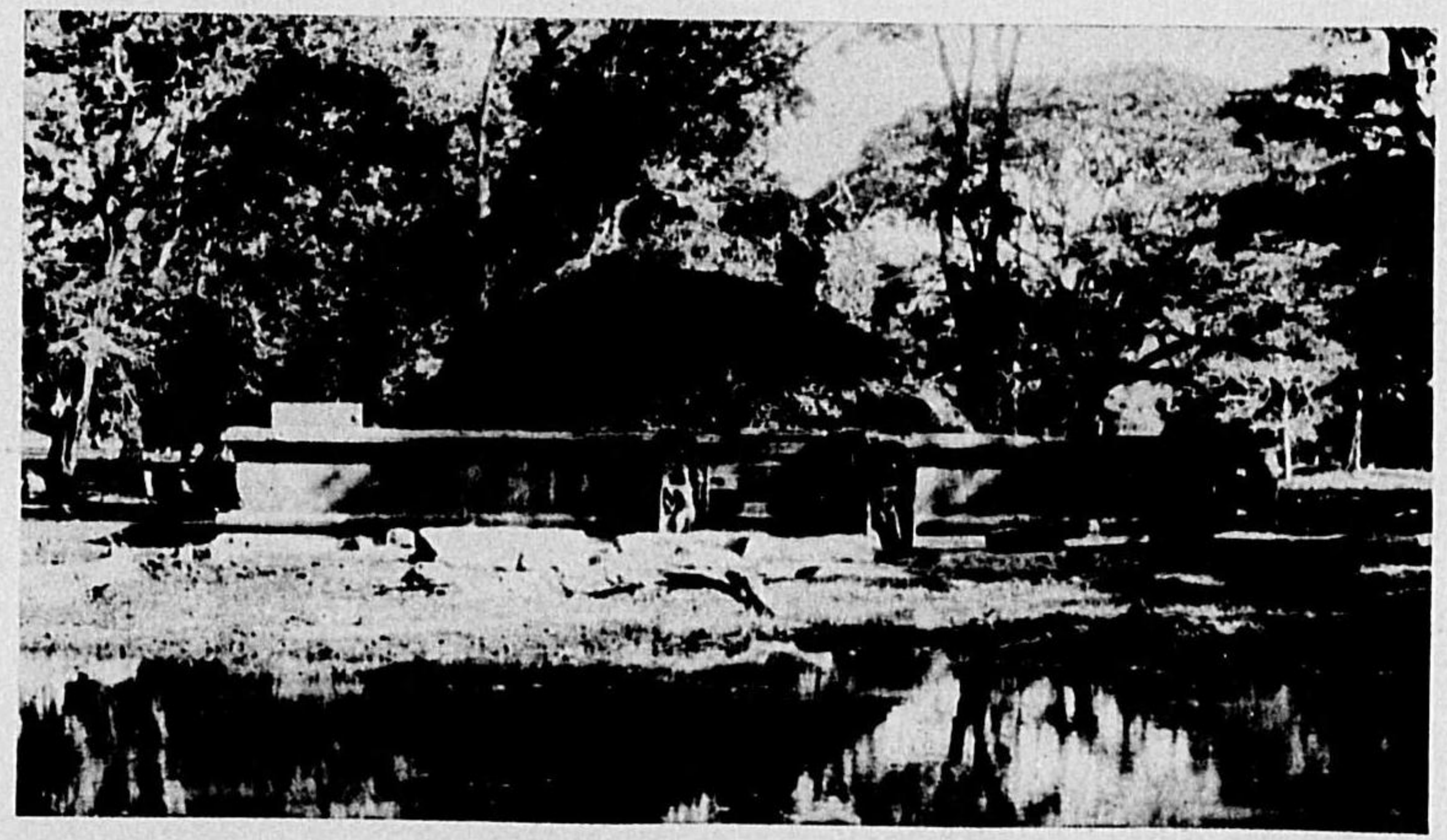


上。一八 ランカラマ塔 (修理前) (ファーガッソン氏著書より)
 下。二〇 同 (修理後) (昭和十一年一月一日)
 一八七〇年、即ち明治三年に上圖の如くであつたランカラマ塔は、い
 つか相輪も平頭も共になくなつて了つたか、或はくづれてゐたのを修理す
 べく試みたか、とにかく大正十二年には、前頁圖に示した如く、煉瓦を
 以て周圍をつみつつあつた。夫れが更に十三年後、即ち明治三年から數
 へて六十七年日の昭和十一年、その一月一日の有様は下圖の如くである。
 修理は正に落成し、まづ白に美事にでき上つたが、上下圖を比較すると
 まことに惜しいことをして了つた事が判るであらう。

二三 「錫蘭考古局報告書」第二冊にはポロンナルワの可なり詳しい図がのせてあるが、其のまま寫真にはとれず。又とったところで、小さくしてはまるで判らなくなる。だから「錫蘭の亡都」所載の圖から引き直して此を作った。勿論大體の見取圖だから、遺跡の大きさや廣さは、必ずしも尺度にあつてゐない。無いよりはよからう位の程度だから、其つもりで見ても可いのである。



昭和十一年十月九日製圖



上。二一 セラチャイチャ塔 其一 (大正十二年一月二十八日)
 下。二二 同 其二 (昭和十一年一月二日)

アナラジャ市所在の七基の塔婆中の最小のもの。ルアンウェリ塔とアバヤギリ塔との間にあるが、以前でも氣をつけぬと知らずに了ふ位であったが、近年ルアンウェリ塔東方の道路に沿ひて家屋が多く建てられたため、一層行きにくくなり、ただでは參詣の道が分らなくなってしまった位である。

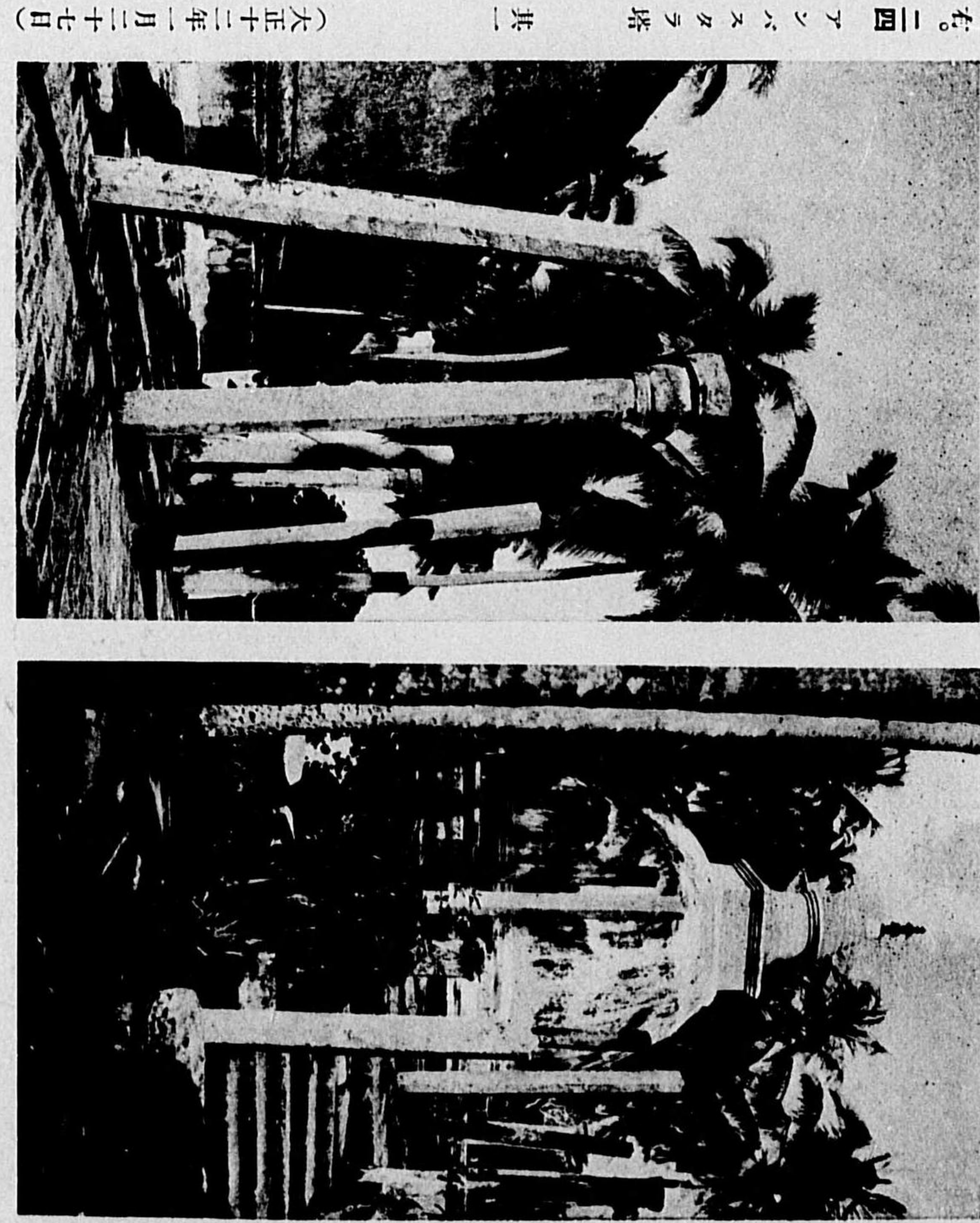
基壇だけはまともであり、階段の留石等も上下兩圖に見る如く立派にあるが、塔其物は原型が判らぬ迄になつてゐる。

印度に於いて塔婆に遺物等を收藏するならば、いふ迄もなく「平頭」——伏鉢上の方形の部分——におさめるのである。然るに我國に於いては、木造又は（石造）層塔の場合、最上層は寶形造だから、その上のところ、即ち四方の斜面の交會點の兩仕舞と體裁とのために「露盤」をのせるのである。故に平たい方形のものが最下——塔身からいへば最上——にあるのは當然で、「伏鉢」は自然其上に乗るのである。だから「平頭」及び其上の數重の四角な蓋（アバカス）にあたるものも亦、そのまま押し上げられて、第二十四・第三十四——三十八圖にみる様に元通り伏鉢上に位置してゐること勿論である。ところが中心柱が発達し、九輪・水煙・龍車・寶珠等をつけてゐるため、重要な「平頭」は内部空虚となり、輪廓だけ残つて單なる裝飾となつて了つた。此は元來方形であるべきものが、後に角がとれて圓形となり、遂に花瓣さへ生じて謂はゆる「受花」となつたとみるべきで、かう迄なるとは考へられぬ迄に變つてしまつたとみて差支ない。

「平頭」及び其上數重の蓋の原型を其まま残してゐるものは、奈良藥師寺東塔の夫れである。この塔はこの點に於いてよく古式を存してゐるのである。四角な花は先づないから——但唐様勾欄の四角な親柱は問題外——この部分が四角である間は、多分花瓣は生じなかつたであらう。何れにしても我國の木造層塔の伏鉢の様になつては、舍利は到底「平頭」に收藏はできないから、「寶珠」——心礎中は別——を以てこれに替へたのであらう。けれども、かうなると其最も原型に近いものは伏鉢に入れるのである。石造寶塔の一種にありては、塔身に收め石蓋をしてあるものもある。

我國の木造層塔に於ける舍利收藏の場所につき、伏鉢に收めるべきであるといつたのに對し、疑義あるやに聞及んだので、特に此機會にこれだけのことを記したのである。尙ほ此巡禮記が回を重ねるに従つて、自然このことに觸れるであらうことを此際斷つておく。

*勿論餘例はある。平頭は印度に於いては "Tee"、ウラウの "Shan" 語 "Hiti" の英語化したもの。梵語 "Harmika"、相輪は "Chhatravali"、心柱を "Yashu"、ウラウの "Shan" 語 "Fergusson-History of I. & E. Arch. vol. I. P. 70 ff. note) (十一月六日記)



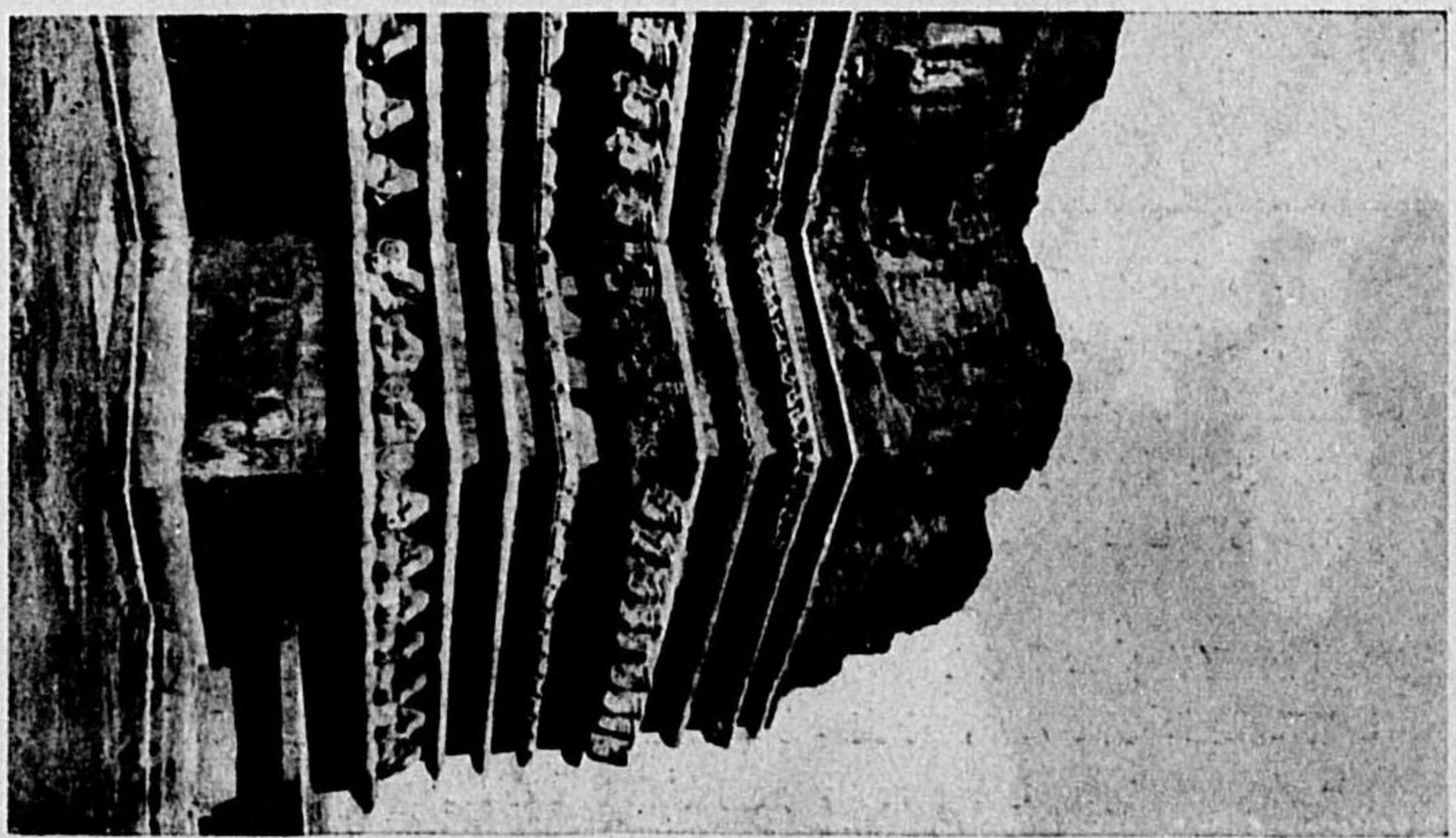
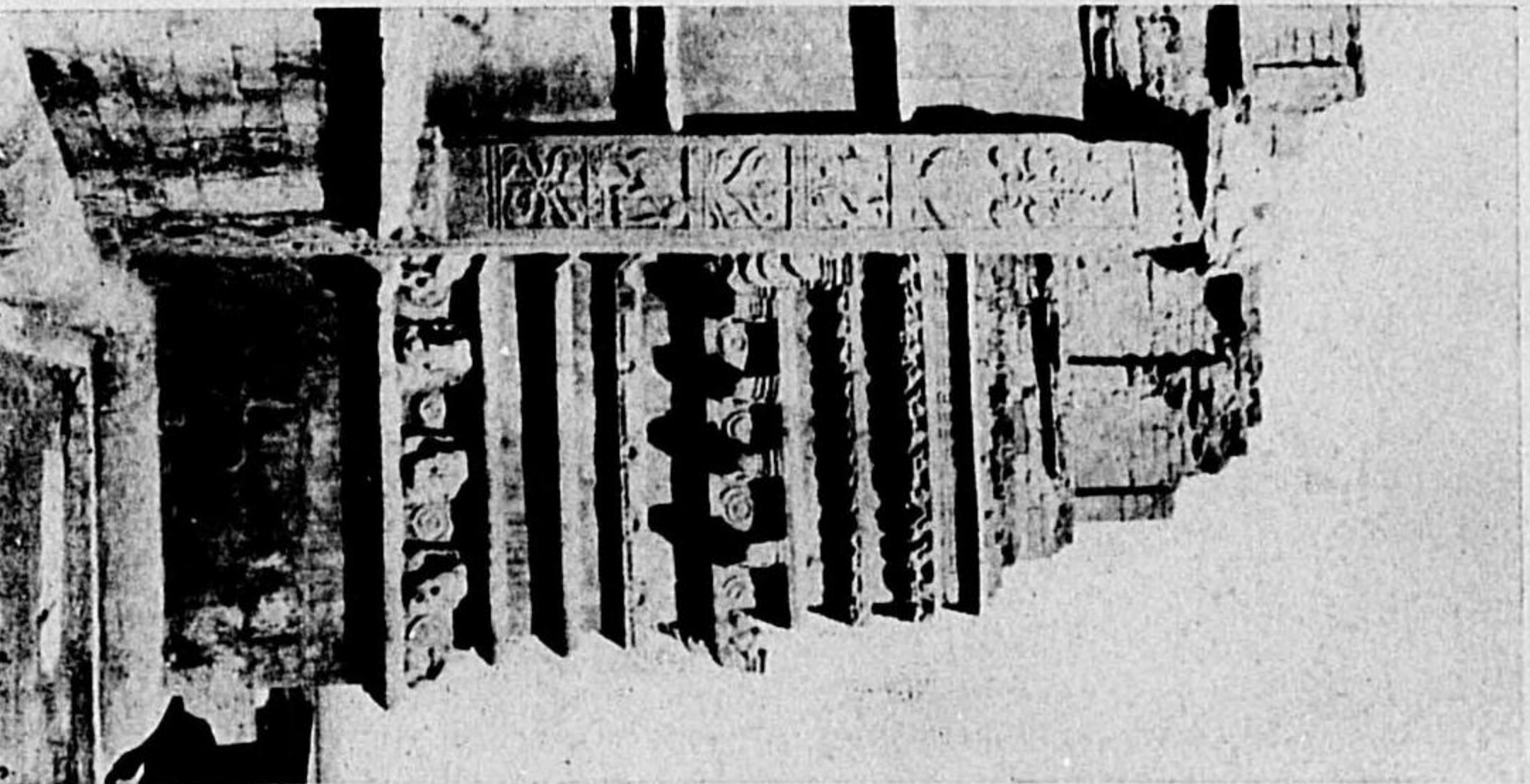
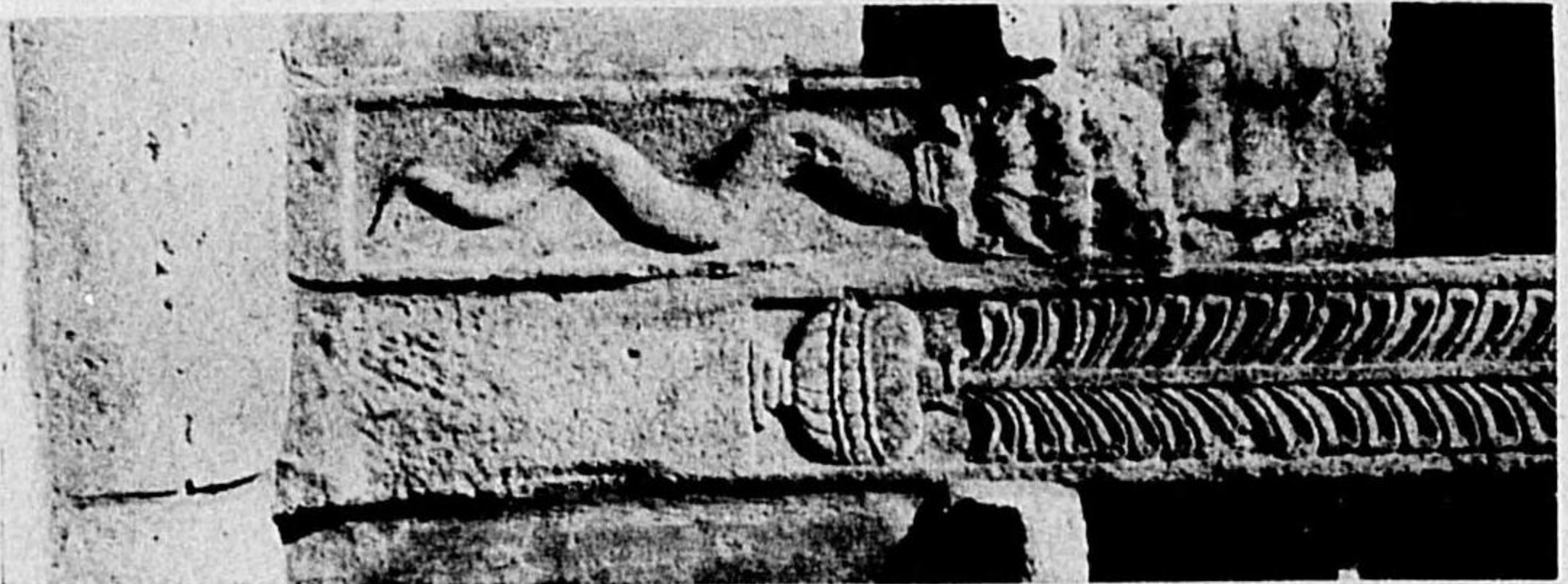
右。一四 アンバヌカラ塔 其一
 錫蘭島に於ける靈跡中の靈跡ともいふべき、阿育王の王子マヒンダ埋骨のところに建てたといふ靈塔。前回にはまだ大分白色の塗料が附着してゐたが（右圖）、今は殆んどとれて了つたので、大變に落つて見えた（左圖）。アナラジャ市に於けるアンバヌ・ランカラ二塔と同様、塔婆の周圍を石柱が二列に廻つてゐる。

左。二五 同 其二
 （昭和十一年一月二日）

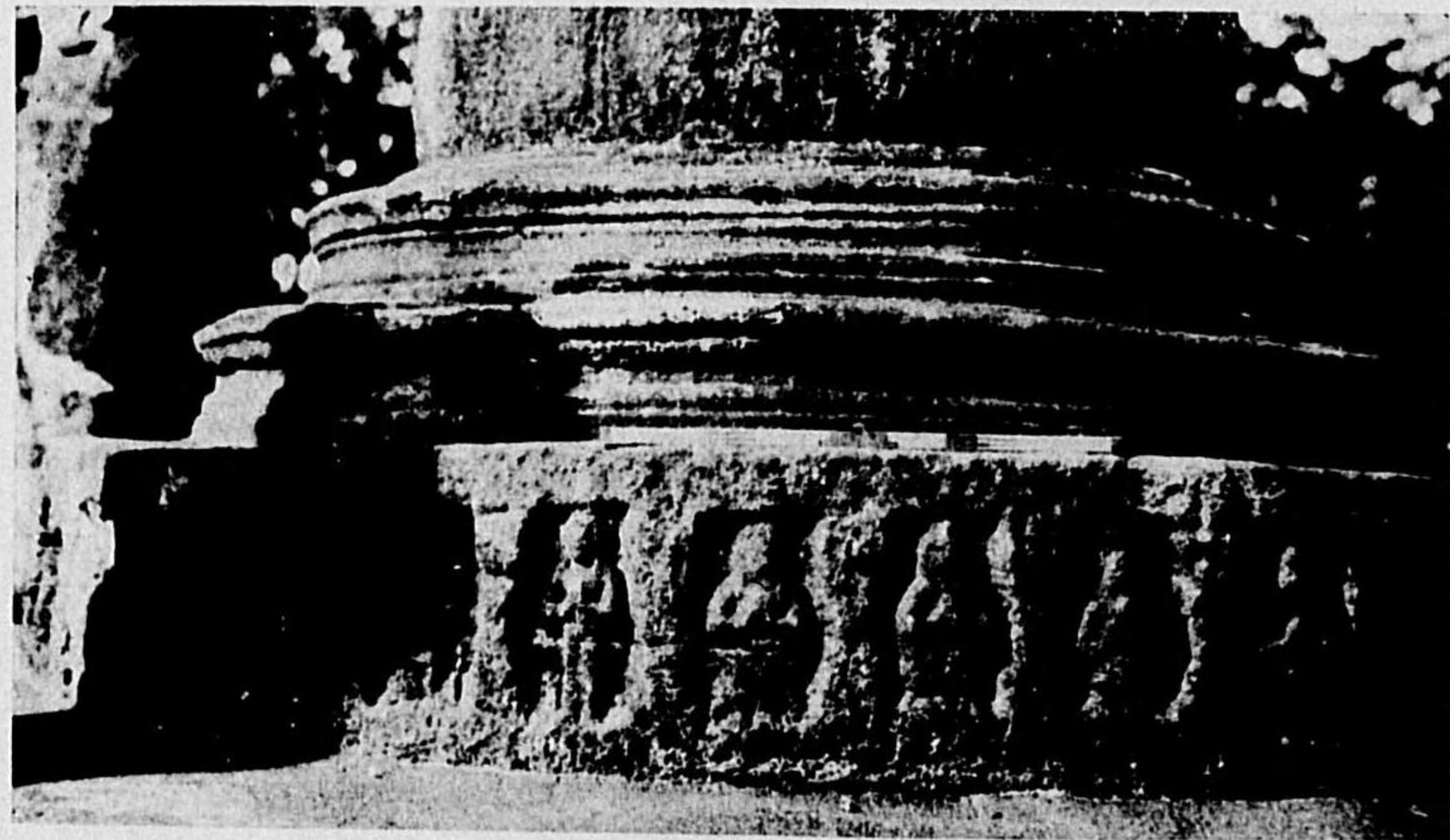
右。一四 アンバヌカラ塔 其一
 （大正十二年二月二十七日）



二六 キリンバダ塔全景 (昭和十一年一月二日)
 マハ・セヤ塔附近の高地から俯瞰すると、帯び、丁度此寫眞の様によく見えるから、雙眼鏡でみるのが最もよろしい。新しく葺き替えられ、午
 工の最中であつたから、塔は全體赤味を帯び、朝日をいっぱいを受けて光り輝き、あたりの線樹との對照で前に美しかった。或は午
 後の方が日が西に廻るから影がついて、もっとはつきりするかも知れない。



左。中。右。
 二七 キリンバダ塔南側聖壇 其一
 二八 同 其二
 二九 同 其三
 何れも極めて良好の状態に保存されてゐる。左圖左下の物指は六寸。
 (昭和十一年一月二日)
 (昭和十一年一月二日)
 (昭和十一年一月二日)

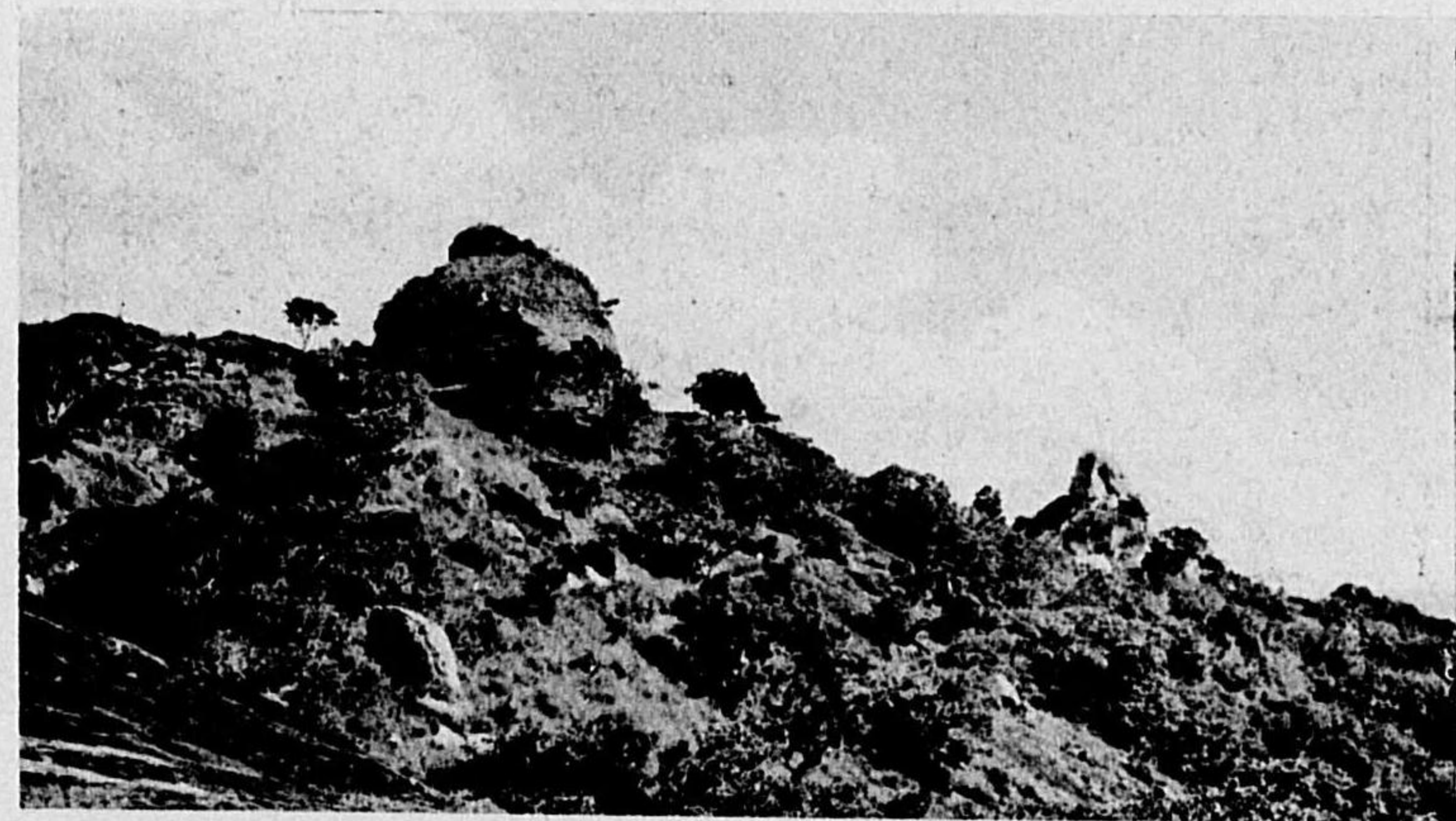
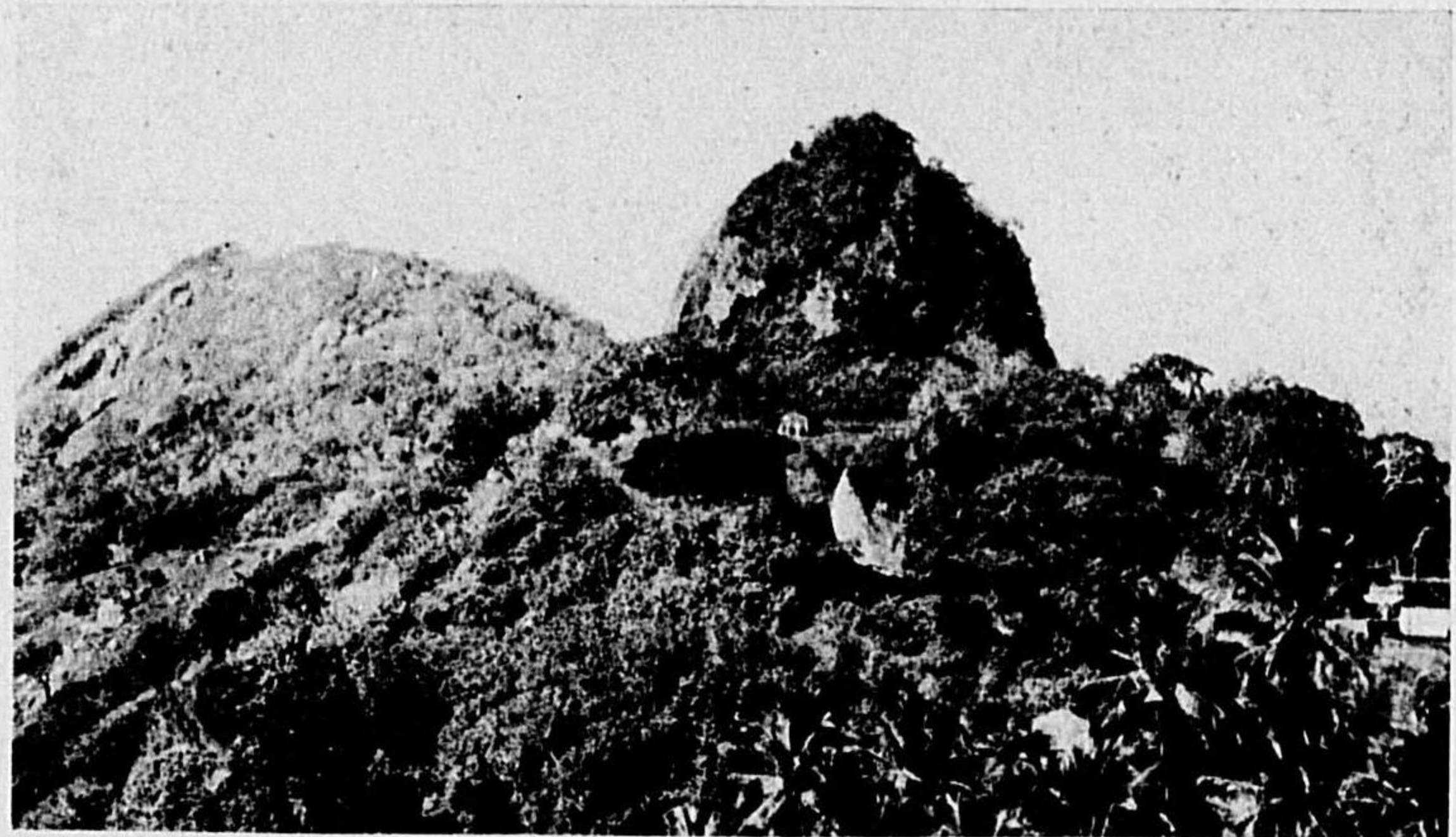


上。三二 曲莖堂内小塔婆全景 (昭和十一年一月四日)

下。三三 同 部分 (昭和十一年一月四日)

ボロンナルワ廢市遺跡中、ツバラマ堂の一廊内にある小堂で、其名を「ニッサンカ・ラタ・マンダパヤ」(Nissanka-lata-mandapaya)、即ち「ニッサンカ王の曲莖堂」(Nissanka's winding-plant-hall)といふのがこれで、柱は總て浪影の植物より成り、上に蓮花の柱頭を頂くところの、洵に珍しい意匠の建物であるが、其堂内床上一基の小塔婆がある。塔婆としては何の奇もなく且つ相輪を缺くも、基礎まで圓形の平面を有し、其周圍に佛像を刻してあるのは變った意匠である。

(下圖物指は曲尺の約一尺(一呎))。

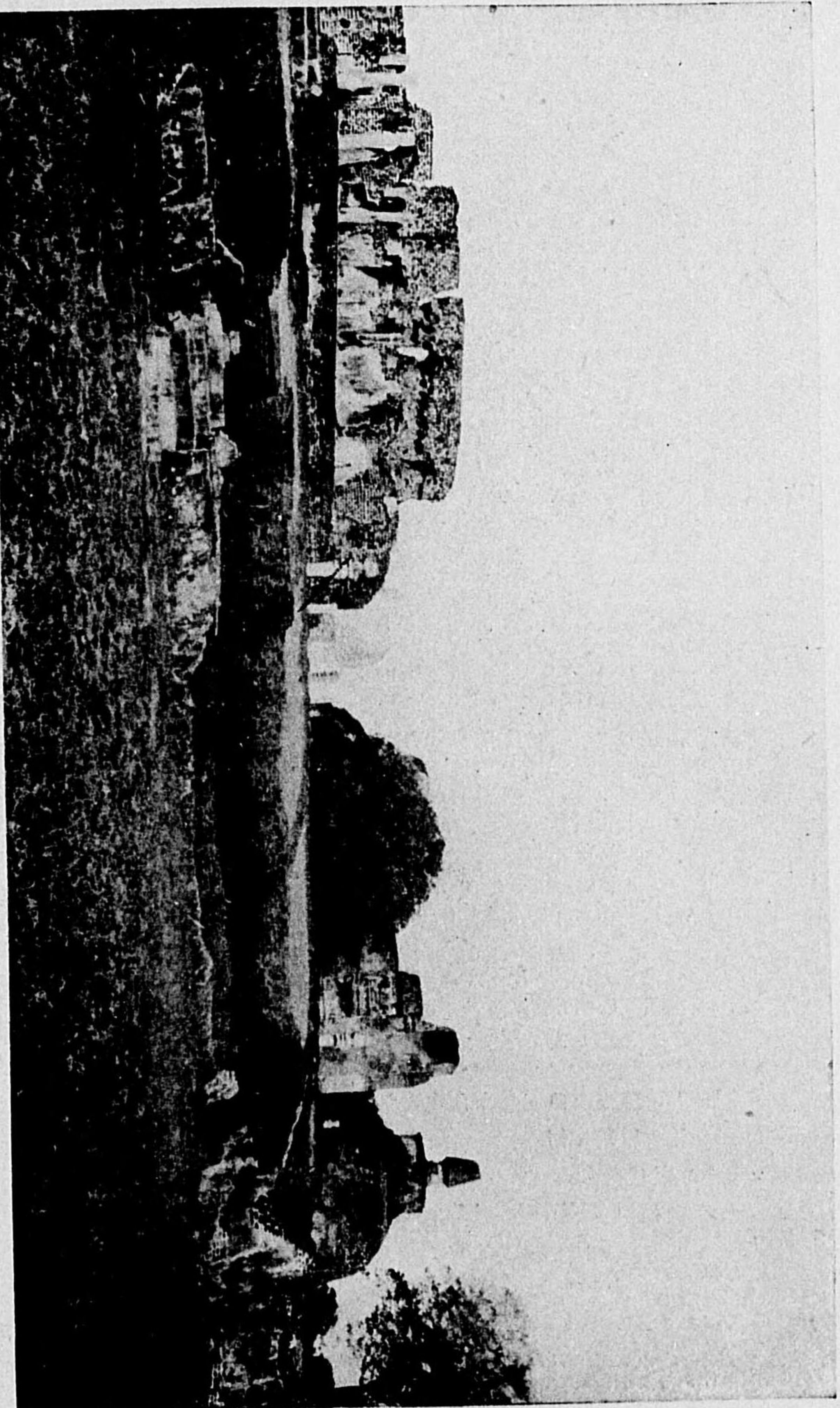


上。三〇 マハ・セヤ塔 其一 (大正十二年一月二十七日)

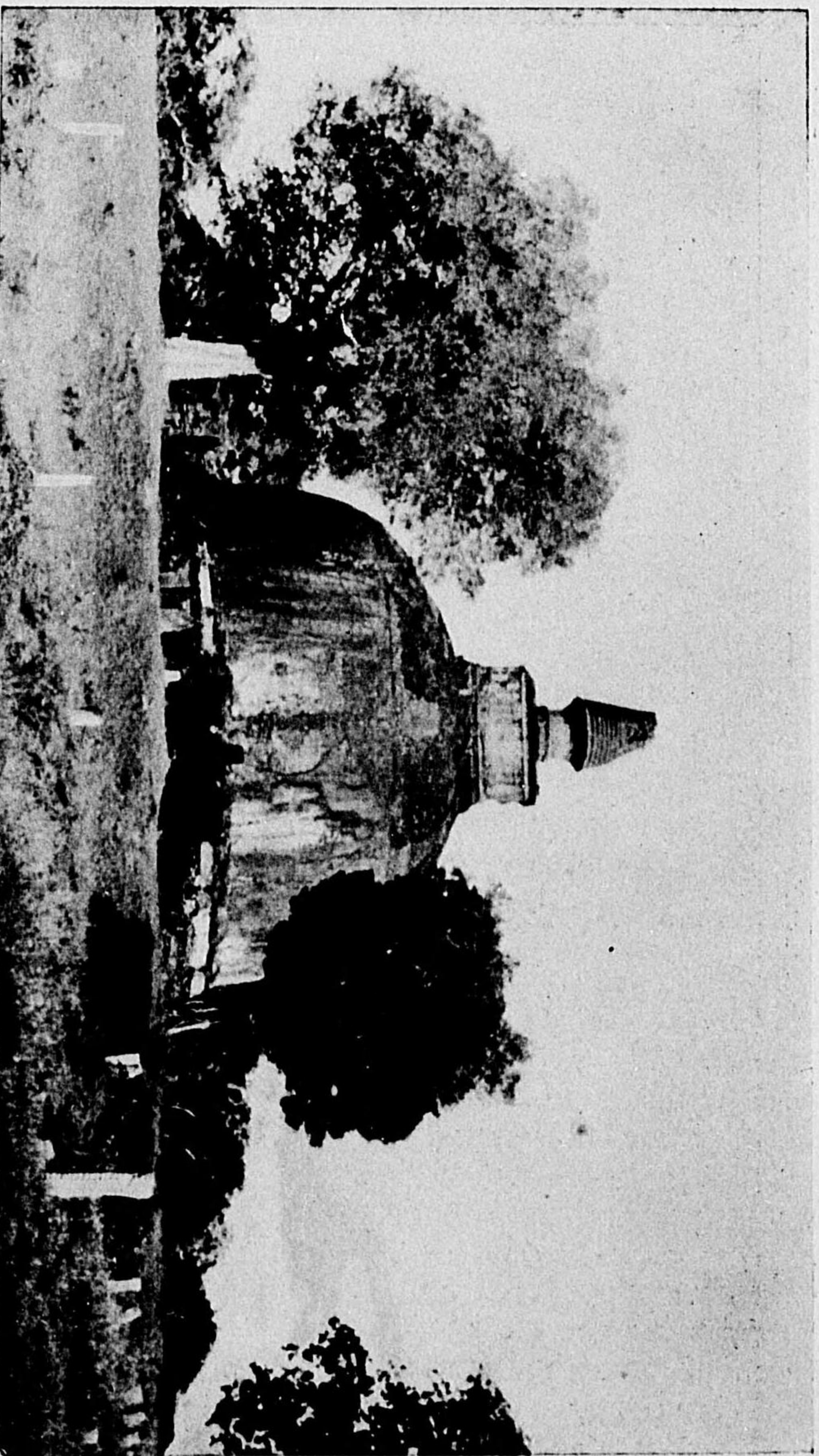
下。三一 同 其二 (昭和十一年一月二日)

上圖は大正十二年一月、此靈跡に參詣したとき、靈塔後方の大岩、展望がよくきくから、私は夫れを「國見岩」と命名したが、當時は至極容易に其岩上に攀登できたので、頂上から寫したもので、右下隅の方に棕櫚樹が多く見えてゐるが、アンバスタラ塔はこの樹の間にあるのである。

下圖は「國見岩」の攀登を試みて失敗したので、途中から記念に寫しておいたもの。少し見た位置が異なるため、今度の方が景色が大きい。塔婆破損の程度はさう變らなかつたが、大分俗化してゐた。



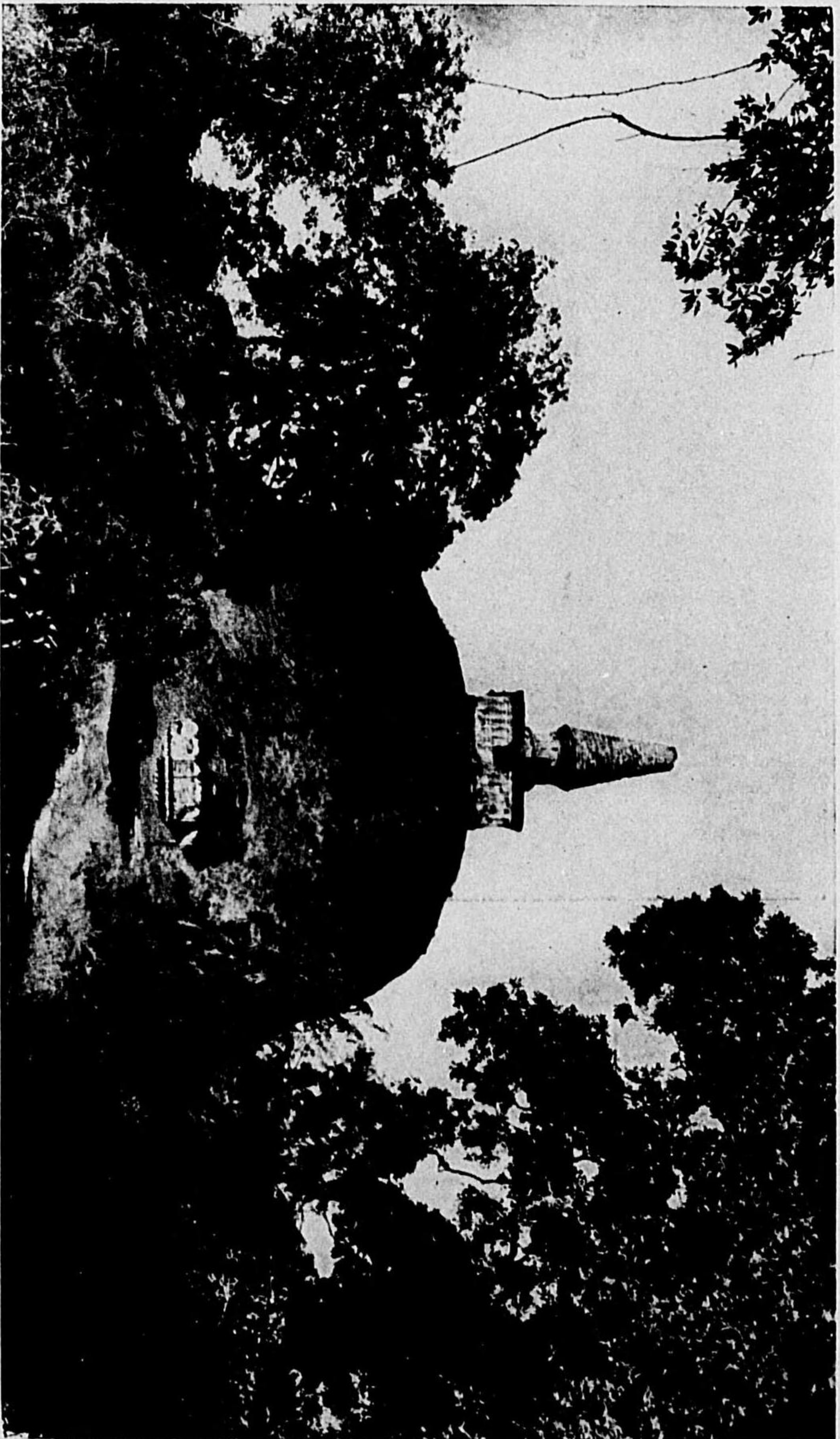
三四 白塔遺望 (昭和十一年一月四日)
 東南方から西北方へかけてみたところ、いふ迄もなく右端が白塔 (Kiri Dagaba) で、其左方は謂はゆるジェタラナラで、本名ラ
 ッカチラカ (Iankatilaka)。最在端即ち近景は俗名修道院 (Priory) 本名バツダ・シマ・ラサダ (Baddha (Buddha) sima-Prasada
 (Pasada)) といふ大きな殆んど正方形をした建物である。



三五 白塔全景 (昭和十一年一月三日)
 前圖と反対の方向から見たところ。基壇・伏鉢・平頭・相輪 (頭部缺損) の區別が明らかである。これで相輪が完全であつたら洵
 に申分がないのであるが、まあその位のことだけがまんすべきであらう。どうも肩が張リすぎているのが缺點で、これが謂はゆる祇園
 塔 (第六・七圖) の様であたらさざよからう。



三六 金輪塔遠望 (昭和十一年一月四日)
 謂はゆる「修道院」の南方から、前の低地を隔てて金輪塔を遠望したところ、私はここを經景の一つと思つてゐる。相輪迄殆んど完全に残つてゐるので、どうも非常に工合がよろしい。“the great golden stupa,” “Goldspitzen-Digahat” 等と言はれてゐるのだから、少なくとも相輪は金色であらうといふところから、「金輪塔」としておいた。



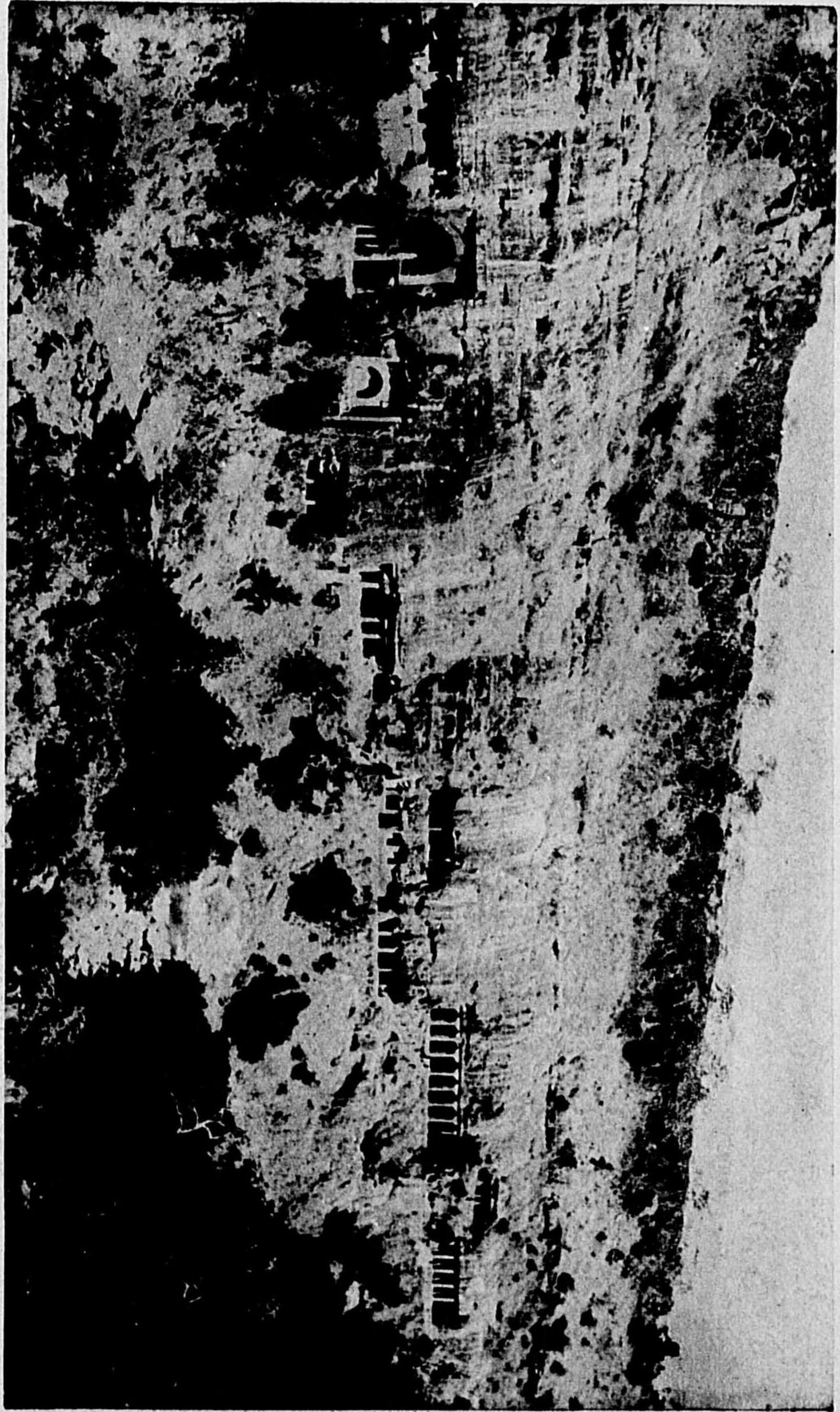
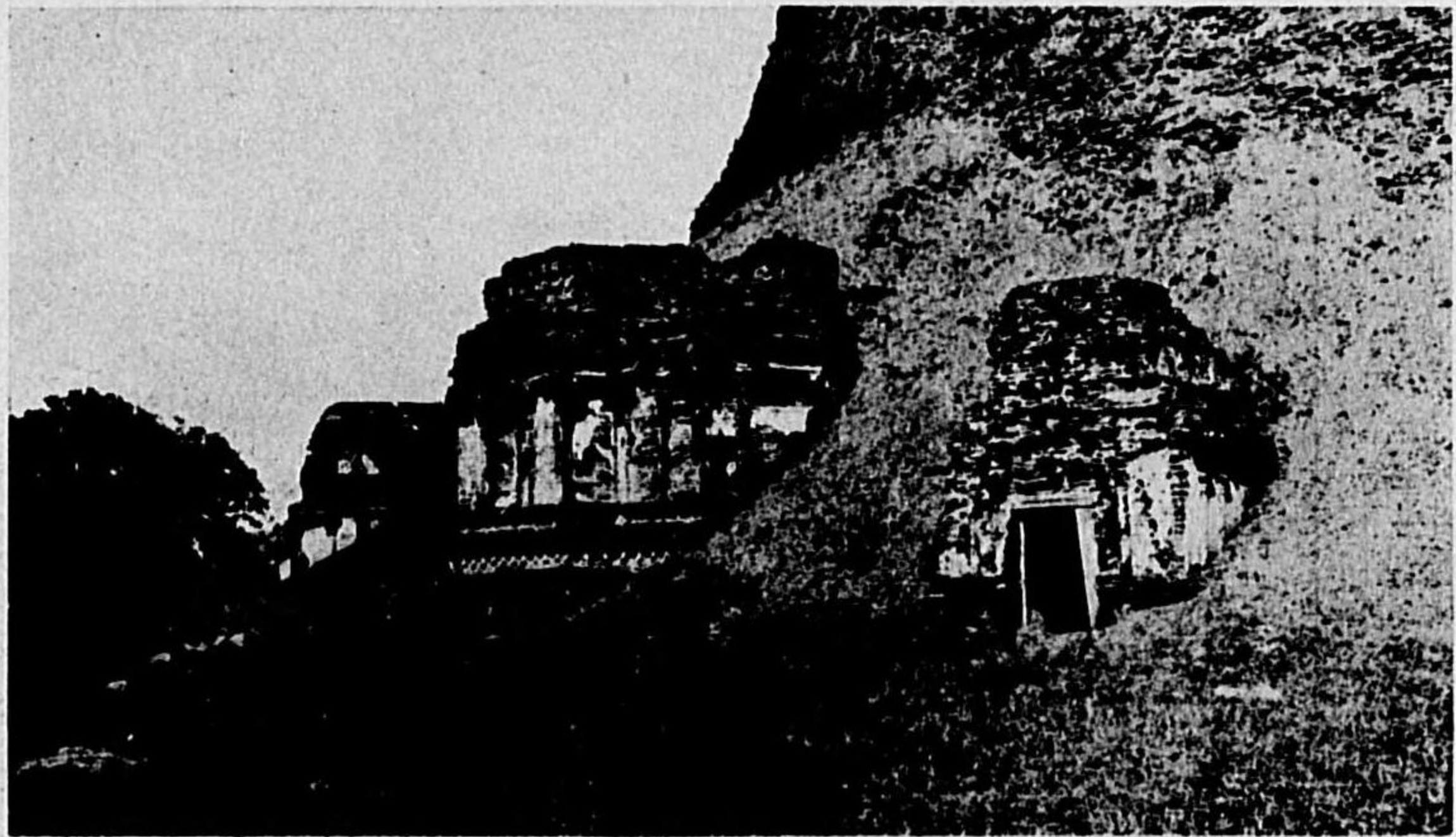
三七 金輪塔全景 (昭和十一年一月五日)
 前圖と正反對の側、即ち南側から見たところ。ツバラマ堂の一廊から北行し、叢林の間の細道を暫く行くと、かういふ景色が見られる。塔基四方の聖籠中南方のものがよく見えてゐるし、平頭も相輪も割合に完全で、殊に心柱の南側に刻された佛像は、殆んど完全といつていい位に保存されてゐるのは珍らしい。

上。三八 金輪塔を西南方よりみる
下。三九 同 基部 聖 籠

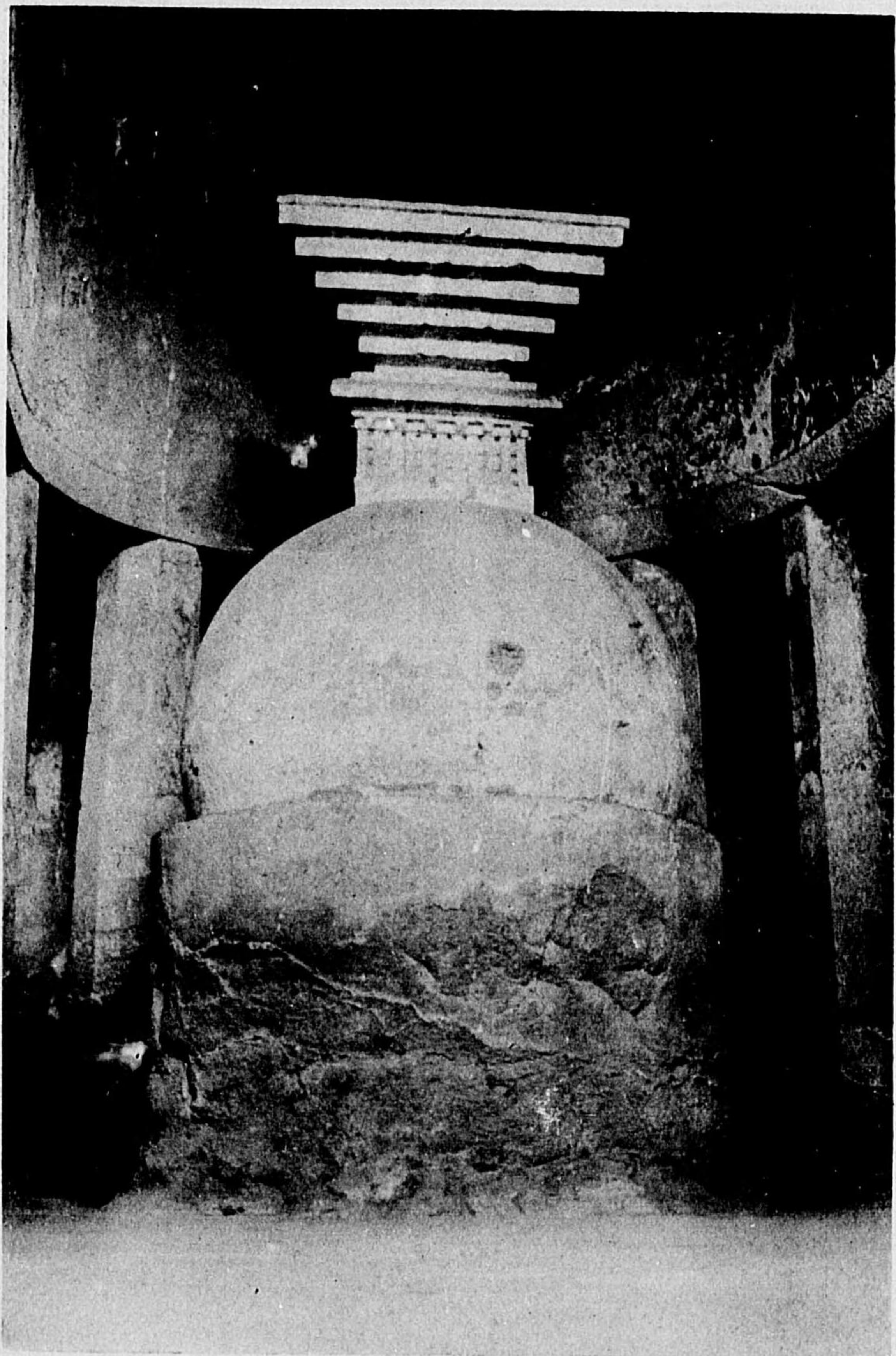
(昭和十一年一月三日)
(昭和十一年一月三日)

上圖は西南方から見たところで、つまり前圖の塔に近づき、向て斜左方からとつた寫眞である。だから前圖の心柱の部分にまともに見えてゐる厚肉の佛像——寫眞が小さくて判然しないが——は、これでは向て右のはしにあるわけである。基部の聖籠は西側の夫れである。近づくると一層肩の張つてゐるのが氣になる。

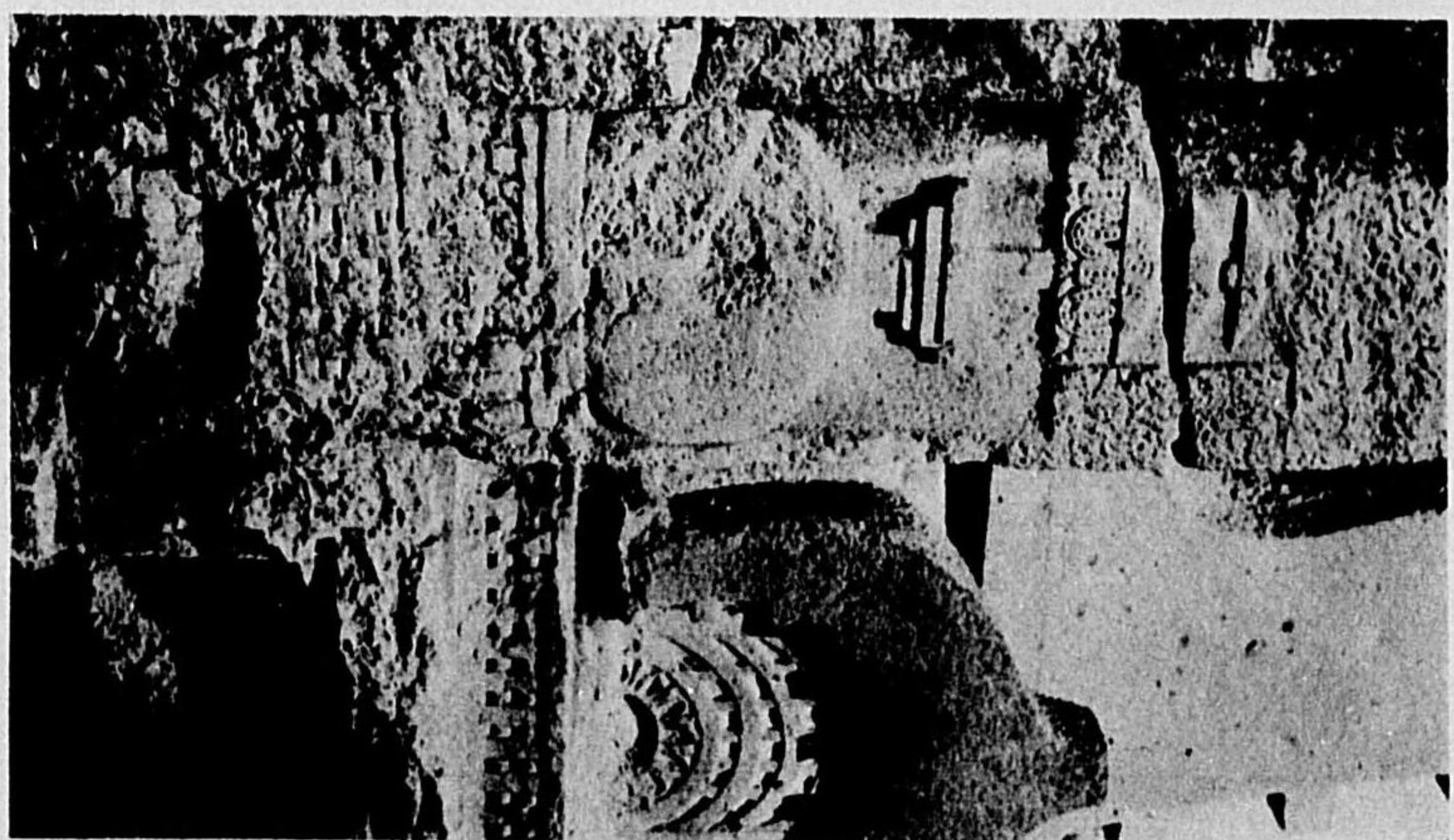
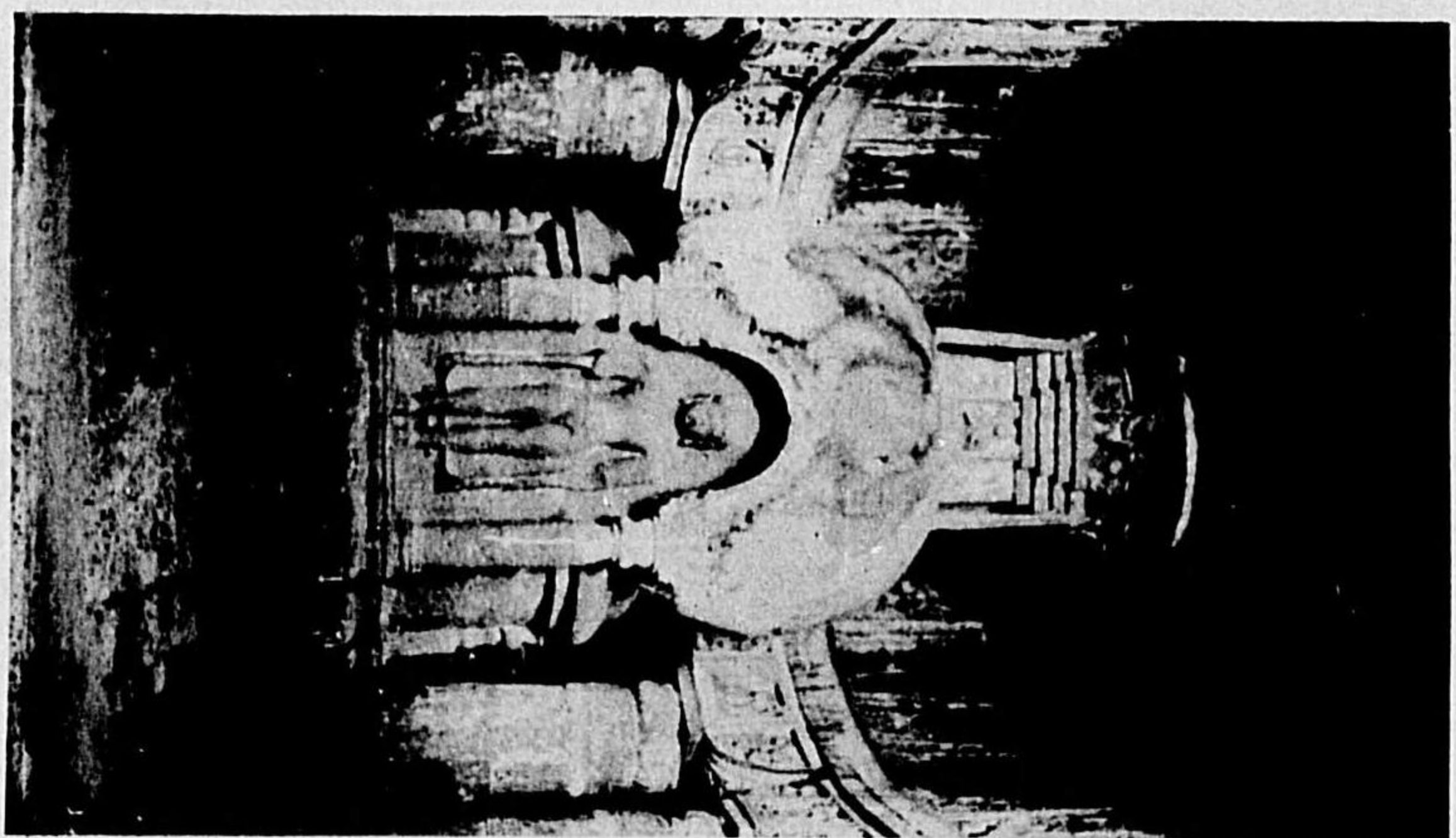
下圖は上圖左下に少しでゐる聖籠を近づいてみたところ。随分ひどくなつてゐるから、廢墟だといふ感を一層深からしめてゐる。



四〇 アジャンタ窟院の一部 (大正十一年十一月二十二日)
全景の様に見えるが、實は初めの半分で、寫眞の右端が第一窟で、夫れから左へ順に第二・第三……と番號がつけてある。上部が曲線形をしてゐるのが制多窟で、楯のは毘訶羅窟である。



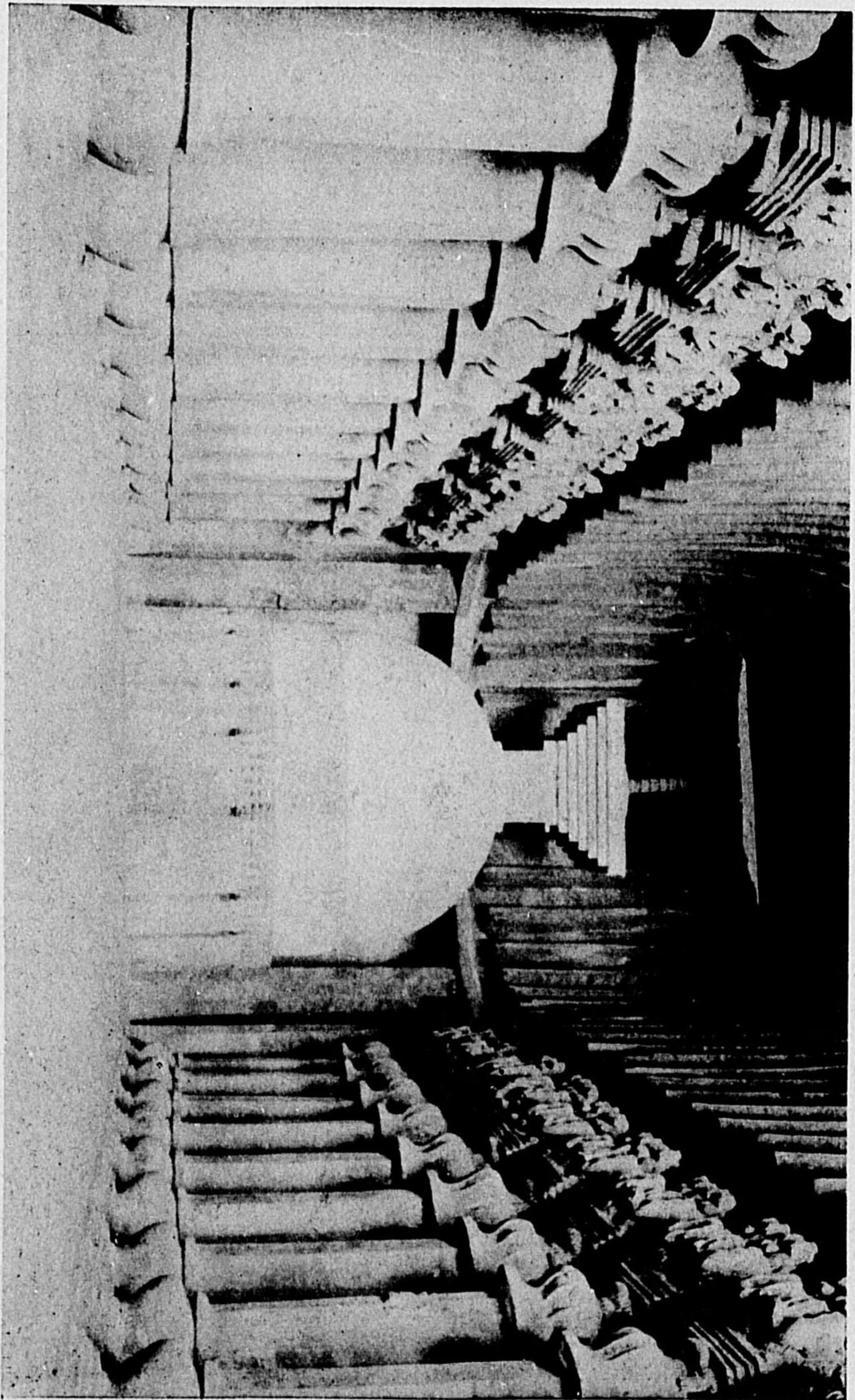
四一 アジャンタ窟院第九號制多窟内塔婆
(大正十一年十一月二十二日)



右。四二 アジャンタ窟院第九號窟正面一部
左。四三 同 第十九號窟内塔婆

(大正十一年十一月二十二日)

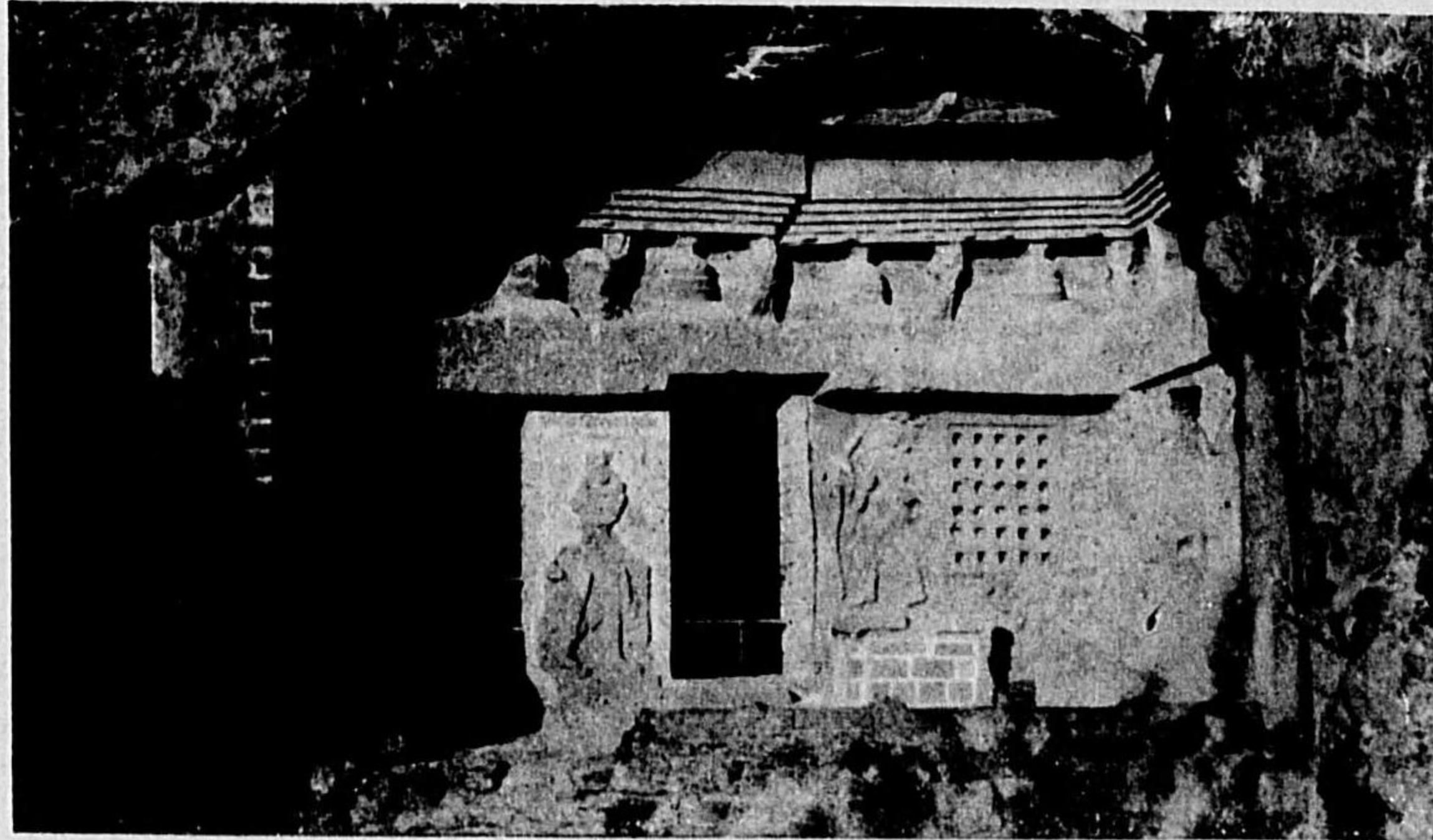
第九窟は印度に於ける佛教窟殿最古のもので幅約二五尺深き四五尺。窟院内の塔婆は前頁の圖に出しておいたが、其解説は本文に譲る。右圖は其正面入口の一部で壁面に薄肉に陽刻してある塔を見せるのが目的。平頭上に三個の相輪あり、最下輪より懸花の様な環塔が下けてある。左圖は第十九窟内の塔婆を見せたもので、時代の新しきため裝飾が大變に多く、且つ正面に佛像を刻んである。



四四 カーリー大制多窟内部 (大正十一年十一月二十五日)
 此窟院は先年 G.I.P.R. のロナーワラ (Lonavla) 駅から行ったが、同鐵道のマラーワリ駅から三哩とあるから、此方なら道が割合にいたため、歩いても大して困らない。此はぬはゆる制多窟中最大最美で且つ最もよく保存されてゐる。



四五 パーシヤ窟院制多窟全景 (昭和十一年一月十九日)
 パーシヤ窟は G.I.P.R. (Great Indian Peninsular Railway) のマラーワリ (malavli) 駅を距る約一哩のところにあるから、歩いても知れたもの。道は殆んど平坦で、窟院に登り口が少し急である。西向きだから午後行くと、一ぱいに日があたってゐて、上等の寫眞がとれる。此圖は中央が制多窟で左右が毘訶羅(僧坊)。この前を通って少し行くと塔婆窟があり、更に少し行くと面白い毘訶羅窟がある。



上。四七 バージャ窟院南毘訶羅窟正面

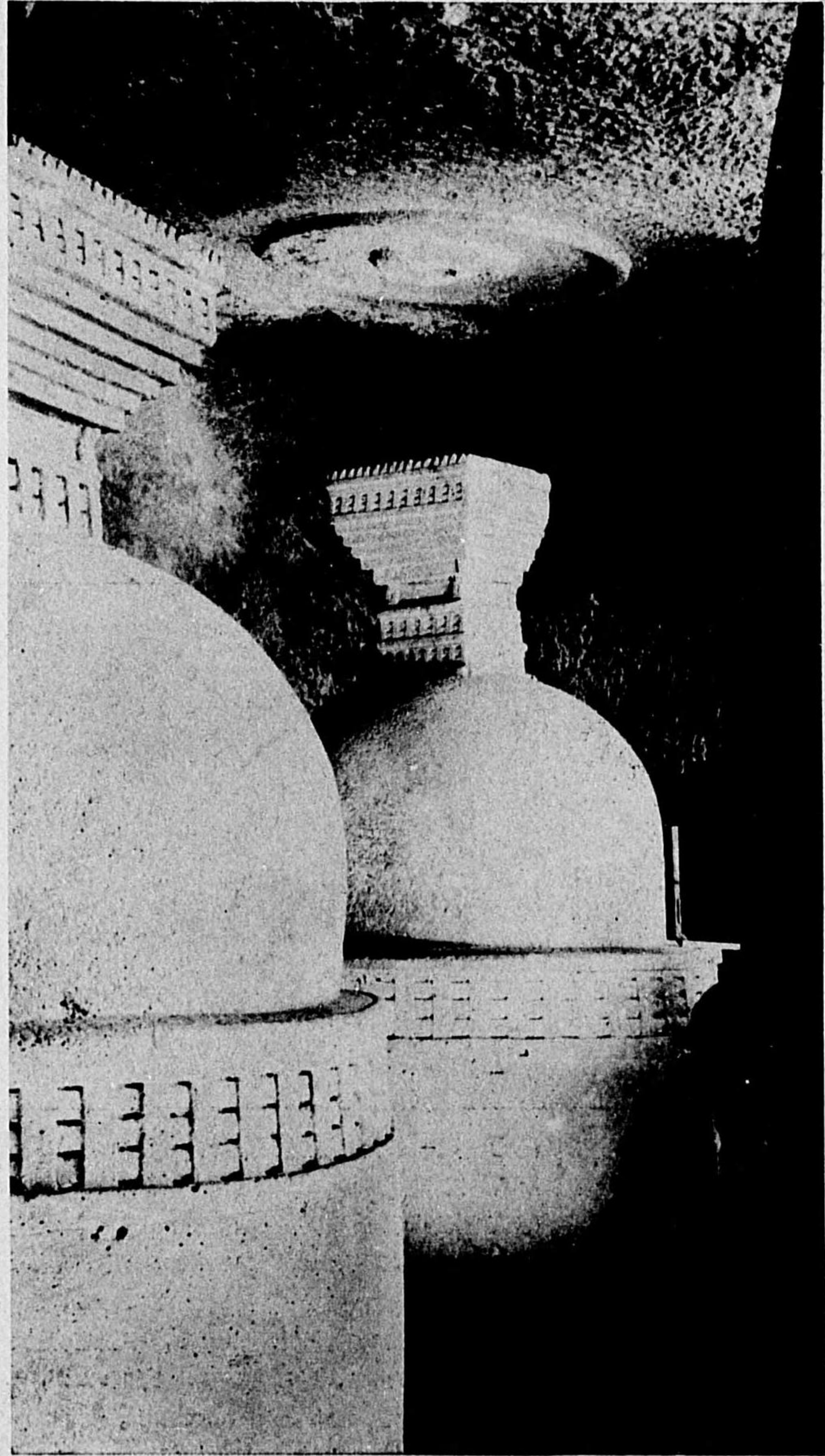
下。四八 同 一部

(上下圖共昭和十一年一月十九日)

正面より内部の方が餘程面白いのであるが、ここではやめておく。此場合は正面軒のところは特に變つてゐて、小塔婆、立像とが交互に彫刻してある。小塔婆は事實大分小さいが、下方には玉垣を、塔身には懸花を刻みだし、平頭迄皆揃つてゐる。僧坊の軒に斯様な彫刻を裝飾としてゐるのは、他にもあるかも知れぬが、ついみた事がない。あつても少なからうと思ふのである。

四六 バージャ窟院制多窟正面
前圖の制多窟を正面からみたもので、多くの例の如く身廊と側廊とが列柱により明らかに分れてゐるところがよく見えるであらう。塔婆は平頭を備えてゐるが、伏鉢まで餘り日がよくあたりすぎてゐるので、暗部が一層まっ黒となり、惜しいことにまるで見えなくなつて了つた。





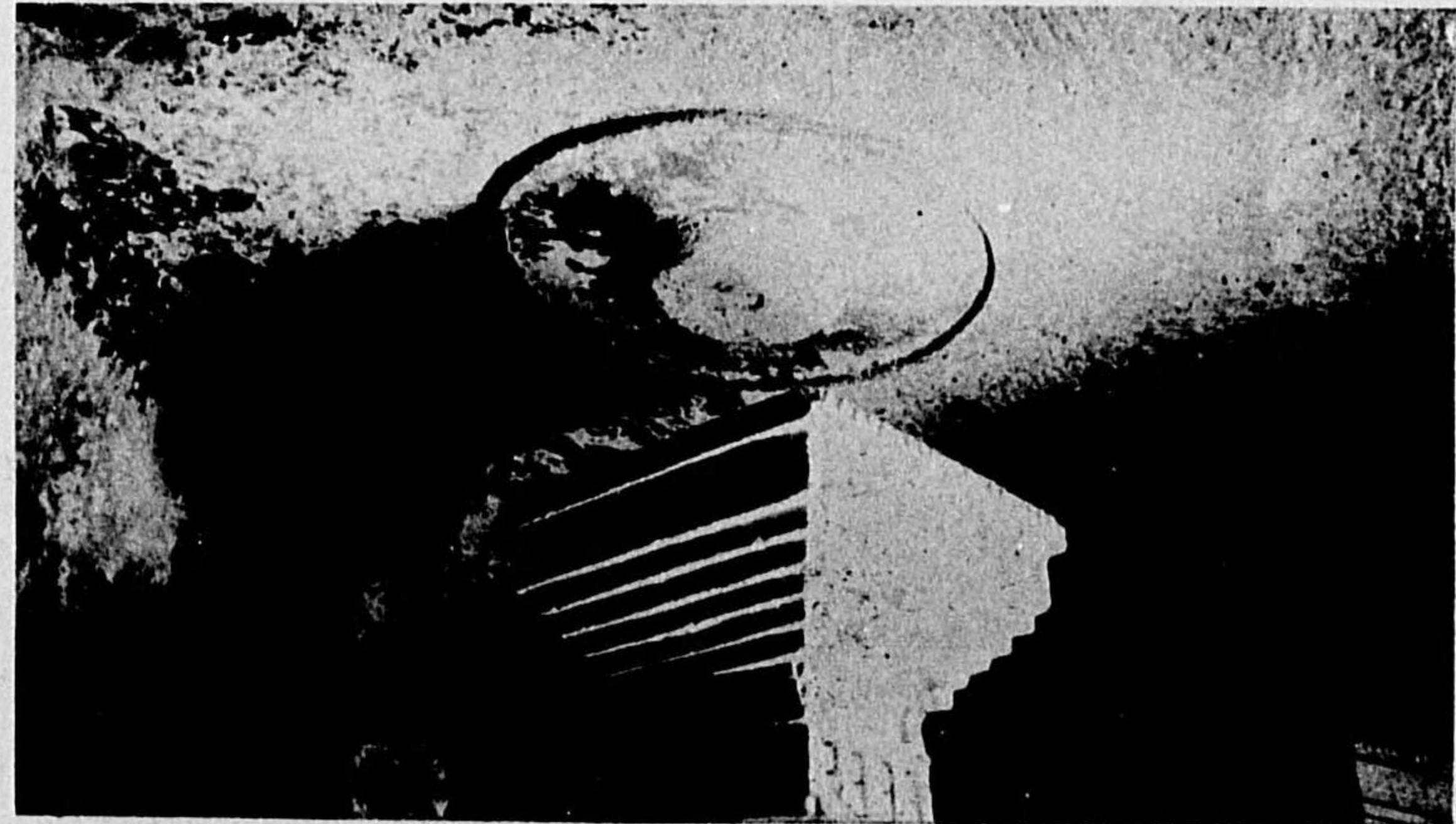
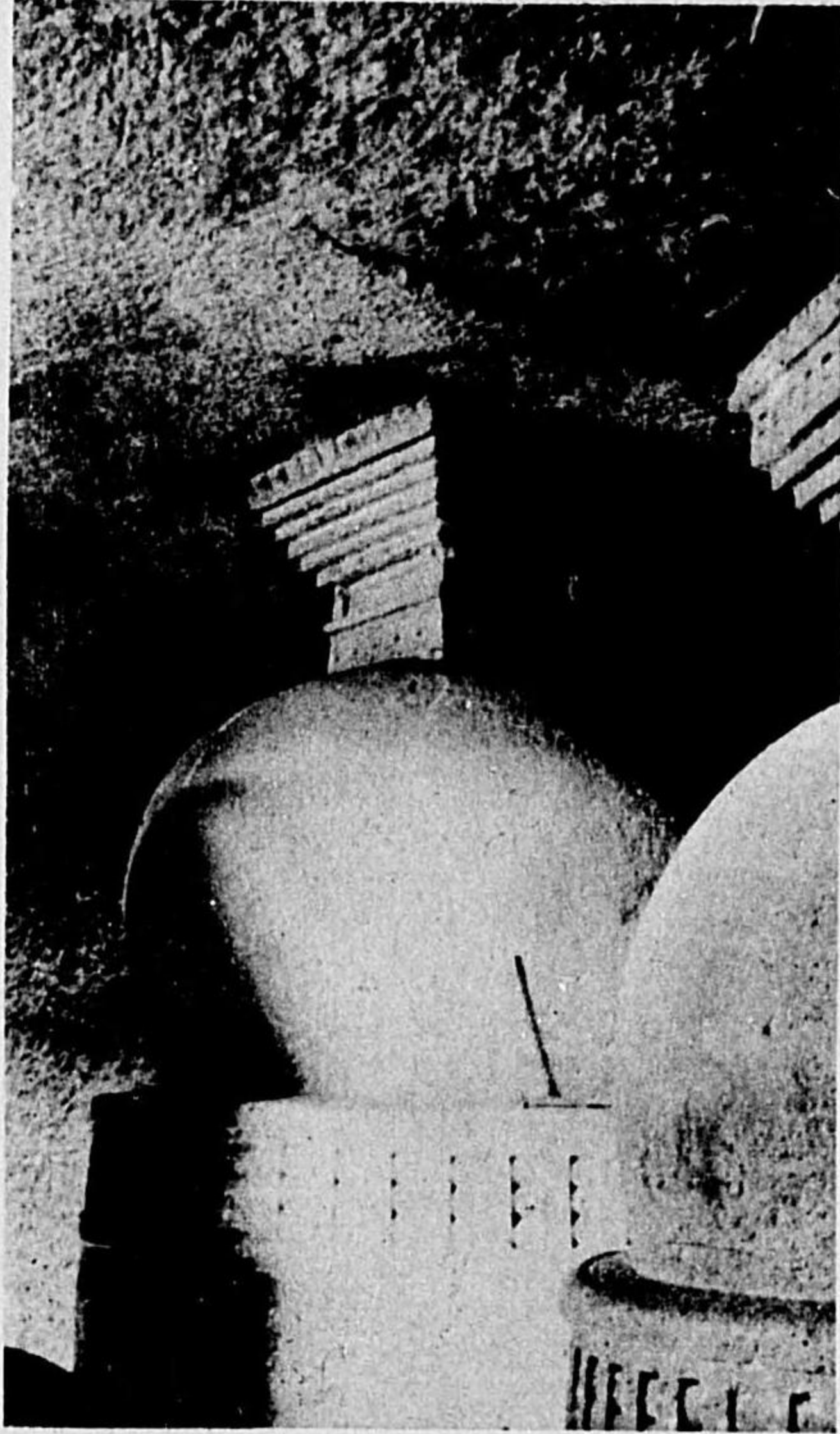
四九 パージャ窟院塔婆窟内塔婆 其一
 大制多窟と前頁の圖に示した毘訶羅窟との間に、十四の小塔婆を彫刻してある塔婆窟がある。この様に多くの塔婆を有せる窟院は
 ついでではみなかった。正面向て左端のが最も美しい平頭をもつてゐるが、上に臨時に生子板で屋根がつくつてあつたから、寫眞をと
 るとどうしても夫れが寫るので、惜しかったがやめて、内部の數例を寫したからここに掲げておくことにした。

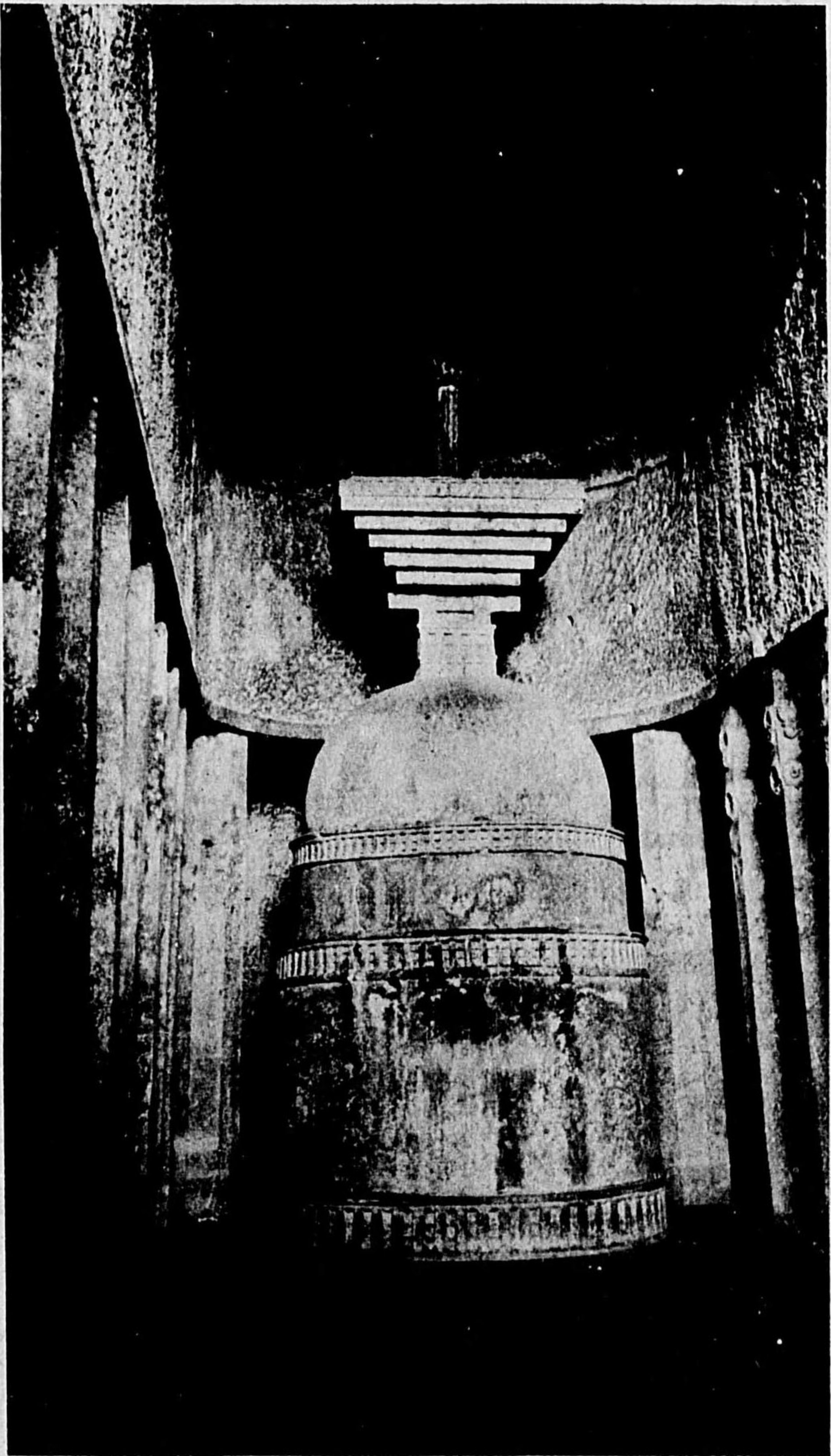
(物指は曲尺の一尺・昭和十一年一月十九日)

上。五〇 パージャ窟院塔婆窟内塔婆 其二
 上。五一 同 平頭及相輪

(上圖物指は曲尺の一尺・上下共昭和十一年一月十九日)

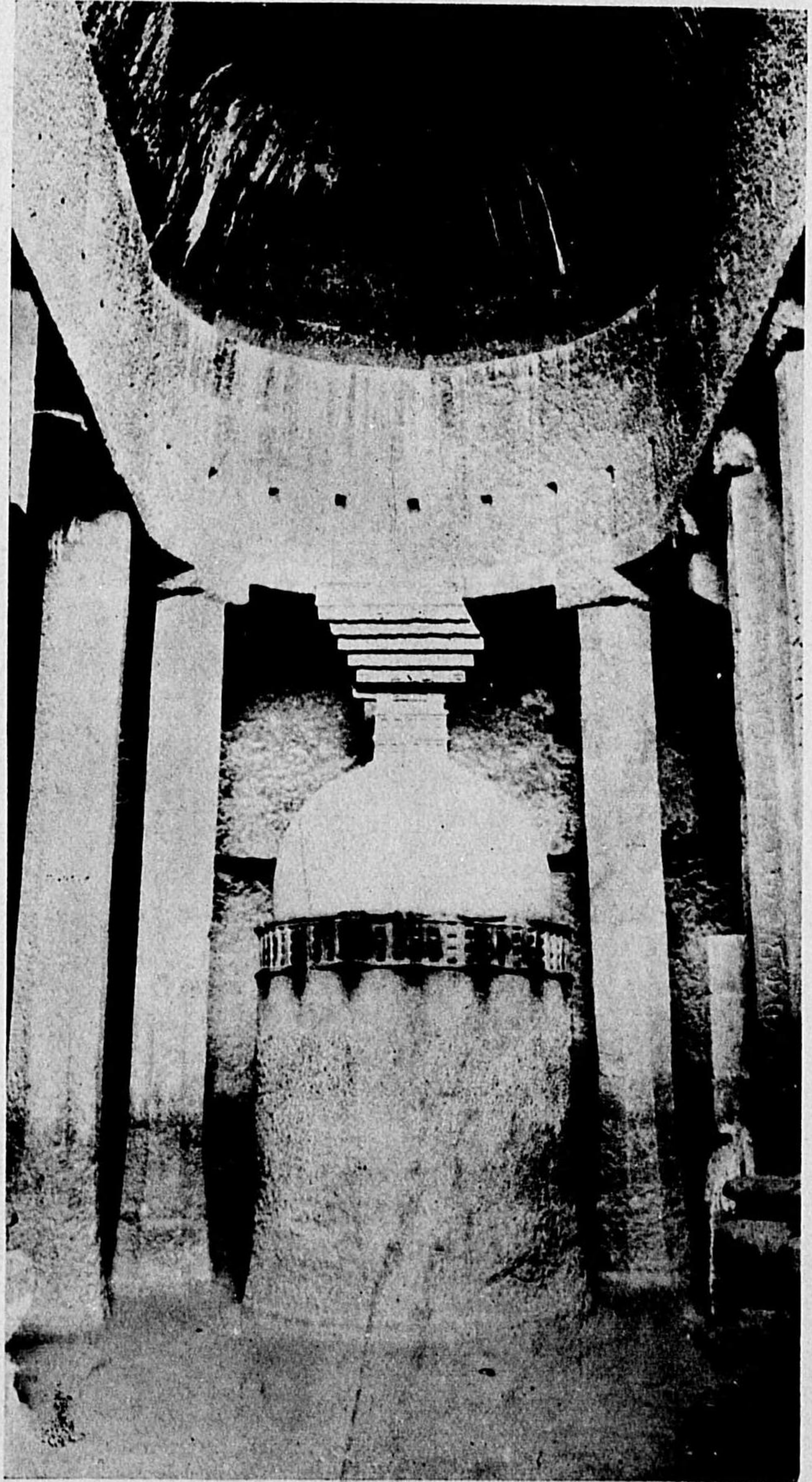
塔婆は何れも下から生へ抜きで、勿論一石から刻みだされ、下部に玉垣を巡ら
 し上部には可なり手の込んだ平頭があり、天井から相輪一個を刻み出し、其間に
 は木の心柱があつたのであるが、これは今は一つもない。勿論平頭の上部には、
 心柱を挿入するための穴をあけてある。此等の塔婆中、伏鉢の内に舍利容器を収
 めたのが二基あるさうである。





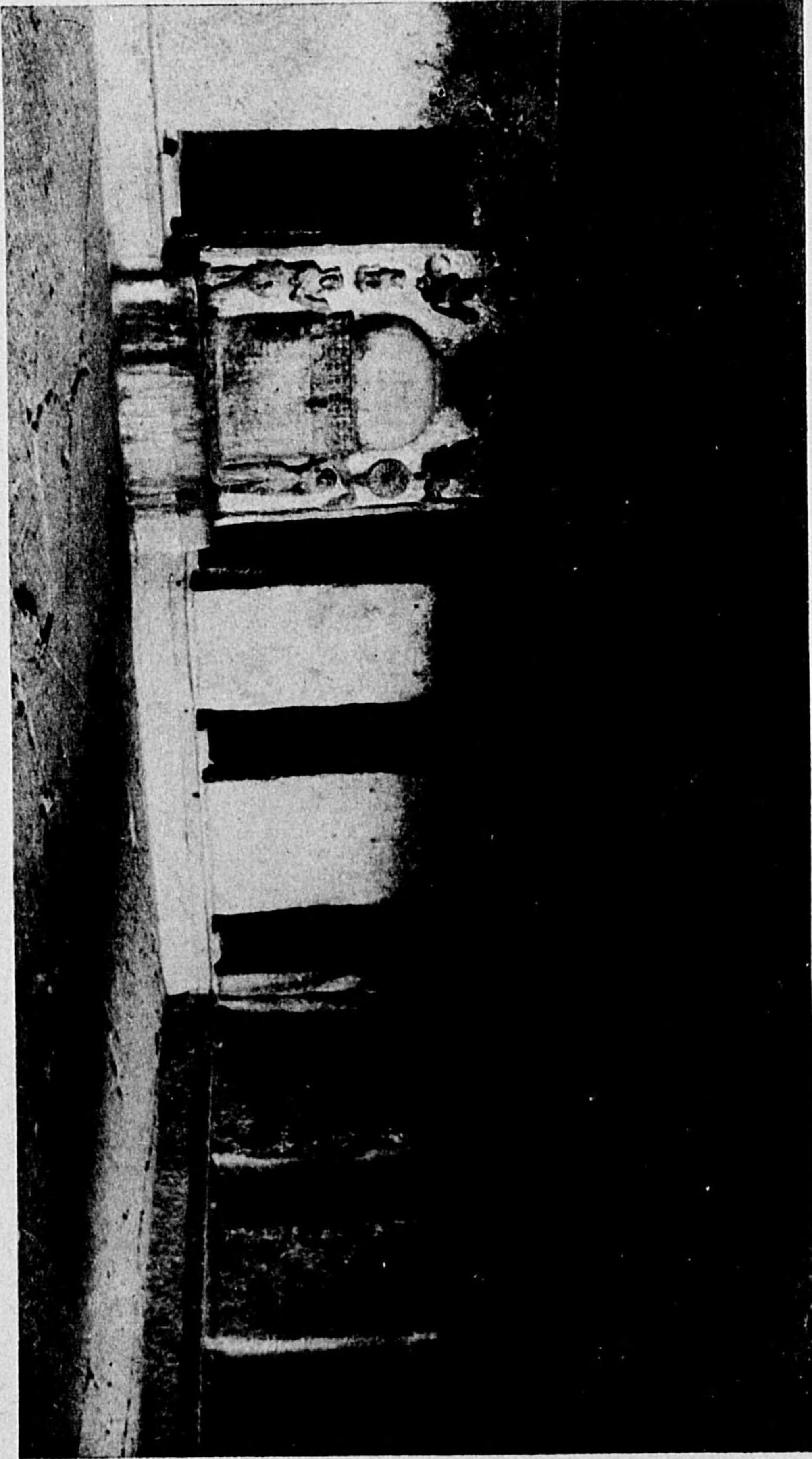
五二 ベドサ窟院制多窟内部
 パージャ窟のある同じ山脈の南側にベドサ (Tadisa) 窟があり、制多窟と毘訶羅窟とより成る。制多窟内の塔婆は大變立派で、圖の如く下から三段に玉垣を廻らし、上が少し大きすぎるが完全な平頭を備へてゐる。其上に開花蓮を頂げる木(?)の棒が立ててあるが、これはやはりカーリ塔婆(第四十四圖)の如く、天蓋にした方がよささうである。

(昭和十一年一月十九日)

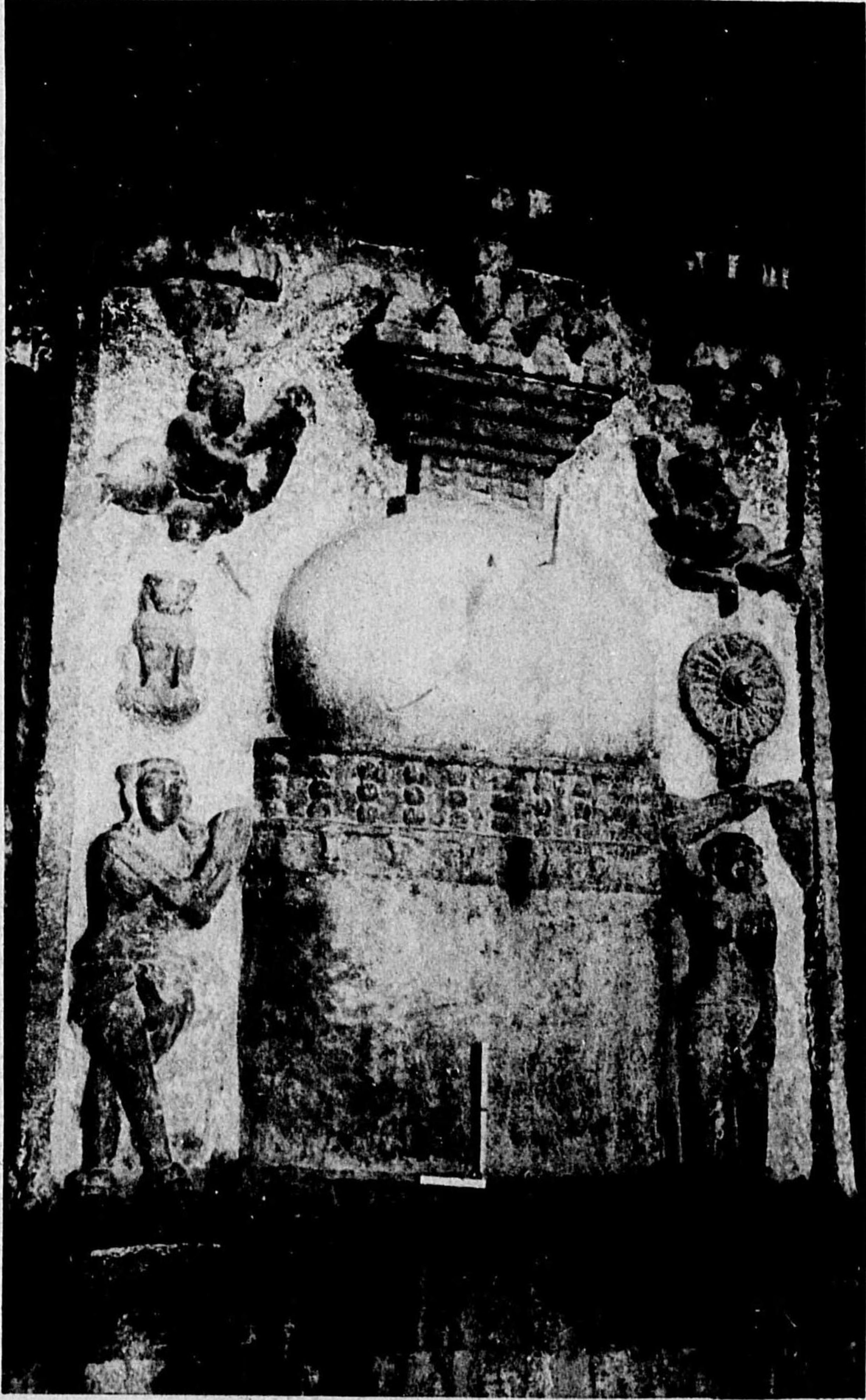


五三 ナシツク窟院制多(第十八號)窟内部
 此窟院はナシツクの町から南南西約五哩にあり。孟買を距る約一一〇哩。街道に近く位置してゐて、さうして自動車を下りてから緩斜面を十町ばかり歩くと達するので、至極行き易い。ここには數へれば二十三窟あるが制多窟はこれだけで、ベドサの塔婆によく似た塔がある。但し平頭上部の一部分が缺損してゐて、且つ多くの例の様に相輪を亡失してゐるので、ベドサのより少し見劣りがする。

(昭和十一年二月二十三日)

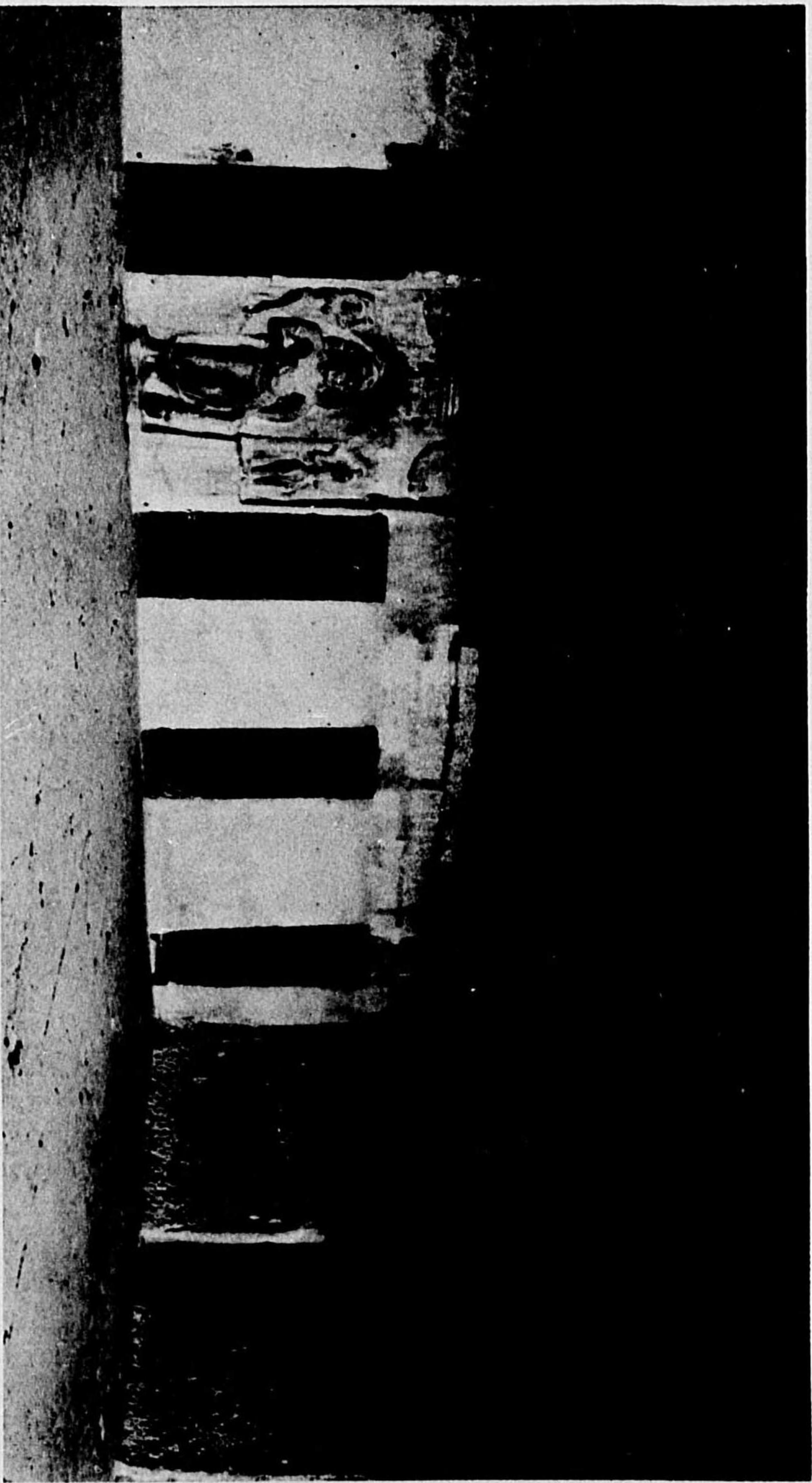


五四 ナシクク窟院第三號窟（コウタミツトヲ倍坊）内部（昭和十一年二月二十三日）
 此は 41'×46' の大毘訶羅窟で、圖でみる如く正面及左右の三方に石壇（腰掛）があるのが珍らしい。室は右側に 7、後側に 6、左側に 5、合計 18 ある。後壁中央に相當厚肉に塔婆を刻みだしてあるが、平頭及び三個の相輪を有す。此窟は後 172—191 の間位に在ったアソラ王朝の王アソラミツトヲ（Yajna Satakarni Gautamiputra）によりて掘鑿せられたものださうである。



五五 ナシクク窟院第三號窟院第三號窟後壁の塔婆
 塔婆は平頭上中央に一個、左右に二個づつ、合計五個の相輪を有す。平頭上五個の三角形の裝飾に注意せよ。

（物指は曲尺の一尺・昭和十一年二月二十三日）

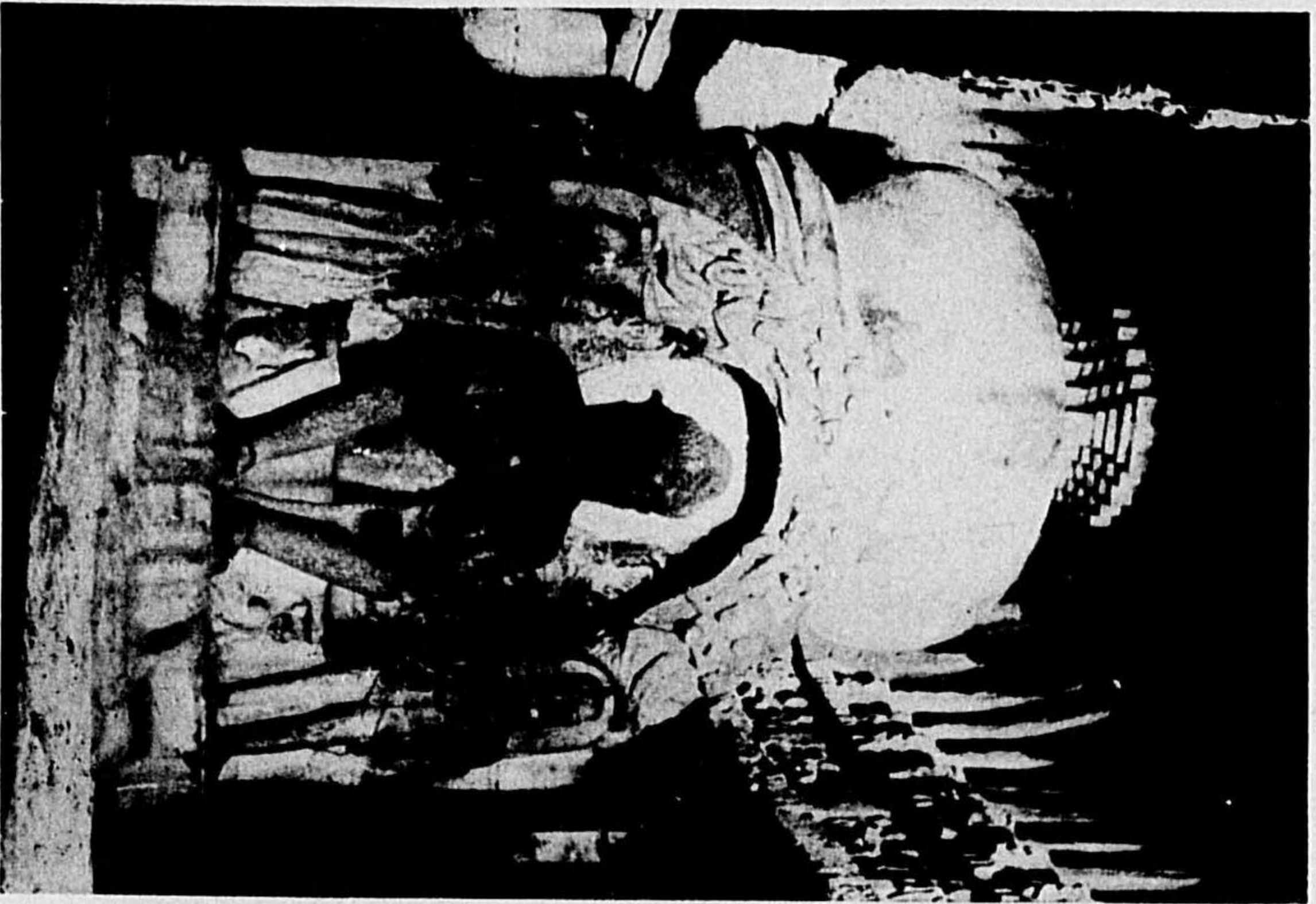
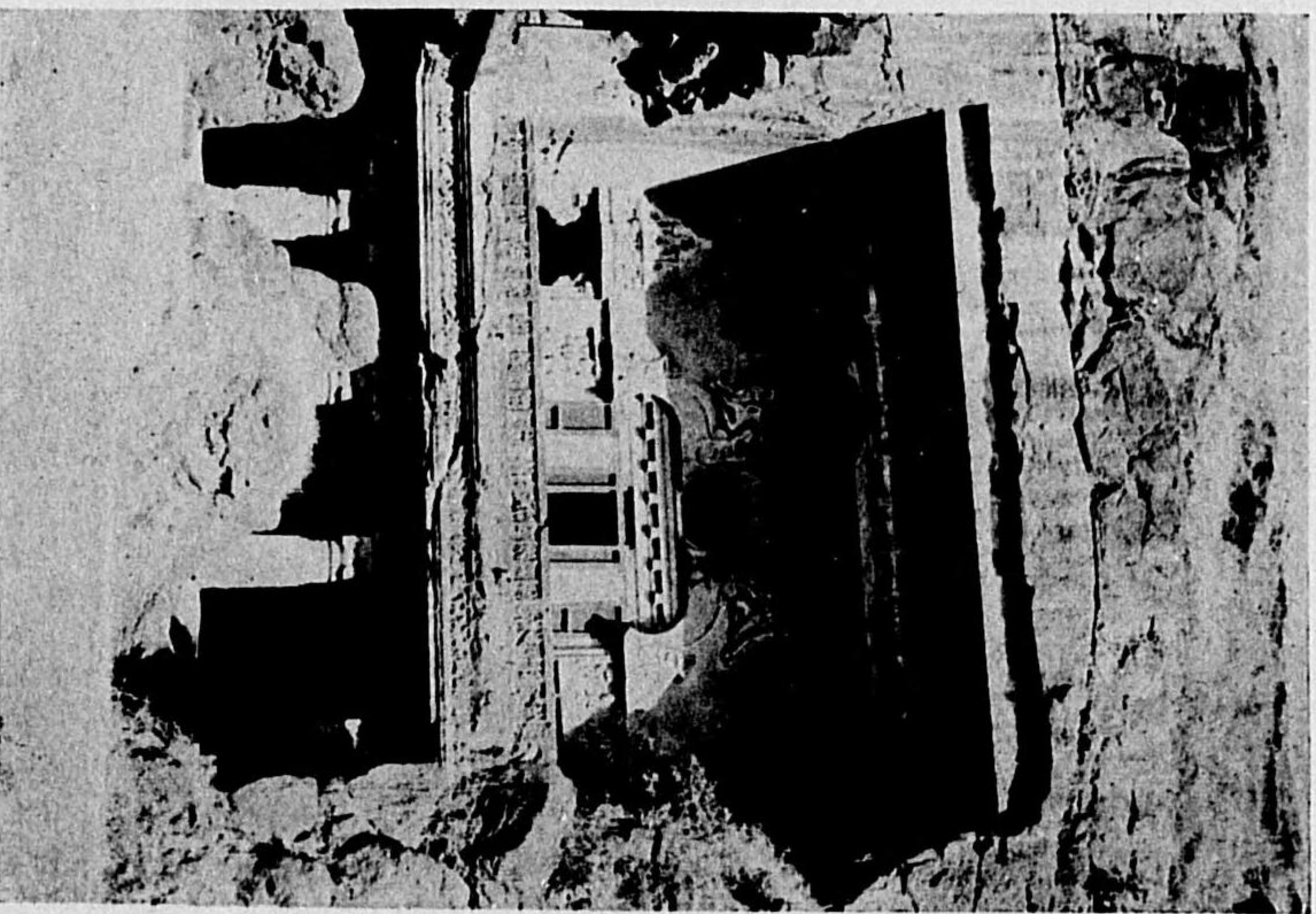


五六 ナシツク窟院第十號窟（ナムハバナ僧坊）内部（昭和十一年二月二十三日）
 後120年以前にウジヤイン（Ujjain）に君臨したナムハバナ（Nalaparua）家の銘文があるさうだが、私は見なかつた。大きき45×43'。室は左右兩側に5つづつ、後側に6で、合計16。第三窟同様後壁中央に、平面上に三個の相輪を有する塔婆を刻みだしたものであつたが、後に塔身の中央に陪羅轉（バイラバ、Phairava）像を刻み、周圍を囲めてこの様にした。

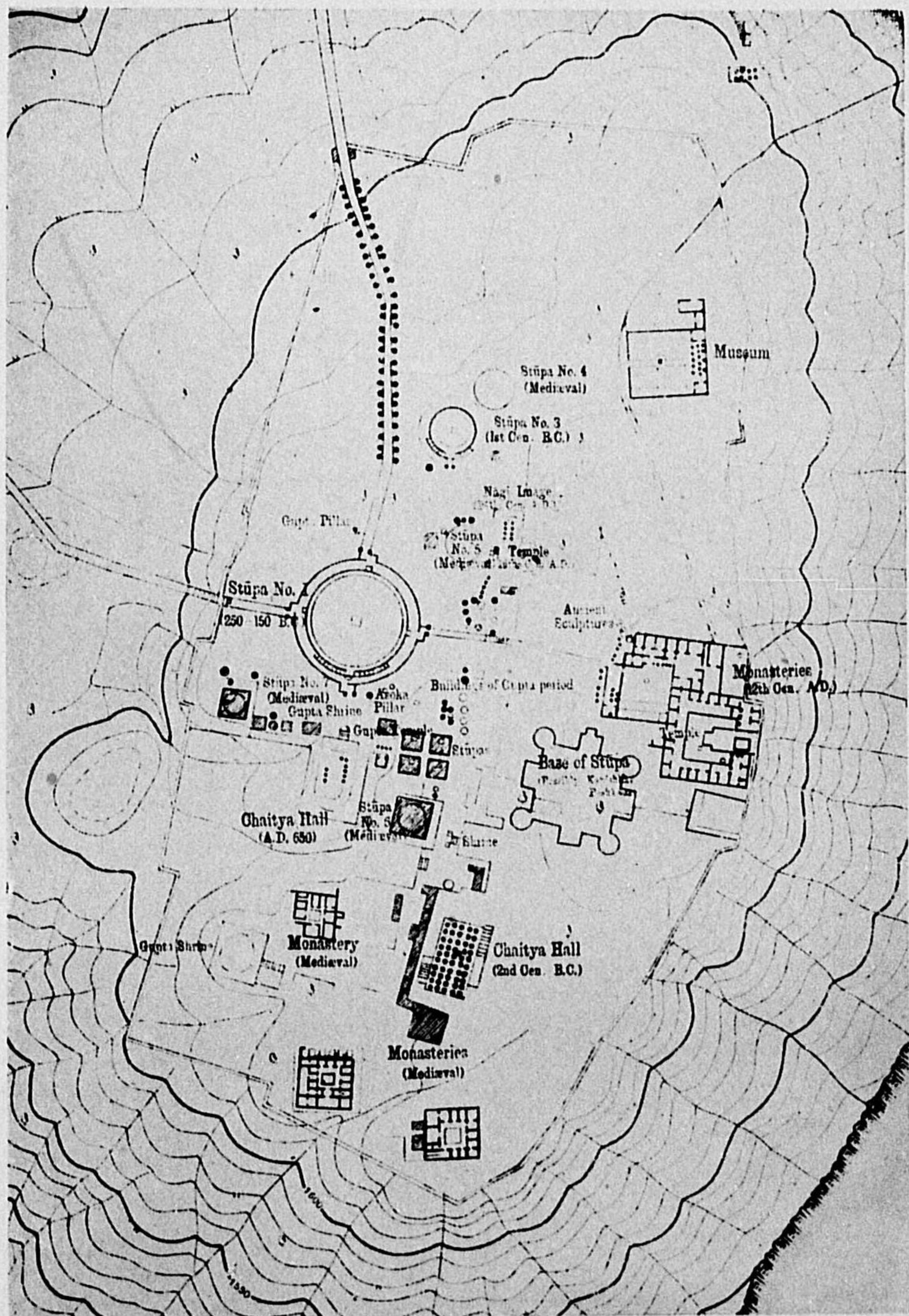


五七 ナシツク窟院第十號窟後壁塔婆の位置に彫刻せしバイラバ像

（昭和十一年二月二十三日）

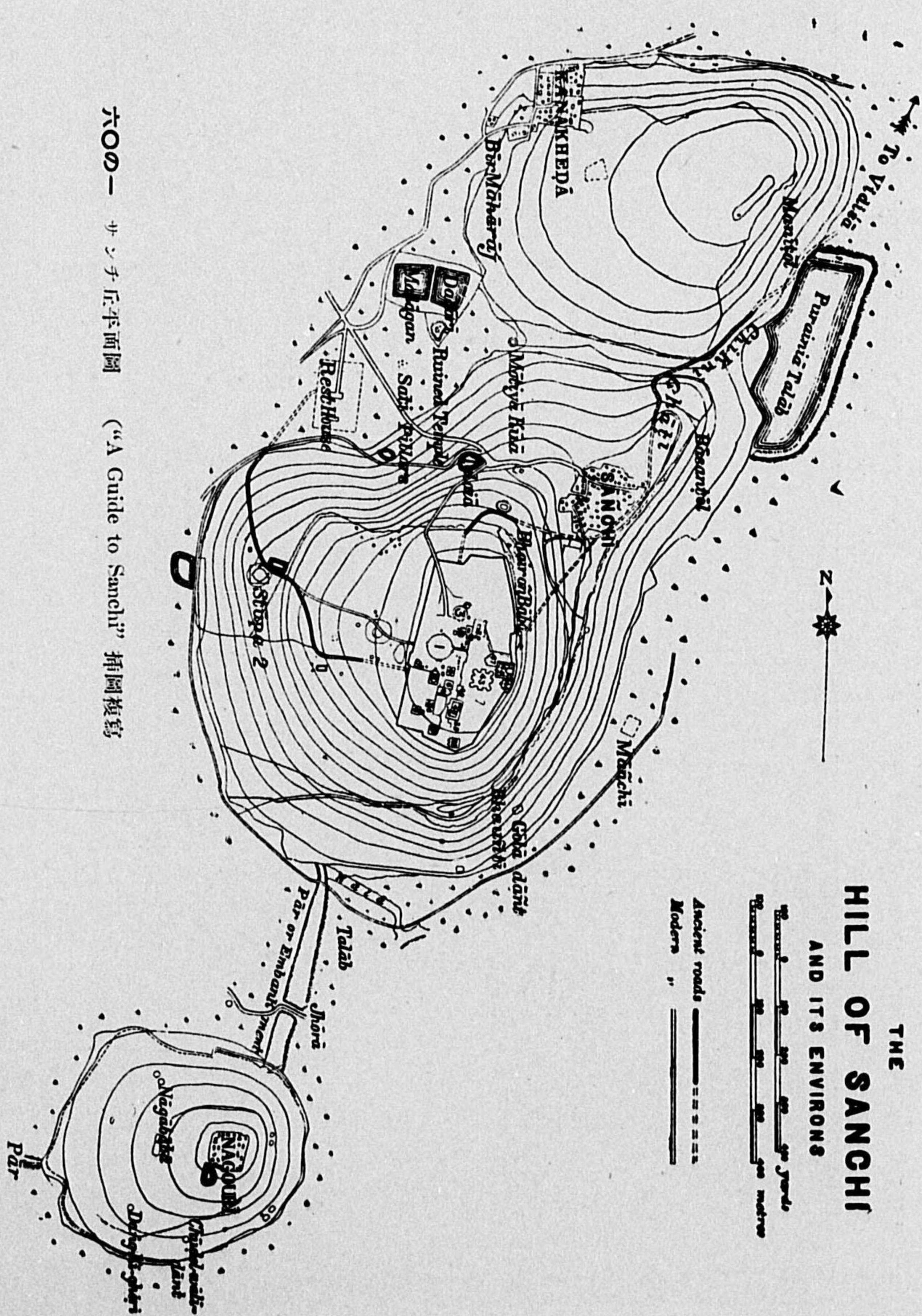


右。五八 エロラ窟院制多窟正面
 左。五九 同 内部
 (大正十二年二月七日)
 エロラに於ける唯一の制多窟で思旨羯摩窟 (Vishakha Cave) と俗稱す。塔婆
 高さ二七尺、正面に大佛像を刻してある。



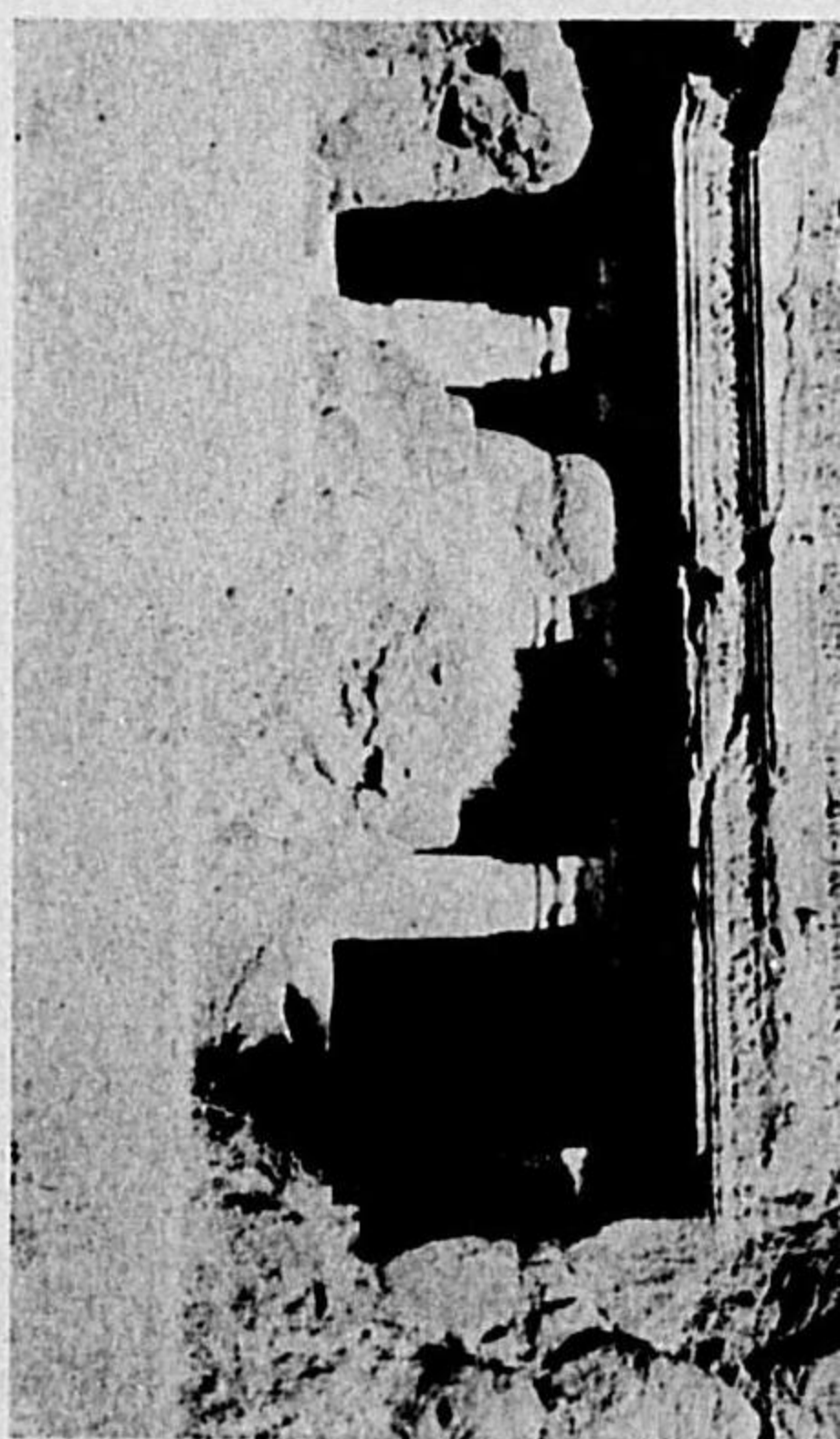
六〇の二 サンチ丘平面詳細圖（家藏地圖複寫）

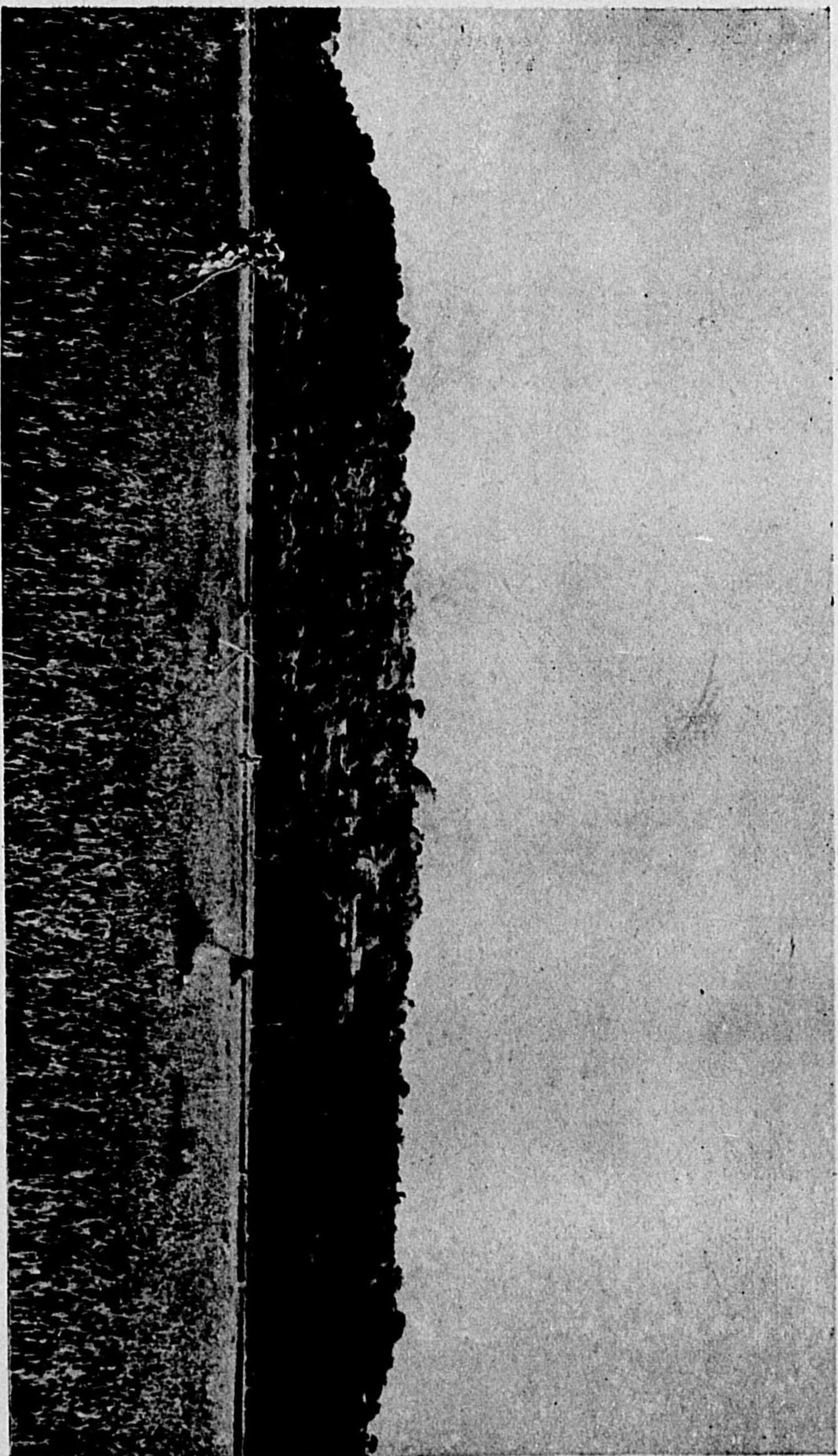
本文第135頁に斷り書きをした圖を見出したので、製版したが入れ所がないので、ここに折込みとして入れておいた。原圖が大して美しい印刷でないため、複寫も亦この位でがまんしておくより仕方があるまい。



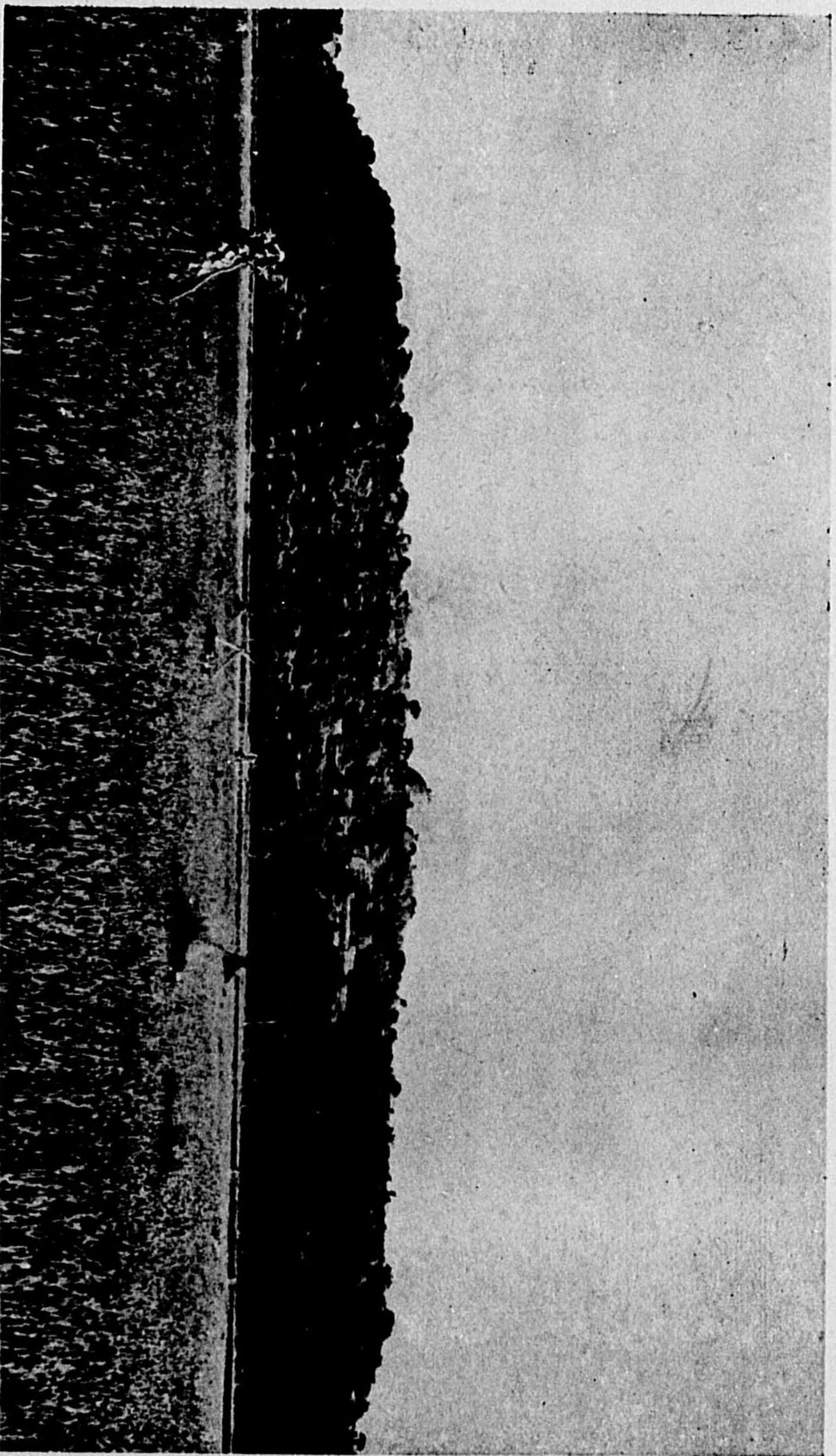
六〇の一 サンチ丘平面圖（“A Guide to Sanchi” 挿圖複寫）

(大正十二年二月七日)
(大正十二年二月七日)
と俗稱す。塔婆
Kinnara (Siv)

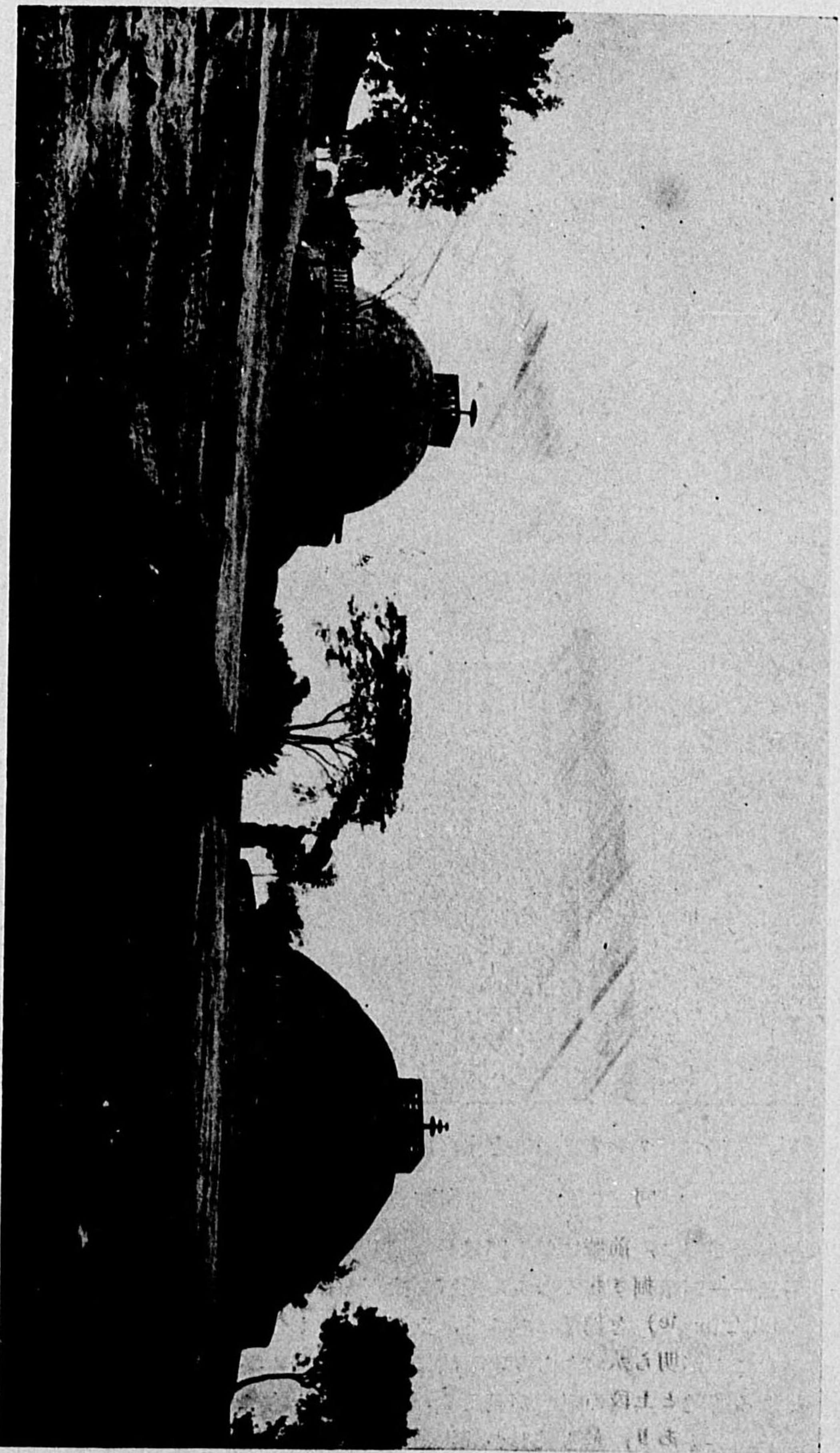




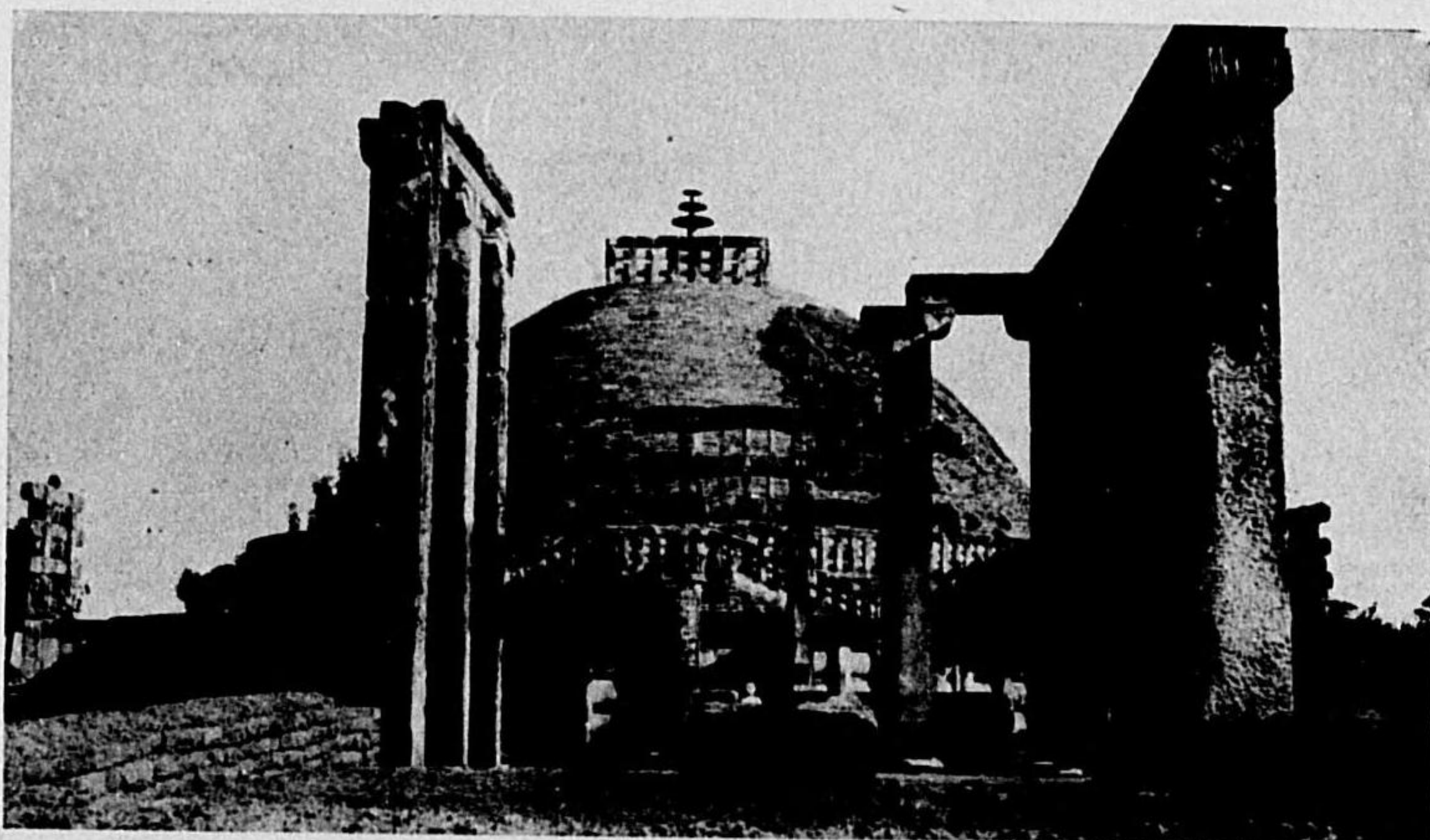
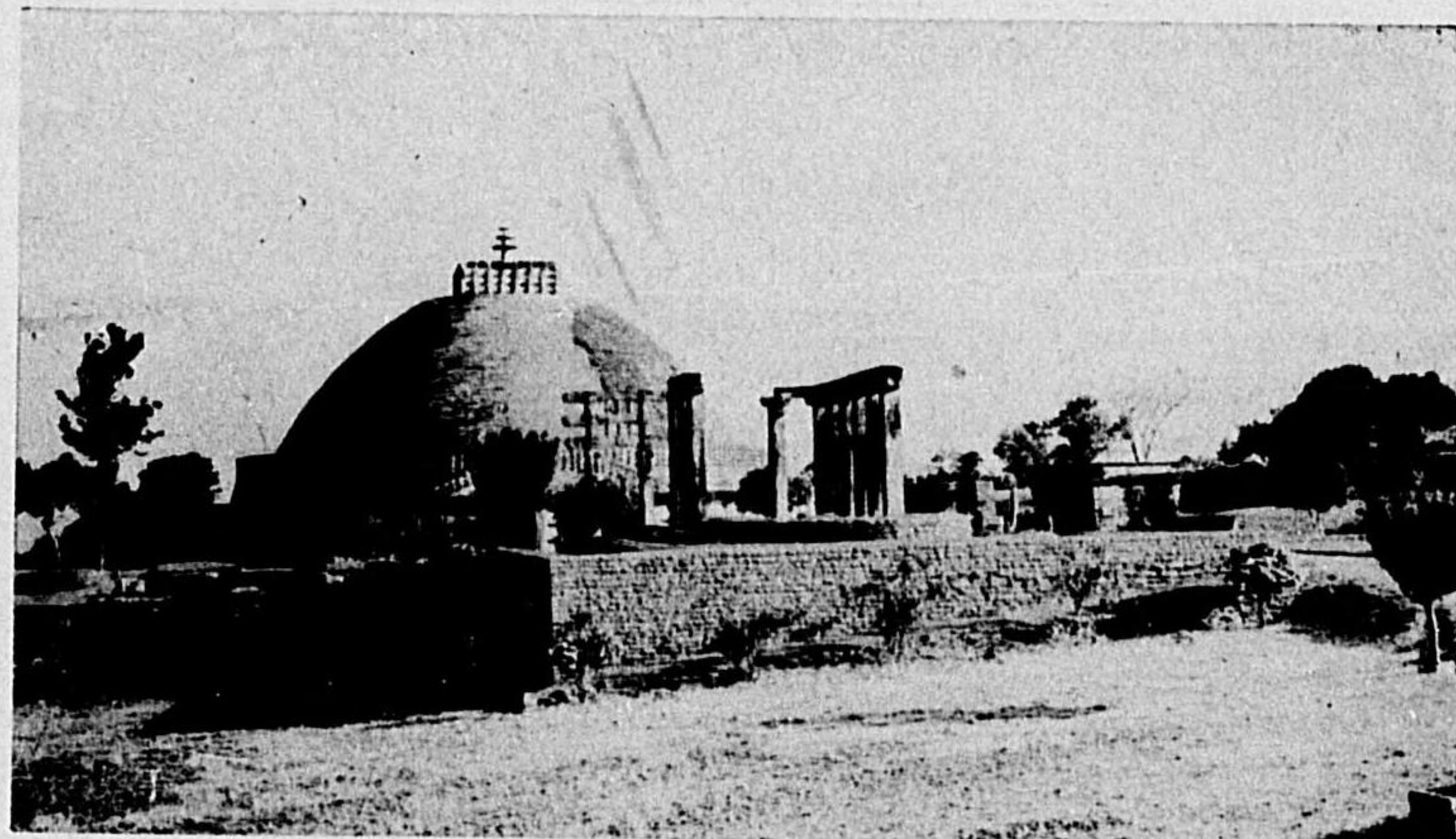
六一 サンチ丘全景 (昭和十一年一月二十一日)
圖の殆んど中央頂界線に見ゆる大伏峠は第一塔。其斜右下 丘の中腹 あるは第二塔で、玉垣迄はつきり寫つてゐる。
第三塔は第一塔の左に當つてゐるが見えてゐない。



六一 サンチ 丘 全景 (昭和十一年一月二十一日)
 圖の殆んど中央頂界線に見ゆる大伏鉢は第一塔。其斜右下 丘の中腹 あるいは第二塔で、玉垣迄はっきり寫つてゐる。
 第三塔は第一塔の左に當つてゐるが見えてゐない。



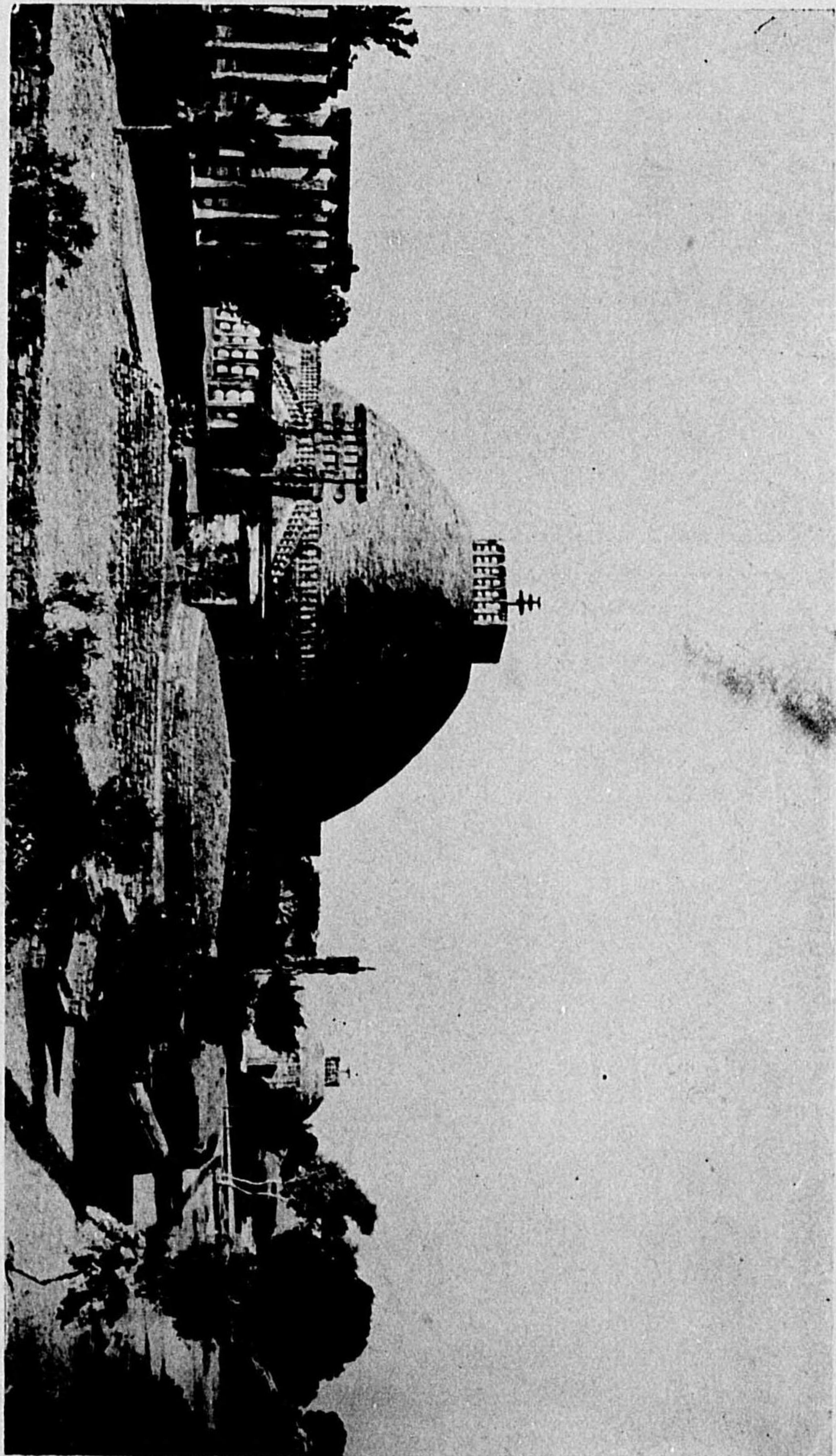
六二 サンチ 第一塔及第三塔を北方よりみる (昭和十一年一月二十三日)
 一月二十三日朝早く最後の寫眞をとるべく丘へ上つた。さうして北方からとつてみたが、天氣は丁度薄曇りで、
 こんなのができてしまった、右が第一塔で左が第三塔。



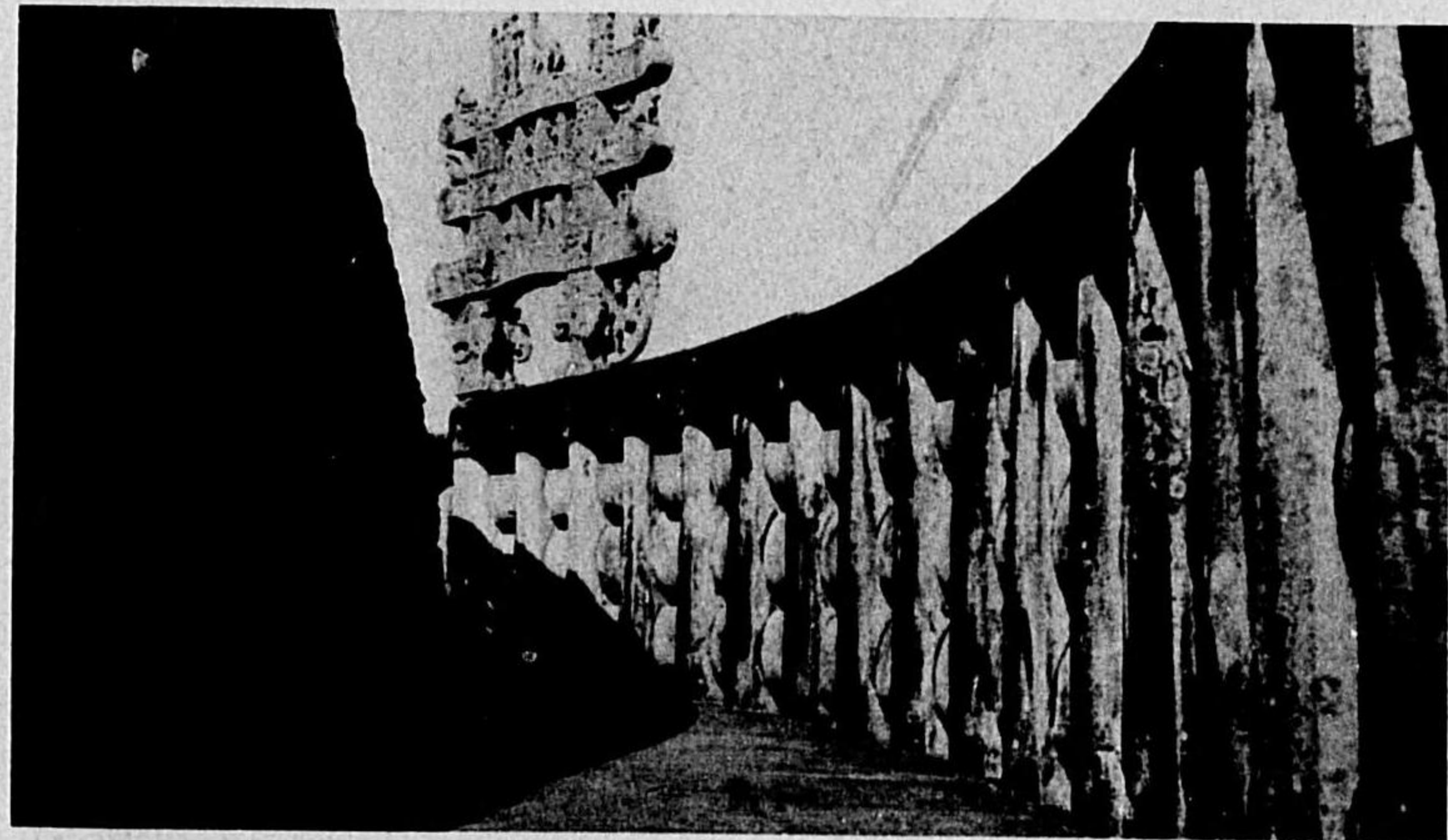
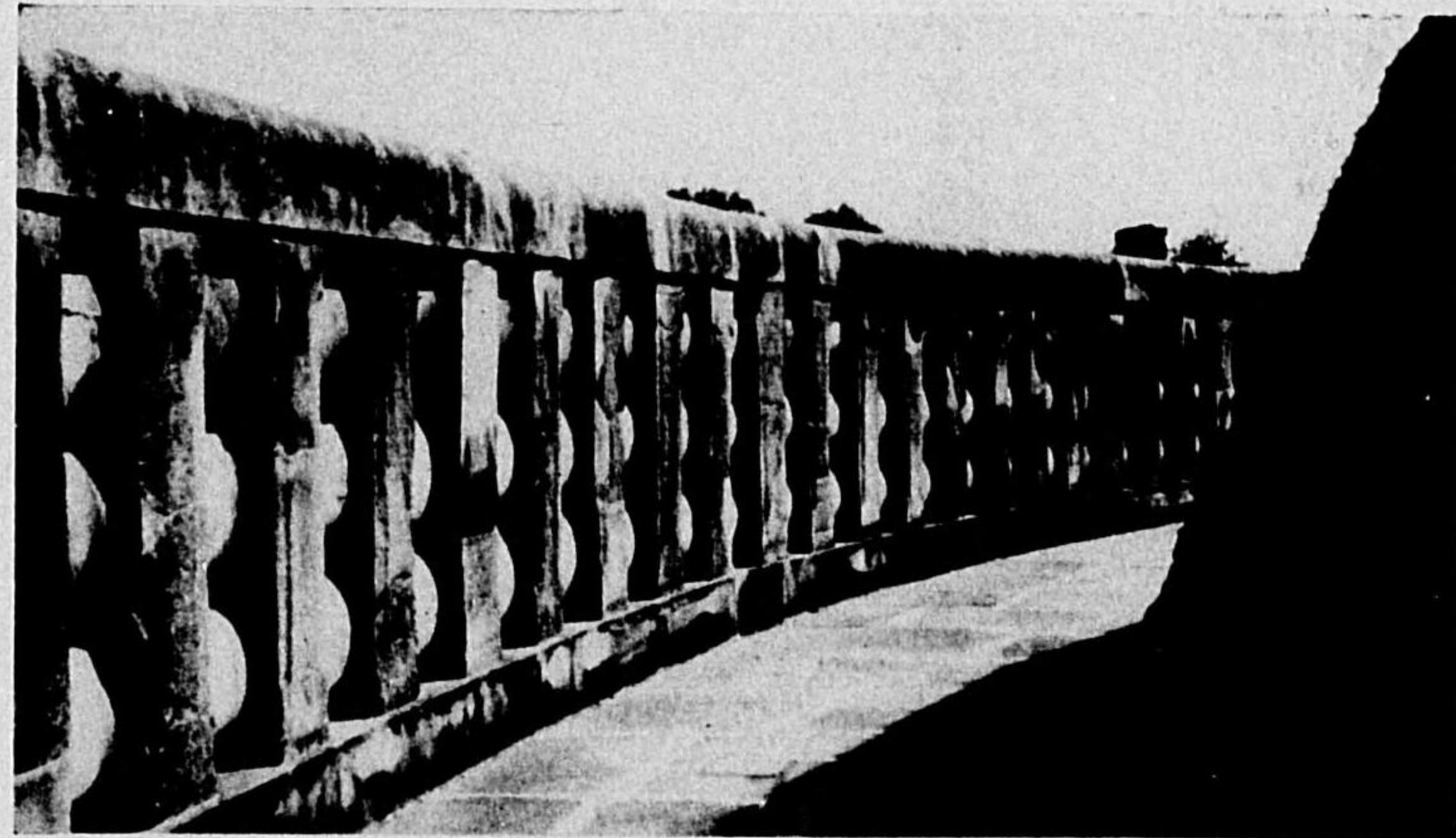
上。六三 サンチ第一塔を南南西よりみる (昭和十一年一月二十二日)

下。六四 同 南方よりみる (昭和十一年一月二十二日)

第一塔の西南に、前號に多く圖示した制多窟の如き、後陣が圓形になった建物——制多堂——が発掘されてゐる。此頁と次頁とに掲げた寫眞は、何れも其圓後陣堂 (Apsidal Temple) を標準にみると、上圖は其少し左から、下圖は其兩側の柱の間から見たことが明らかであらう。下圖に於いて中央のが南門で、其後方に上段に昇る階段と上段の玉垣が見える。さうすると右は東門で左は西門であり、最も美しい北門は丁度ま後ろにかくれてゐる。



六五 サンチ第一塔を南南東よりみる (昭和十一年一月二十二日)
 此圖では圓後陣堂の柱が左に見え、其右端の梁の上に西門が極く僅かばかりでゐる。尙ほ第一塔の東北方に位置せる第三塔も遠景に寫つてゐるから、相互の關係もよく判るであらう。



上。六六 サンチ第一塔玉垣 其一 (昭和十一年一月二十二日)

下。六七 同 其二 (昭和十一年一月二十二日)

サンチ第一塔周囲の玉垣には、第二塔にみる様な面白い彫刻のある圓紋がないのであれに比べると大分に淋しいが、其代り四方の門(Toran)が特別に立派である。これも修理前は、其位置に建つてゐたのは東門と北門とだけで、あとは随分ひどくなつてゐたこと、書物の挿圖で知ることができるのである。([中印度紀行]“Voyage dans l'Inde centrale” 1877)。それなのに、よくも今日みる様に、うまく復原ができたものだと、私は感心するのであるが、併しよく観察したら、或は相(次頁へ)

上。六八

サンチ第一塔玉垣 其三

下。六九

同

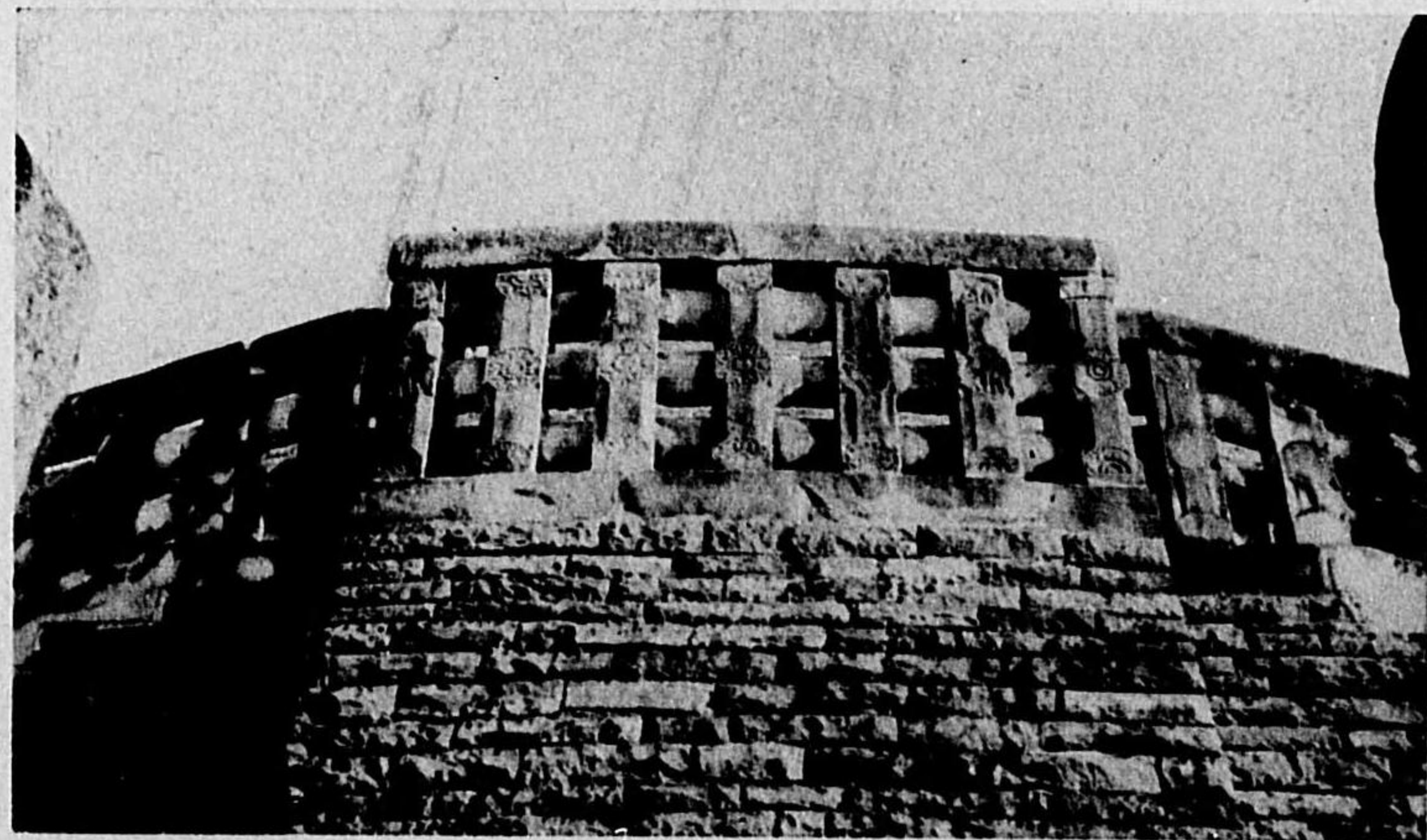
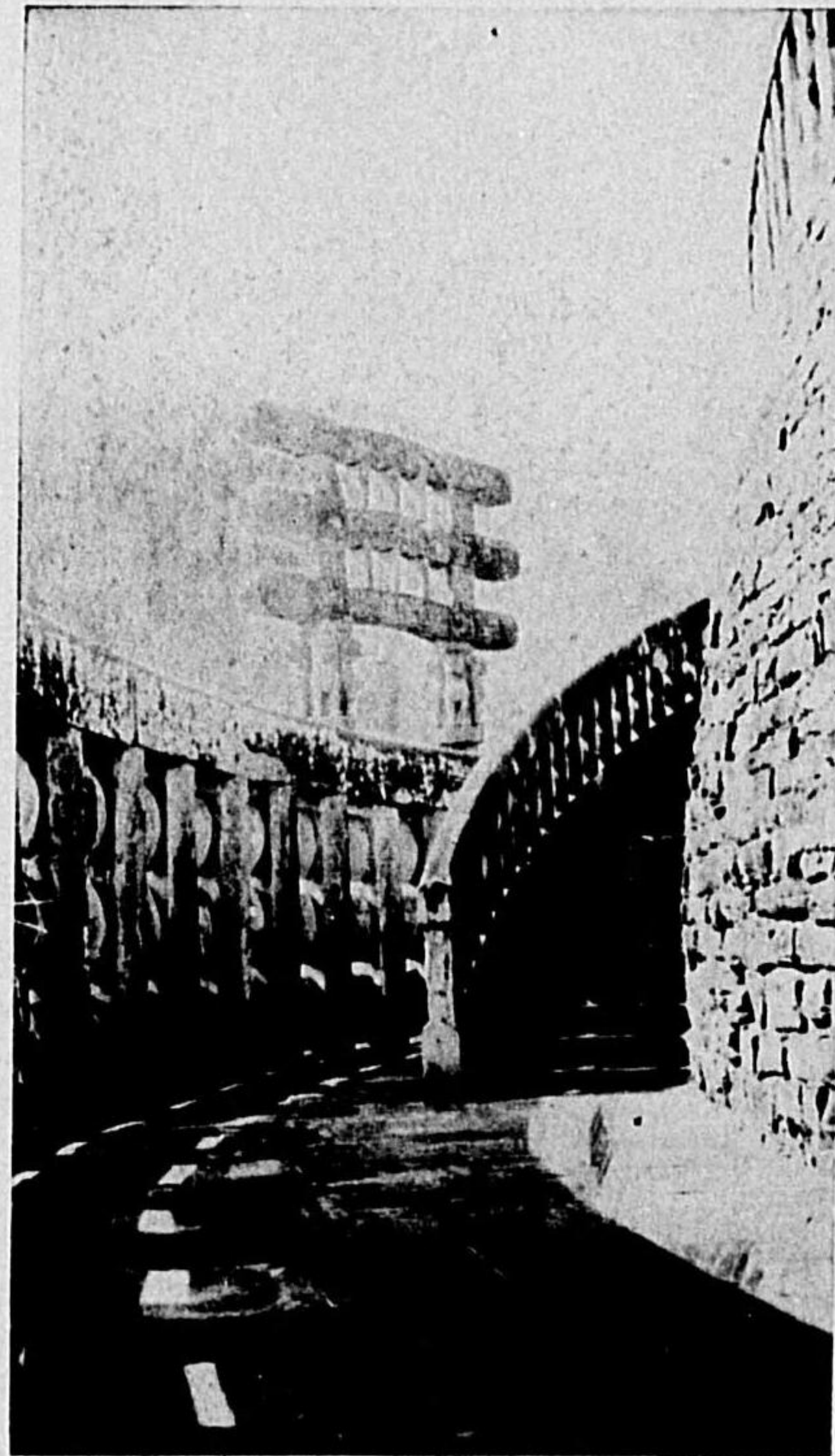
其四

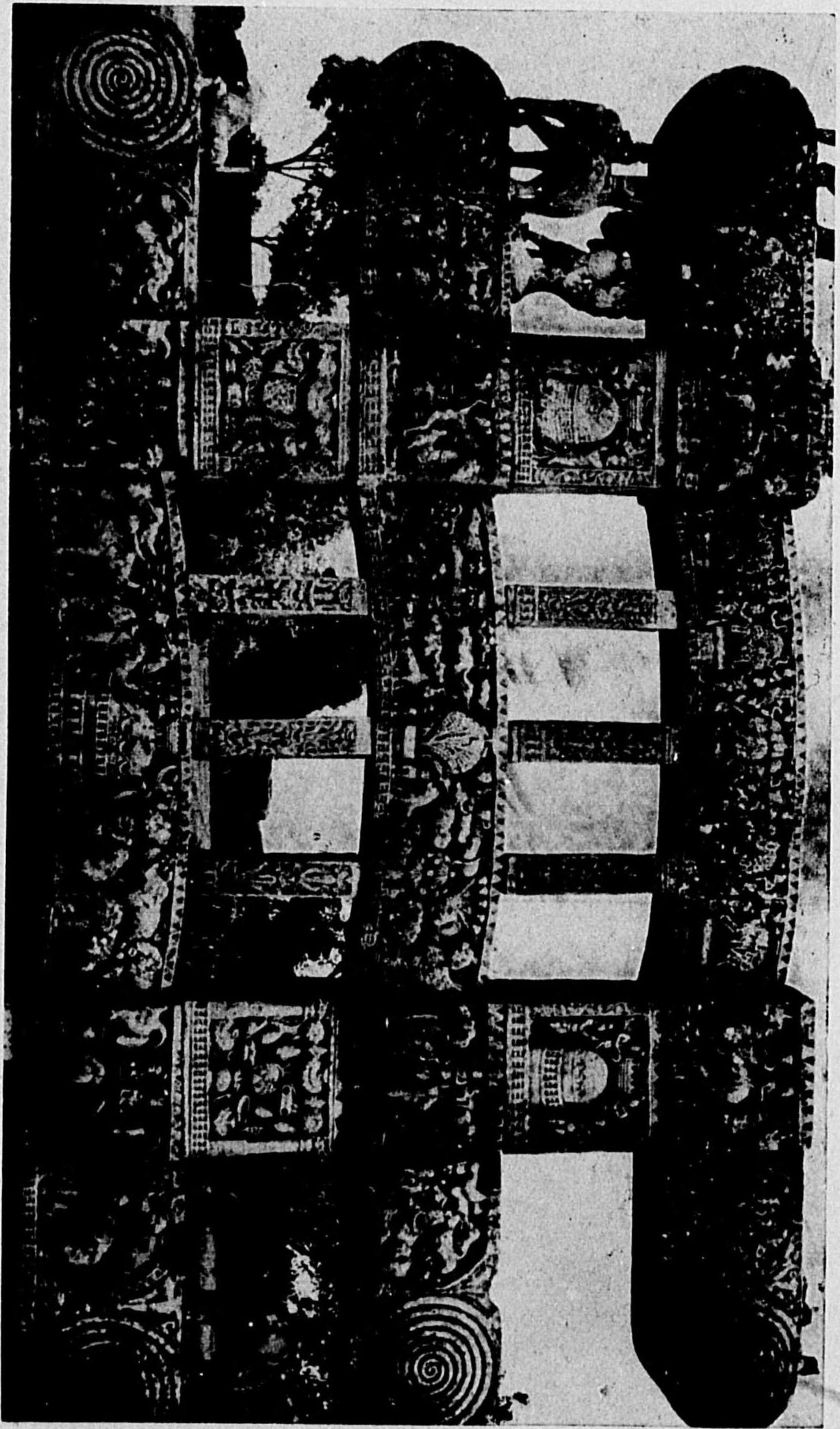
(昭和十一年一月二十二日)

(昭和十一年一月二十三日)

(前頁から) 當かどうか思はれる様などを見出すかも知れない。

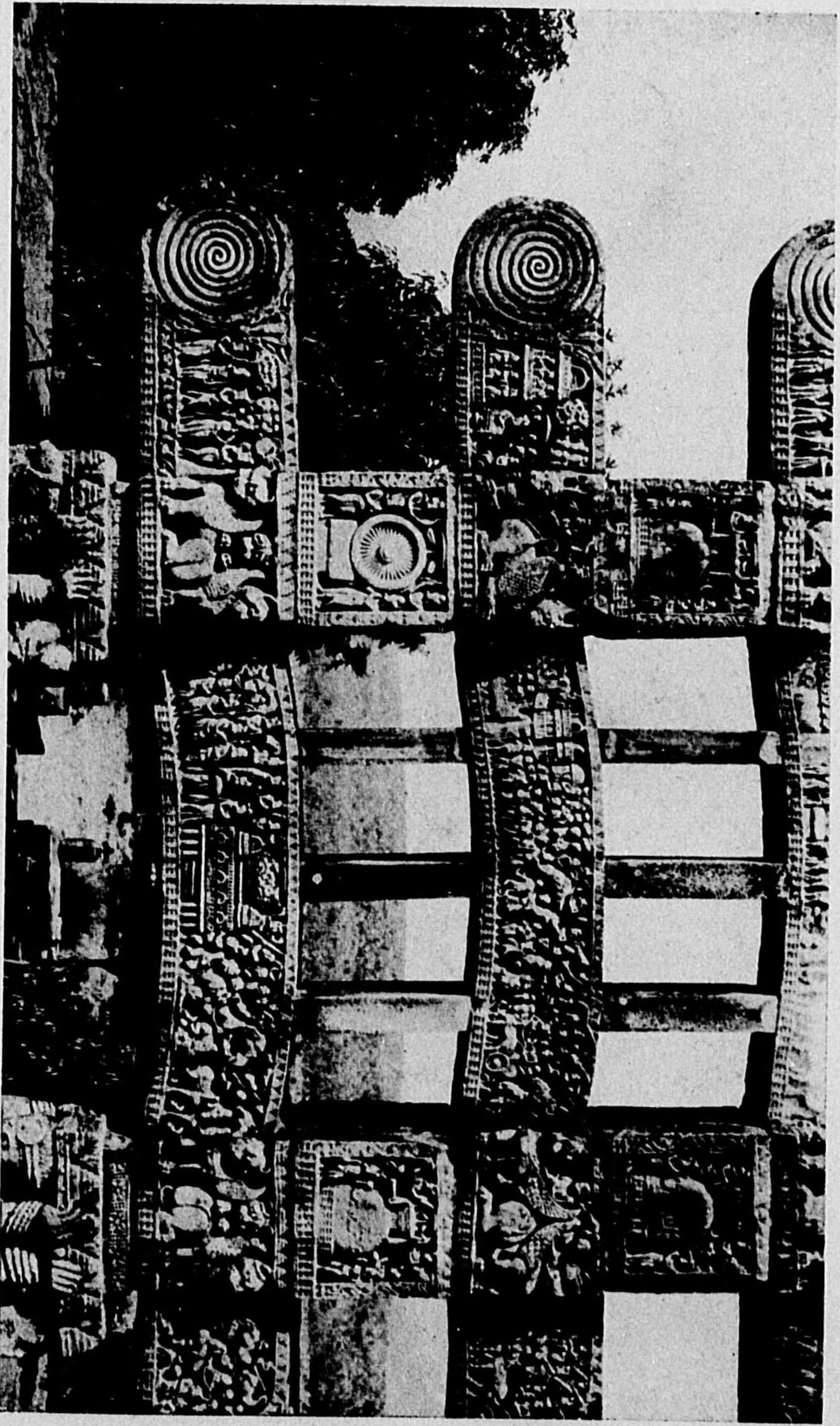
中段へ登る階段及踊り場には圓紋があるが、古いのは踊り場のだけで、彫刻が入れてある。下圖が夫れであるが、右から左へ三本目の中央の圓紋の彫刻は、馬人(Centaure)が女を背中にのせてゐる所で、かかる彫刻は第二塔の二つあるし、又佛陀伽耶大塔玉垣の夫れにもあつて、大に興味を惹くものである。





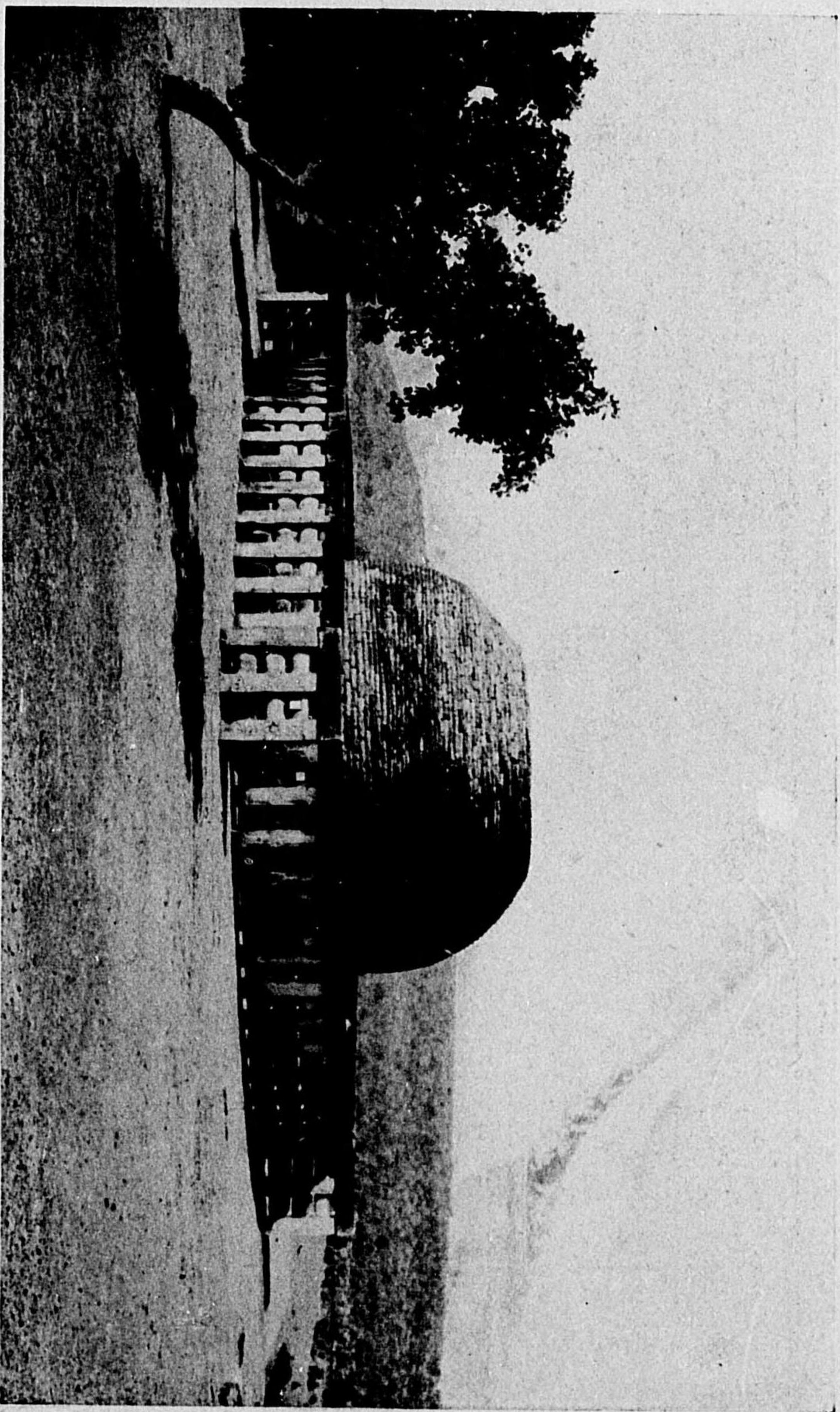
七〇 サンチ第一塔東門背面一部 (昭和十一年一月二十二日)

此圖も次圖も背面ばかり見せたが、正面の方は下からだから、この様に都合のいい寫眞がとれないからやめたので、其他に理由は無い。此等の彫刻には隨所に塔婆を現はしてあるのを見せるのが主で、第五十五圖の夫れらの如く、平城の上部に三角形を(次頁へ)

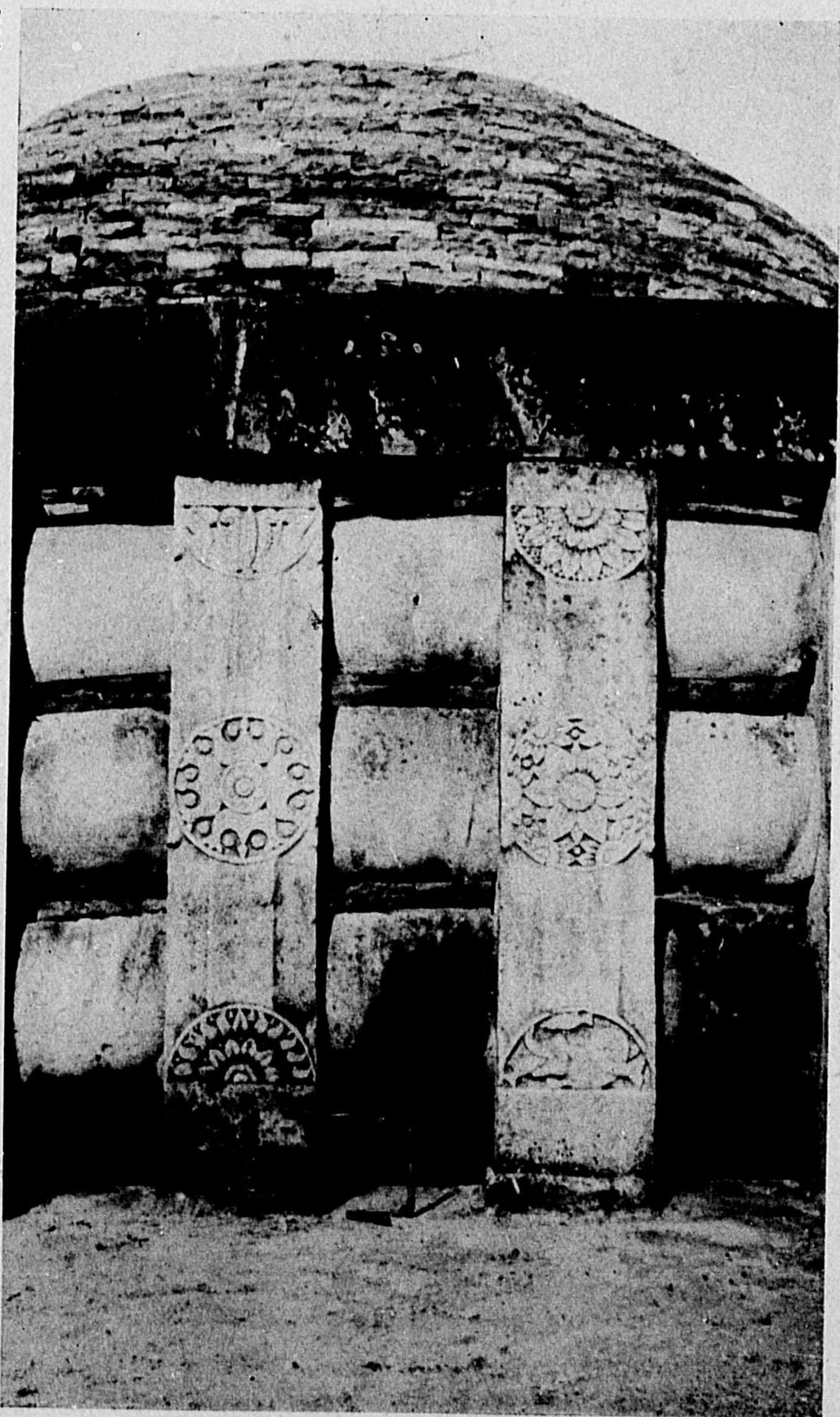


七一 サンチ第一塔西門背面一部 (昭和十一年一月二十二日)

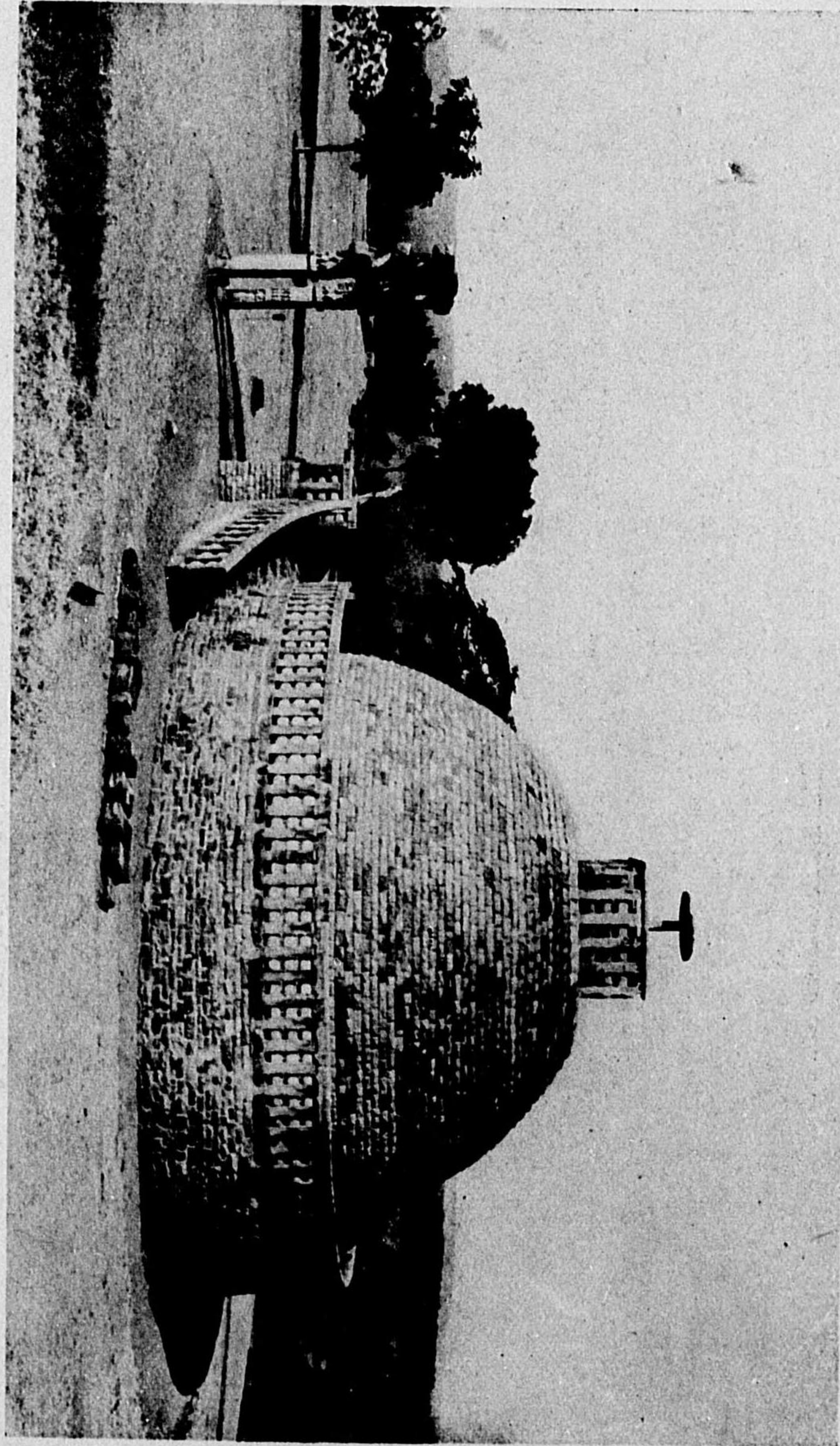
(前頁より)並べた様な飾を有し、相輪も備へてゐて小さいながら洵に完全な形態の塔婆であることを示さんがためである。其上に埃及式蓮花も見え、又「白澤」思はれるものもあつて、大變に面白いのである。尙又モヘンジョ・ダロにも居たようである。(後)



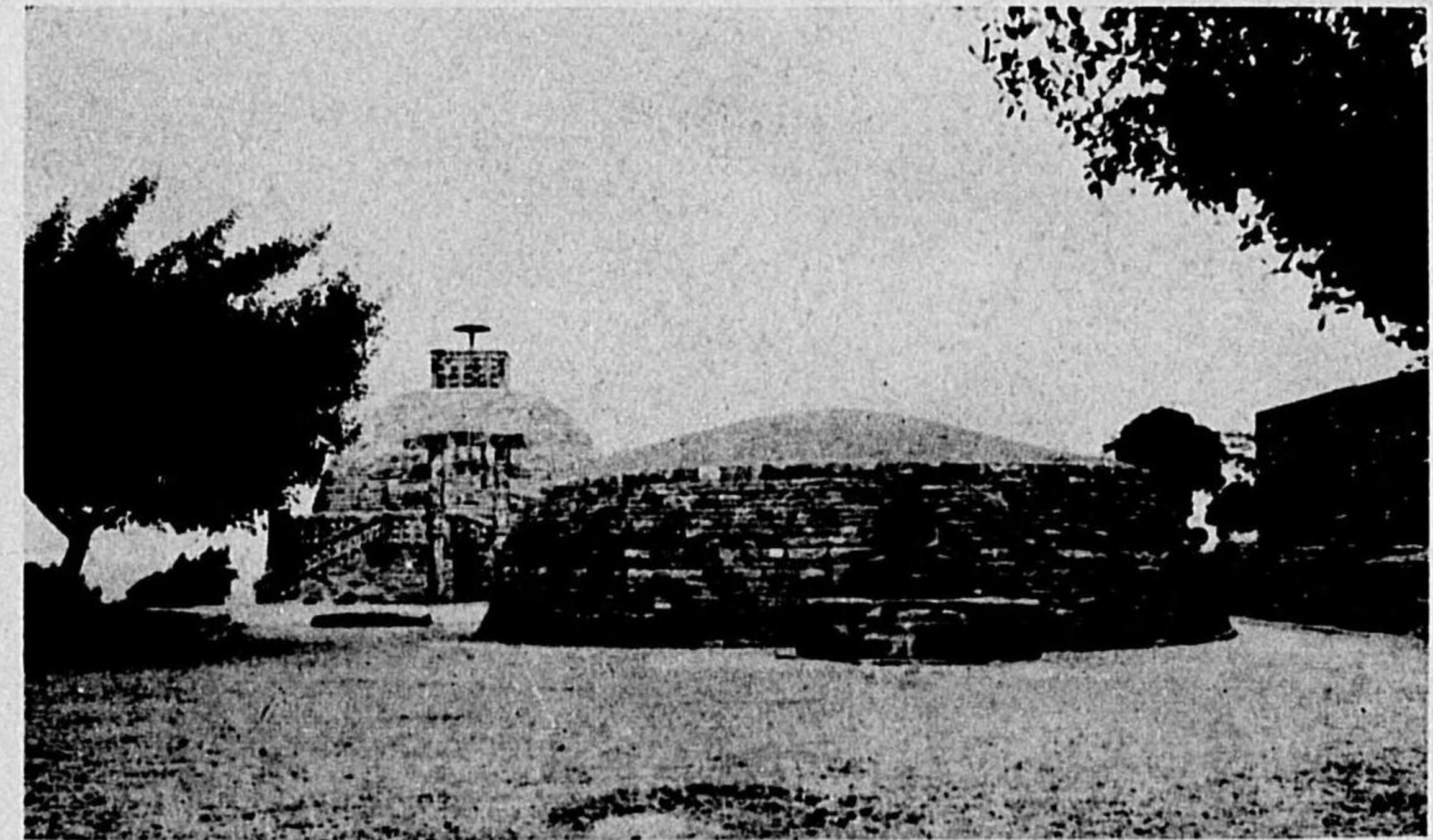
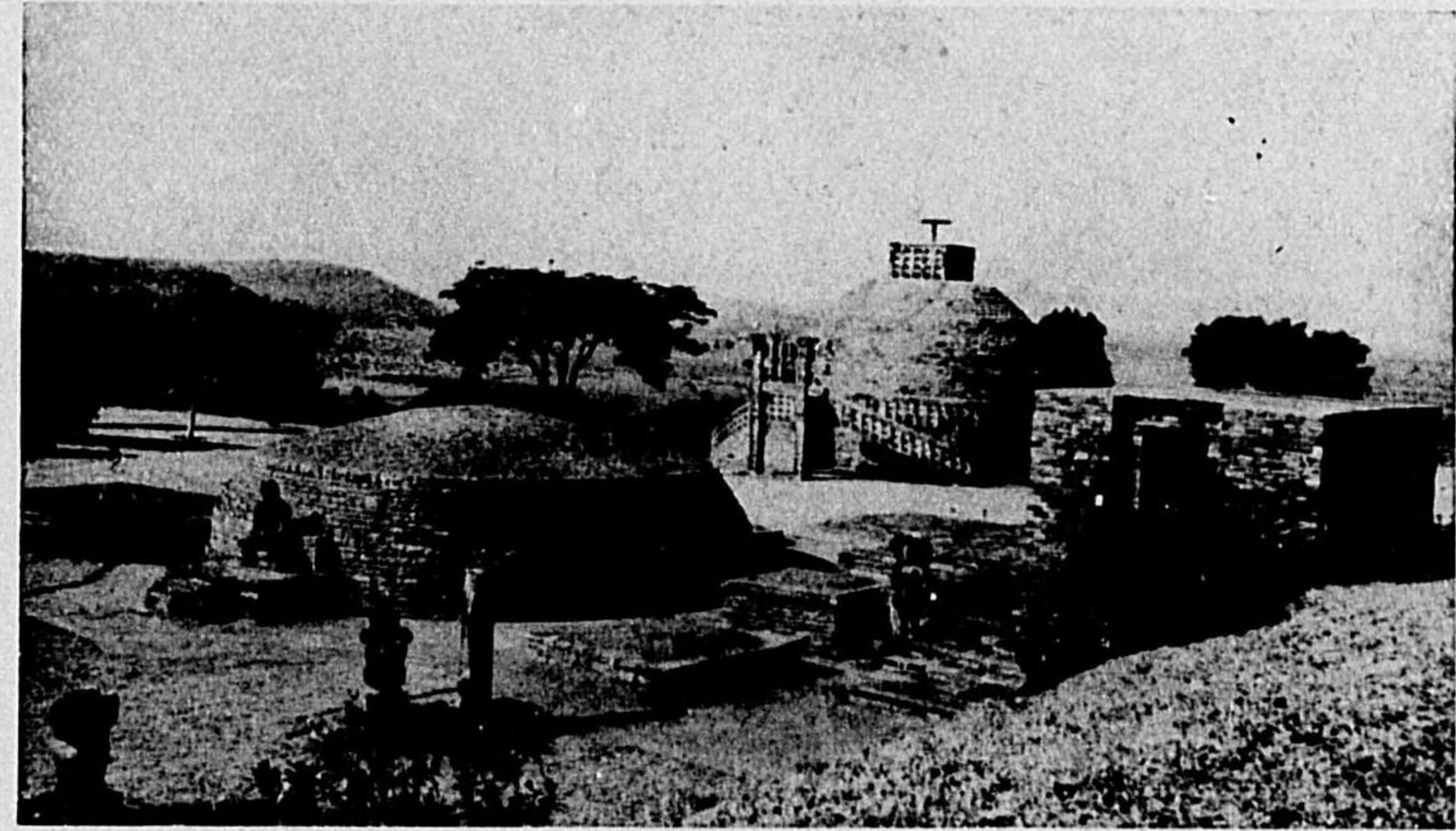
七二 サンチ第二塔を東北方よりみる (昭和十一年一月二十一日)
 第二塔の玉垣は、大きな門を有してゐない。塔婆其物もこれ以上復原のしやうがなかつたと見え、少し物足りない。



七三 サンチ第二塔玉垣一部
 第二塔の玉垣には、非常に面白い彫刻入の回文が澤山にある。他日これ等に就いて記載するかも知れない。
 (物指は曲尺の一尺・昭和十一年一月二十一日)



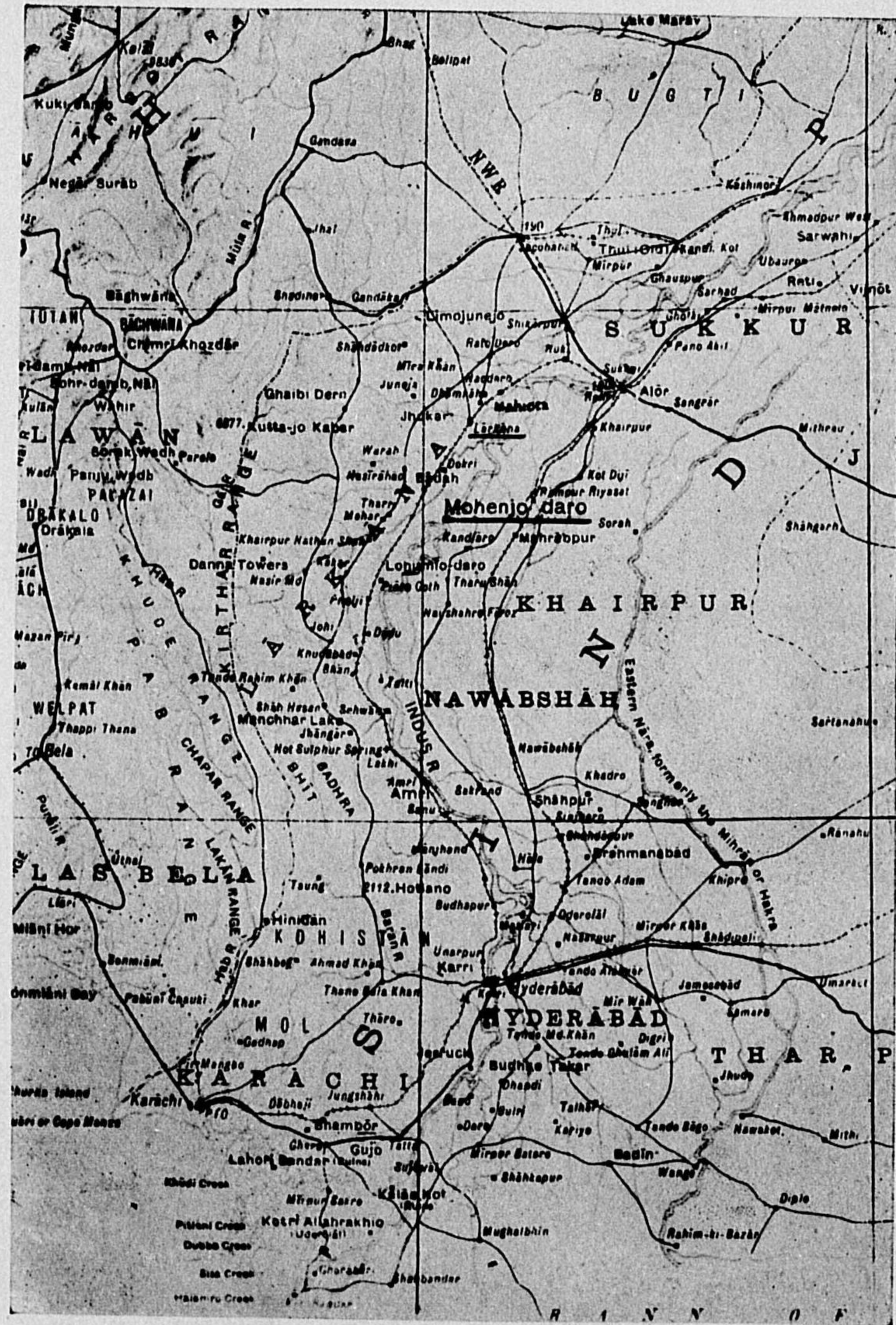
七六 サンチ第三塔を東方よりみる (昭和十一年一月二十二日)
 前圖の解説にかいた通りの状態であったから、餘程頭を崩かさなければ、到底この様な復原は不可能である。



上。七四 サンチ第三塔を南南東よりみる (昭和十一年一月三十一日)

下。七五 同 東南方よりみる (昭和十一年一月二十二日)

此塔婆は第一婆に比べると大分小さいせいか、相輪も僅かに一個にしてある。小じんまりしていい形である。第一塔と同じ様に、四方にあった門が、漸く一つ残ったのかと思ふと、さうではなくて、初めから一つであったのだらうといふ説らしい。此塔も先きに記した【中印度紀行】の挿圖によると、兩方の柱と最下の貫とがたつてゐただけで、あとはまるで地上に落ちてゐたのであった。況や塔婆其物は、まるで崩れて原形をとどめず、まるで手がつけられない様になってゐたことが判る。

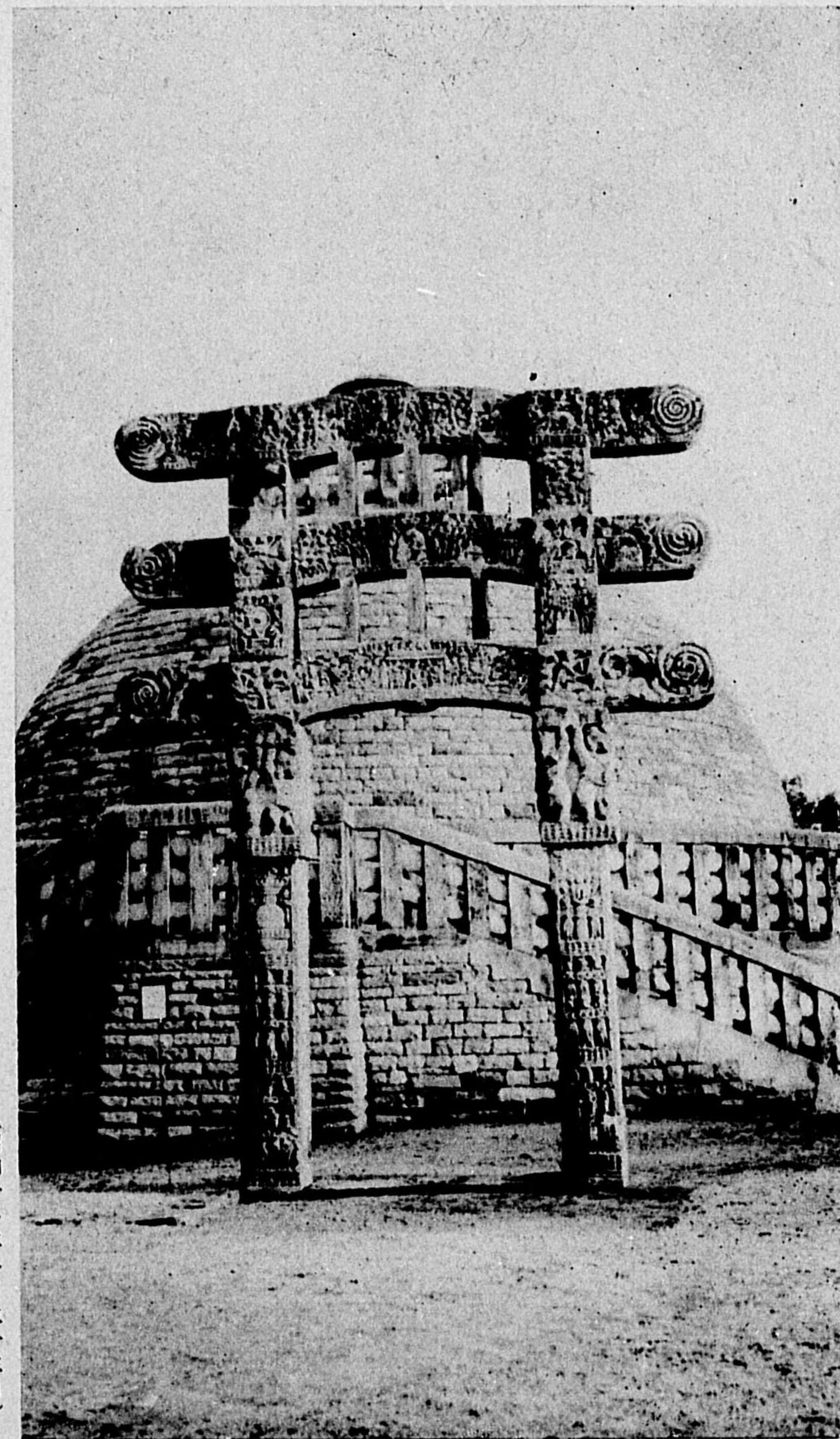


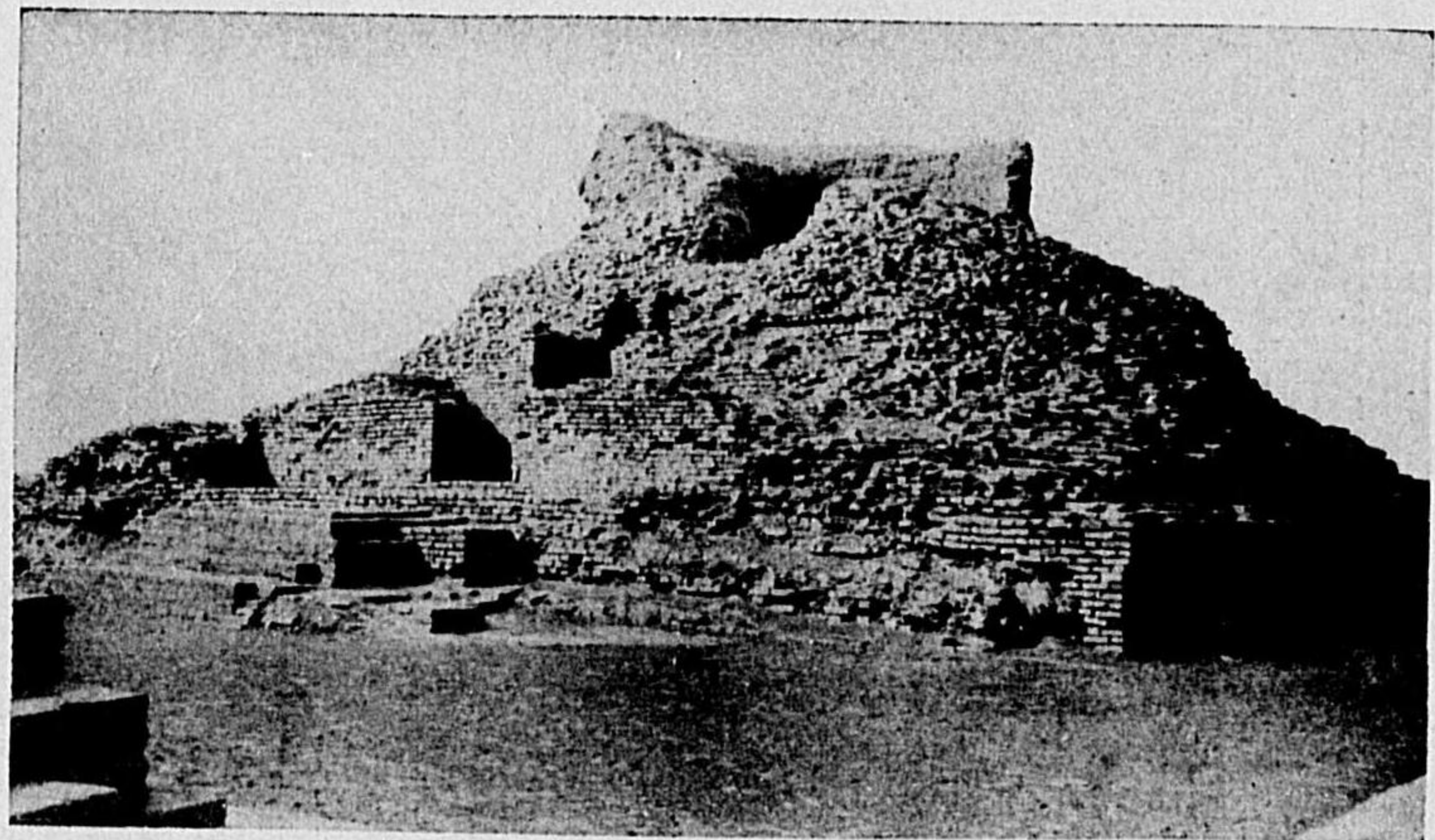
七八 モヘンジョ・ダロ及其附近一般圖

(MOHENJO-DARO AND THE INDUS CIVILIZATION 附圖複寫)

本圖はモヘンジョ・ダロ及附近の大體をしめんがために掲げたものである。

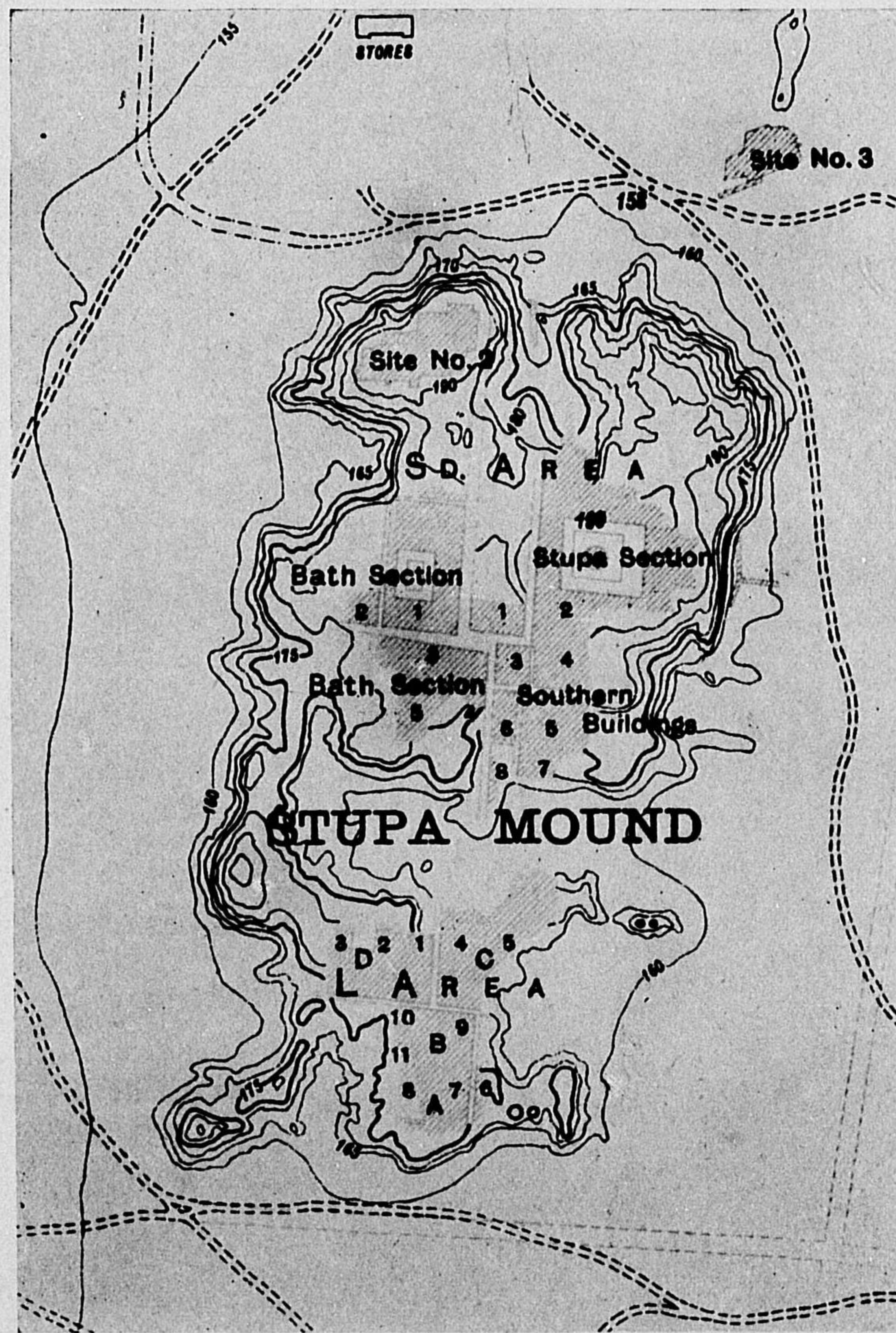
七七 サンチ第三塔及南門
 正面門の左柱上部に塔婆の彫刻がある。此圖は小さいながら、平頭上の三角の行列と、裝飾附相輪の有様が明瞭に判るであらう。
 こんなものをみてみると面白くて去ることができなくなる。



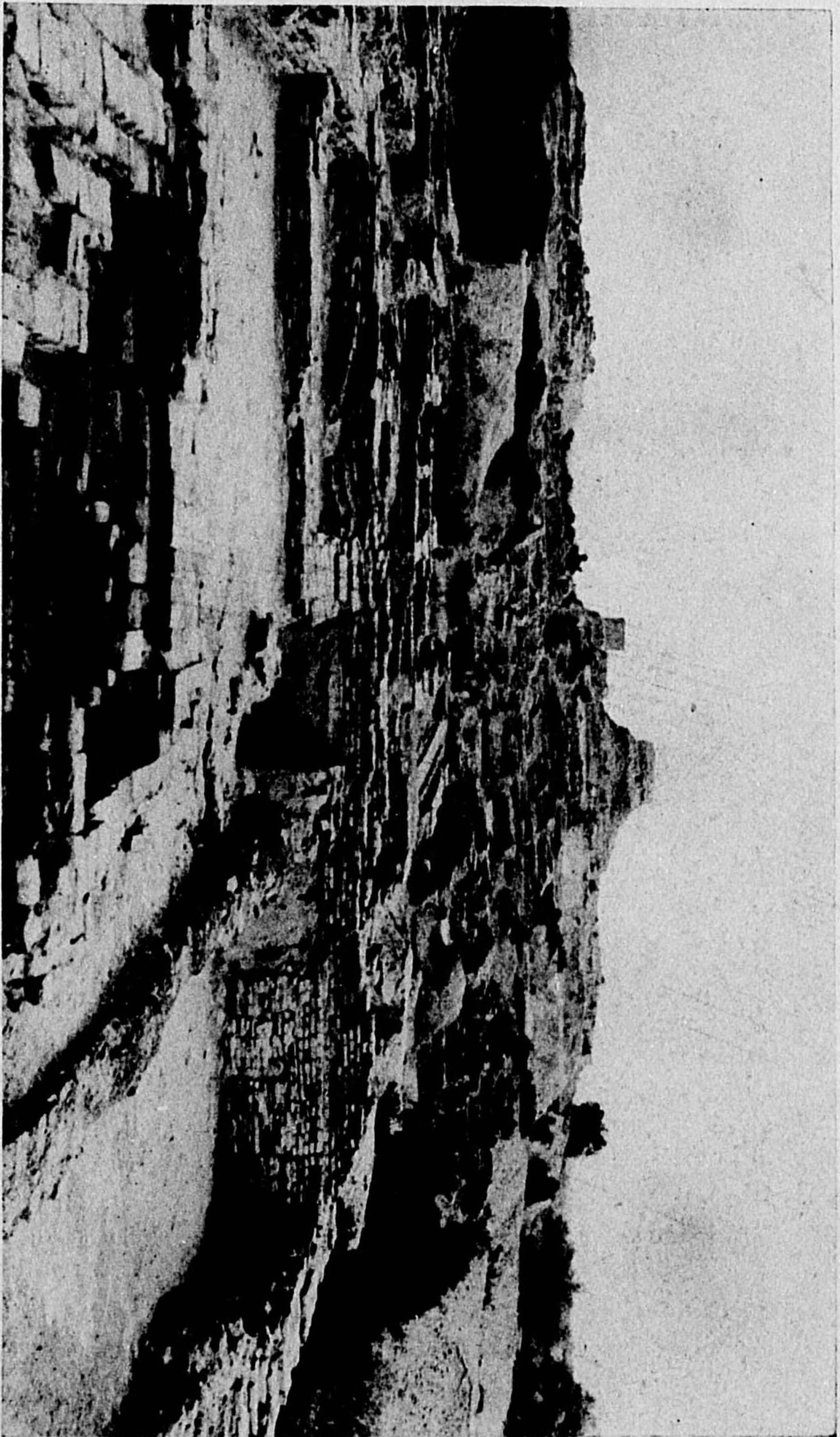


上。八〇 モヘンジョ・ダロの廢塔婆 其一 (昭和十一年二月十日)
 下。八一 同 其二 (昭和十一年二月十日)

塔婆は廣き臺地の中央より少し後方に東面して建つてゐる。上圖は近く東北
 方からみたところ。左方即ち正面に、其壇上に登るための階段、及び東面せる
 佛像安置の小籠の一部分、並に中空の圓形基礎の一部がよく見えてゐる。下圖は
 少し遠ざかり南方からみた全景。共に七九と比較せば、これ等の寫眞をとつ
 た位置がよく判るであらう。



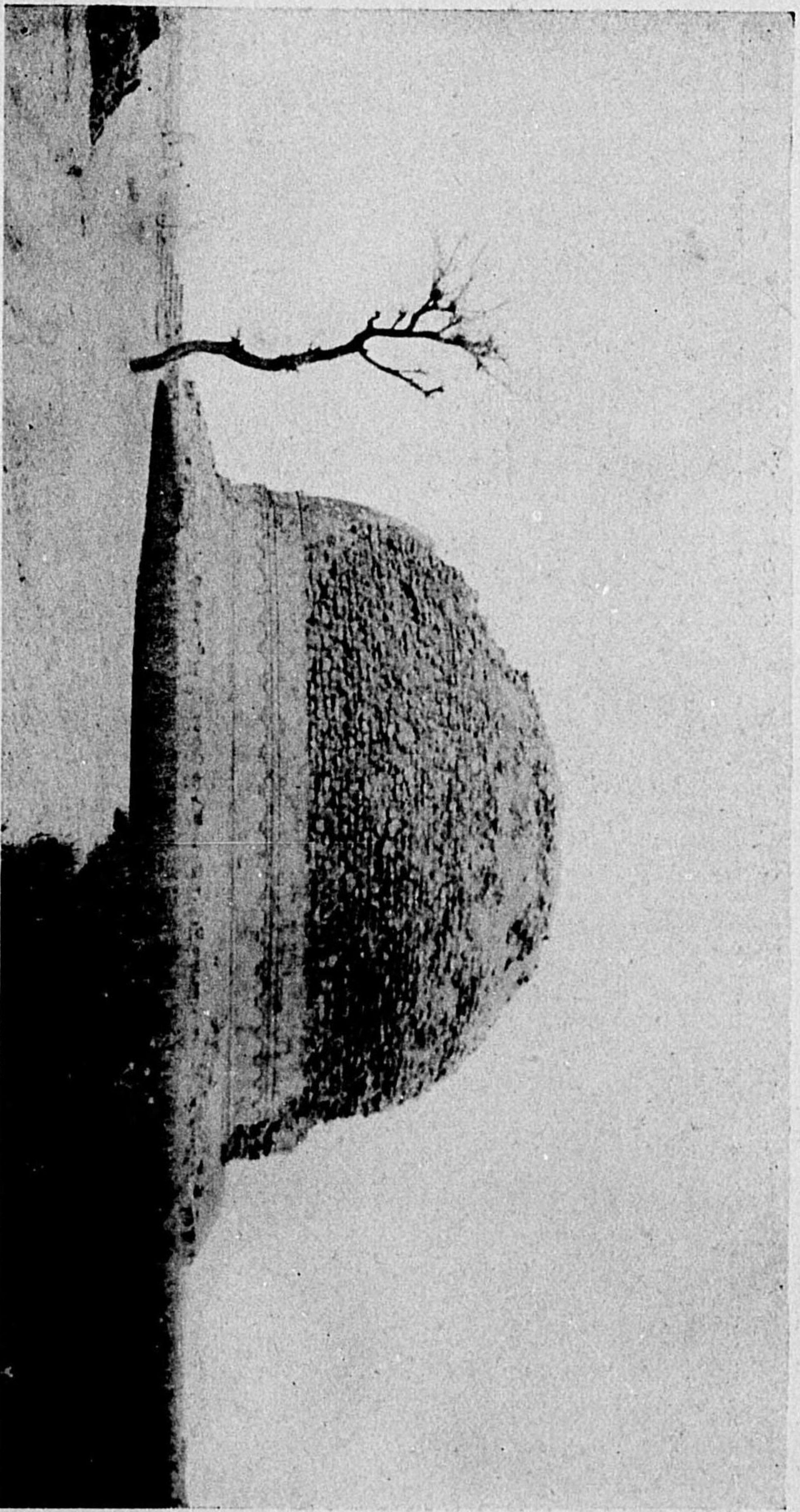
七九 塔婆堆平面圖 (M. D. & I. C. 附近一部複寫)
 モヘンジョ・ダロ遺跡の最高地で、どこからでも塔婆は見える。右上が「塔婆區」
 左及左下「大浴場區」、右下「南方建造物」と分けてゐる。



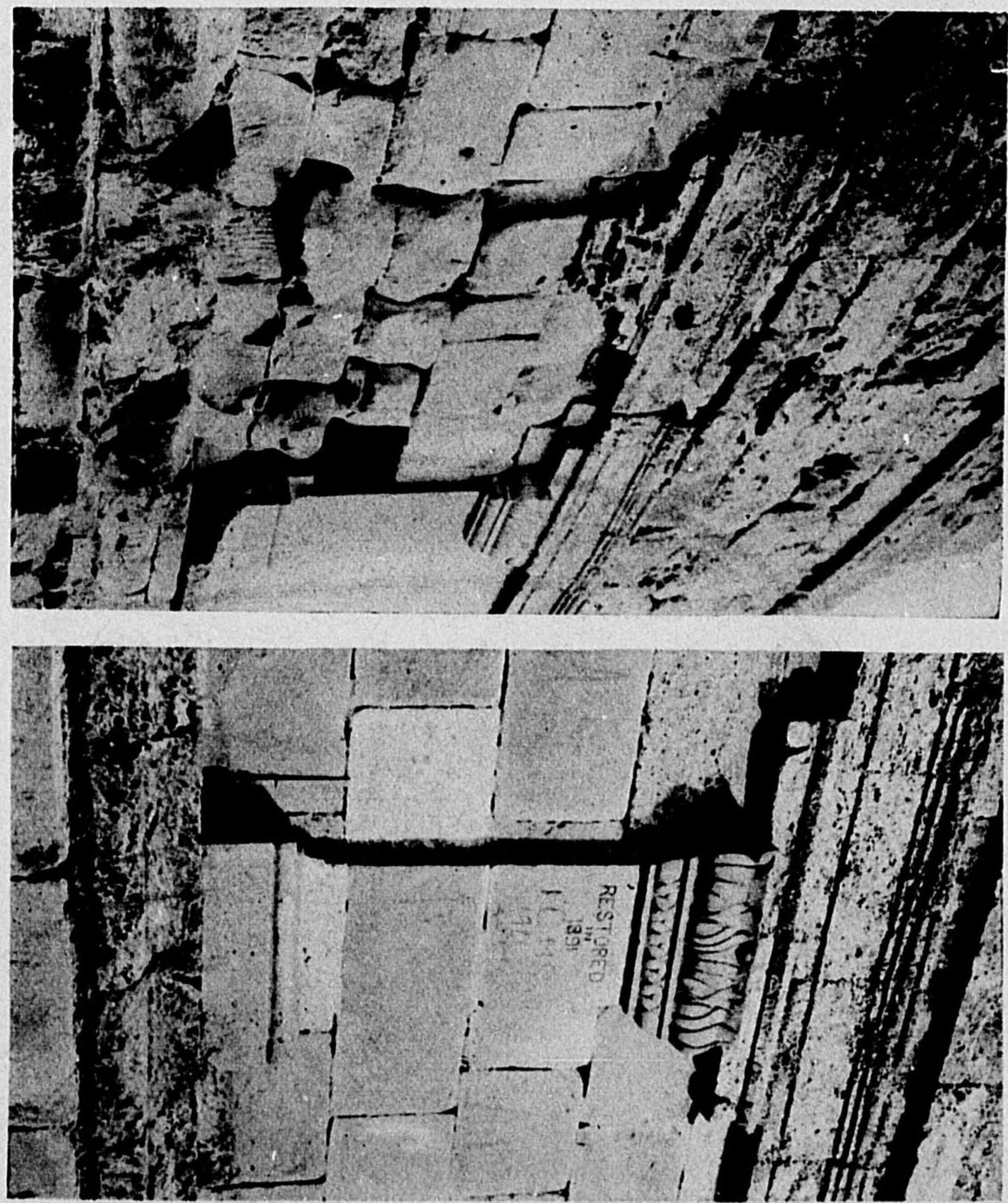
八二 塔婆を中心とするモヘンジョ・ダロ全景。(南方よりみる) (昭和十一年二月十日)
 塔婆は高所にあるので遠方から目標になってゐる。これは前頁下圖と同じ方向で、遂に遠方からみたところ。前景に最も近く現はれてゐるあたりは、報告書 (MOHENJO-DARO AND THE INDUS CIVILIZATION) に "Southern Buildings" としてお(次頁へ)



八三 塔婆を中心とするモヘンジョ・ダロ全景 (西北方よりみる) (昭和十一年二月十日)
 (前頁より) るもの一部分である。その邊から左に廻り、西北方からみると今度は塔婆の左にあつた四角な家が右方へくる。この拙い大きな殺風景なま四角な集の様な家は見取所で、これあるがためどの位風致を害つてゐるか判らない。

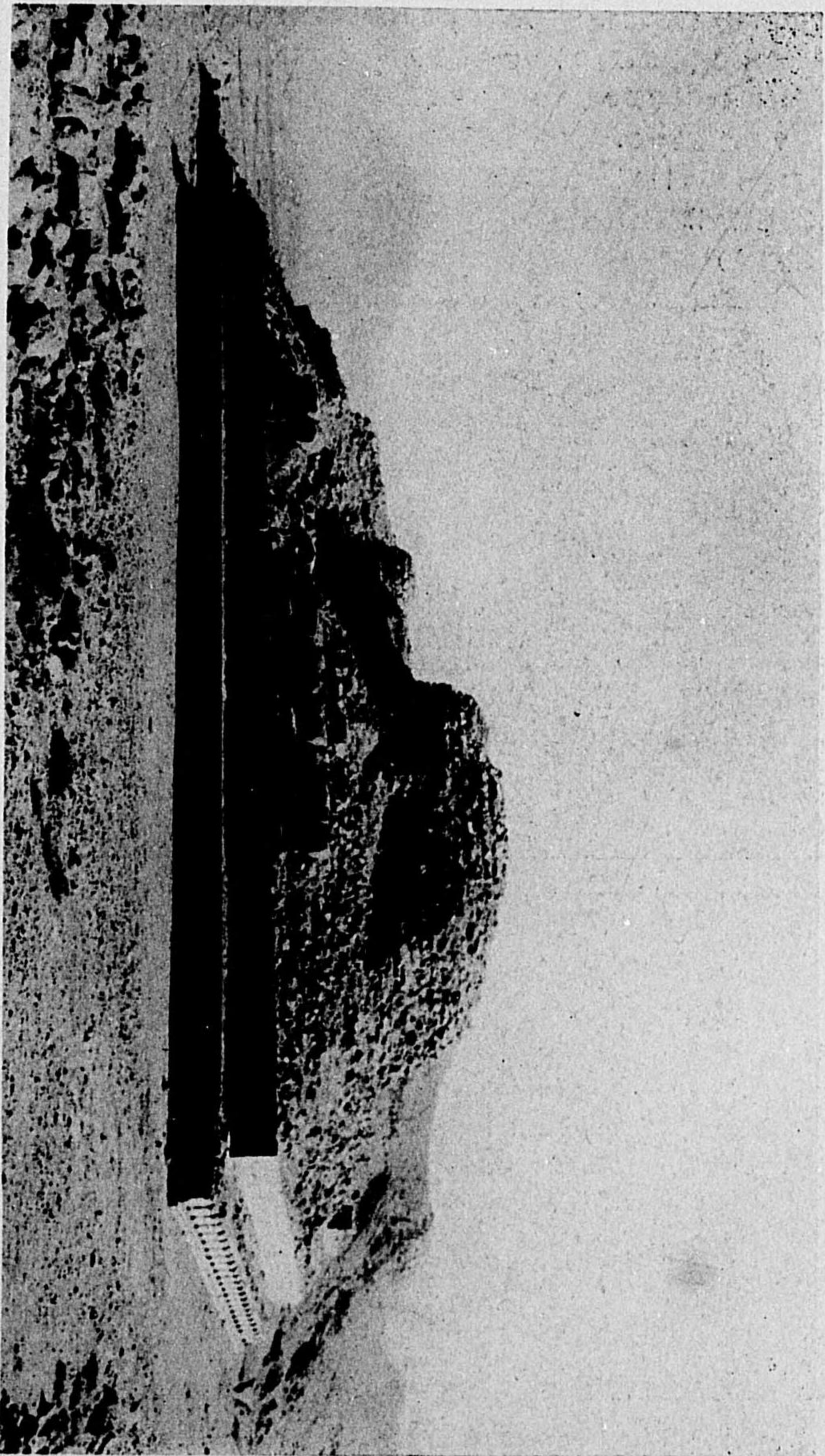


八四 マニキヤラ塔 (Mankiyala Stupa) 全景 (昭和十一年一月二十八日)
大正一年生の時代、印度建築史の概略を教へて頂いたとき、マニキヤラ・トーブといふ名を覚えた。餘り變な名なので、その時以來忘れないでゐたが、印度に三十年もゐるで知らぬ人もある位に、現代とは没交渉の塔婆だから、ここまで應徳行つてみやうといふのは、餘程の篤志家か、さもなくば少し足りない人物位で、普通の人なら先づ疾走中の窓から横目で覗んでおく程度であらう。



右。八五 マニキヤラ塔基礎の片蓋 (修理後)
左。八六 同 (修理後と修理前)

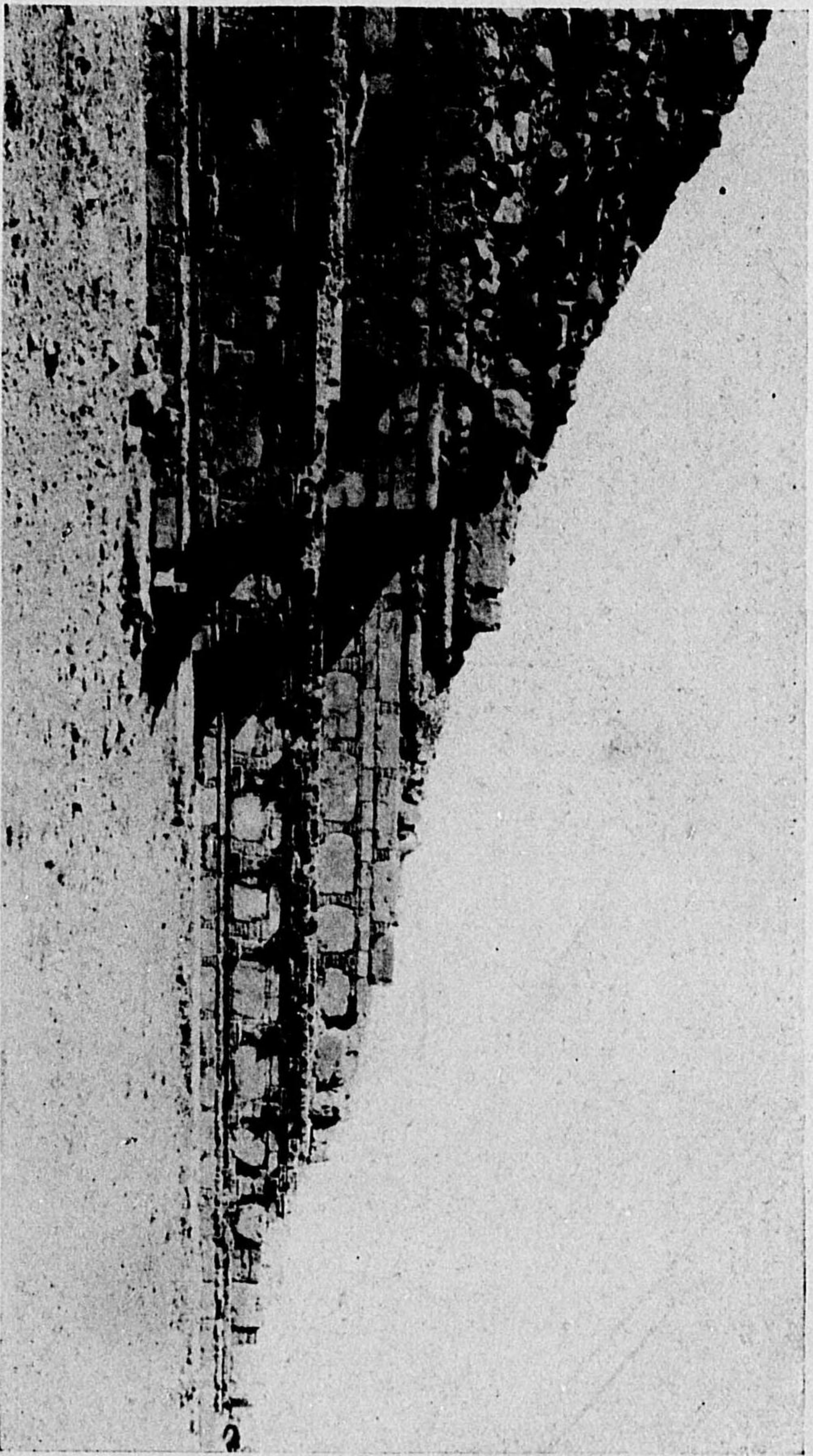
(右物指は曲尺の二尺・兩國共昭和十二年一月二十八日)
マニキヤラ塔基礎を裝飾してゐる片蓋柱で、随分ひどくなつてゐるが、面白いことには、薬師寺金堂須彌壇の東石の様に、基礎を構成せる石から刻みだしてある。この復原はどうも大部分が推定ではないかと思ふ。併し其に「明治二十四年復原」(RESTORED IN 1891)と三行にかきつけてあるのは大によろしい。



八七 クナーラ (Kunala) 塔全景 其一 (昭和十一年一月三十日)
 阿育王の皇子拘拏浪 (クナーラ) の塔と傳ふるもので、シルカツブ (Sirap) 遺跡の東方高地にあり、僧坊と並んで北面して建て
 る。此圖は次頁の圖と共に、僧坊廢墟の壁上から寫したもので、少しく位置を變へたので (次頁へ)

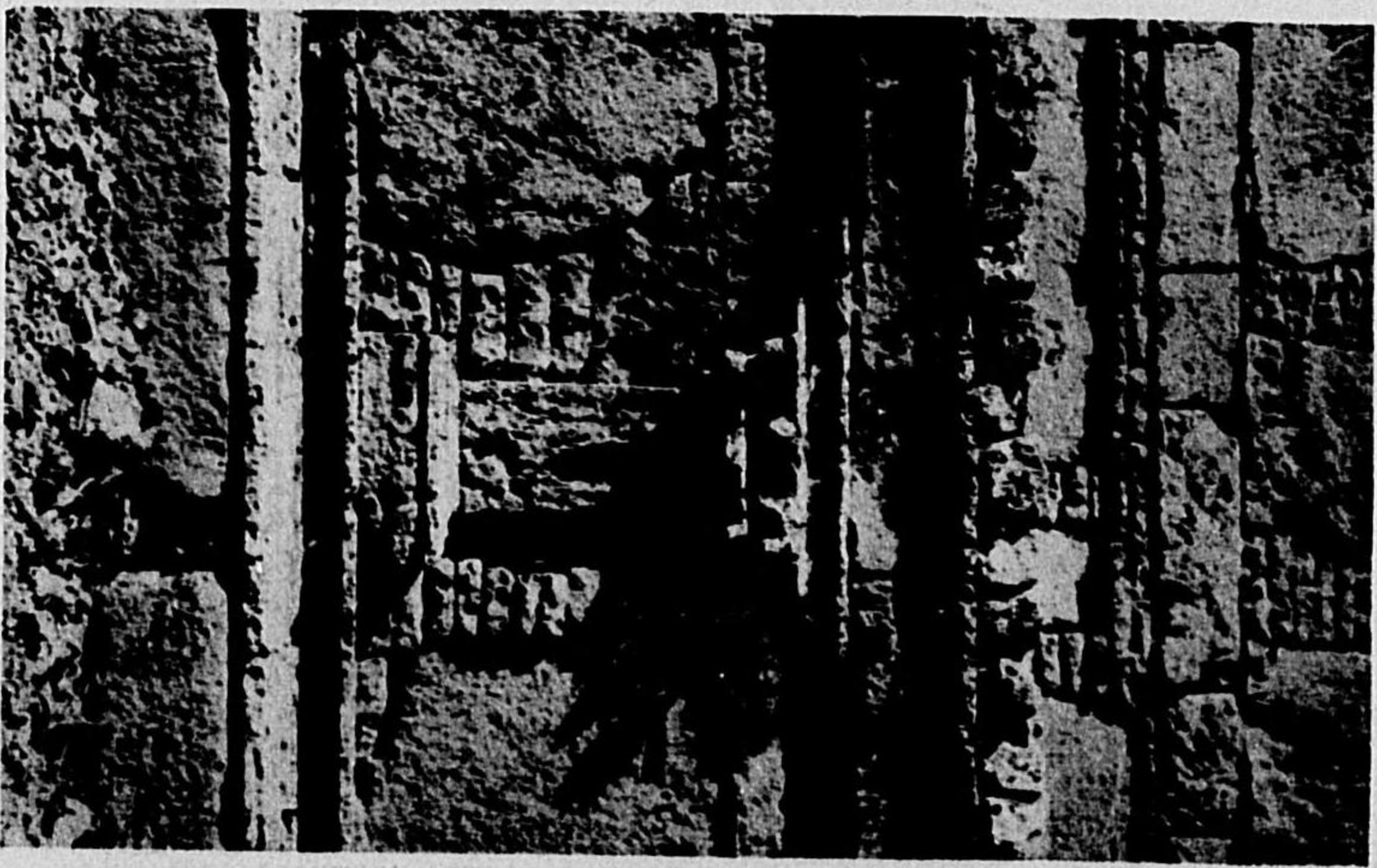


八八 クナーラ塔全景 其二 (昭和十一年一月三十日)
 (前頁より) 後面と正面昇段の位置が明瞭な筈である。兩國共大塔内に更に小塔があること、前圖及び此圖の如くであるが、これは
 第九一圖に大きくだしておいた。クナーラは拘那羅・鳩那羅等ともかく。



八九 クナーラ塔基壇一部（昭和十一年一月三十日）

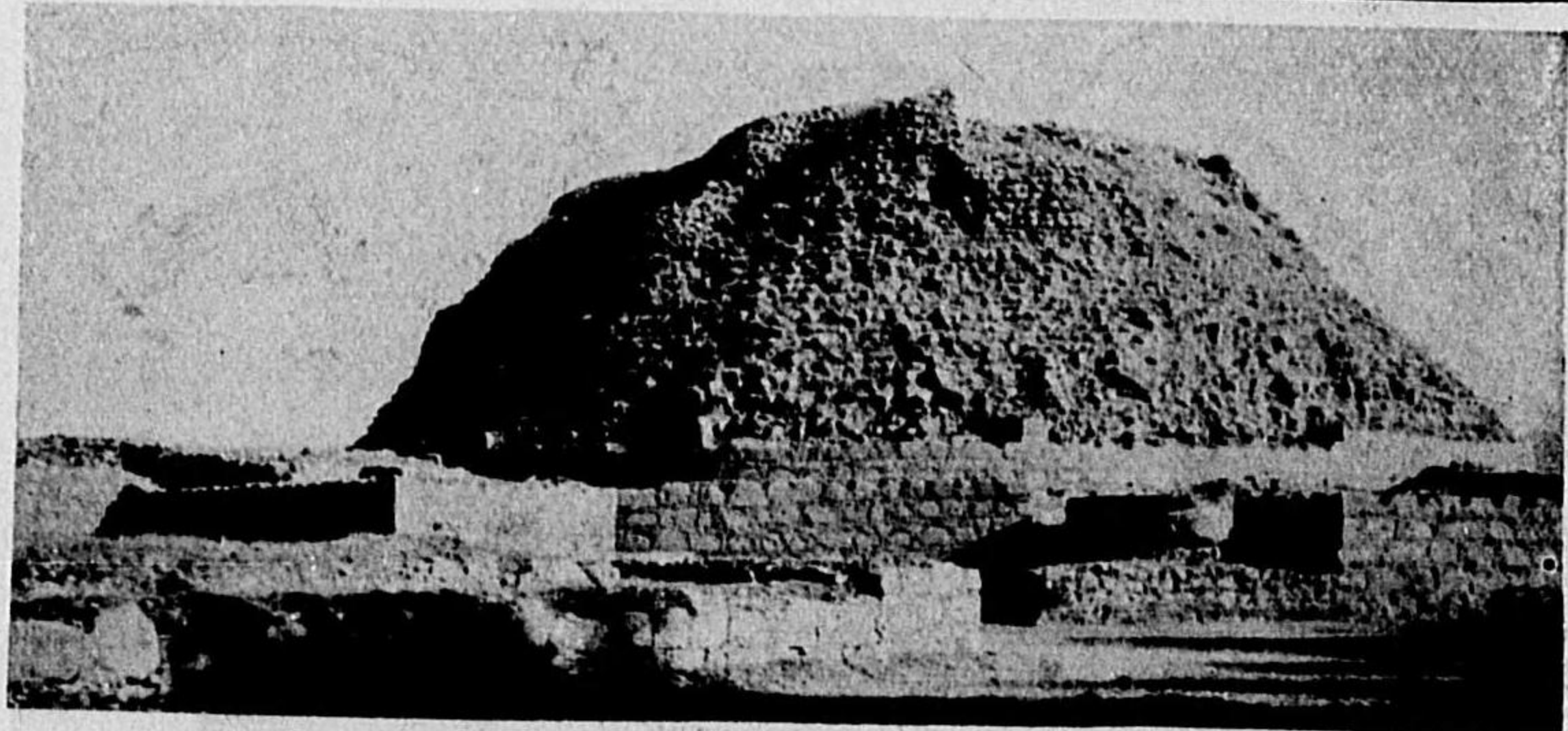
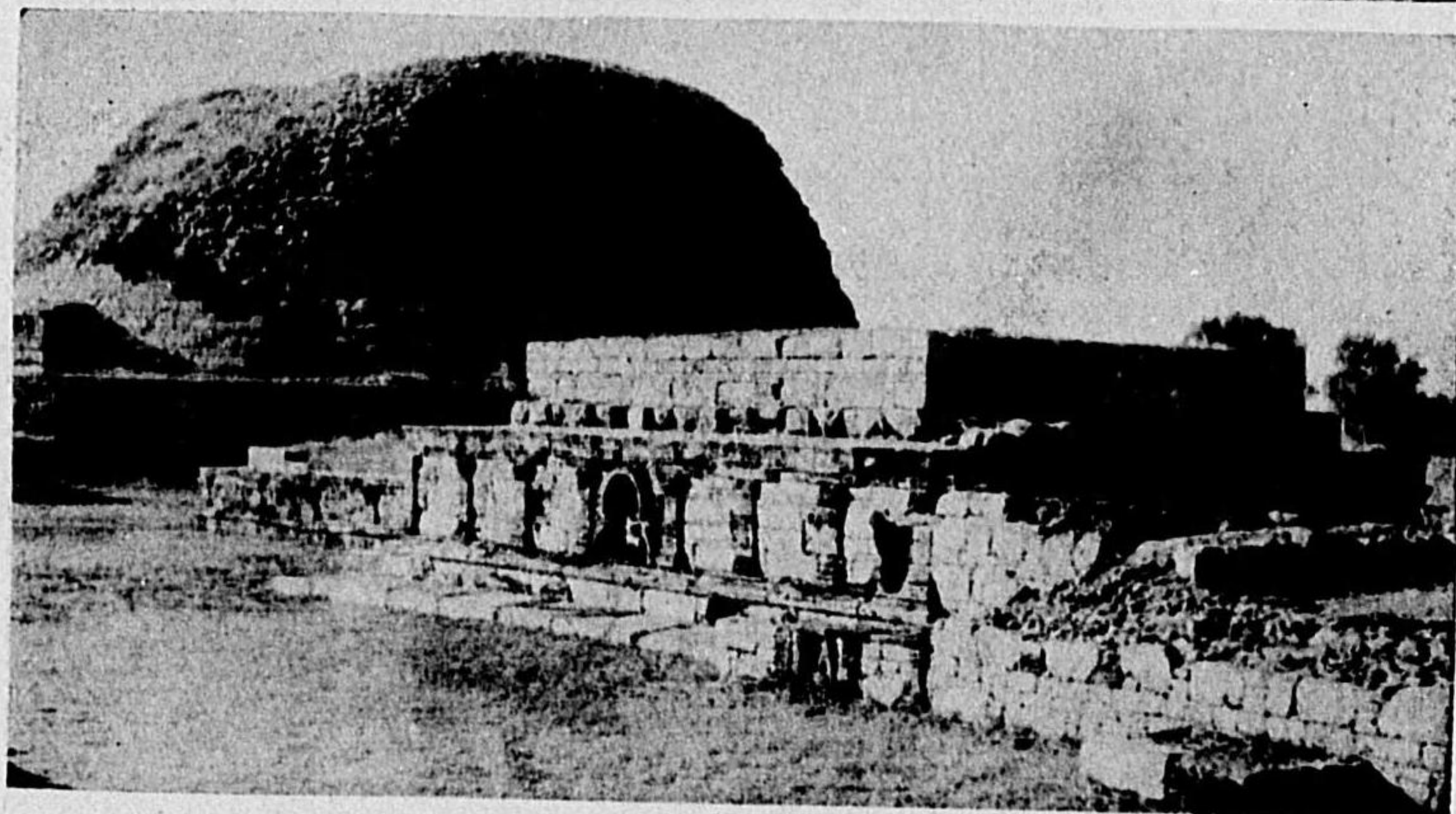
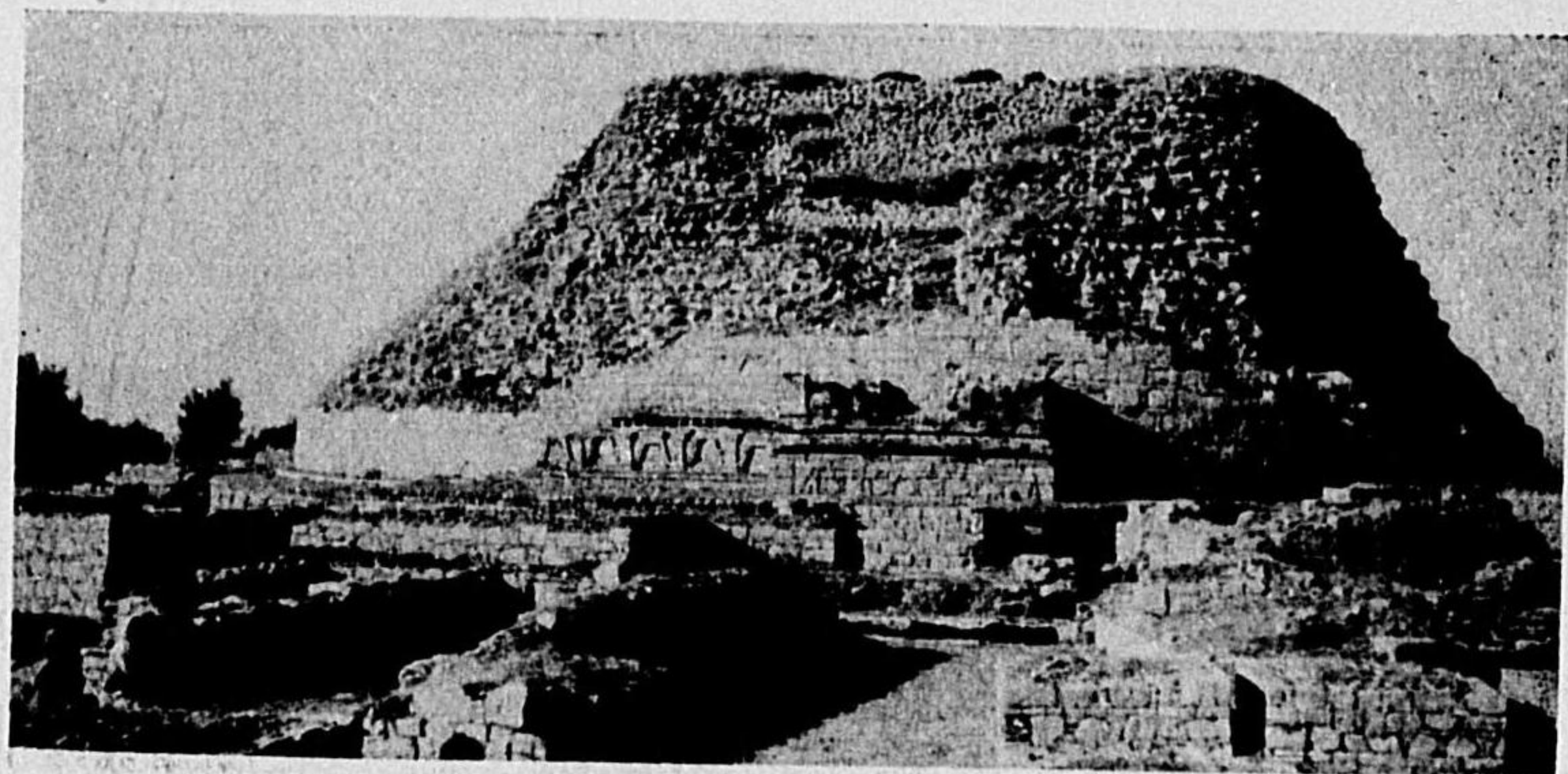
クナーラ塔東面北端を東方からみたところで、方形基及の壁の積み方を見せたもので、大図に明らかである様に、大石を積み其間を平たい小石で充たしたものである。



右。九〇 クナーラ塔基壇片蓋柱
左。九一 クナーラ塔内小塔婆

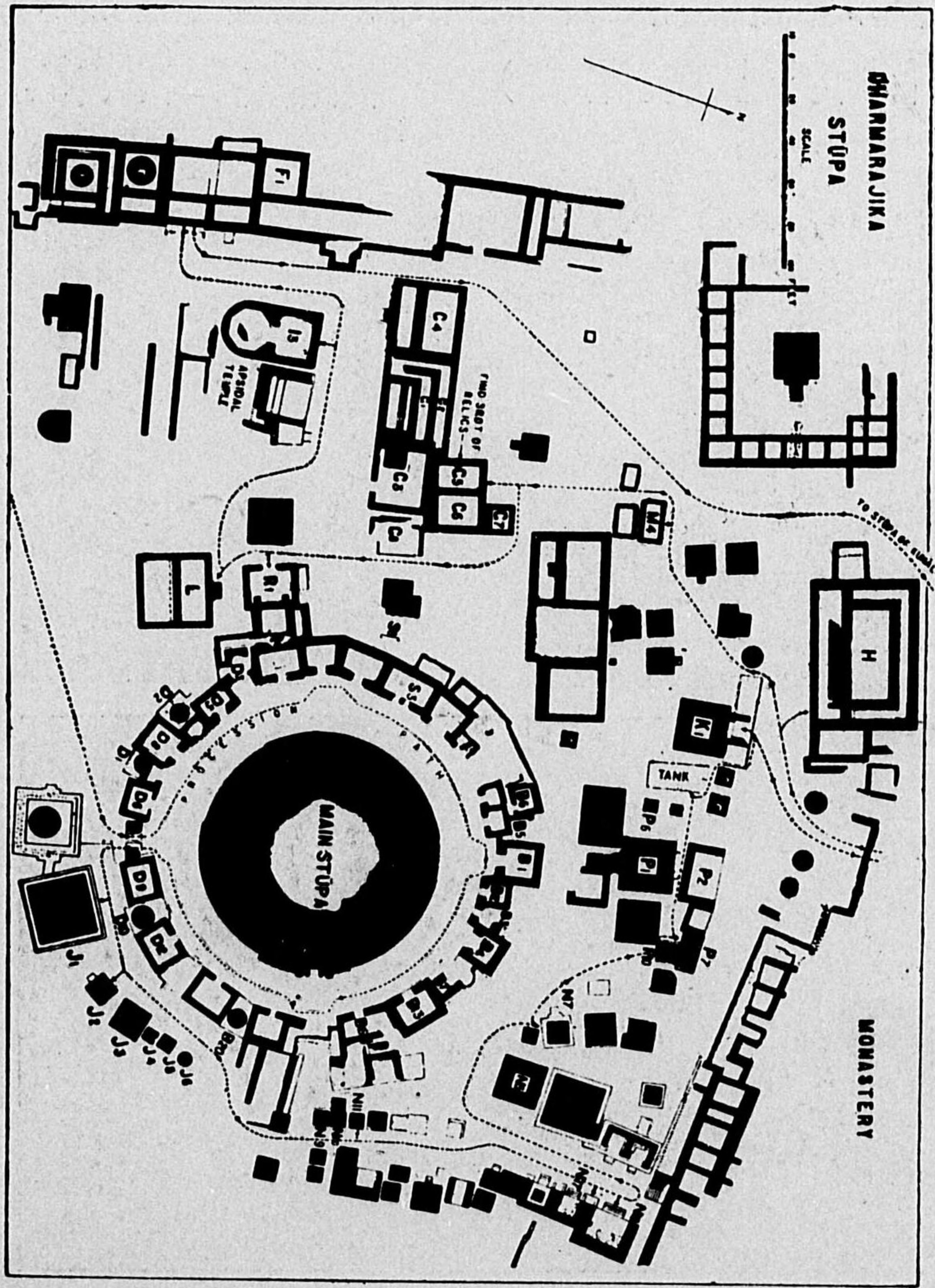
右圖は前頁基壇最左端に見えてゐる柱を大きくしたもので、前圖でも列つてゐるであらうが、尙ほ充分に石の積み方等を見せるつもりで、掲げたのである。大石の間隙を小さい平たい石で埋めておることがよく現はれてゐる。
左圖は塔内より現はれた小塔で、方形の基壇上に圓形の基壇あり、更に其上に依鈴を有するもので、總高約十尺、後約二世祖と推定されてゐる。

（右圖柱頭上の物指は曲尺の約一尺二呎）、
（左圖共昭和十一年二月三十日）



上。九三　　ダ爾マラージカ塔婆を東南方よりみる
 中。九四　　同　　　　　　東北方よりみる
 下。九五　　同　　　　　　西南方よりみる
 (三圖共大正十一年十二月十八日)

九二　ダルマラージカ塔婆及一階平面圖
 此圖はジョン・ニシヤル氏著『タキシラ案内』(A Guide to Taxila)の挿圖から
 複寫したもので、塔は次の三圖でみる通り、基壇に近いところは、それでも修理を
 したのであらうが、相當に残つてゐるけれども、上の方はまるで形ができてゐない。





九六 ビバラ僧坊 (Pippala Monastery) 室内小塔婆基壇一部
 ビバラ僧坊の小室内にあるので、場所が狭まくて、どうしてもまともにとれなかった。此僧坊發掘の記事・平面圖・蓮花文の正面
 向等は、印度考古局報告書(一九二三—二四年)第六一—六三頁及圖版第二三・二四にでてゐる。尙ほイオニア式片蓋柱に注意せよ。



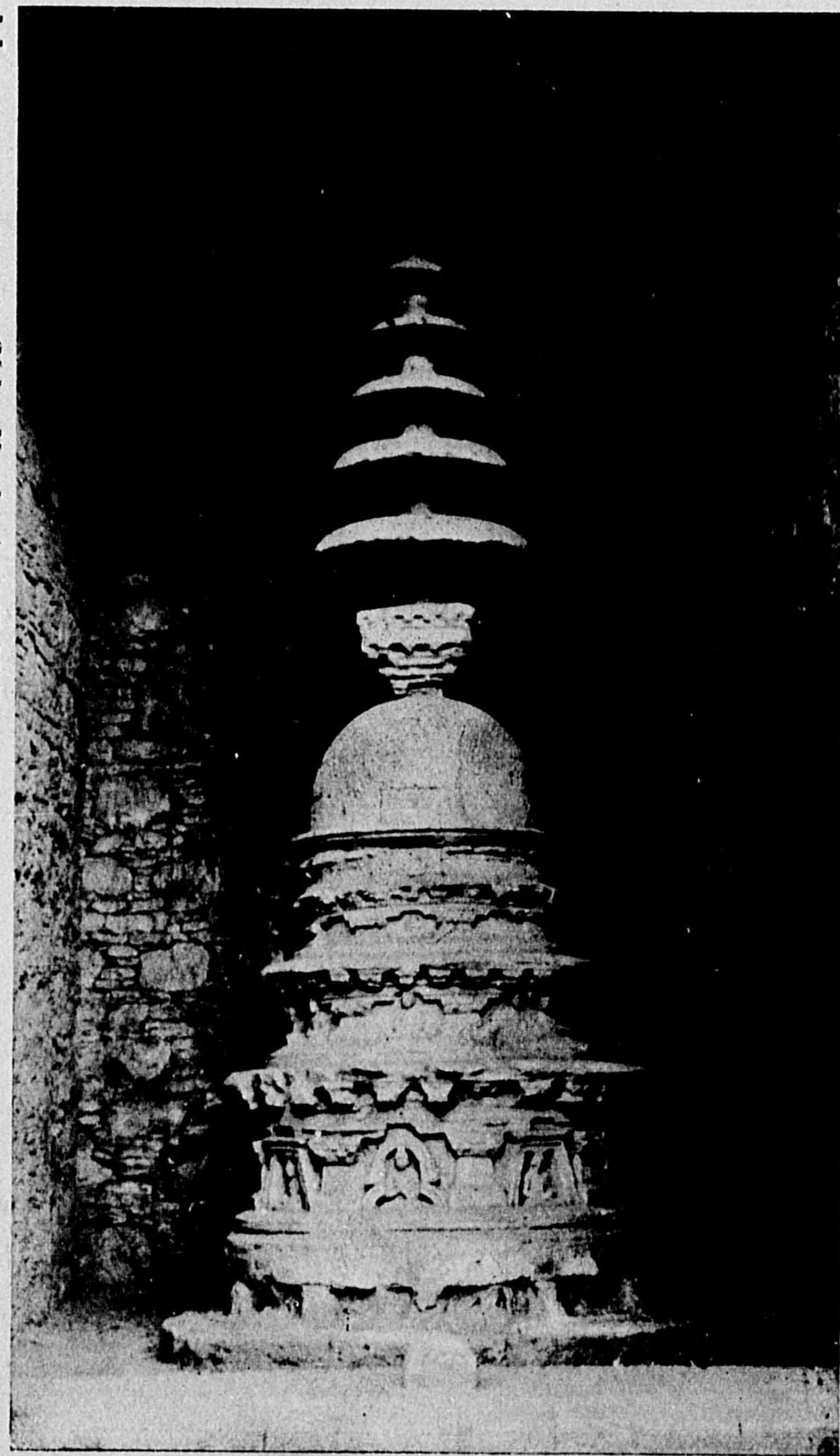
右。九七 ビバラ僧坊室内小塔婆半肉像 其一
 左。九八 同 其二

(物指は曲尺の約五寸(六吋)、昭和十二年一月二十九日)
 此所へ行つたのは日のくれ方で、番人も既に歸つてしまつたあとだから、幸
 ふじてこの佛像だけ寫した。實物は全く見事な作で塑像である。



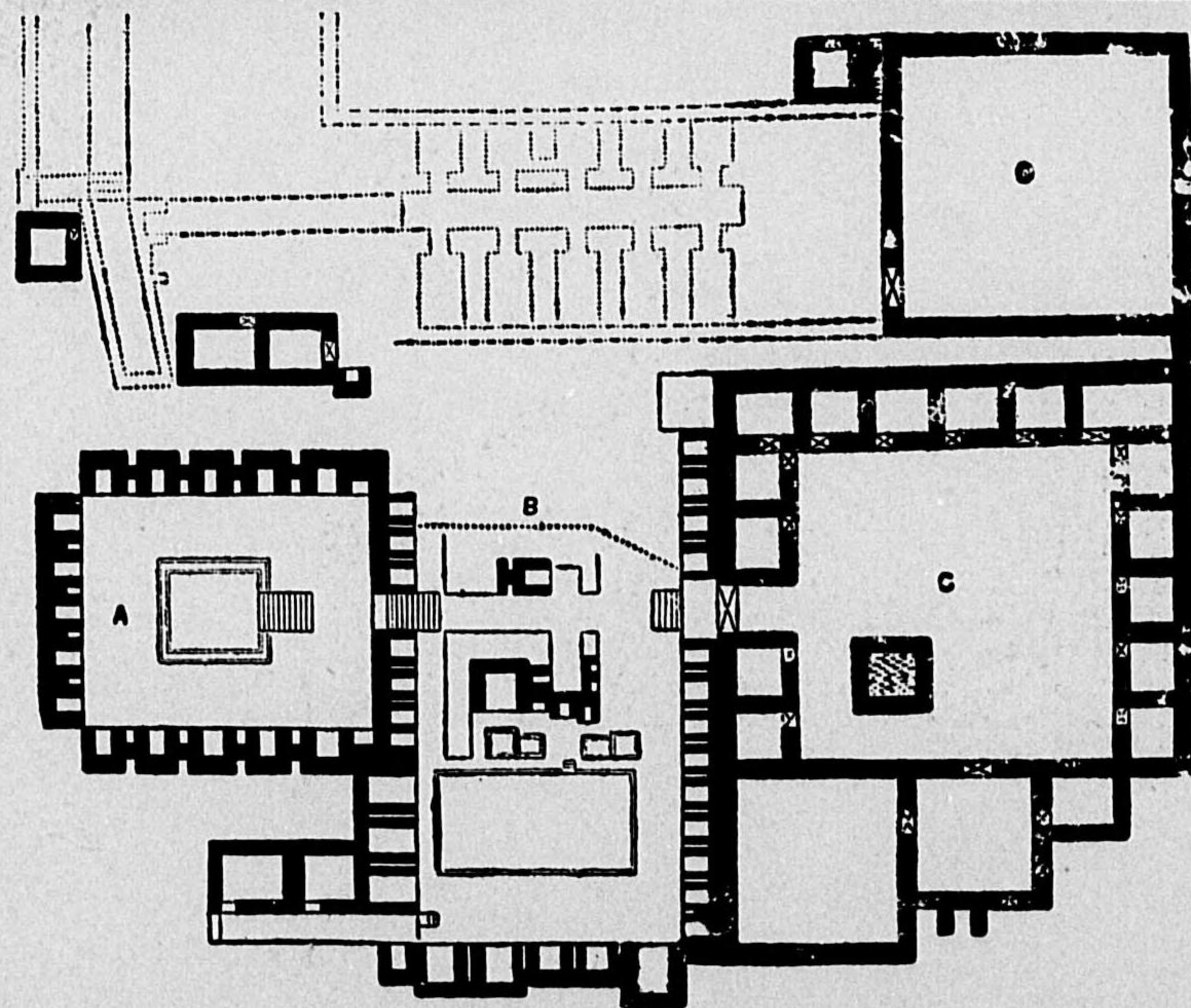
100 モーラー・モラーツ僧坊室内小塔婆基礎詳細

(昭和十一年一月二十九日)

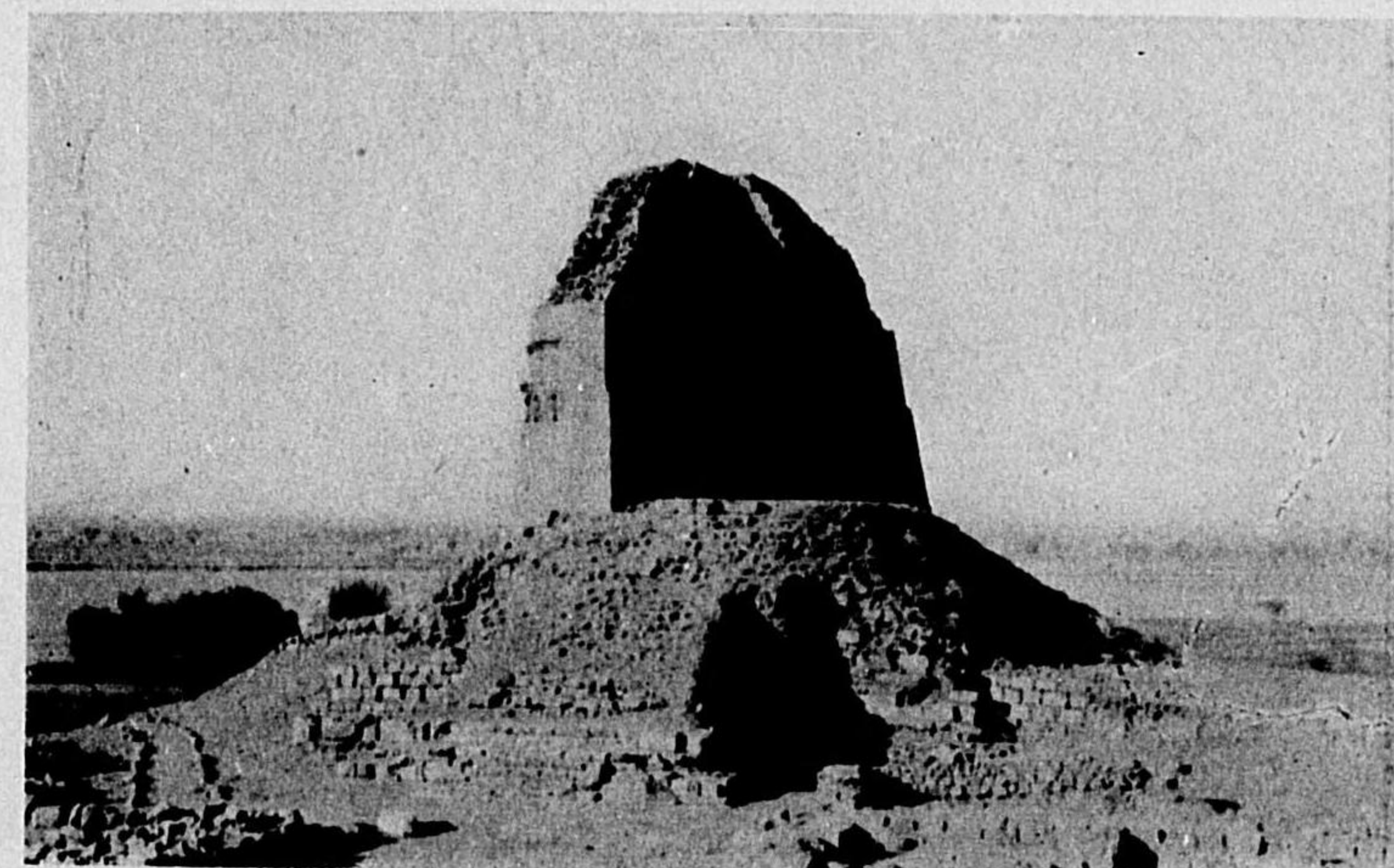
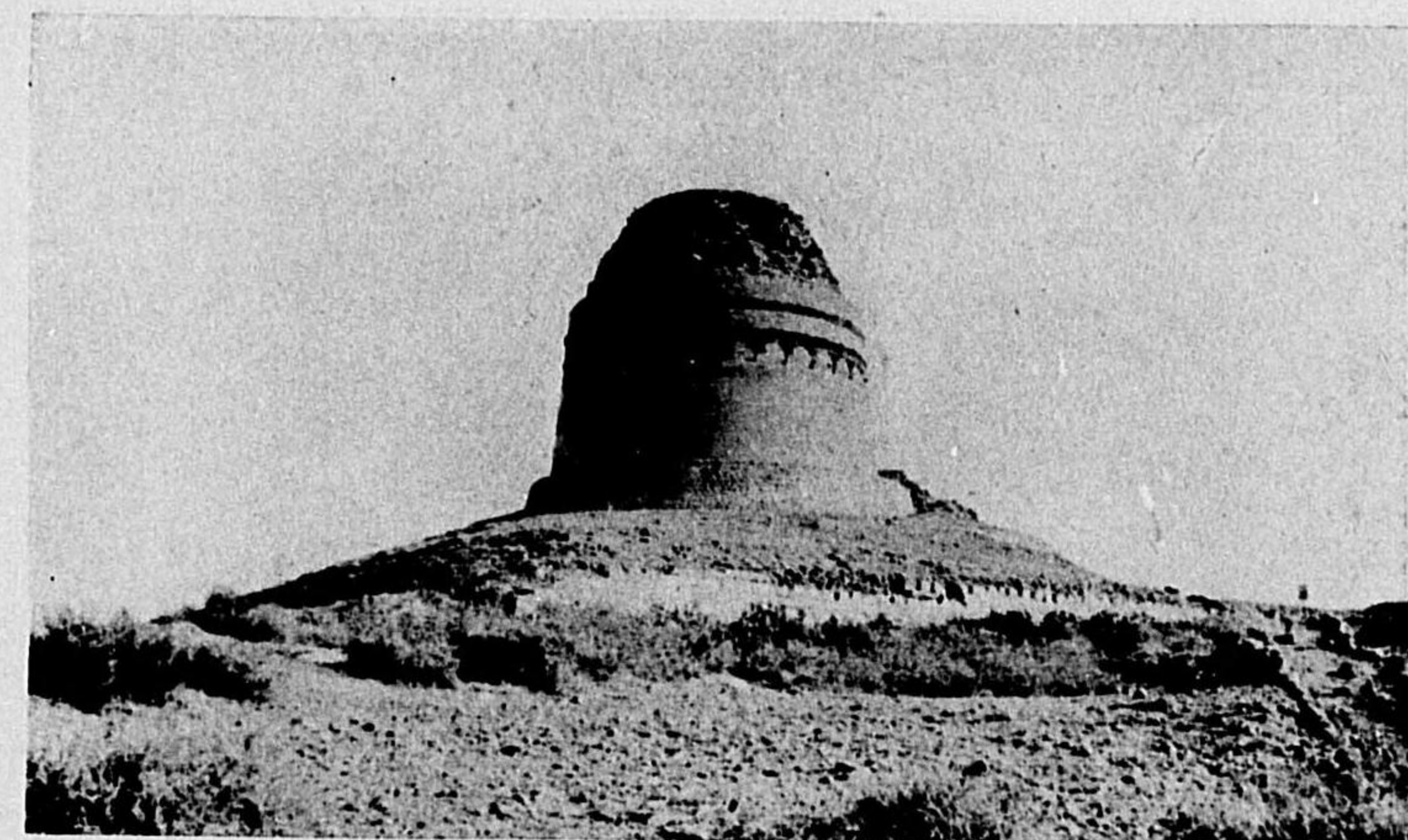


九九 モーラー・モラーツ (Moha Moradu) 僧坊室内小塔婆
五重の基壇の上に伏鉢のある完全な小塔婆。各基壇側面のコリント式片蓋柱及び第二重の小籠内の佛像を大きく見せたのである。次頁の圖は小籠及び其内の佛像を大きく見せたのである。

(昭和十一年一月二十九日)
第九十三・九十四圖と比

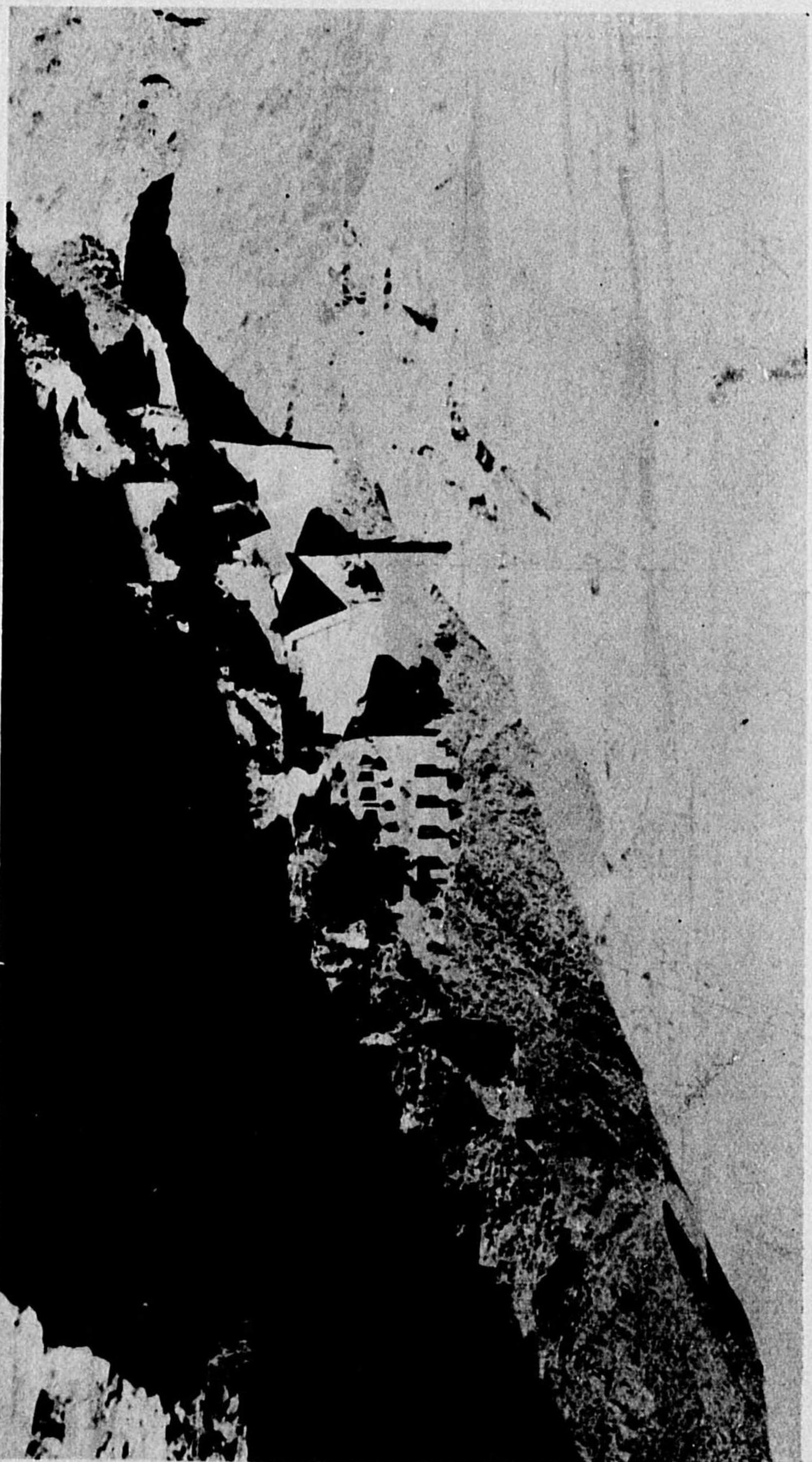


上。—〇三 タクチ・バハイ廢寺のある山の全景
 下。—〇四 同 平面圖
 上圖は昭和十一年一月三十一日の寫眞，下圖はファーガソンの著書より寫したもの。

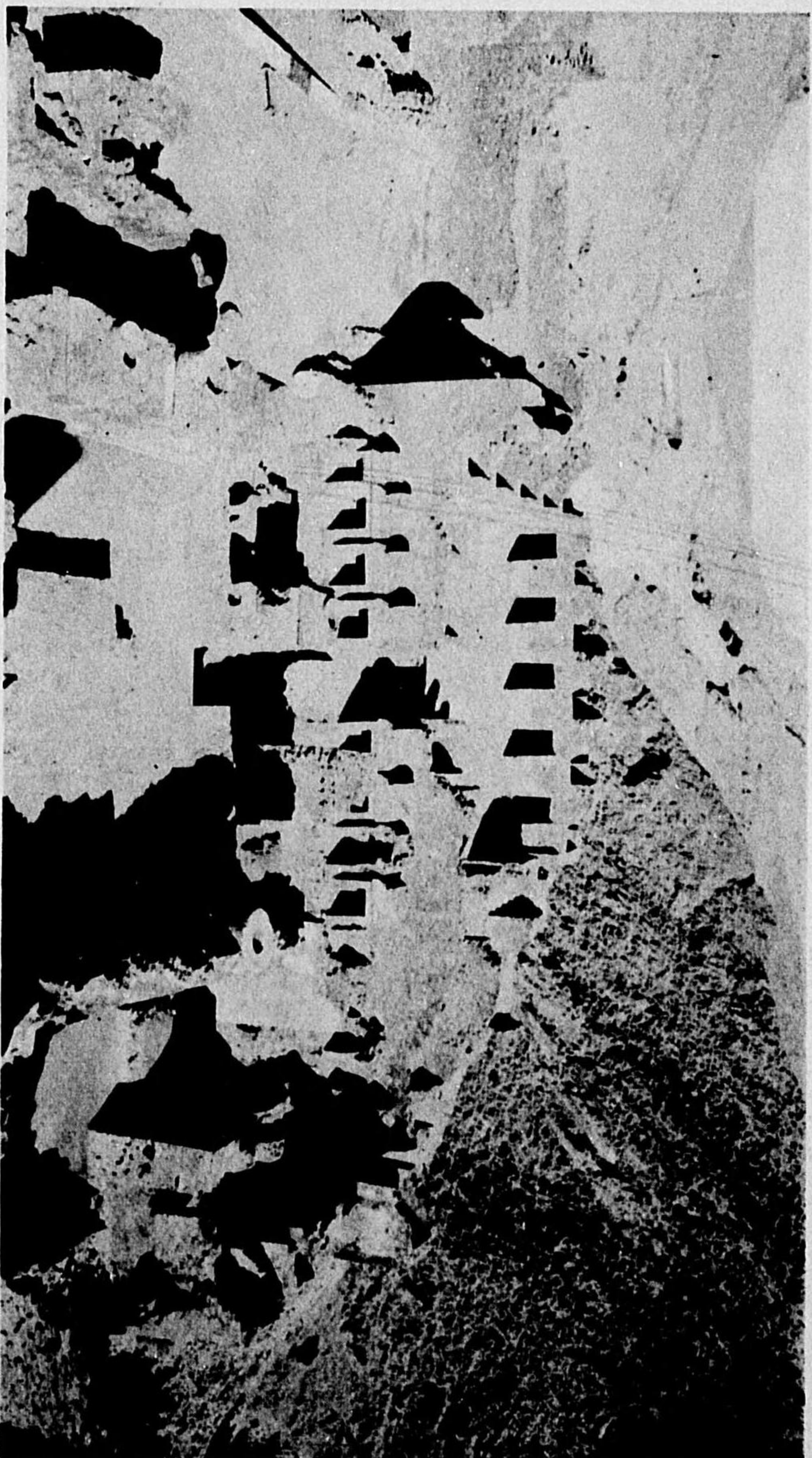


上。—〇一 バーラー塔 (Bhallar Stupa) 其一
 下。—〇二 同 其二
 (上下圖共昭和十一年一月三十日)

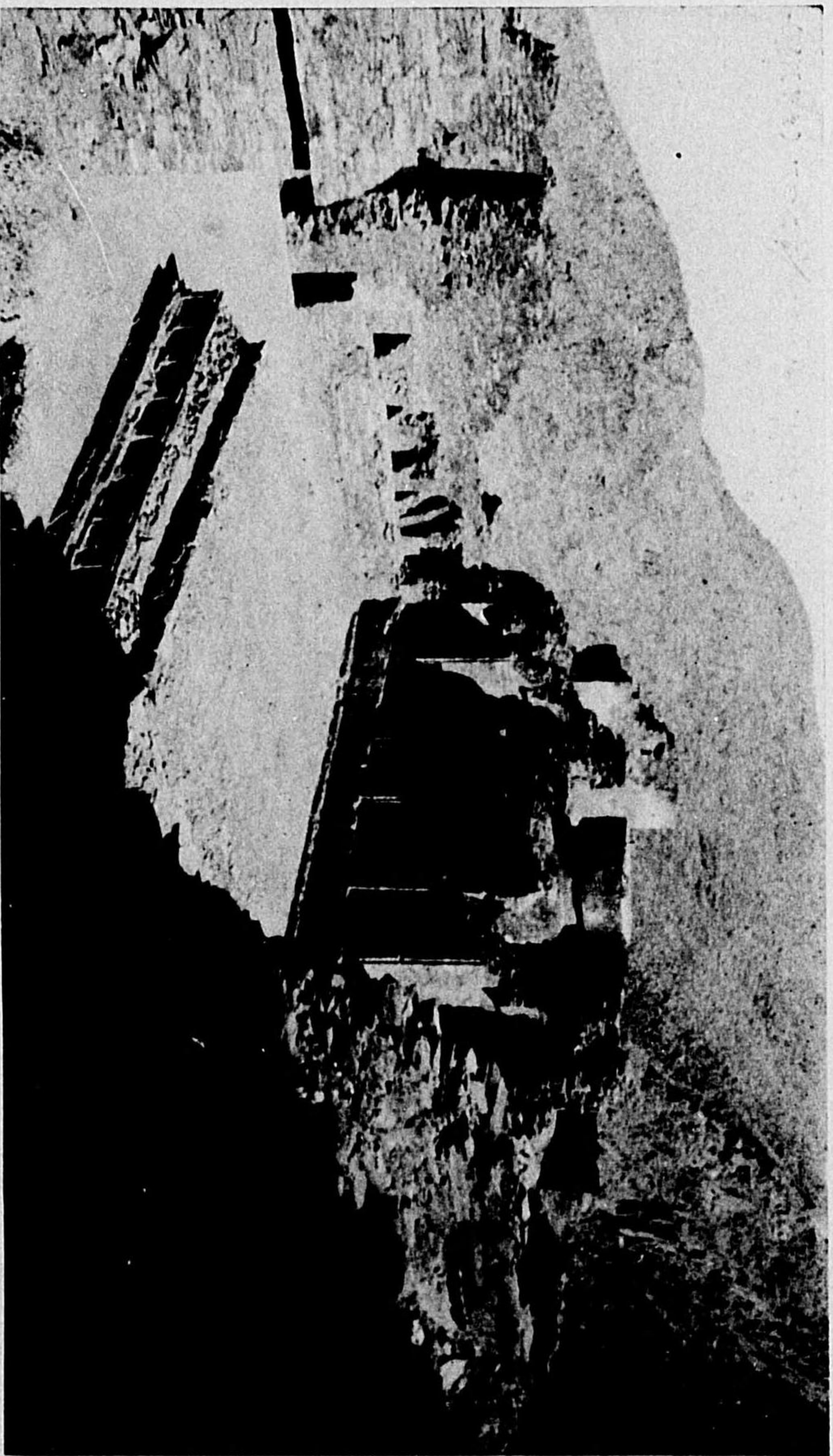
タキシラ驛を距る約5哩といふ。ハベリアン鐵道 (T.xila-Havelian) 沿線にある。タキシラよりトンガで往復するのが最も便利の様である。クナーラ塔の様に方形の基壇上に建つ。圓形の高き基壇の上部に近くコリント式の片蓋柱を廻す。塔婆上部は原型を留めぬ迄になつてゐるが、反對側に於いて伏鉢上部の遺物安置室をみる事ができる。



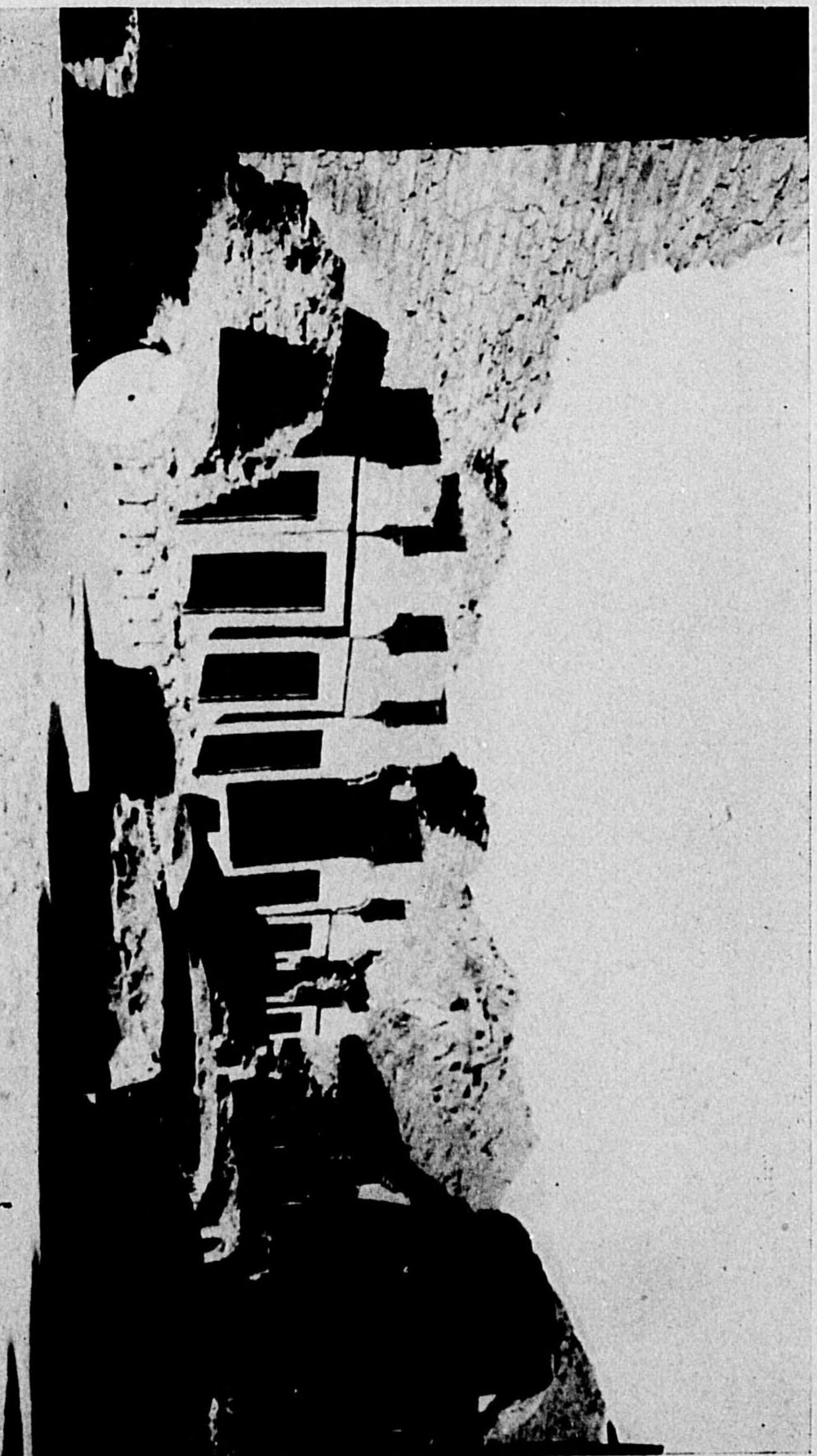
—〇五— タクチ・バハイ陵寺全景 其一 (昭和十一年一月三十一日)
 前頁上圖に見る様な禿山を登り、向ふ側へ行くと、右手此圖の様な陵墟が見える。先年はもつと行きにくい所だらうと思ひ込み、やめてしまったが、行って見れば何でもない。作し一人は勿論、従僕だけ連れ (次頁へ)



—〇六— タクチ・バハイ陵寺全景 其二 (昭和十一年一月三十一日)
 (前頁より) たのでは甚だ心細い。私は驛で人夫を雇ひ案内させたので、容易に行くことができた。實に堂堂たる陵寺である。谷一つ隔てた山腹にも可なり殊瓦壁が露出してゐるが、遂に此に及ばぬ様である。



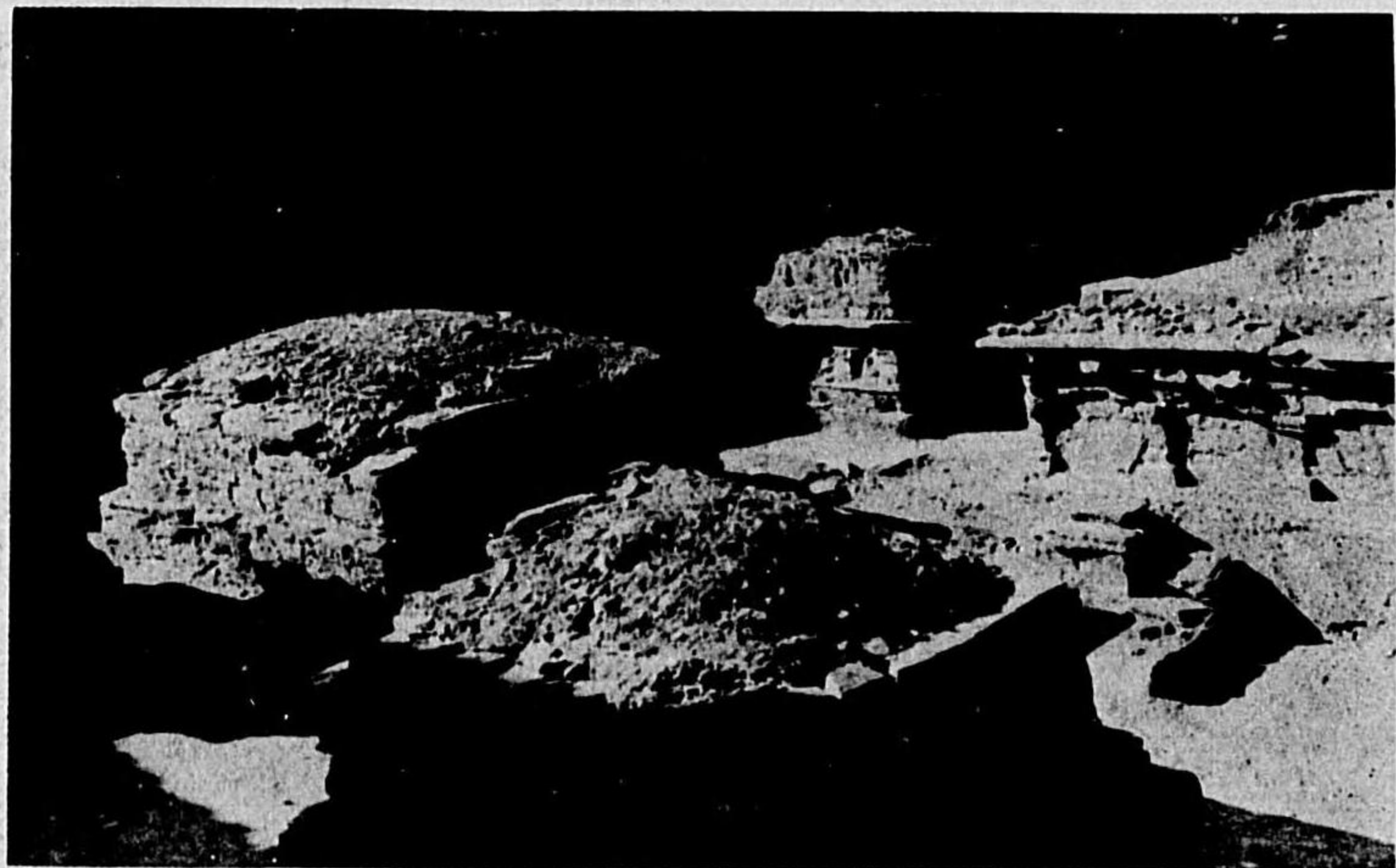
一〇七 タクチ・バンイ 隆寺塔婆基壇 (昭和十一年一月三十一日)
 此隆寺に於ける主塔婆の基壇で、即ち塔婆區の中庭を西南隅の高地から見下ろしたものである。基壇はかく方形だが、當初は此上に、例へばパーラー塔 (第一〇一、一〇二■参照) の様な、圓形の基礎を有する伏鉢型の塔があり、平頭と相輪とを具備してゐたものと想像し得るのである。



一〇八 タクチ・バンイ 隆寺中庭小塔婆群 (昭和十一年一月三十一日)
 左方の高い壁體は僧坊の夫れで、左端は第百〇四■に於ける「C」の左上角に當る。前に並べる特殊の切妻を有せる妻入の小籠は、佛像を安置した厨子に當るもの。奉獻小塔婆は寫眞の右下に多く並んでゐるが、丁度平面圖に「B」字を記入してある邊に當つてゐるのである。



一〇九 タクチ・バイハ 廢寺中庭小塔婆群 其一 (昭和十一年一月三十一日)
 第百〇四圖は未だ充分發掘ができておない時の圖だから、何も平面圖にかいてないが、あの圖の「B」とかいであるところの下の
 方の中庭の有様が即此で、大小幾多の小塔婆が、所狭き途に並んでゐる。「A」字のかいである中庭は、中央に一つ大き(次頁へ)



上。一一〇 タクチ・バイハ 廢寺中庭小塔婆群 其二
 下。一一一 同 其三

(上下圖共昭和十一年一月三十一日)

(前頁より) なのがあるだけだし、「C」の一廊は僧坊で、例の如く周圍に室
 があるだけで、ここには塔婆はない。其最も多いのは、この中庭で第百〇八圖
 右方の黒い高い籠の裏側、即ち中庭の東のところである。此等の塔婆は何れも
 基壇だけが、殆んど其何れにも、片蓋柱が側面に等間隔に作られてゐるのが見
 えるだらう。これが毎毎記した通りこの邊の塔の特徴である。





上。一一三 タクチ・バハイ塔婆基壇側面裝飾 其二

下。一一四 同 其三

(上下圖共昭和十一年一月三十一日)

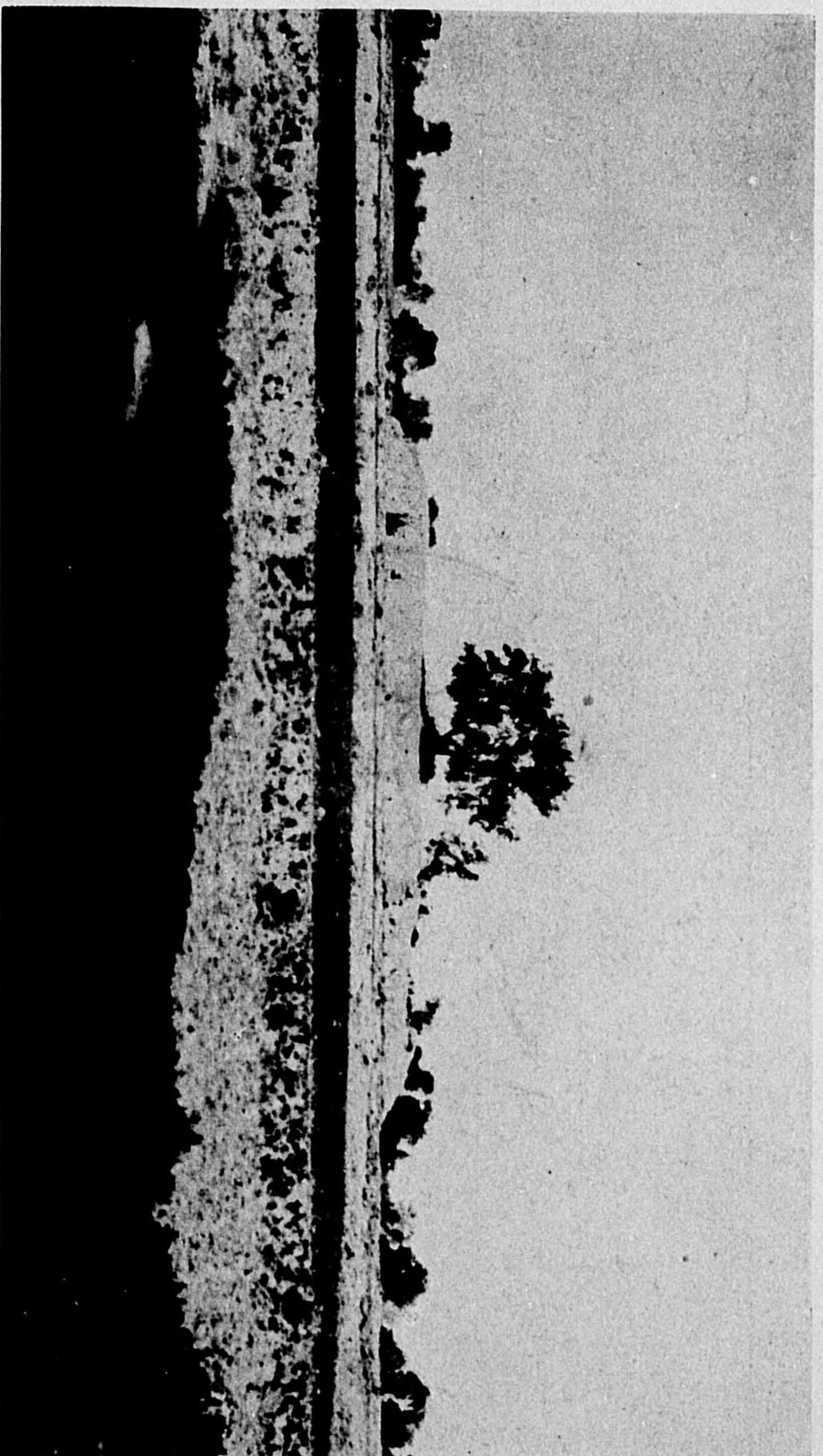
上圖は前頁のとは異なる塔婆基壇側面コリント式片蓋柱間の塑像の一で、王及び妃の像と傳ふるもの。下は其向って左、即ち右隣の座像で、上圖の左につづいてゐるものである。片蓋柱も塑像も、共によく健駄羅式を現はしてゐる。さうして何れも甚だ美術的で、頗る優麗なる製作である。



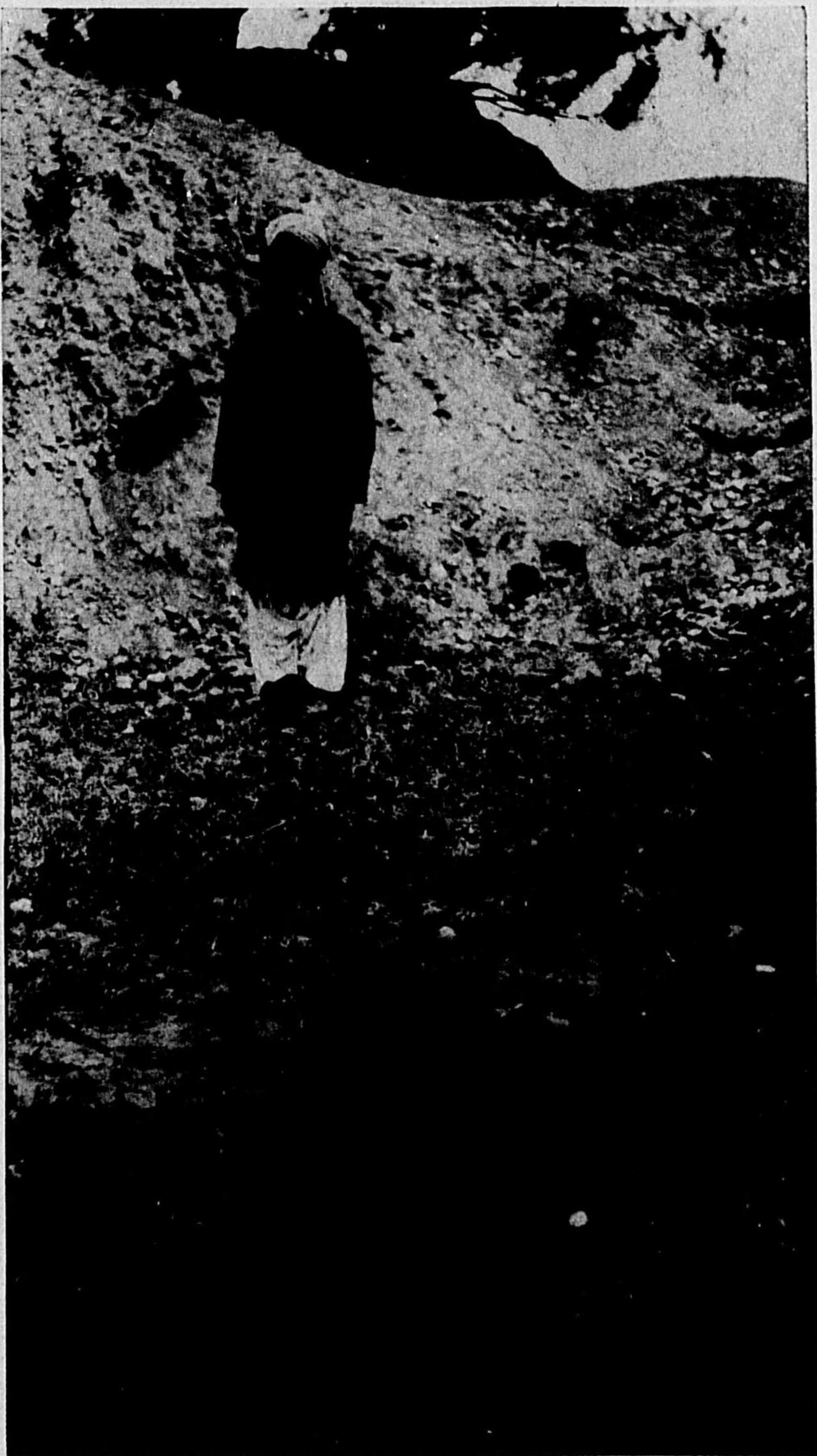
一一二 タクチ・バハイ塔婆基壇側面裝飾 其一
 前頁及前前頁の圖にみる如く、奉獻小塔婆は數多くあるが、それ等のうち、殊に基壇の側面に美しい厚肉塑像のある分は、保護のため假屋根をつくり、猥りに觀覽人が入れぬやうにしてゐるのは結構だが、暗くて寫眞がとれないので、日光を反射させたら餘りに強すぎてこの様になつてしまつた。梯形範圍内の立像が面白い。
 (昭和十一年一月三十一日)



一一五 陵迦 賦色迦寺塔址 其一 (昭和十一年二月二日)
 大正十一年二月に行ったときは、折あしへ曇ってしまひ、到底全景をとる見込がなかつたので、次次頁に示した様に、漸くあの有名な舍利容器を發掘したといふ場所だけ寫しておいたが、昭和十一年二月再びここを (次頁へ)

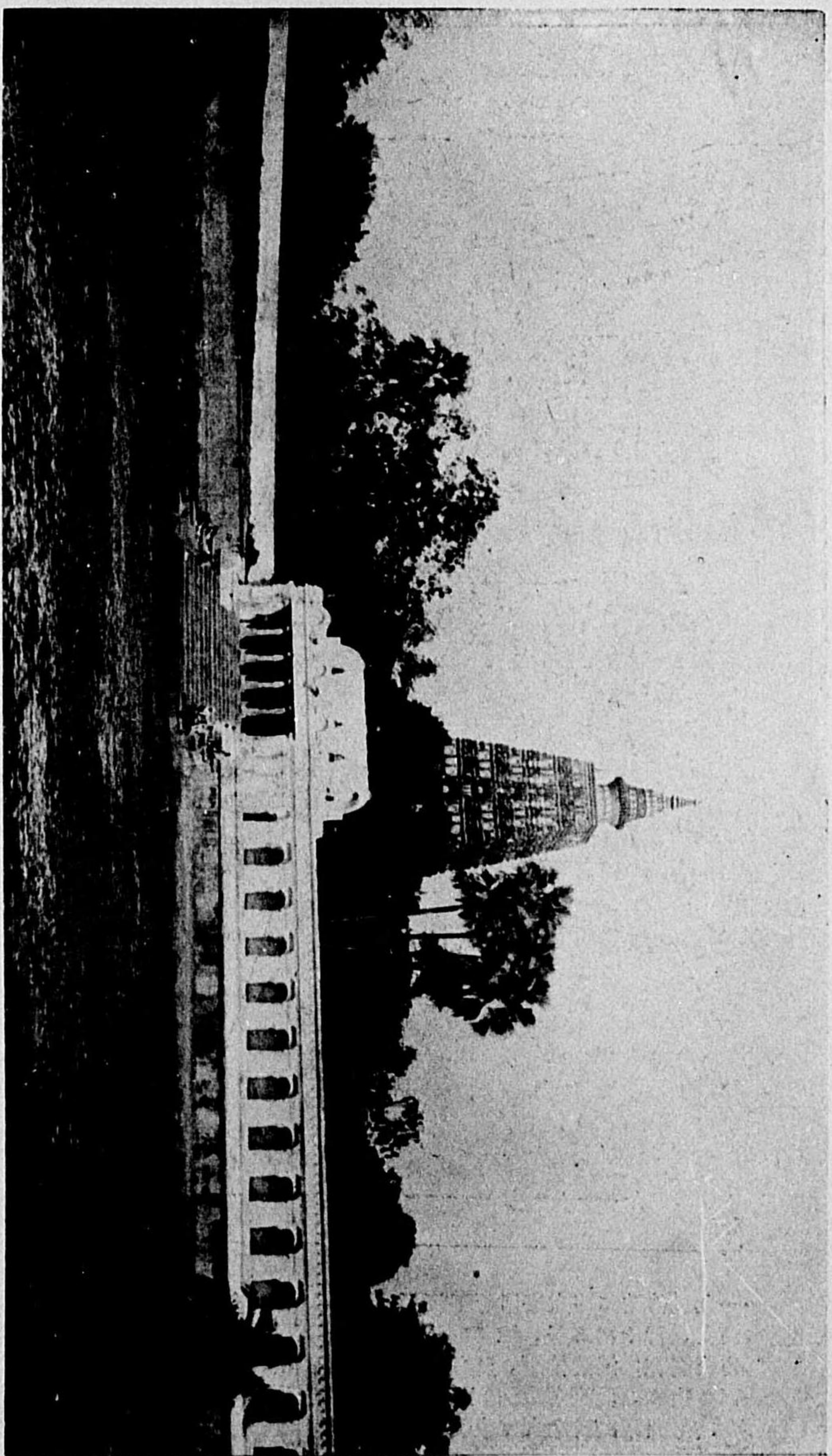


一一六 陵迦 賦色迦寺塔址 其二 (昭和十一年二月二日)
 (前頁より) 訪ねた時は、空は晴から遇まで暗れ互り、透き通る様な上天気であつたから、塔址を充分に寫すことができた。前頁圖は僧坊址からとつたもので、此頁のは其反對側からの寫眞である。



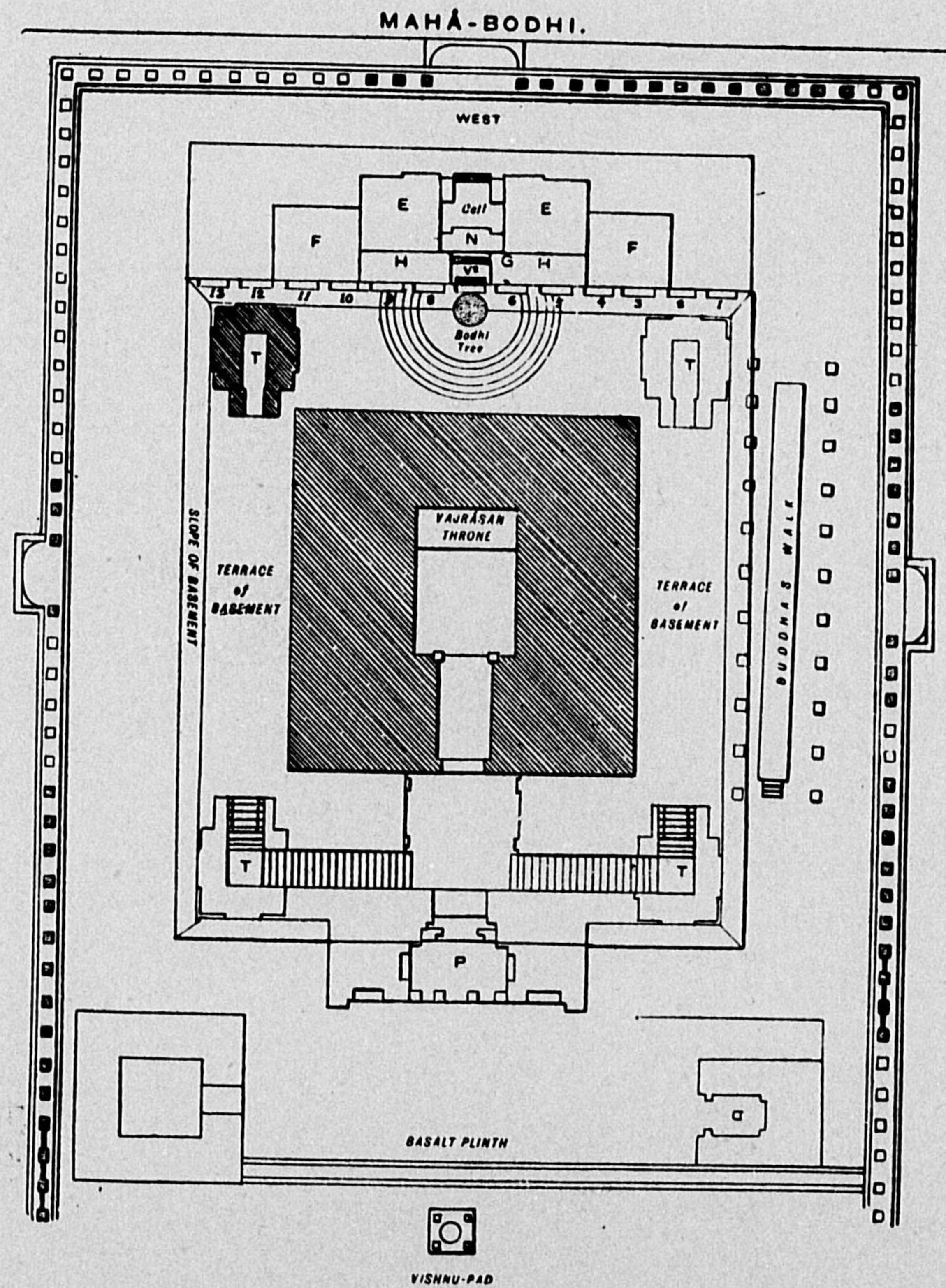
一一七 廢迦膩色迦寺塔址 其三

(大正十一年十二月二十二日
右下方に中央が黒く不規則に窪くなってゐるのは、此寫眞をとった少し前に、溜つてゐた水が引いたばかりで、明らかに判るが、舍利容器は、此ところ地下約五尺掘り下げて、見出したものださうな。人物は私が先年ここへ行った時、印度考古局西北支部次長をつとめてゐた故モハマッド・ワシ・ウツ・ヂン氏。



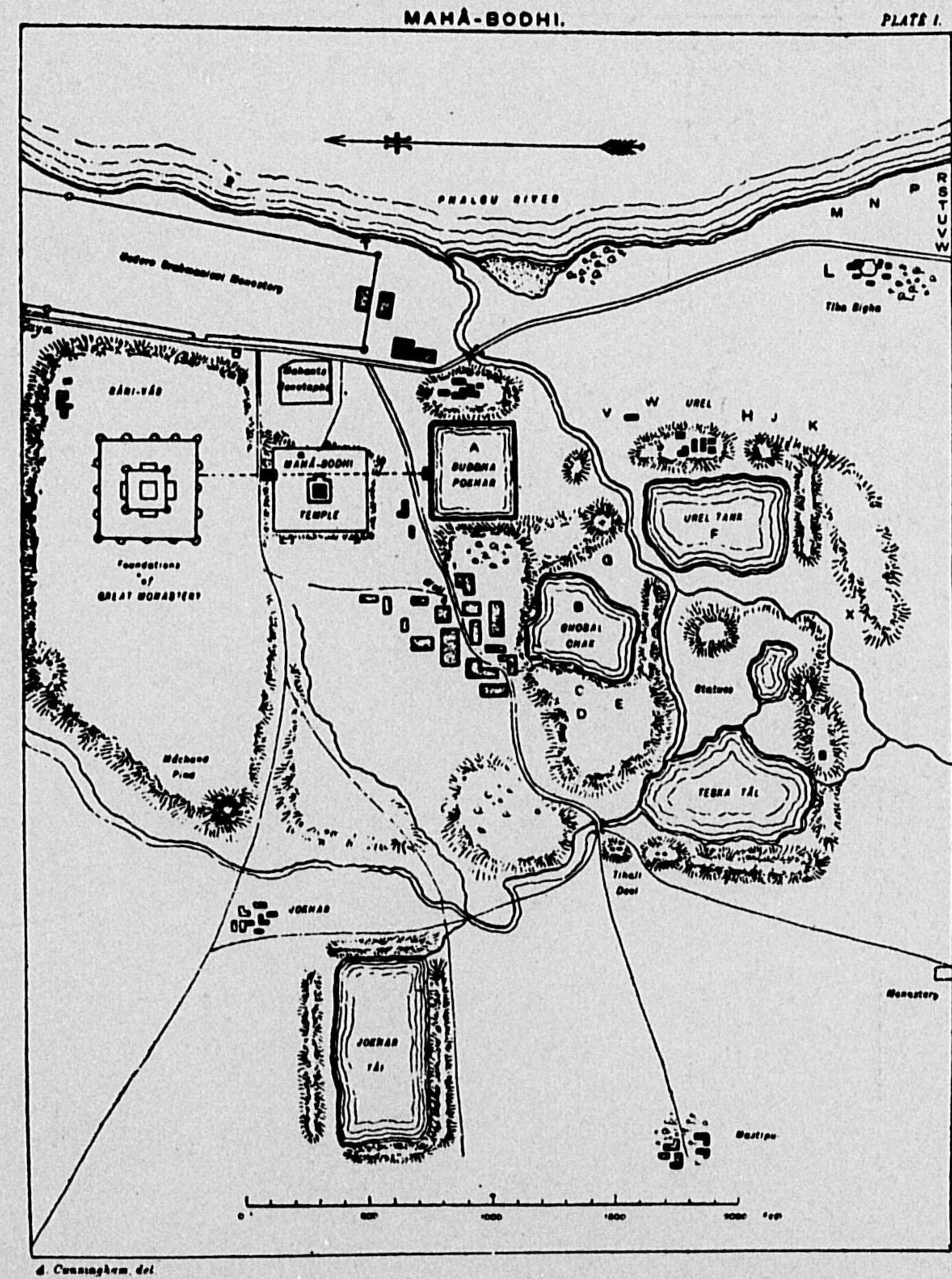
一一八 佛陀伽耶大塔の遠望 (大正十二年一月八日)

大塔の南方にある沐浴池，「大唐西域記」に「南門ハ大花池ニ接シ」とある，其大花池から遠望したところで，正面の石段は Bathing Chat である。大圖と比べてみると，このタツクと塔の關係がよく判るであらう。



一一〇 佛陀伽耶大塔平面圖（“MAHA-BODHI” 附圖複寫）

（前頁より）と【大唐西域記】にある通り、よく現場と一致してゐる。大塔四隅の附層小塔は、修理前には一基も亡かったが、左上即ち西南の斜線の引いてあるT印のは、基礎は明らかに残つてゐたから、これにより四隅に小塔のあった事は確實になつたさうである。



一一九 佛陀伽耶大塔附近平面圖（“MAHA-BODHI” 附圖複寫）

前正覺山西南。行十四五里。至菩提樹。周垣壘甃。崇峻險固。東西長。南北狹。周五百餘步。奇樹名花。連陰接影。細沙異草。彌漫綠被。正門東開。對尼連禪河。南門接大花池。西阨險固。北門通大伽藍。壘垣內地。聖迹相鄰。或窅堵波。或復精舍。普瞻部洲諸國君主大臣豪族。欽承遺教。建以記焉。（次頁〜）

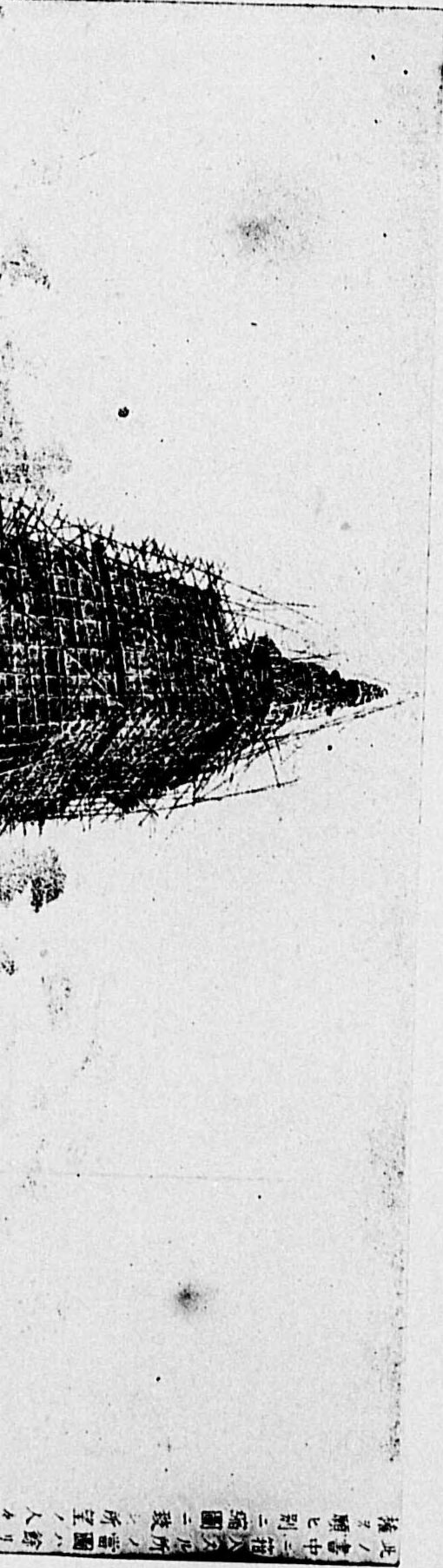


此ノ書中ニ挿入スルモノ皆國ハ餘リ大相ニ付テ寫真
 繪ヲ類ビ別ニ繪圖ニ致ス所望ノ人々ニ附與ス可シ

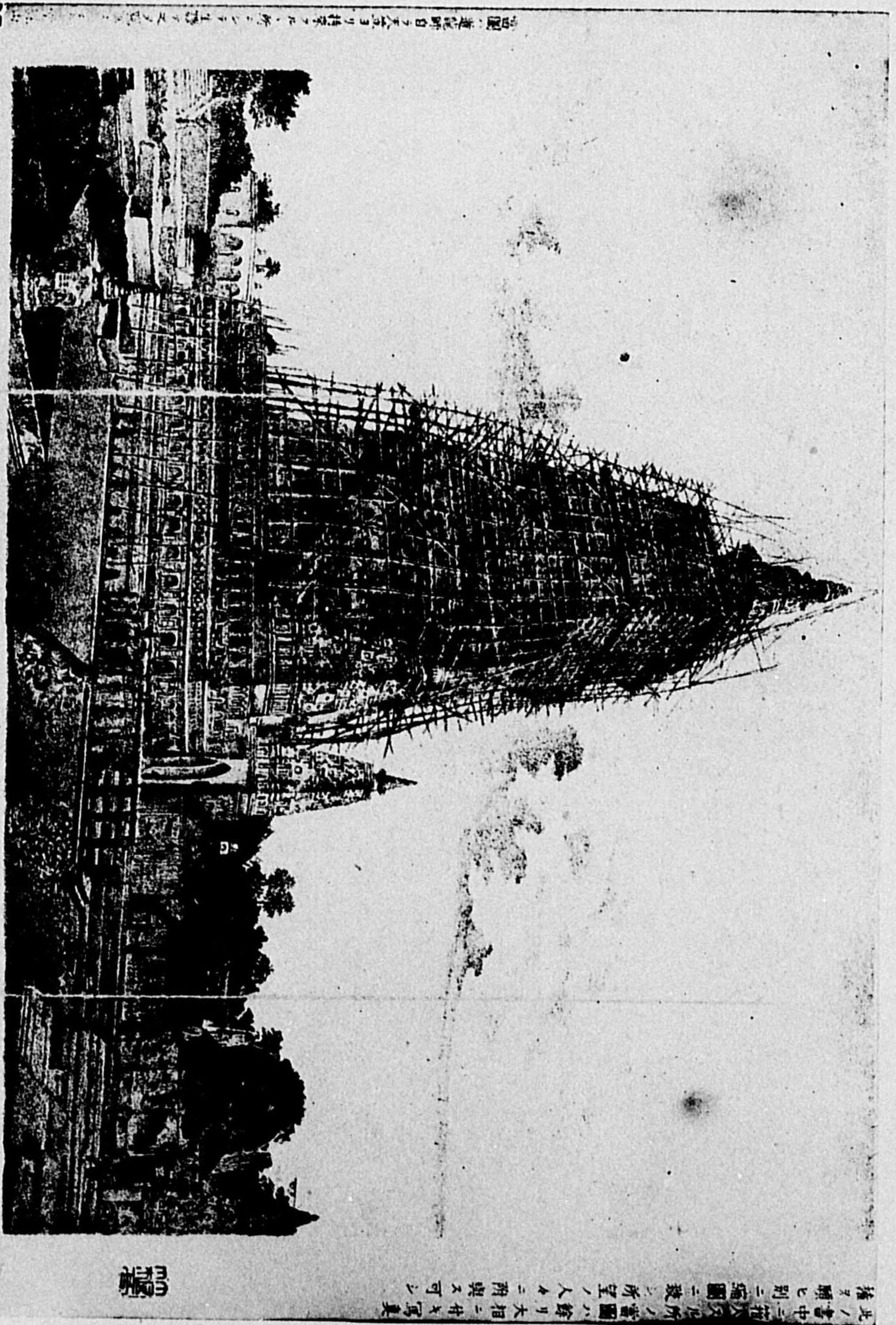
佛塔

富岡ノ遺跡跡目々大等ヨリ持來テルノ所ニシテ生誕テ之ノ觀寫ス去ニ書森山

一一一 佛塔伽耶大塔 (修理前) (天竺行路次所見) 挿圖複製
 「……天幸にも彼の黒人は英語を自在に語せり即ち云く是れは是れ釋尊の大墳墓なりと是に於て黒崎手を舉げて大呼して云く是れ即ち釋尊の大墳墓なりと余之を聞いて宛も狂人の如く石階を棄下りて……嗚呼大聖世尊の墳墓なり大聖世尊の墳墓なりと多日の辛苦を打ち忘れて喜跳悦躍相ひ止まざれば土人之れを周匝してただ奇怪の看を爲しにける也……」(本文第207頁参照)。



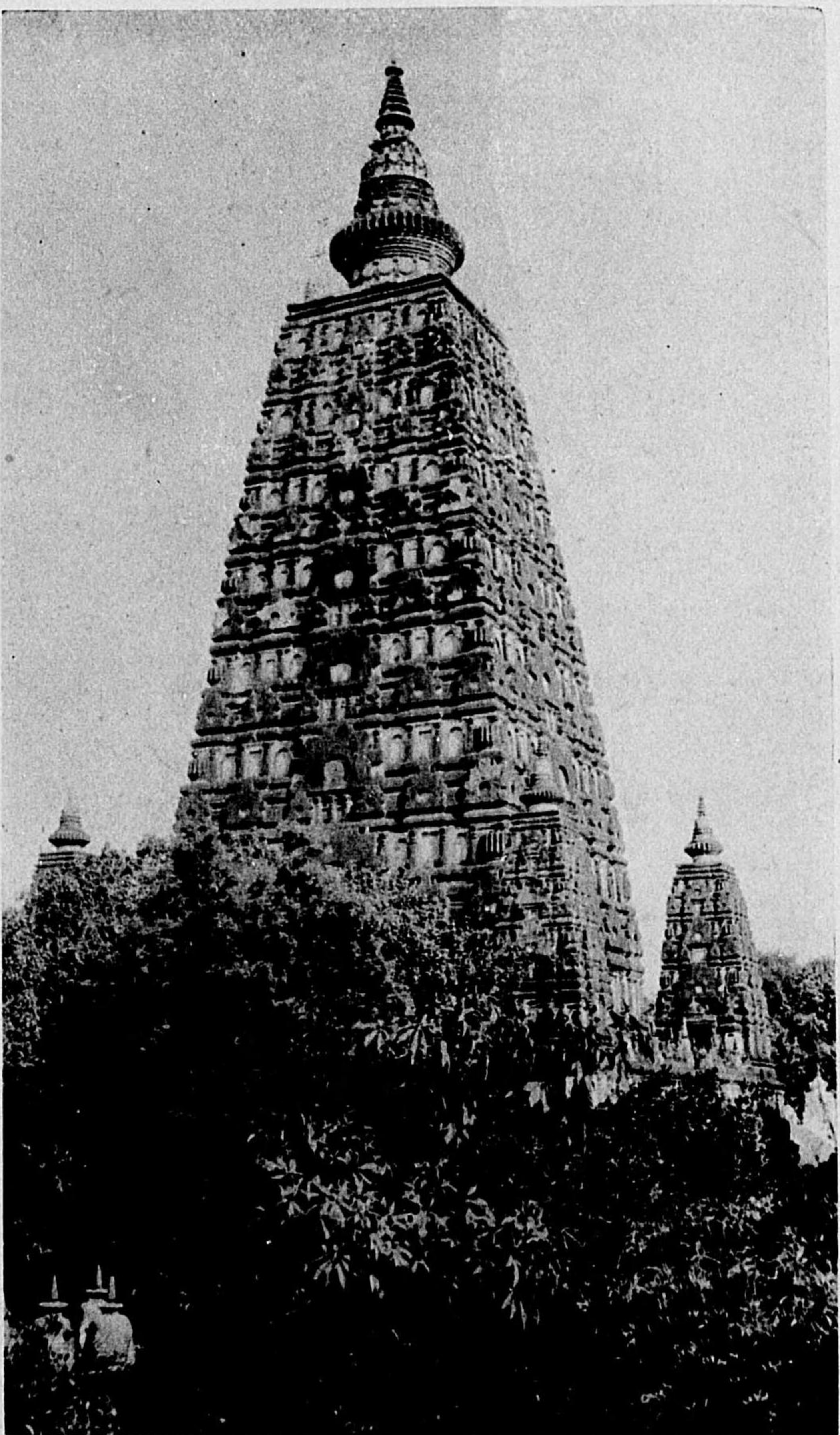
是ノ書中ニ挿入スルモノ皆國ハ餘リ大相ニ付テ寫真
 繪ヲ類ビ別ニ繪圖ニ致ス所望ノ人々ニ附與ス可シ



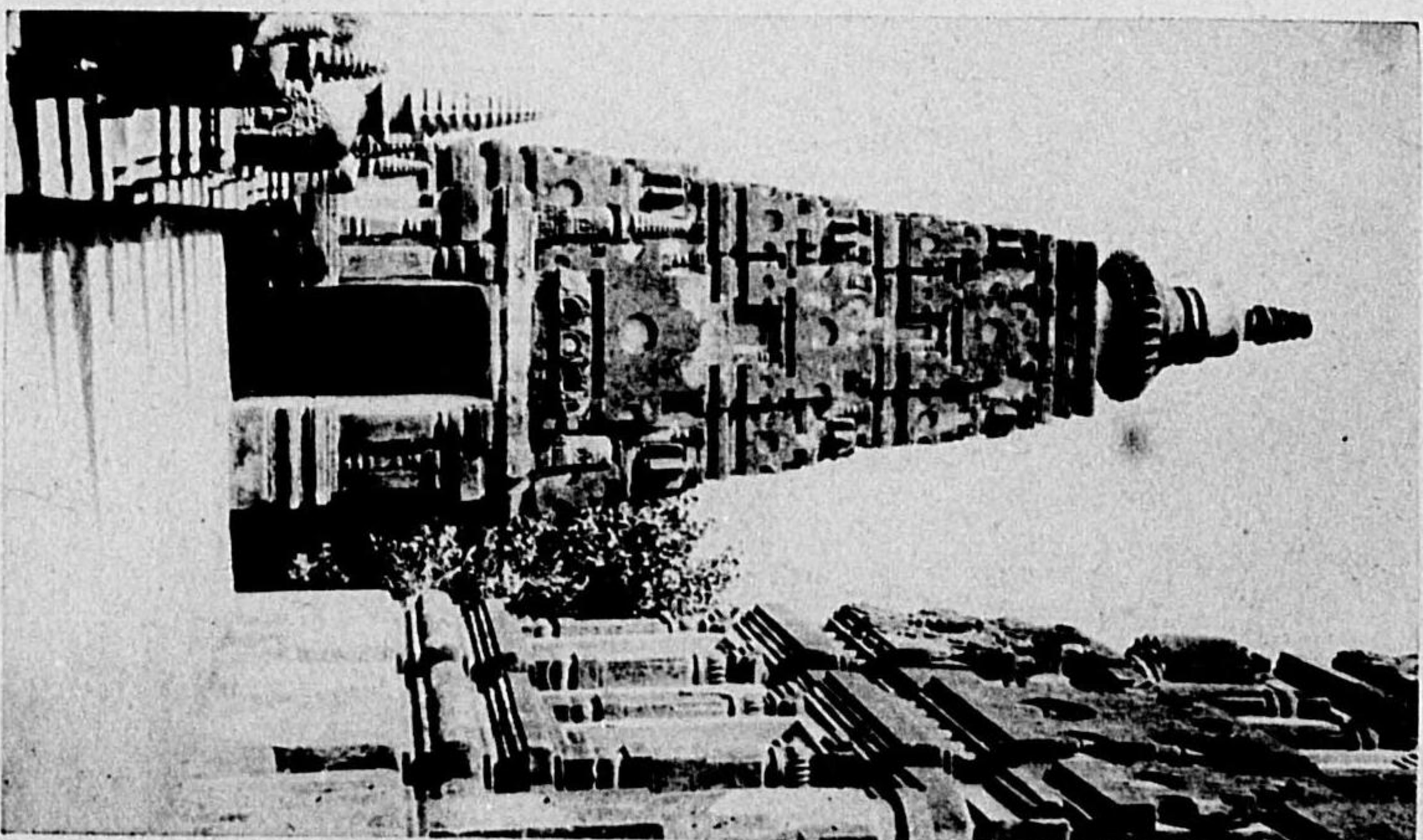
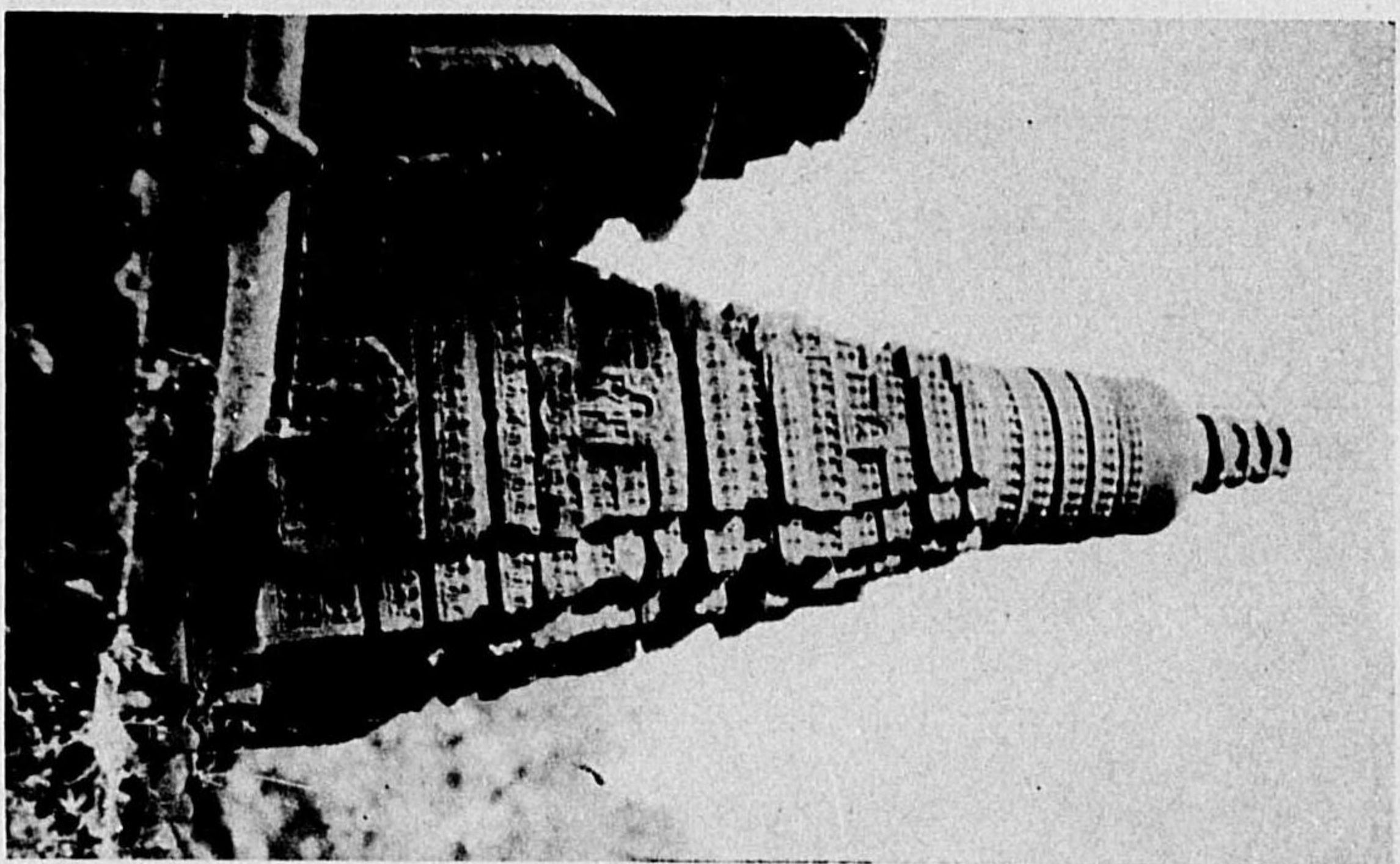
一一二 佛陀伽耶大塔 (修理中) (同書挿圖複製)

此ノ書中ニ掲ゲタル所ノ當國ハ餘リ大相ニ付テ写真
 機ヲ用ヒテ別ニ攝圖ニ幾ノ所至ノ人々ニ附與ス可シ

明治



一二三 佛陀伽耶大塔全景(修理後)
 西方の高地からみたもの。中央及び四隅の小塔(内三塔だけ此寫真に見ゆ)上部に、各一つづつの相輪を具備せる塔婆を頂けることに注意せよ。
 (大正十二年一月八日)



右。一二四 佛陀伽耶大塔四隅の小塔の一
 左。一二五 同 に於ける奉獻塔婆の一例
 (何れも大正十二年一月八日)
 右は大塔第二層西南隅の附屬小塔で、此部に元小塔のあった事が確實に認められるのは、平面圖及び其解説に記した通りであるが、小塔其ものは全然推定復原である。左は境内にある奉獻小塔婆の一例で、高き數階の基壇の上に塔婆がのつてゐて、何れも側面に多くの佛像を陽刻した希有の例。

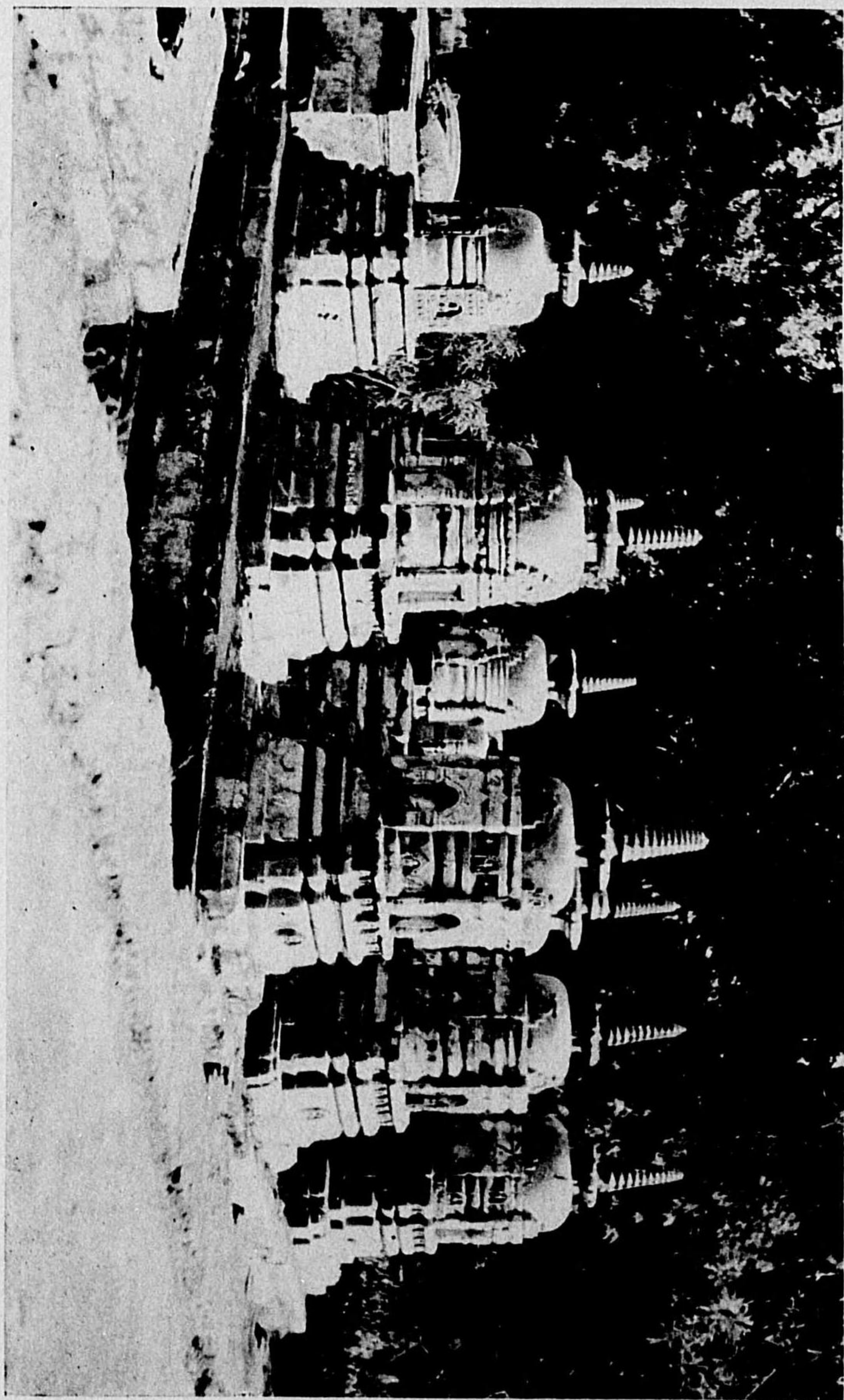


上。一二六 佛陀伽耶大塔上層蒲椽上にある奉獻小塔婆の數例
下。一二七 同 に於ける奉獻小塔婆 其一

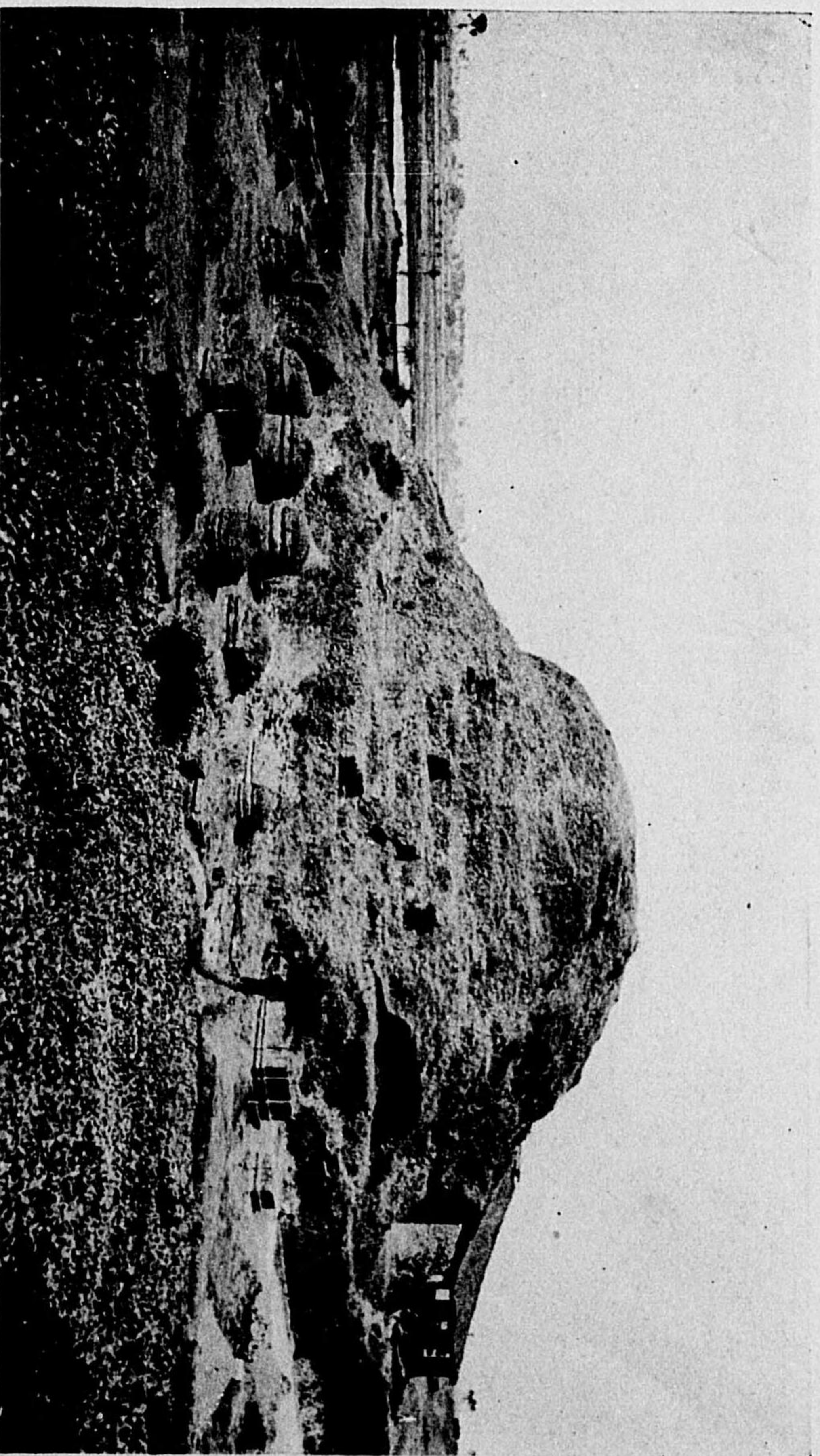
(何れも大正十二年一月八日)

大塔第二層の四方を廻れる溝椽の、勾欄に當る壁の笠石の上幅は可なり廣いで、其上に適當の間隔に、小塔婆を並べてある。何れも同じ様で、古いものはな

いが、それが反て裝飾になつてゐる。上圖がそれ。
下圖は境内にある奉獻小塔婆中の最も裝飾の多いもので、四方四佛の籠等は、少しばかりうるさい位に飾られてゐる。

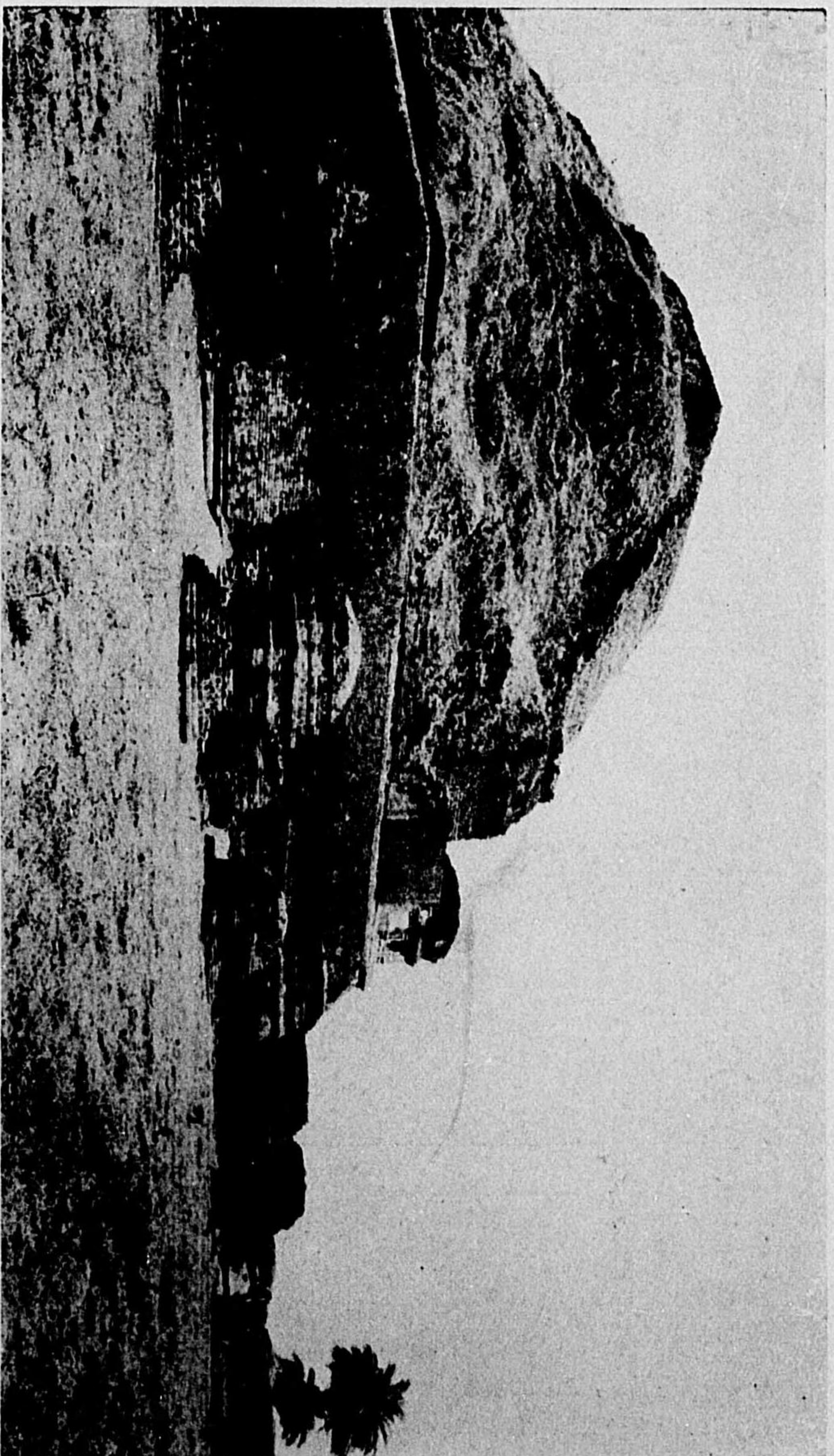


一二八 佛陀伽耶に於ける奉獻小塔婆 其三 (大正十二年一月八日)
同じ様な大さの同時代の寶塔が澤山揃ったところは尙に美しいものである。



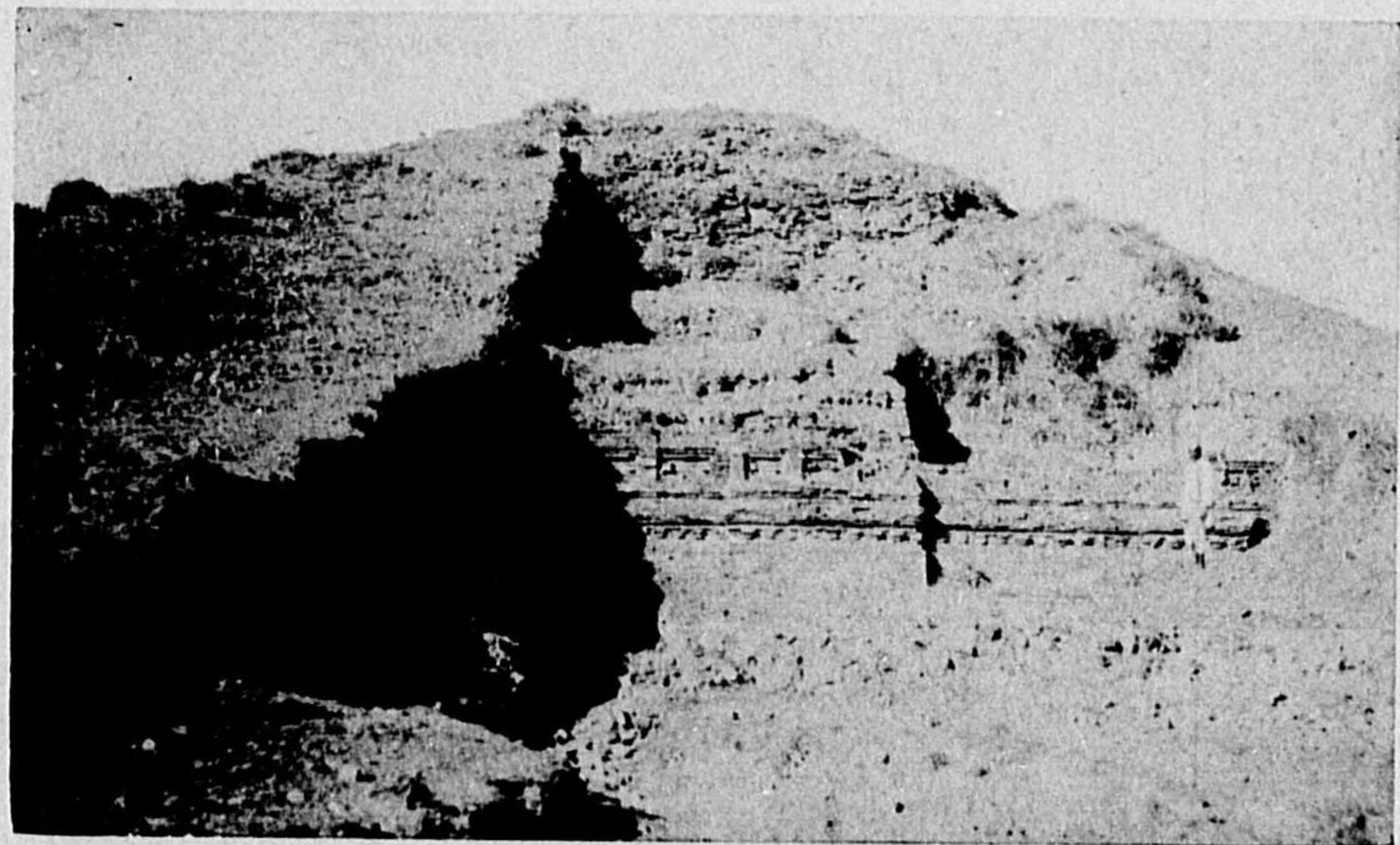
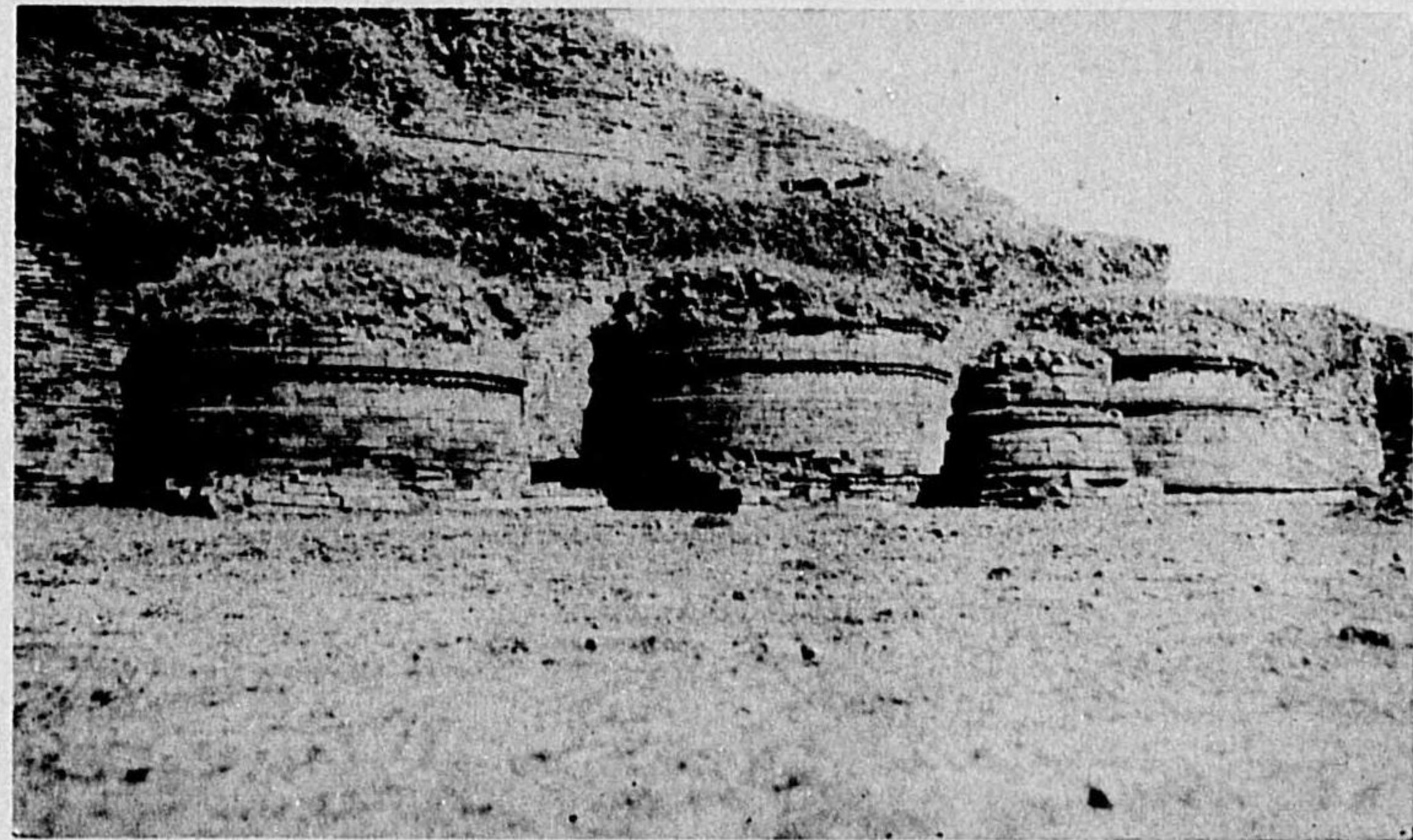
— 二九 — 陵那羅陀寺南塔全景 其一 (大正十二年一月四日)

那羅陀寺址に於ける最南端にある建物で、當時第一塔 (First Stupa) と呼んでゐたが、それを東南方より見たところ。其一角 (即ち東北角) だけは、既に一部發掘ができ、地下深く掘り下げてあり、塑像等もでてゐるので、臨時庇をつくつてある。それ (次頁へ)



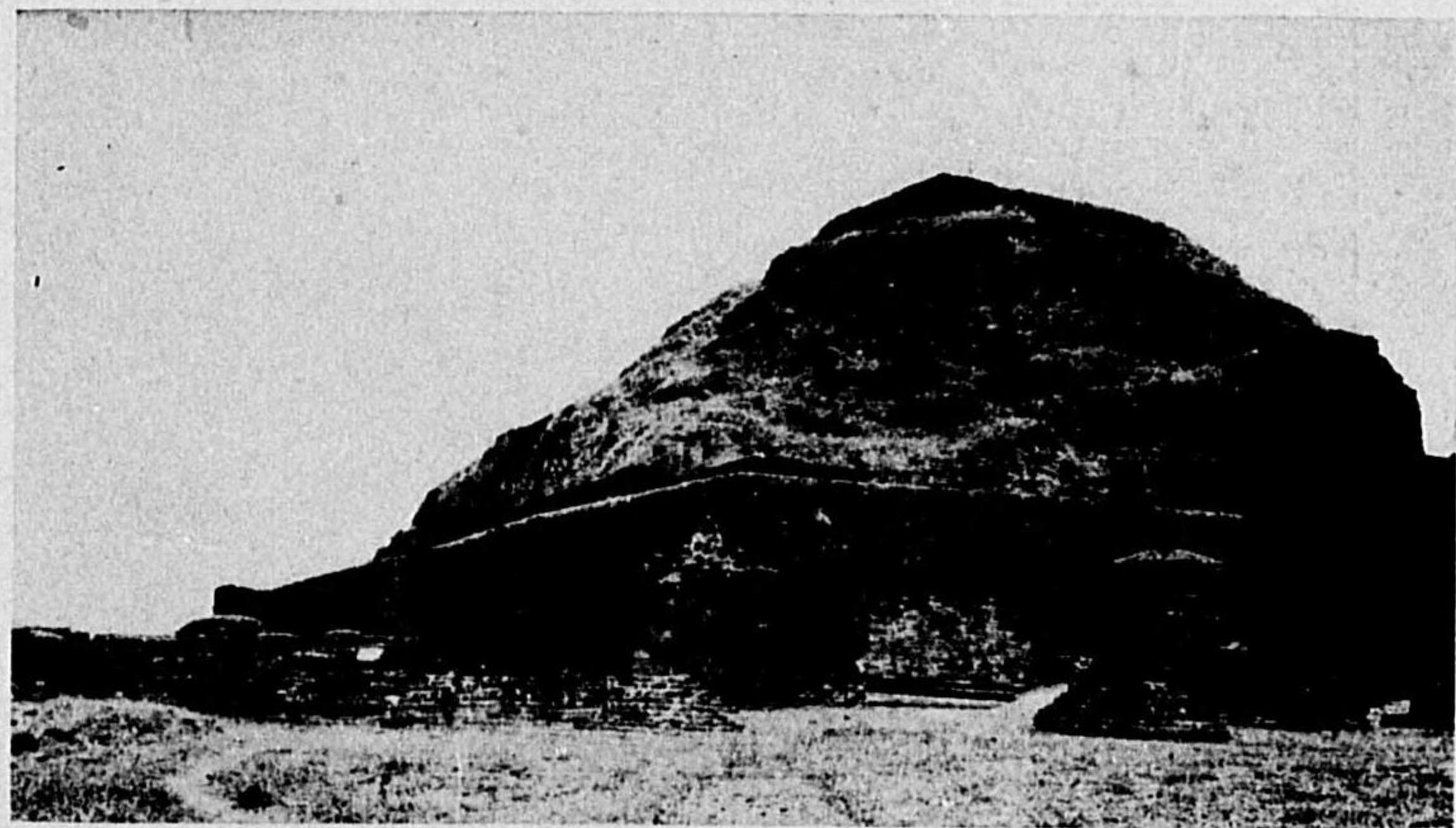
— 三〇 — 陵那羅陀寺最南塔全景 其二 (昭和十一年三月十一日)

(前頁より) を大規模に發掘し、埋没してゐるところを大分に世にだしたのが此圖で、これは其北面である。此圖右端の涼柑樹と、前圖中央の少し右方のそれとは同一のもので、十四年間に大きくなつたものと思ふ。



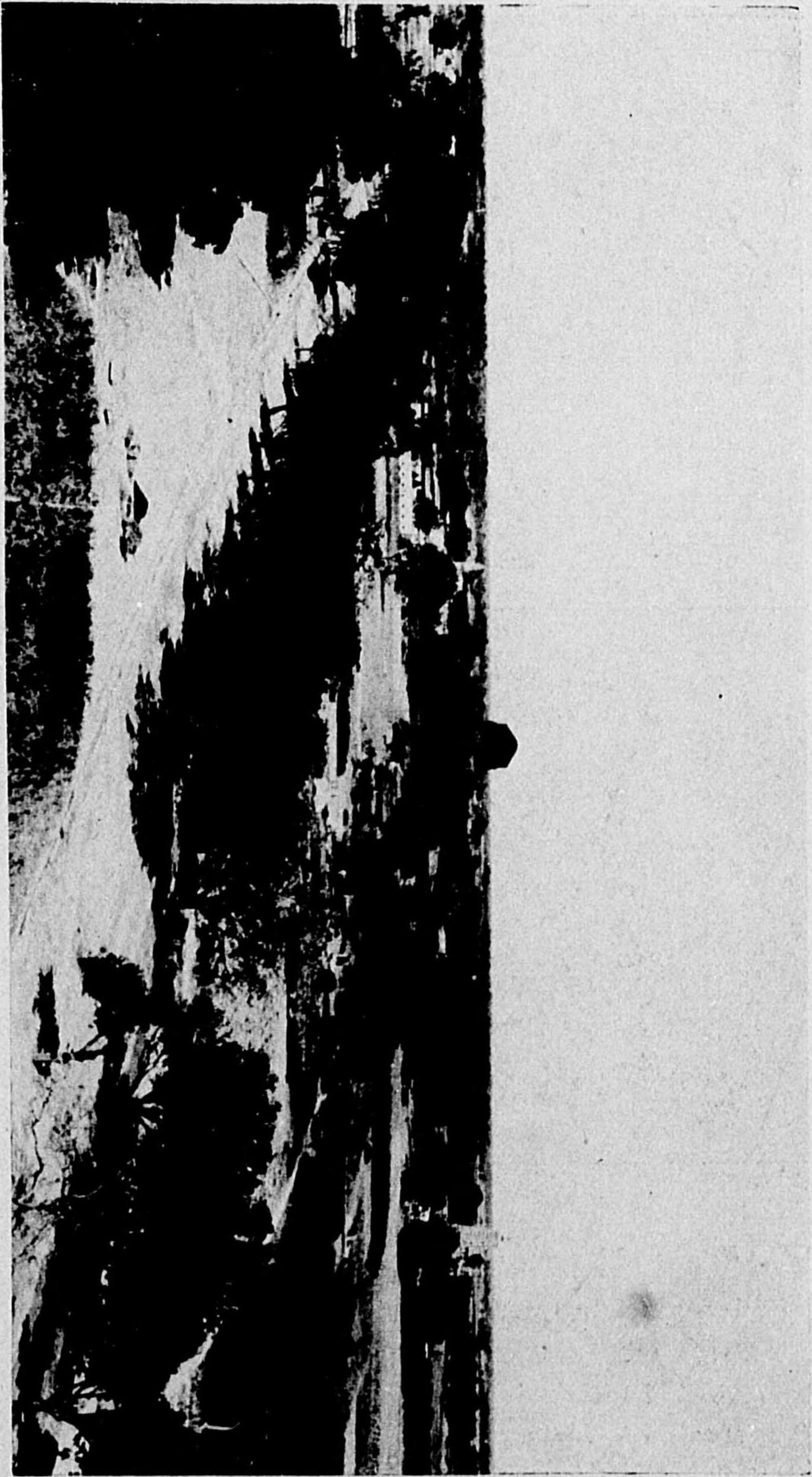
上。一三三 廢那爛陀寺南塔附屬南方小塔婆
 下。一三四 同 北塔を南方よりみる
 (上下圖共大正十二年一月四日)

上圖は最南塔南側にある小塔婆の二三を示したもので、他の多くの例の如く、何れも基壇ばかりで、伏鉢以上はない。下圖は最北塔の基壇一部が現れてゐるだけであつたが、今回は大部分が現はされてゐた。上下圖共前回の時の寫眞である。南より北へ第一・第二・第三塔と呼んでゐたと記憶してゐたが、此度は名稱が逆になつてゐた様に思つたので、混雜するといけないから南・北としておいた。



上。一三一 廢那爛陀寺南塔全景 其二
 下。一三二 實那爛陀寺南塔附屬西方小塔婆群
 (上。昭和十一年三月十一日、下。大正十二年一月四日)

上圖は前圖と同じもので、前圖左端の角(西南角)は、此所では丁度中央に見えてゐる。左方即ち西側に多くの奉獻小塔婆があるが、此等を見下ろしたのが下圖である。今から十四年前は、ここは發掘中で、自由に寫眞がとれたから、高地から俯瞰して多くの小塔婆も一度とつたのであるが、今度はさう自由に歩くこともできずましてこの様な位置から俯瞰等は到底できなくなつて了つた。



一三五 迎佛塔上より鹿野苑の陵城遠望（昭和十一年三月九日）

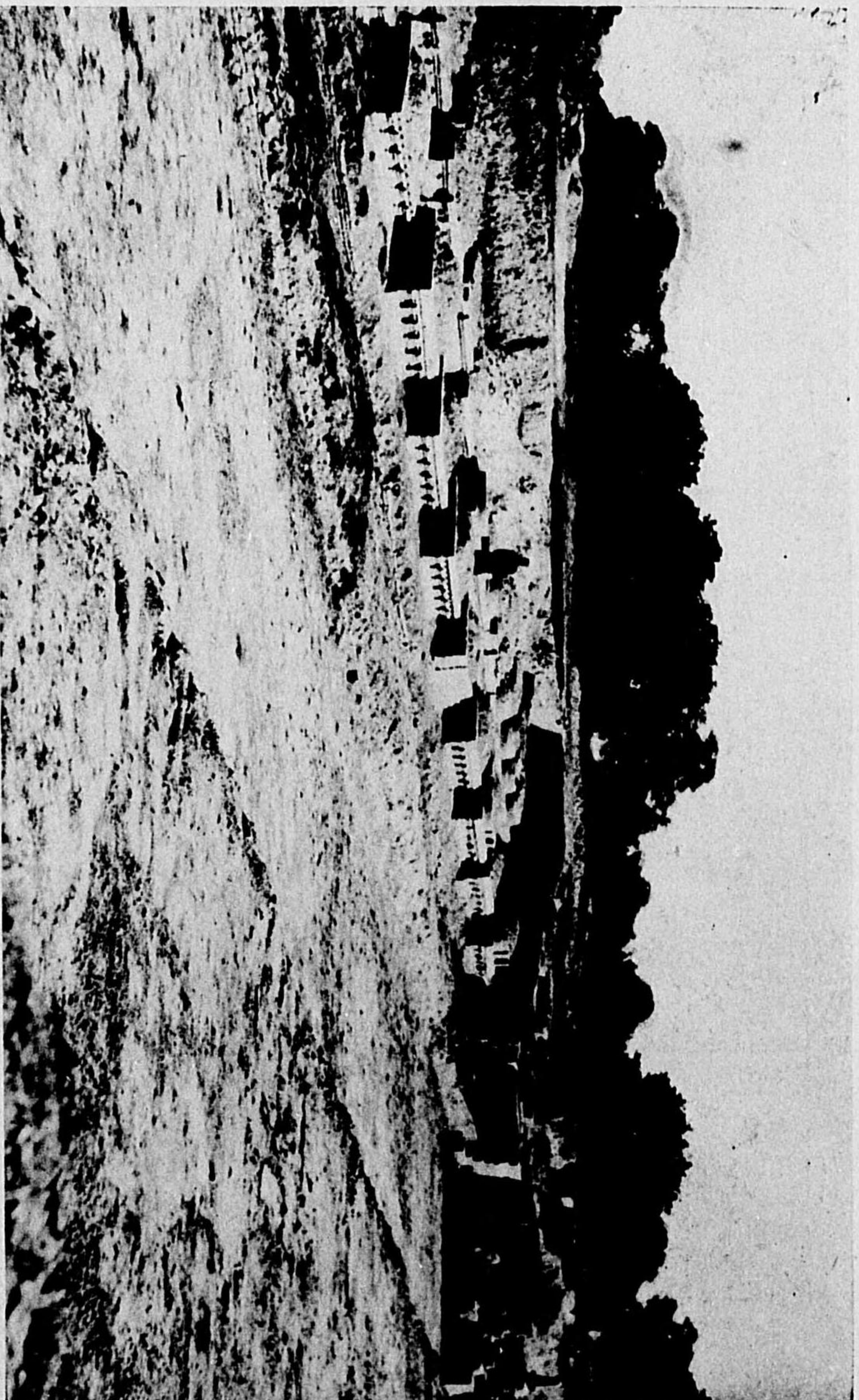
迎佛塔上にアクバー大王の建てた「フマーン」塔の上から、ダマーク塔を中心に陵城の方面を見たもので、中央のかいふ迄もなくダマーク塔。其右方に見ゆる高き白色の塔の深なものは、此地に新業の初轉法輪寺（ムラガンダクチ・セハラ, Muligandhakti Vihara）で、當時野生司香雪嵐伯が、全力をつくして釋迦一教の繪を内部の壁面に描き中であつた。



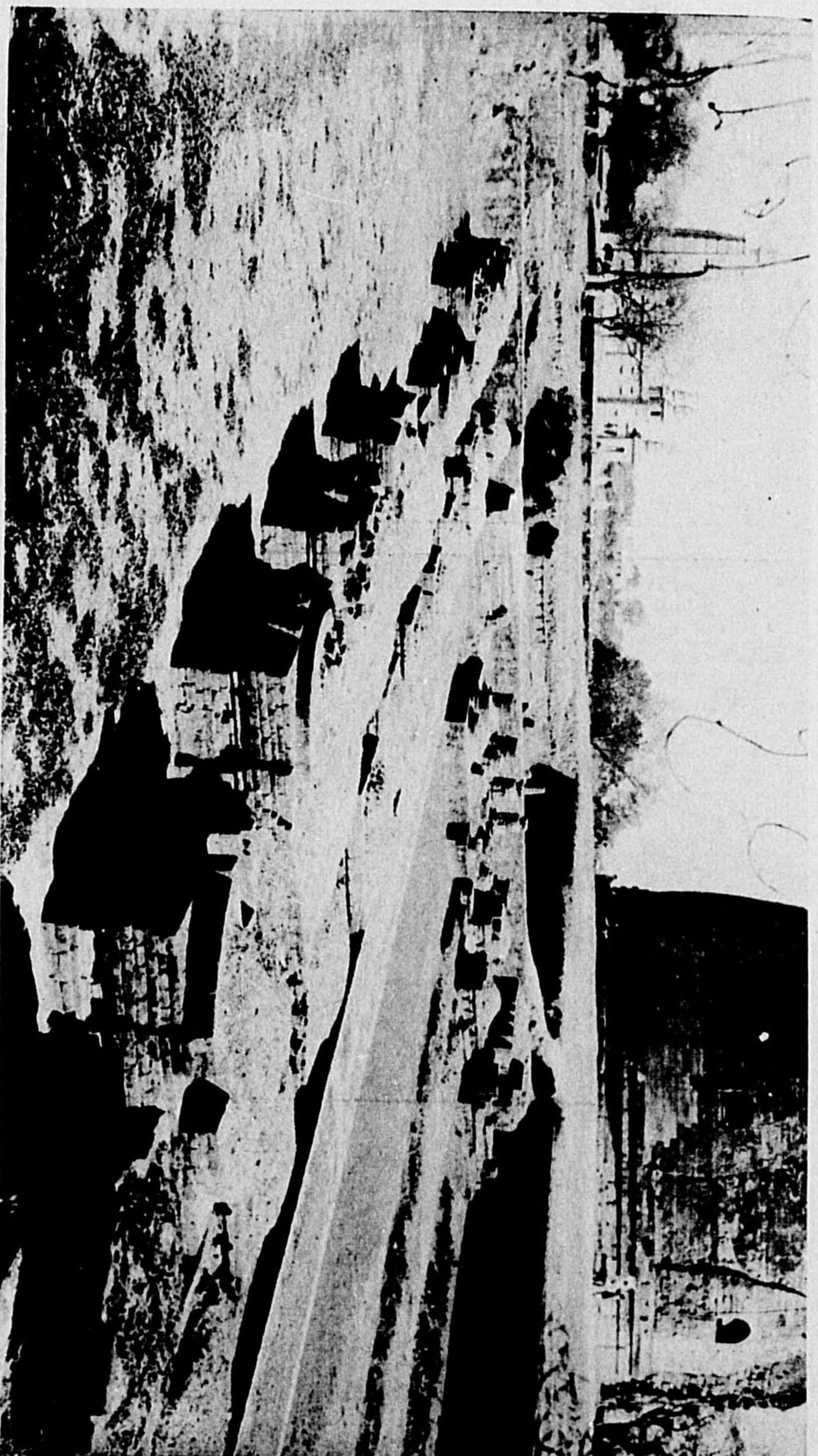
一三六 鹿野苑に於けるダマーク（Hanekh）塔

基部の八方にある小籠は、當初佛像を安置したもの。今全部亡失。尙ほ下部側面には非常に精巧なる唐草や幾何模様が刻んである。

（大正十一年十二月二十八日）



一三七 本 殿 参 道 其 一 (大正十一年二月二十八日)
 謂はゆる本殿 (Main Shrine) 正面の参道の一景で、東西に通つてゐる。其北側には多くの奉獻小塔婆の基壇だけが残つてゐるが
 岡の中央より少し左に立てゐる人物によりて、其大體の大きが判るであらう。

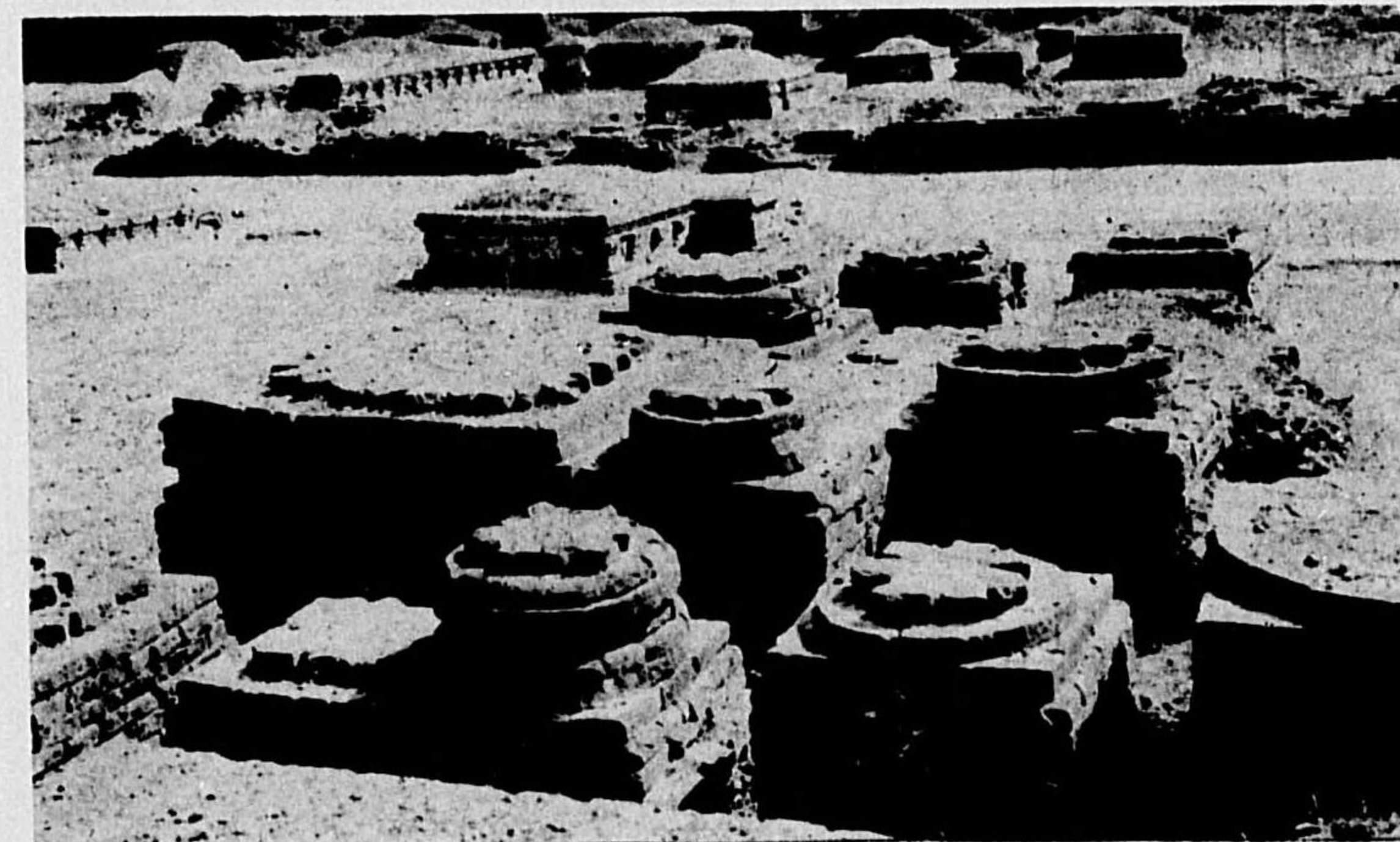
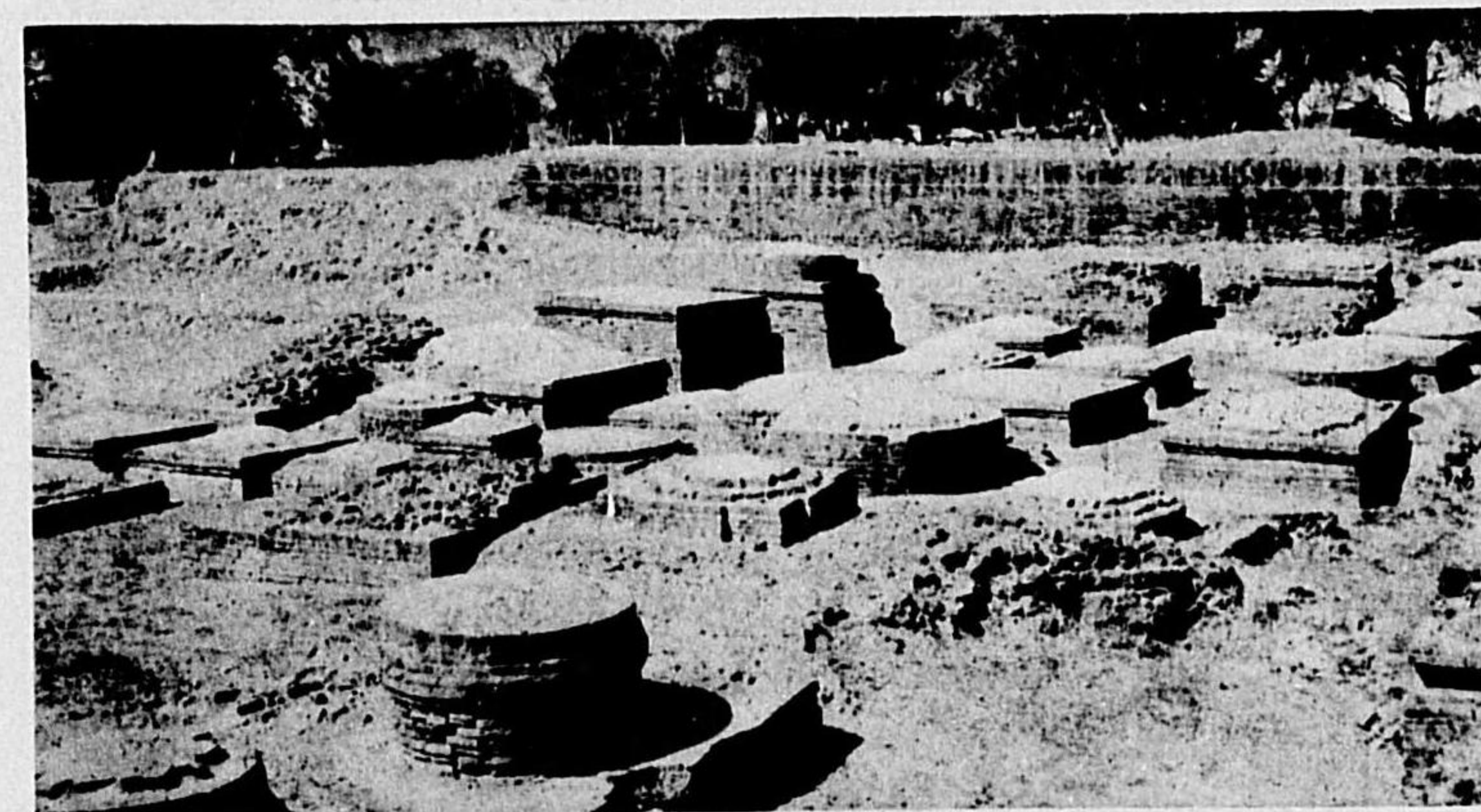


一三八 本 殿 参 道 其 二 (昭和十一年三月九日)
 本殿参道を隔ててグメーク塔の一部をみたところで、第一三四圖の正面に見えてゐる籠は、ここでは右方に寫つてゐる。尙ほ前岡
 最右端に辛ふじて出でゐる單層の小寶塔は、此岡の約中央にあるから、此等の岡の關係が自然
 明らかであらう。此岡左上の大きな建物は新築のムラガングクチ・セハラ。



(前頁より) 飾漆喰がとれて、内の煉瓦が裸で見えてゐるから、塔の小さい割に煉瓦が大きくて、釣合がとれてないのは止むを得ない。併しこのあたりをみると、よくもこの位までに整理ができたものと思はれ、この事業に従事した人の勞苦に對し敬意を表する。

前回にみて寫眞にとつた孔雀王朝時代(321—184 P.C.)の正面をもう一度見ようと思つて探したが、私の見つけ様がいけなかつたのかどうしても見當らなかつた【印度旅行記】第257頁。



此頁上。一三九 鹿野苑本殿附近奉獻小塔婆 其一
 此頁下。一四〇 同 其二
 次頁上。一四一 同 其三
 次頁下。同其四 同 其四

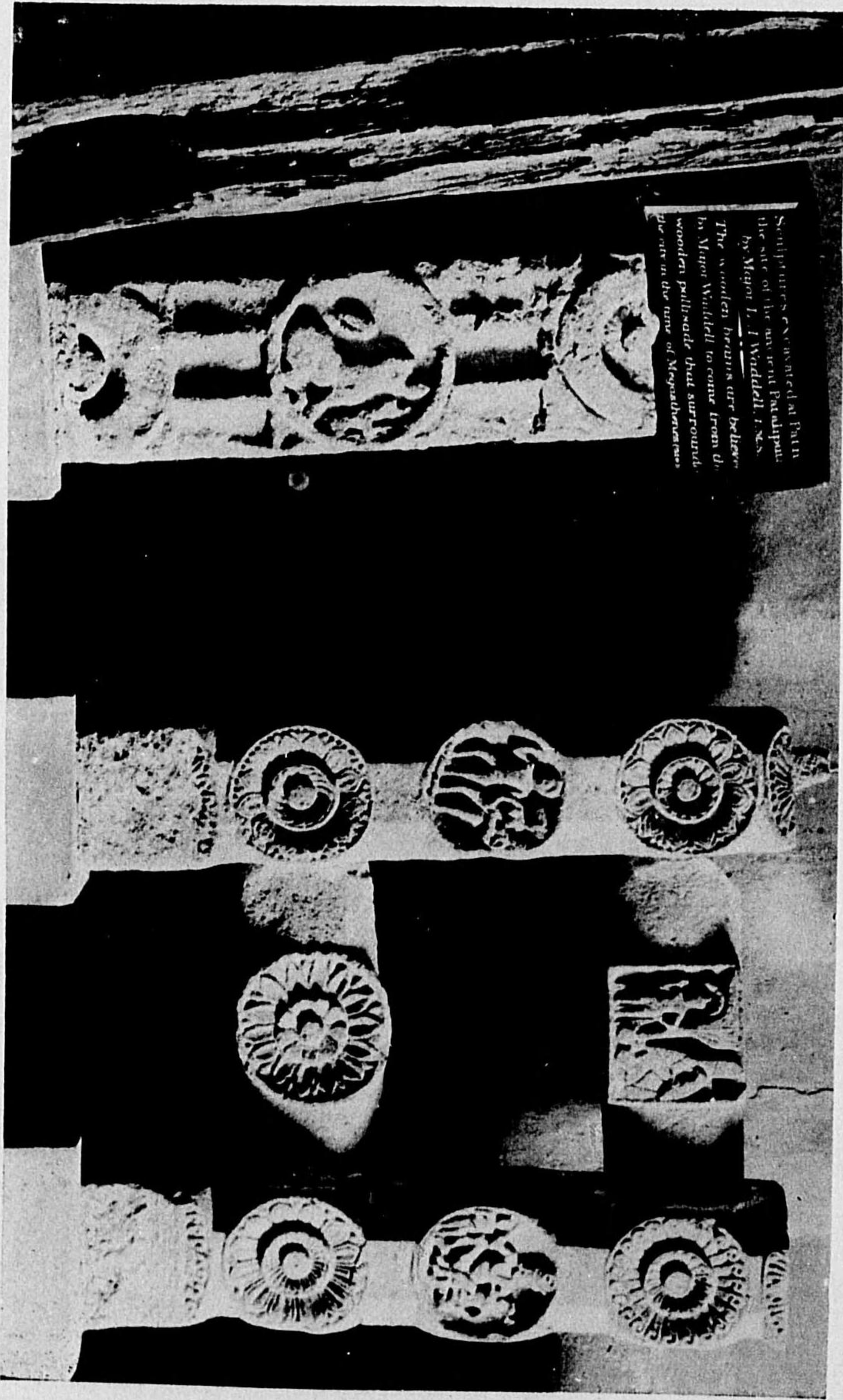
(以上四圖共昭和十一年三月九日)

本殿の附近には、數多くの小塔婆が発掘されてゐた。以前にはこんなものは一つも出てゐなかつたのだから、いづれ其後の發掘によりて、世に出たものと思はれる。伏鉢が完全に近いのはめつたになく、大概は下の四角な基礎ばかりか、或は伏鉢の下部が少しある位である。さうして何もが外側の(次頁へ)

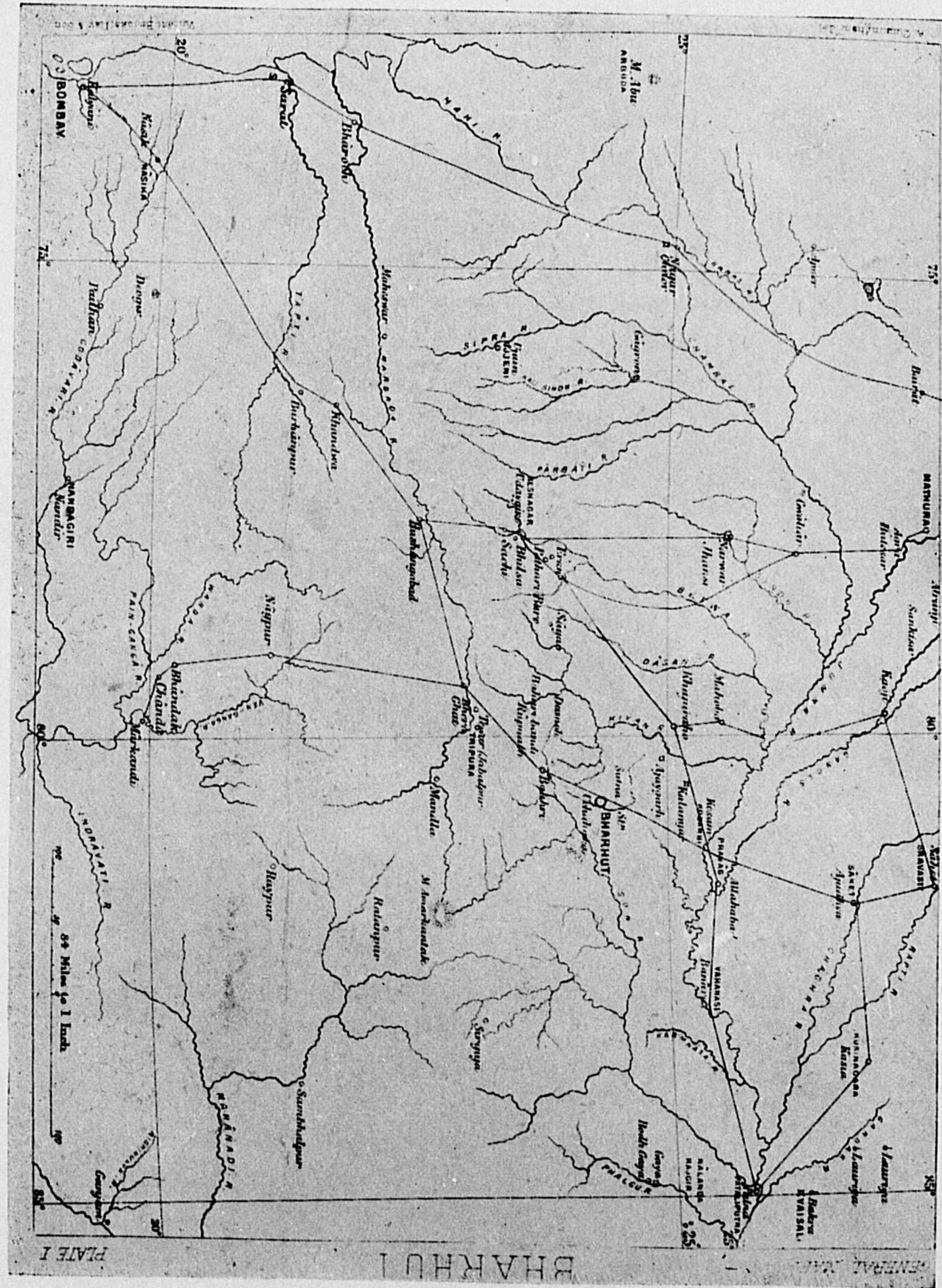


一四三 本殿南側凸出部に囲まれた小塔婆及玉垣
 寫真が高いところから寫せなかつたので、折角の玉垣が僅か一部分しかでてゐないが、これは一石を刳抜いてつくり、水磨にしたもので、大變に手間がかかつてゐるが、惜しいことに壞れてゐる。併し夫れはただ破れてゐるだけで、尖はれた部分のないのは幸ひである。

(大正十二年十二月二十八日)



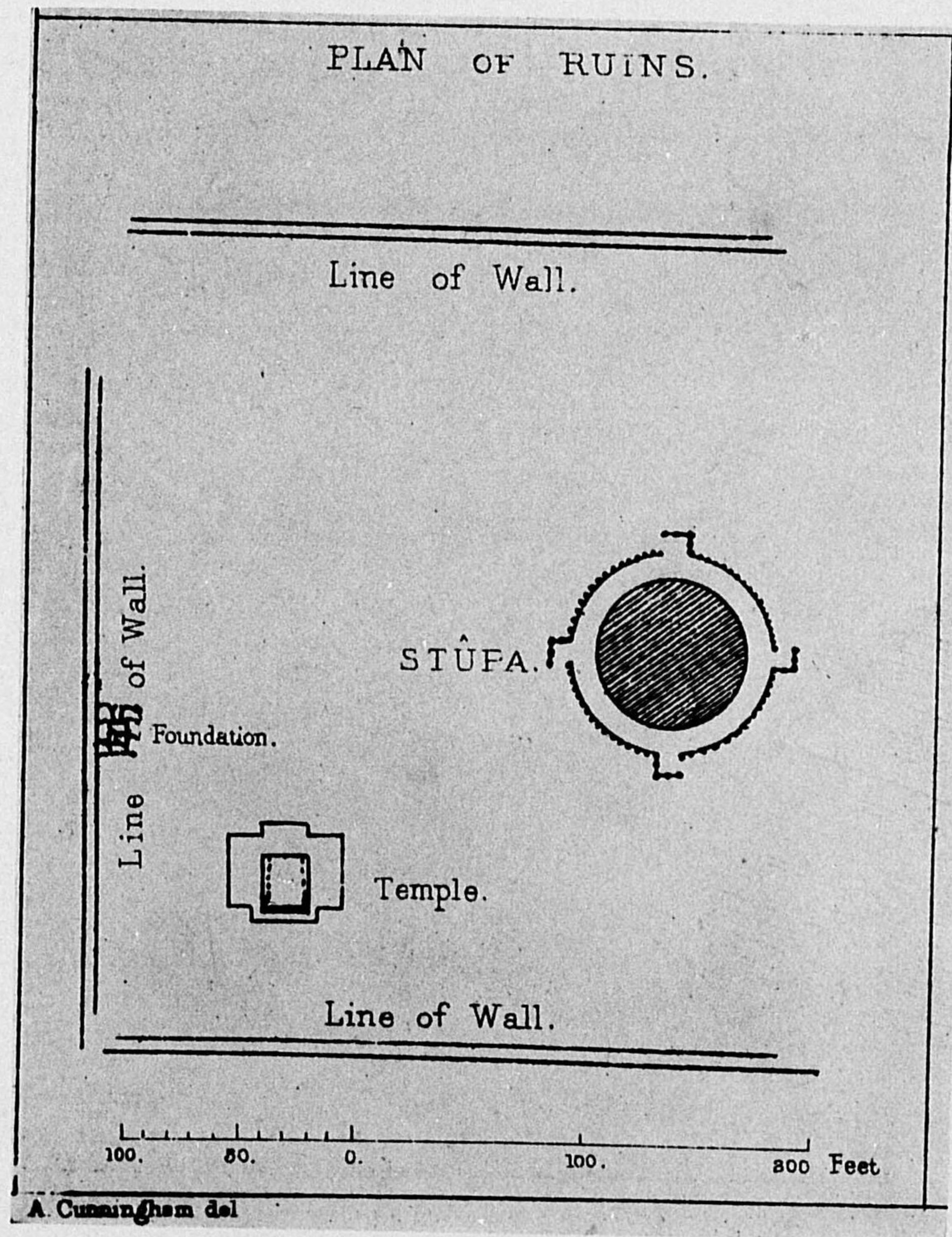
一四四 甲谷他博物館出陣パトナ出土玉垣 (大正十二年一月十二日)
 右圖左柱中央の圓紋内に現はれたる彫刻、男子と並べる子供を抱いてゐる馬頭女子とに注意せよ。それから上方の貫の中央のが角紋になつてゐる事と、石柱上下のが完全に圓紋になつてゐることも看過してはいけない。



一四六 パールハット及其附近一般圖 (STUPA OF BHARHUT 附圖複製)

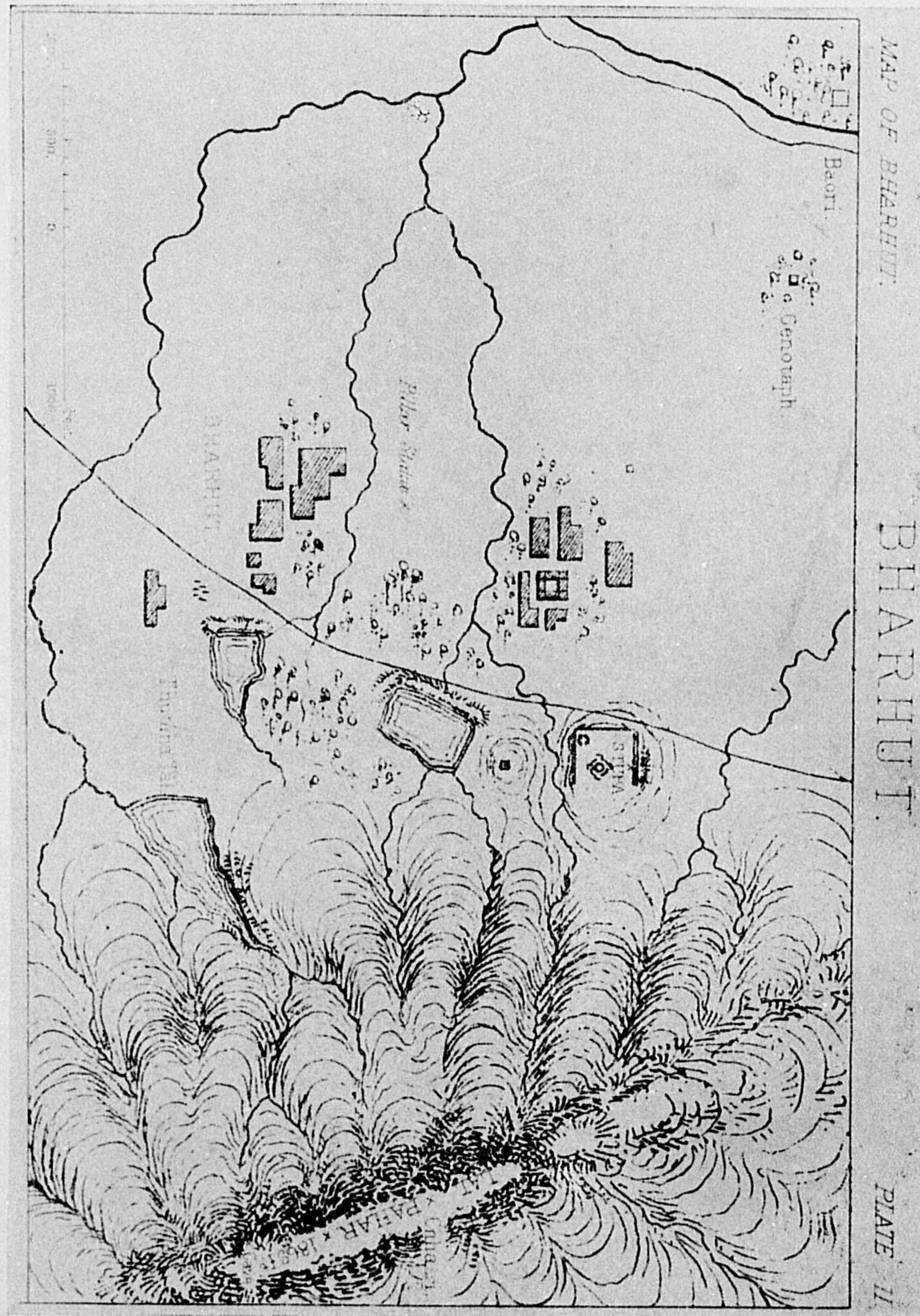


一四五 甲谷他博物館出陳小塔婆 (大正十二年一月十二日)
スワット溪谷 (Swat Valley) 發見。線形及び相輪の一部は後補といふ。



一四八 バールハット廢塔附近一般圖
(STUPA OF BHARHUT 附圖複寫)

前圖右方の山の西麓にある塔婆の一區域を擴大したもので、周圍玉垣の出入口は、サンチ第二塔の夫れの様にてきてゐるが、この場合は其内方に門(Toran)があつたのである。玉垣は東南の一象眼——右下即ち東南方——だけ殆んど完全に發見され、門も東門の一部は見付かったが、惜しいことに大部分は行方不明になつてゐた。尙ほ本文中の塔婆復原圖と比較せよ。



一四七 バールハット村落地圖、廢塔の位置を示す。(STUPA OF BHARHUT 附圖複寫)

一五〇 甲谷他博物館出陳の復原せるパールハット塔婆玉垣及門一部（内部よりみる）

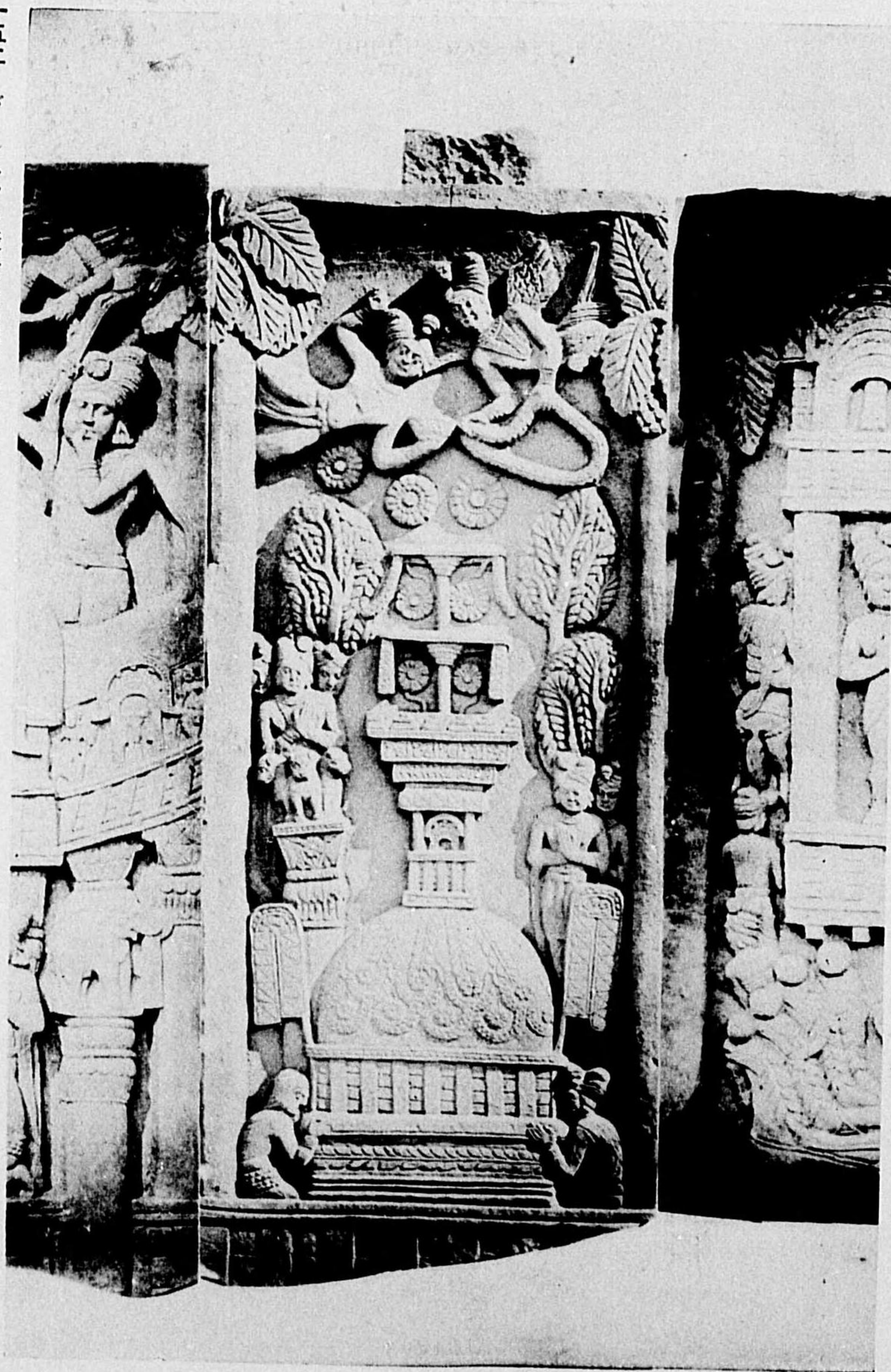


（大正十二年一月十二日）

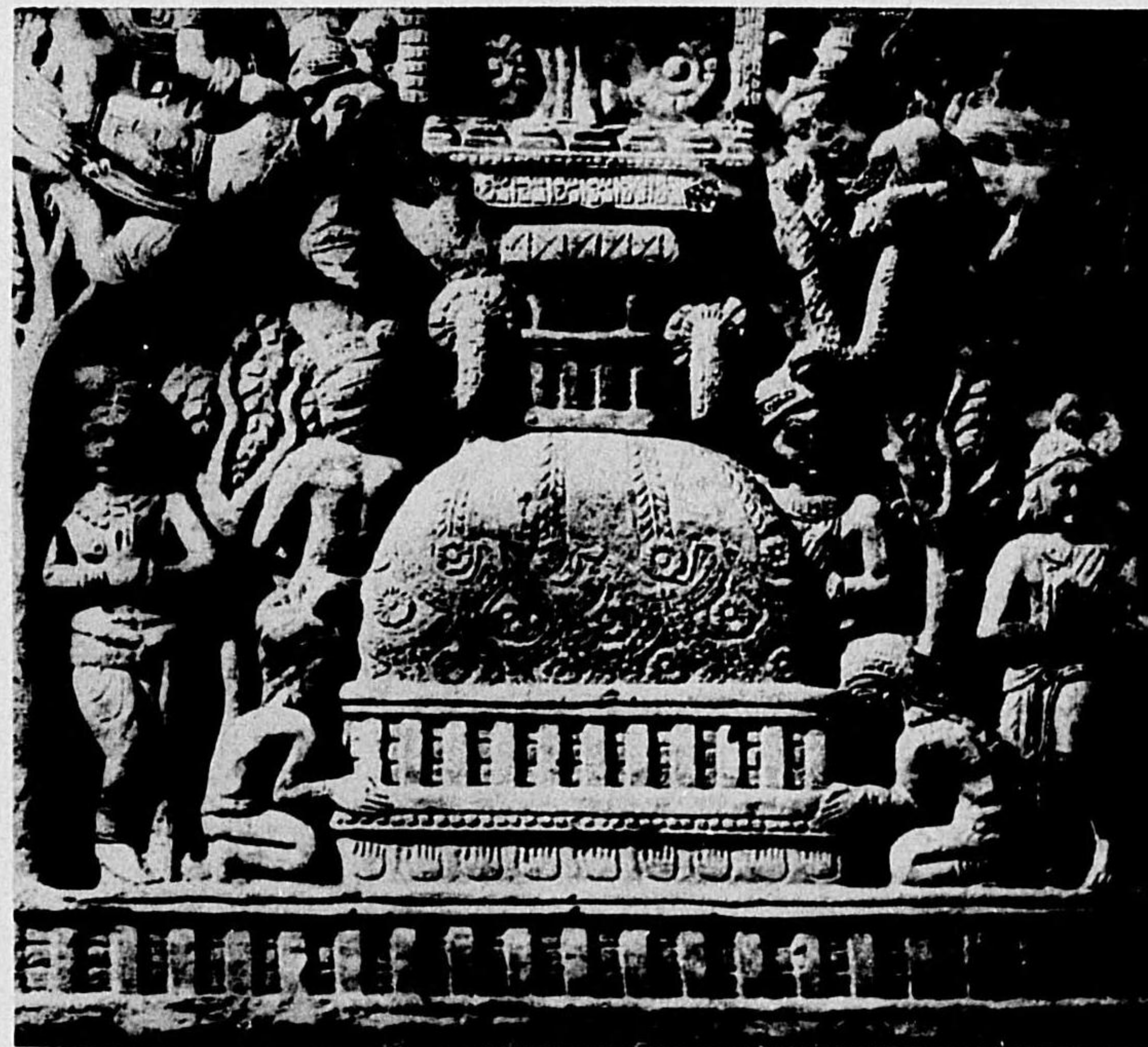


一四九 原位置に於けるパールハット廢塔婆玉垣及門柱一部
（STUPA OF BHARHUT 附圖複寫）

門柱一本の下半と、玉垣の柱三本と、笠石一本と、これだけが漸く残つてゐるが、柱の上が柄になって笠石に入り込んでゐるところは見えぬ代りに、笠石の接手は明らかである。笠石外側には側面に満開の蓮花を刻み、下に瓔珞と鈴——馬鐸を上下からつづした様な形のもの——を下げたてあるのは、法隆寺金堂内天蓋を想起せしむるのである。上方の埃及式蓮花もまた面白い（一五四参照）。貫の圓文内の平頭を具備せる塔婆に注意せよ。



(STUPA OF BHARHUT 附圖複寫)



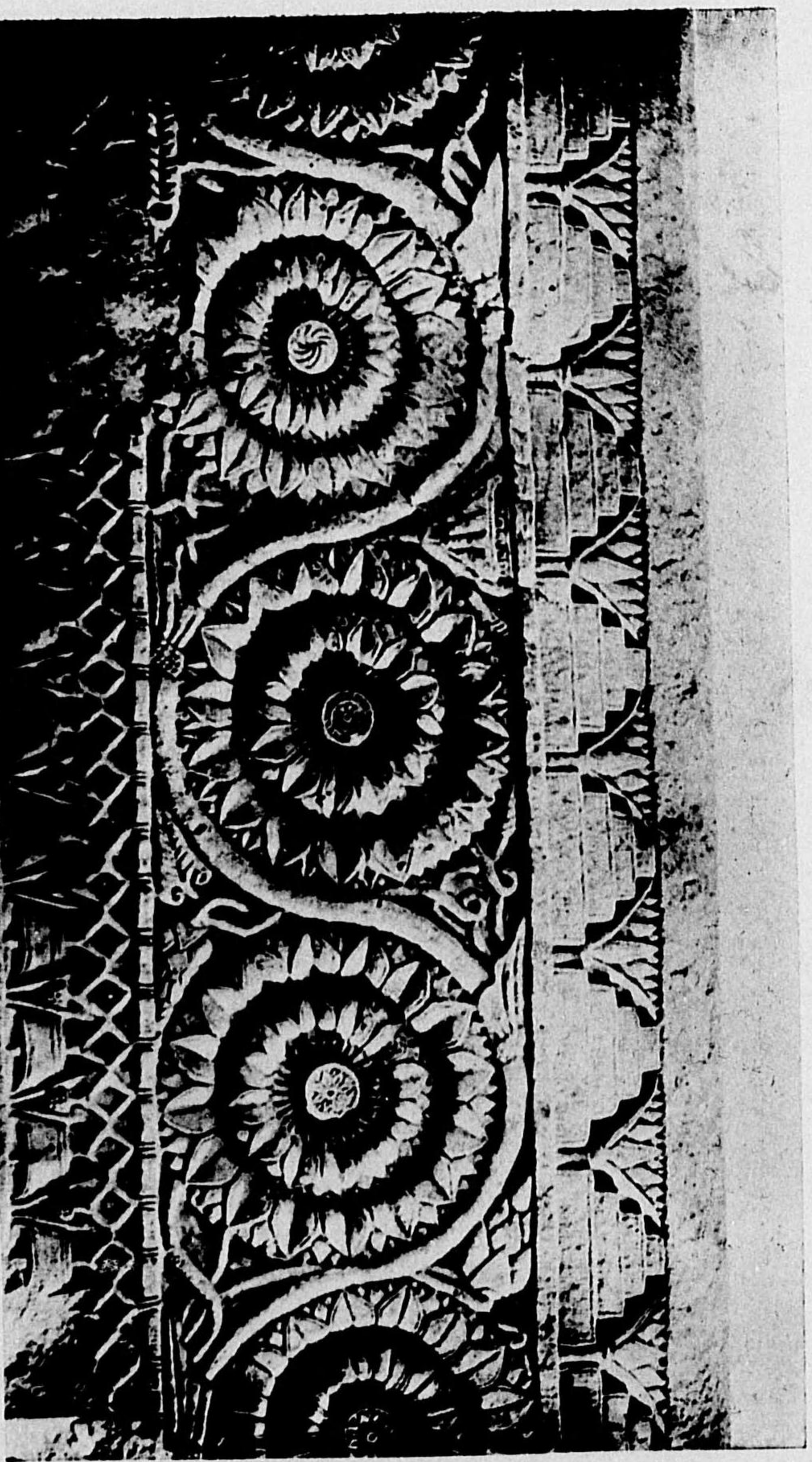
一五一 バールハット廢塔玉垣柱に現はれたる塔婆 其一
(STUPA OF BHARHUT 附圖複寫)

塔婆は元來屍體を埋葬したところに、記念のために土を盛り又は石を積み重ねたものであるが、佛教徒のはその様に簡單なのは殆んどなく、多くは舍利收藏のために、煉瓦又は石を以て築造した堂堂たる規模のものであった。

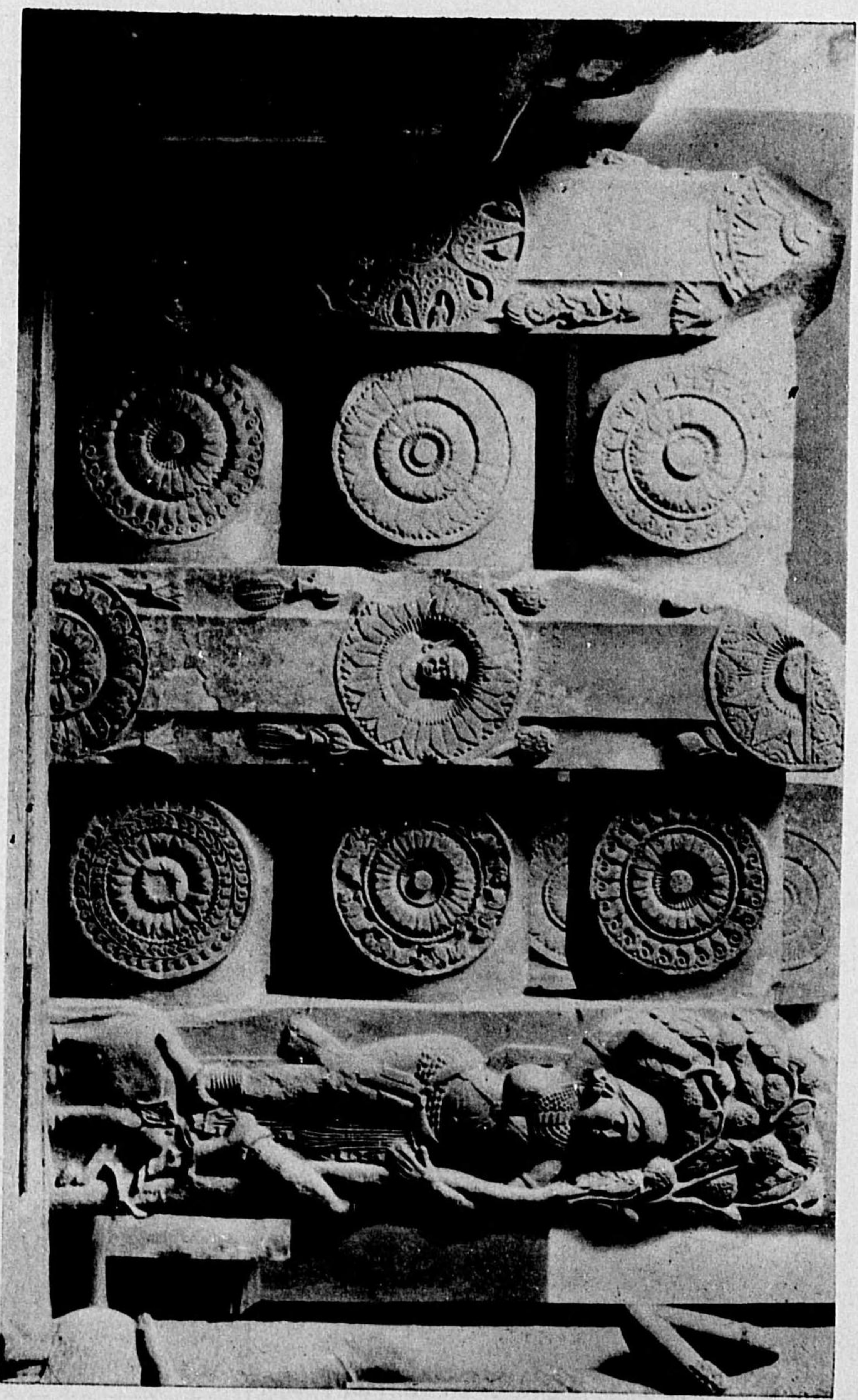
其二三の實例を擧ぐれば、錫蘭に於いてはアナラジャブラ及びボロンナルワ其他、印度に於いてはサンチ・マニキヤラ及びバルフト等、何れも地上に築造された大伏鉢型のものであり、タキシラやペシャワール所在のものは少し型式が異なつてゐたことは、既に數回に亙つて記したところで、改めて述ぶるには及ばない。

* * * * *

バルフトの彫刻に現はれた塔婆亦同型式で、此頁及次頁と第一四九の圖文内に見えてゐる。此等の例に於いては、相輪から吹流しの様なものが兩方に出で、相輪の下端は花を以て飾り、伏鉢の表面は花綵及び花文を以て美しく裝飾がしてある。



一五三 パールハット廢塔玉垣笠石側面文様 (ST. JPA OF BHARHUT 附圖模寫)
 パールハット廢塔玉垣笠石の外面には、何れも此様な蓮の滿開の文様がつけてある。印度に於ける蓮葉はいつもこの様な一種特別の形式である。子房は殊に小さいが、其内に刻された文様、其中でも左端の螺旋模様が興味を惹く。下方に垂下せる環状及風鐸の如き給(？)、上方の長方形を四つ囲む輪廓が三角形をなせるもの、及び其間にある埃及式蓮花文に注意せよ。

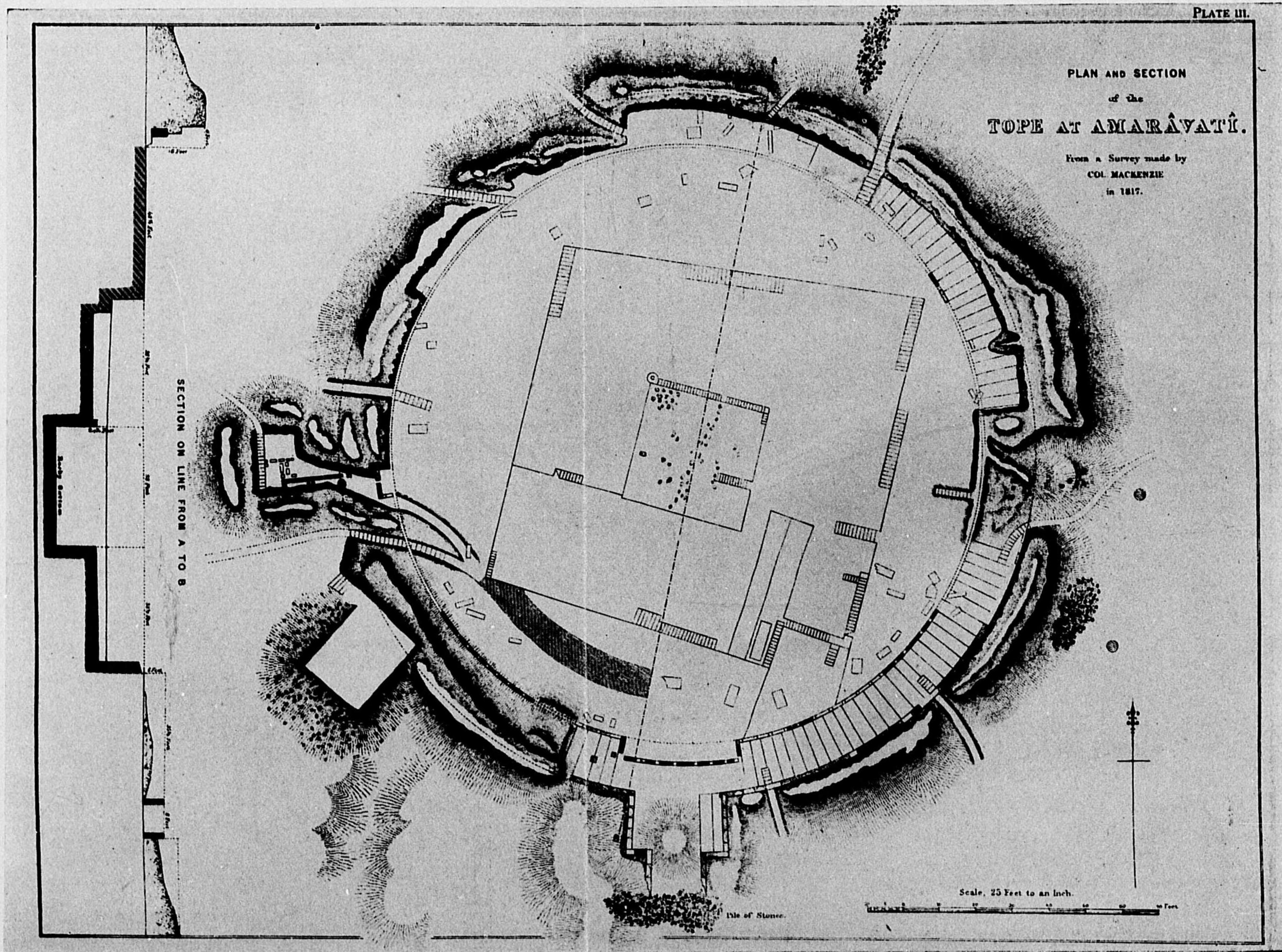


一五四 甲谷他博物館出陳パールハット廢塔玉垣一部 (大正十一年一月十日)



一五五 パールハット廢塔玉垣に現はれたる祇園精舎の景
下方には牛車に金を積んでもってきたところ、右上は地上に金を敷きつめてゐるところ、其他左上下に現はされた二棟の建物に注意せよ。

(STUPA OF BHARHUT 附圖複寫)

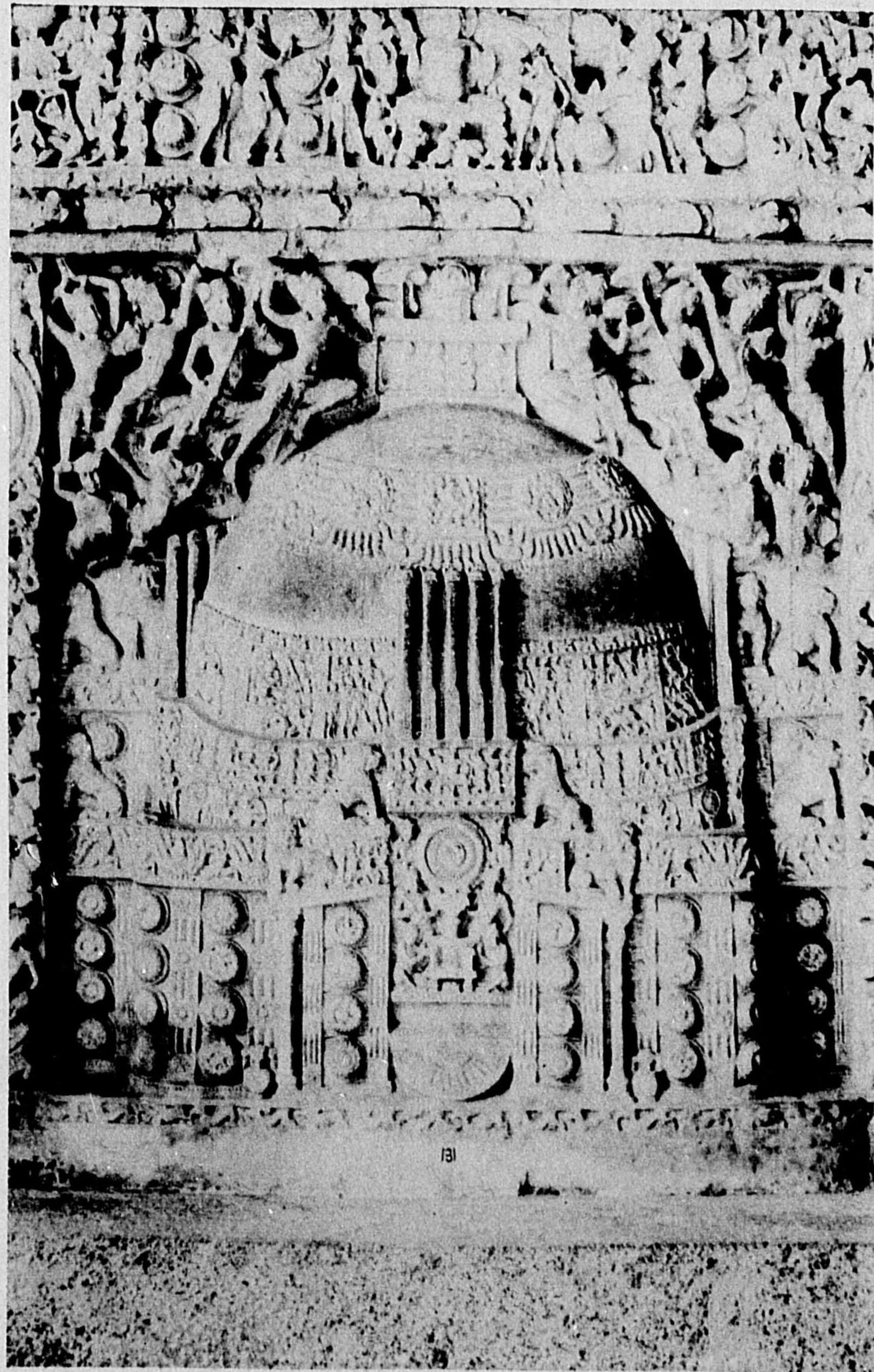


一五六 一八一七年（文化十四年）に於けるアマラバチ廢塔の狀況
 此平面圖はフアーガッソンの「龍樹崇拜」に掲げてあるものと全く同じだが、どういふものか断面圖が正反對になつてゐる。兩方比較してみると、どうせここに掲げた方が正しいらしい。
 (AMARAVATI AND JAGGAYYAPETA 附圖複寫)

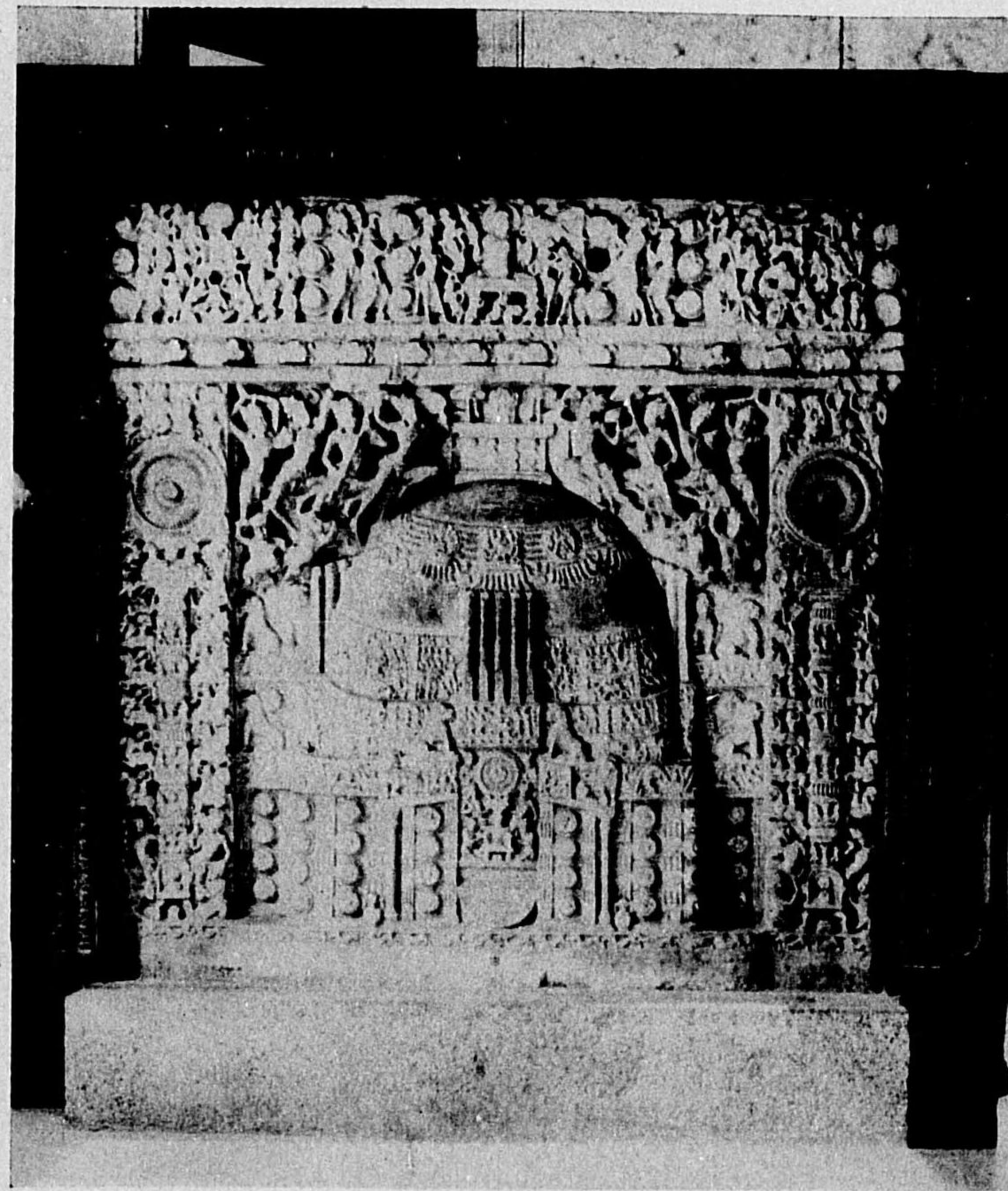


一五五 パールハット廢塔玉垣に現はれたる祇園精舍の景
 下方には牛車に金を積んでもってきたところ、右上は地上に金を敷きつめてゐるところ、其他左上下に現はされた二棟の建物に注意せよ。
 (STUPA OF BHARHUT 附圖複寫)

一五八 マドラス博物館出陳アマラバチ廢塔彫刻 其二
 解説前頁にあり。尙ほ本文参照の事。



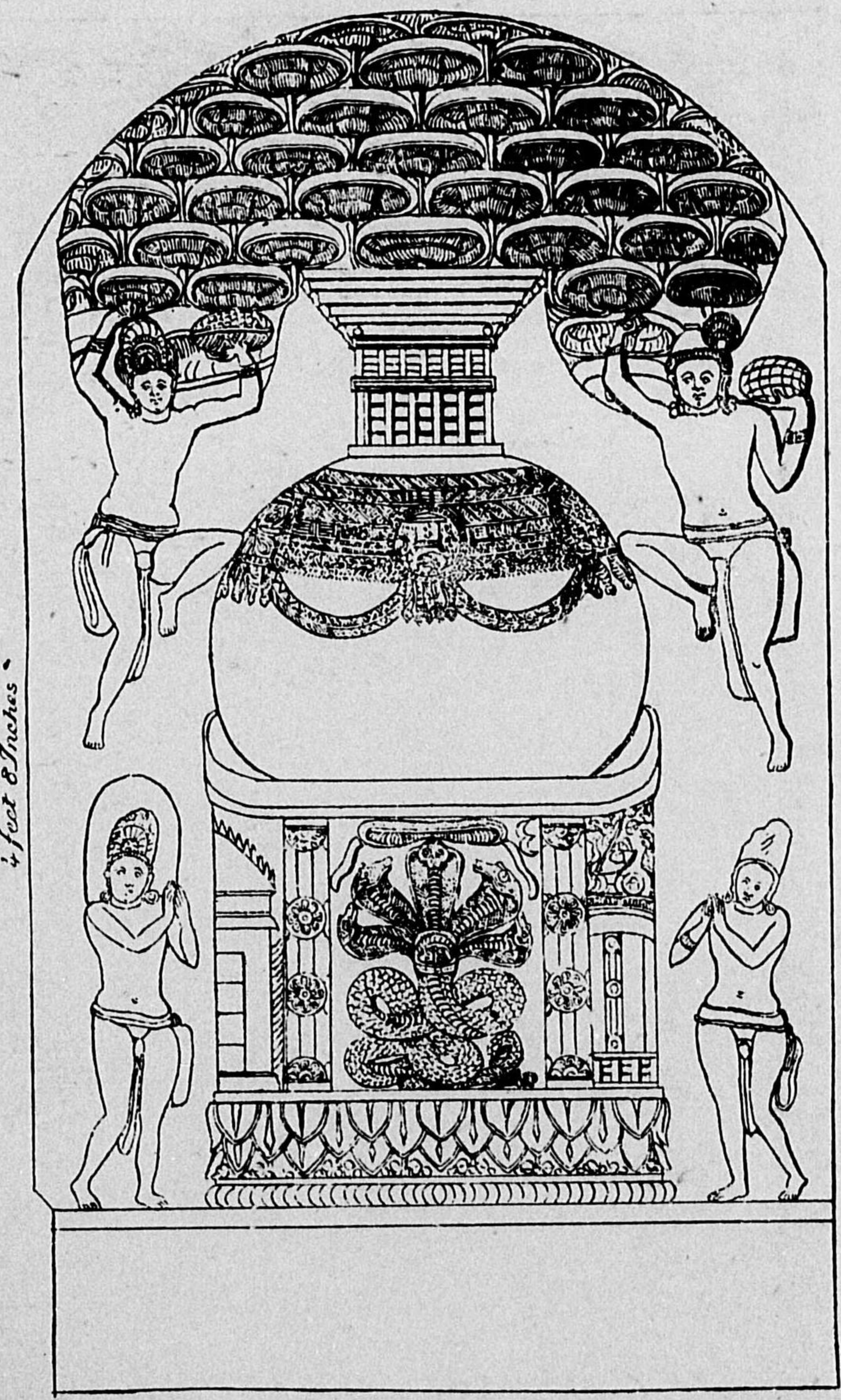
(大正十二年一月三十一日)



一五七 マドラス博物館出陳アマラバチ廢塔彫刻 其一
 (大正十二年一月三十一日)

アマラバチ廢塔に屬した彫刻は、マドラス博物館とロンドンのブリチッシュ博物館と兩方に陳列してあるが、これは前者に出陳してあるもので、ありし日の白大理石大塔婆を髣髴せしむべき頗る美事なものである。さうしてこの方面の事を取扱った書物は、必ず挿圖として掲げてある位に有名である。此彫刻は 1881 年(明治十四年)迄はマスリパタム(Masulipatam)にあったといふ。大き方約 6 尺。中央塔婆の大き方約 4 尺、周圍に 4 本の貫を有する玉垣あり。正面中央に半圓石、其上方及び上方の左右に精巧なる千輻輪を刻してある。

一五九 アマラバチ廢塔薄肉彫刻 其三
 平頭上から左右相稱に蔓延して井の様な相輪、塔身の裝飾、基部の反花、五頭的那伽等に注意せよ。



4 feet 8 Inches

(AMARAVATI AND JAGGAYYAPETA 附圖複寫)

2 feet 8-Inches

正 誤 表

頁行	4	7	14	32	74	137	162	167	180	201	219	255	”	10
本														
誤	(algon)	いふにとである	修理を修理し	修理をし	イブラヒム	1(御書)下冊第181・182頁	(Pahy)	全頁に示し	(第481・484頁参照)	其位置に	大正十二年	大正十二年	”	ch. は獨逸語
文														だから ch. を
正	(algon)	いふことである	修理をし	イブラヒム	イブラヒム	下冊第182・183頁	(Pahy)	第158頁に記し	(下冊第213・219頁参照)	其位置で	大正十二年	大正十二年	”	kh. は獨逸語
正														だから kh. を

頁行	1	2	8	19	19	42	52	82	85	99	101	102	117
本													
誤	修正												
文													
正													

(Bairas) コンジベラム
 圖版解説
 佳持 浪影 其周圍
 住持 浪影 其周圍
 右下の丘の中腹にある
 第一塔婆 折あし
 第一塔婆 折あし
 右下の丘の中腹にある
 第二三六圖 (Thiekh) 次頁下。一四二
 第二三四圖 (Thiekh) 次頁下。同其四。
 どうもここに

以上の他にも誤植はあろうが、然るべく推察を乞ふ。
 (昭和十九年九月十日)

989
106

(出版會承認) 5160084

2,000部



昭和十九年十二月一日初版印刷
昭和十九年十二月五月初版發行

印度佛塔巡禮記 上册
定價拾五圓

著者 天沼俊一

發行者 田中太右衛門

印刷者 岡島善次
奈良縣丹波市町川原城三〇七
奈良一

發行所 株式會社 秋田屋
大阪市南區安堂寺橋邊三丁目十五番地

振替口座大阪五一四〇番
會員番號三四二〇〇七番

配給元 東京都神田區
淡路町二丁目九
日本出版配給會社

終